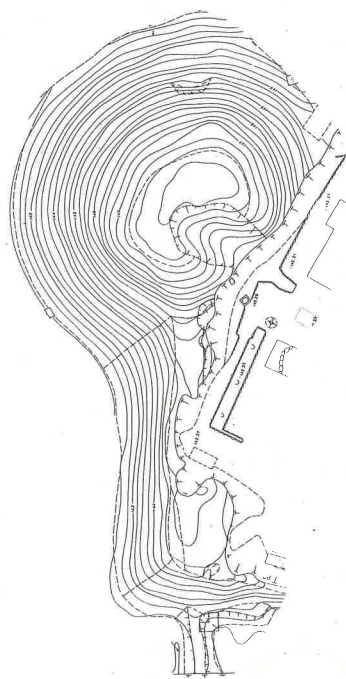


大分県文化財調査報告書 第100輯

# 大分の前方後円墳

三重・西国東地区編



1998

大分県教育委員会

# 大分の前方後円墳

三重・西国東地区編

1998

大分県教育委員会





立野古墳第1 トレンチ



立野古墳第4 トレンチ





猫石丸山古墳空撮（豊後高田市教育委員会提供）



猫石丸山古墳出土埴輪（長谷川正美氏撮影）（左から、66、95、11）

## 序

大分県教育委員会では、県内に所在する遺跡のうち、今後の保存等の策定の資料を得ることを目的に、国庫補助事業として遺跡の種類毎に調査を実施しているところですが、平成4年度から3ヵ年にわたる「県内装飾古墳発掘調査事業」にひきつづき、平成7年度から「県内中世城館等発掘調査事業」を開始し、城館等の調査と併行して主要前方後円墳の確認調査を3ヵ年にわたって実施してまいりました。

県内に所在する前方後円墳は、総数50基にも満たない数少ないものであります。我が国の国家の形成期の政治・社会構造を知る貴重な文化遺産である前方後円墳は、今後さらに手厚い保護対策を講じる必要があると考えます。本書では、昭和63年に発見された立野古墳、数少ない古墳時代後期の前方後円墳である猫石丸山古墳を主として収録し、併せて関連する資料についても掲載することができました。

本書が今後の文化財保護並びに学術研究にとって寄与することができれば幸いに存じます。

最後に、本事業の遂行に際し、多大なご協力をいただいた関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成10年3月31日

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

## 謝 辞

立野古墳の調査に際しましては加藤勝政・ナラ子ご夫妻、猫石丸山古墳の調査に際しましては近藤四郎氏にひとかたならぬご尽力をいただきました。記して感謝致します。

## 例 言

- 1、本書は、国の補助をうけて平成7～9年度に大分県教育委員会が実施した「中世城館等（主要古墳）発掘調査事業」の報告書である。
- 2、本書に報告する遺跡は、平成7年度に測量・発掘調査をおこなった立野古墳、平成8年度に測量・発掘調査をおこなった猫石丸山古墳、平成9年度に測量調査をおこなった小坂大塚古墳の3古墳である。ほかに関連する古墳・埴輪等の報告を掲載した。
- 3、本書におさめた各遺跡の概要は以下に速報してあるが、本書をもって正式な報告とする。  
田中裕介「立野古墳」『大分県埋蔵文化財年報』5、P 130、1997 大分県教育委員会  
田中裕介「猫石丸山古墳」『大分県埋蔵文化財年報』6、1998 大分県教育委員会に収載予定。
- 4、遺構の実測、写真撮影は主として各調査担当者がおこなったほか、多くの県文化課職員の協力を得た。また両古墳の調査において井上義也・松本博幸（別府大学学生）に協力を得た。遺物の整理は田中があたり、実測・浄書は田中・井上・麻生廣美・土崎弘子がおこなった。近世陶磁器については吉田寛の協力を得た。
- 5、本報告書の作成にあたっては、平成9年度に県教委文化課文化財資料室において、遺構図面および遺物の整理作業等を実施した。遺構図面の整理は田中があたり、浄書は金丸涼子・麻生・土崎があたった。遺物写真撮影は長谷川正美氏に依頼した。
- 6、立野古墳・小坂大塚古墳の調査では三重町教育委員会の全面的な協力を得た。
- 7、猫石丸山古墳の調査では豊後高田市教育委員会の全面的な協力を得、巻頭のカラー空撮写真の提供を受けた。
- 8、真玉大塚古墳・野内古墳の調査成果の掲載については真玉町教育委員会および、江藤和幸氏（宇佐市教育委員会）の協力を得た。
- 9、本書の執筆は、田中裕介・清水宗昭・諸岡郁・橋本幸治が分担してあたった。分担は目次および文末に明記した。
- 10、出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。
- 11、本書の編集・構成は田中が担当した。



# 目 次

|                                  |      |            |
|----------------------------------|------|------------|
| 第1章 はじめに                         | (田中) | 1          |
| 第1節 調査にいたる経過                     |      | 1          |
| 第2節 調査経過と調査組織                    |      | 1          |
| 第2章 大分県の大型古墳                     |      | 3          |
| 第1節 大型古墳の現況 (田中)                 |      | 3          |
| 第2節 大型古墳の分布 (田中)                 |      | 5          |
| 第3節 大型古墳とその規模 (田中)               |      | 6          |
| 第4節 大分県の埴輪 (田中)                  |      | 8          |
| 第5節 大分県前方後円墳調査史 (清水)             |      | 10         |
| 文献一覧                             |      | 12         |
| 第3章 三重地区の前方後円墳                   |      | 15         |
| 第1節 歴史的地理的環境—古墳時代を中心に— (田中)      |      | 15         |
| 第2節 立野古墳 (田中)                    |      | 17         |
| 1) 立地と環境                         |      | 17         |
| 2) 調査歴と調査方針                      |      | 18         |
| 3) 墳丘測量                          |      | 25         |
| (調査日誌抄                           |      | 25)        |
| 4) 立野古墳の層序—自然層と考古学的層位—           |      | 25         |
| 5) 第1トレンチ                        |      | 27         |
| 6) 第2トレンチ                        |      | 30         |
| 7) 第3トレンチ                        |      | 32         |
| 8) 第4トレンチ                        |      | 32         |
| 9) 第5トレンチ                        |      | 35         |
| 10) X地点断面                        |      | 36         |
| 11) プラントオパール分析                   |      | 36         |
| 立野古墳土壌のプラントオパール分析 大分短期大学助教授 佐々木章 |      | 37         |
| 12) 出土遺物                         |      | 40         |
| ① 埴輪                             | 40   | ② 古代土師器 48 |
| ③ 近世陶磁器                          |      | 48         |
| 13) 立野古墳のまとめ                     |      | 48         |
| ① 墳丘の設計・規格・施工                    | 48   | ② 築造時期 49  |
| ③ 埴輪の形式組成から埴輪儀礼の様式へ              |      | 49         |
| 第3節 小坂大塚古墳 (橋本)                  |      | 51         |
| 第4節 道の上古墳                        |      | 57         |
| 1) 測量調査の経緯 (清水)                  |      | 57         |
| 2) 観察所見 (田中)                     |      | 57         |

(立野古墳発見の経緯 57)

第5節 重政古墳（諸岡） 58

第6節 秋葉鬼塚古墳（諸岡） 60

第7節 まとめ—三重地区における前方後円墳の変遷とその性格—（田中） 62

## 第4章 西国東地区の前方後円墳 —————（田中） 65

第1節 歴史的地理的環境—古墳時代を中心に— 65

第2節 猫石丸山古墳 67

1) 立地と環境 67

2) 調査歴と調査方針 67

3) 墳丘測量 71

(調査日誌抄 71)

4) 猫石丸山古墳の層序 72

5) 第1トレンチ 74

6) 第2トレンチ 76

7) 第4トレンチ 77

8) 第3トレンチ 78

9) 第5・6トレンチ 80

10) 出土遺物 81

① 須恵器 81 ② 埴輪 81 ③ 土製品 95

11) 猫石丸山古墳のまとめ 96

① 墳丘の設計・規格・施工 96 ② 築造時期 97

③ 埴輪型式とヘラ記号からみた埴輪工人の編成 98

第3節 真玉大塚古墳 100

第4節 野内古墳 103

第5節 まとめ—西国東地区における大型古墳の変遷とその性格— 104

## 第5章 総 括 —————（清水+田中） 106

## 写真図版 ————— 107

(報告書抄録 巻末)

### 資料提供

巻頭カラー猫石丸山古墳空撮写真 豊後高田市教育委員会

巻頭カラー猫石丸山古墳埴輪 長谷川正美氏

重政古墳平面測量図+挿入写真 三重町教育委員会

秋葉鬼塚古墳平面測量図+挿入写真 三重町教育委員会

真玉大塚古墳平面測量図 真玉町教育委員会

野内古墳平面測量図 江藤和幸・下村精一氏

# 第1章 はじめに

## 第1節 調査にいたる経過

大分県教育委員会では1993（平成5）・1994（平成6）年度に国の補助をうけて、県内装飾古墳発掘調査事業をおこなった。その成果は1995（平成7）年に『大分の装飾古墳』と題して刊行された。そのなかで墳丘の測量図などの古墳の基礎資料の整備の遅れが指摘された。そのために墳裾や周溝の改変によって古墳の平面形態および遺構の範囲がわからなくなった古墳が多く、周辺の開発による破壊の危機に直面していることが認識された。そこで装飾古墳に次いで、県内の前方後円墳をはじめとする大型古墳の基礎資料の整備が日程にのぼった。そのために1995（平成7）年度から1997（平成9）年度の3カ年にわたって国の補助をうけ、県内の前方後円墳を中心とする主要古墳の基礎資料の作成をおこなうこととなった。

具体的に次のような全県的な古墳の情報収拾をおこなうことになった。その際、石棺・副葬品等は既往の研究もあり、まず墳丘測量図と埴輪の収集に力点を置くことにした。①前方後円墳および径30m以上の円墳の位置を確認する（分布調査）。②古墳の規模・墳形を明らかにする（測量調査）。③古墳の周溝・範囲を明らかにする（発掘調査）。④以上の調査にともなって採集される埴輪等の情報を整理する。調査内容は①分布調査、遺跡地図および遺跡台帳をもとに現地再確認。とともに埴輪の出土と内容を確認する。②測量調査、墳丘測量図のない古墳あるいは不十分な古墳を優先的に測量する。③発掘調査、墳丘外にトレンチをいれ、周溝と墳端を確認するというものであった。

しかし3カ年という時間と予算の規模からみて県内すべての大型古墳の調査を実施することはもとより不可能である。そこで、大型古墳が群在しながら基礎資料の整備がおくれていた西国東郡と大野郡三重町の古墳群をえらび、なかでも県指定史跡ながら測量図が未整備な豊後高田市猫石丸山古墳と三重町立野古墳・小坂大塚古墳を調査することにした。特に猫石丸山古墳と立野古墳は墳丘の改変・崩壊が激しいので古墳の範囲を確定し、指定および追加指定に備えることを調査の目的として範囲確認の発掘調査をおこなった。

同時にこの2地域では地元教育委員会や研究者有志による古墳の基礎資料整備がすすめられつつあり、県の調査と相互に連携を深めながら調査をおこない、その成果を整理にあたって集約した。（田中）

## 第2節 調査経過と調査組織

年度をおって、主要古墳調査事業の経過をのべる。

1995（平成7）年度 大野郡三重町立野古墳の測量調査と墳裾および周溝に調査坑（トレンチ）をいれる範囲確認調査をおこなった。調査はまず（株）パスコに委託して測量用の基準点設定と周溝外の周辺地形の平板測量を1996年1月下旬におこなって、本調査に備えた。2月13日より調査員が現地に入り、墳丘測量とトレンチ調査を並行しておこなった。墳丘測量は光波平板を使用して開放トラバースにておこない、25cm等高線を原則とし、必要に応じて12.5cmの補助線を作図した。トレンチ調査は幅1mを原則に設定し、表土層から手掘りでおこなった。立野古墳の調査組織は以下のとおり。

|       |                                         |
|-------|-----------------------------------------|
| 調査責任者 | 大分県教育委員会教育長 田中恒治                        |
| 調査委員  | 後藤宗俊（別府大学教授）・柳沢一男（宮崎大学助教授）              |
| 調査総括  | 末広利人（大分県教育庁文化課課長）                       |
| 調査主任  | 清水宗昭（大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長）             |
| 調査担当者 | 高橋 徹（大分県教育庁文化課副主幹）・田中裕介（大分県教育庁文化課主任）    |
| 調査員   | 諸岡 郁（三重町教育委員会社会教育課主事）・丸尾博恵（大分県教育庁文化課嘱託） |
| 調査補助  | 井上義也・松本博幸（別府大学学生）                       |

調査中は地元上田原地区の区長さんをはじめ多くの協力をえた。ことに立野古墳の土地所有者のひとりであり、

この古墳のすぐそばに住んで、長年古墳の顕彰に努力されてこられた加藤勝政氏には、発掘器材の収納や昼食場所の提供から、測量の援助まで言葉ではいえぬ協力をたまわった。

調査は3月3日に小雨のなか現地説明会をおこなって、3月18日に埋め戻しを終了した。

1996(平成8)年度 豊後高田市猫石丸山古墳の測量調査と、墳裾および周溝に調査坑(トレンチ)をいれる範囲確認調査をおこなった。調査はまず(株)パスコに委託して測量用の基準点設定を10月21・22日におこない、測量に備えた。11月5日より調査員が現地に入り、墳丘測量とトレンチ調査を並行しておこなった。墳丘測量は光波平板を使用して開放トラバースにておこない、25cm等高線を原則とし、必要に応じて12.5cmの補助線を作図した。トレンチ調査は幅1mを原則に設定し、表土層から手掘でおこなった。猫石丸山古墳の調査組織は以下のとおり。

|       |                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 調査責任者 | 大分県教育委員会教育長 田中恒治                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| 調査委員  | 川西宏幸(筑波大学教授)                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| 調査総括  | 後藤一郎(大分県教育庁文化課課長)                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 調査主任  | 清水宗昭(大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係長)<br>渋谷忠章(大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)                                                                                                                                                                                                                                  |
| 調査担当  | 田中裕介(大分県教育庁文化課主任)                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| 調査員   | 高橋徹(大分県教育庁文化課副主幹)<br>小林昭彦(大分県教育庁文化課主査)<br>甲斐寿義(大分県教育庁文化課主任)<br>河野典之(豊後高田市教育委員会社会教育課技師)<br>大久保謙一郎(豊後高田市教育委員会社会教育課技師)<br>下村精一(真玉町教育委員会社会教育課文化財調査専門員)<br>江藤和幸(宇佐市教育委員会文化課主任技師)<br>吉田博嗣(大分県教育庁文化課嘱託)<br>豊田徹士(大分県教育庁文化課嘱託)<br>横山明代(大分県教育庁文化課嘱託)<br>上野淳也(大分県教育庁文化課嘱託)<br>北内恵美子(豊後高田市教育委員会社会教育課嘱託) |
| 調査補助  | 井上義也・松本博幸(別府大学学生)、吉田和彦(奈良学院院生)                                                                                                                                                                                                                                                              |

調査中は猫石地区の区長近藤義洋氏をはじめ多くの地元の方々の協力をえた。ことに猫石丸山古墳の土地所有者であり、古墳の管理に尽力されてきた近藤四郎氏に感謝したい。また調査にあたっては東本均・近藤邦彦の両氏と河野忠臣氏にさまざまなご便宜をはかっていただいた。

調査は12月23日に現地説明会をおこなって、あくる1月17日に埋め戻しを終了した。

1997(平成9)年度 大野郡三重町小坂大塚古墳の測量調査のみをおこなった。測量は9月9日から、9月18日までおこなった。光波平板を使用して開放トラバースにておこない、25cm等高線を原則とし、必要に応じて12.5cmの補助線を作図した。小坂大塚古墳の調査組織は以下のとおり。

|       |                                                |
|-------|------------------------------------------------|
| 調査責任者 | 大分県教育委員会教育長 田中恒治                               |
| 調査総括  | 後藤一郎(大分県教育庁文化課課長)                              |
| 調査主任  | 清水宗昭(大分県教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長)                    |
| 調査担当  | 田中裕介(大分県教育庁文化課主査)<br>諸岡 郁(三重町教育委員会社会教育課主事)     |
| 調査員   | 橋本幸治(大分県教育庁文化課嘱託)<br>吉野公紀(朝地町教育委員会生涯学習課文化財専門員) |

調査時には地権者の宇薄家の方々にお世話になった。

(田中)

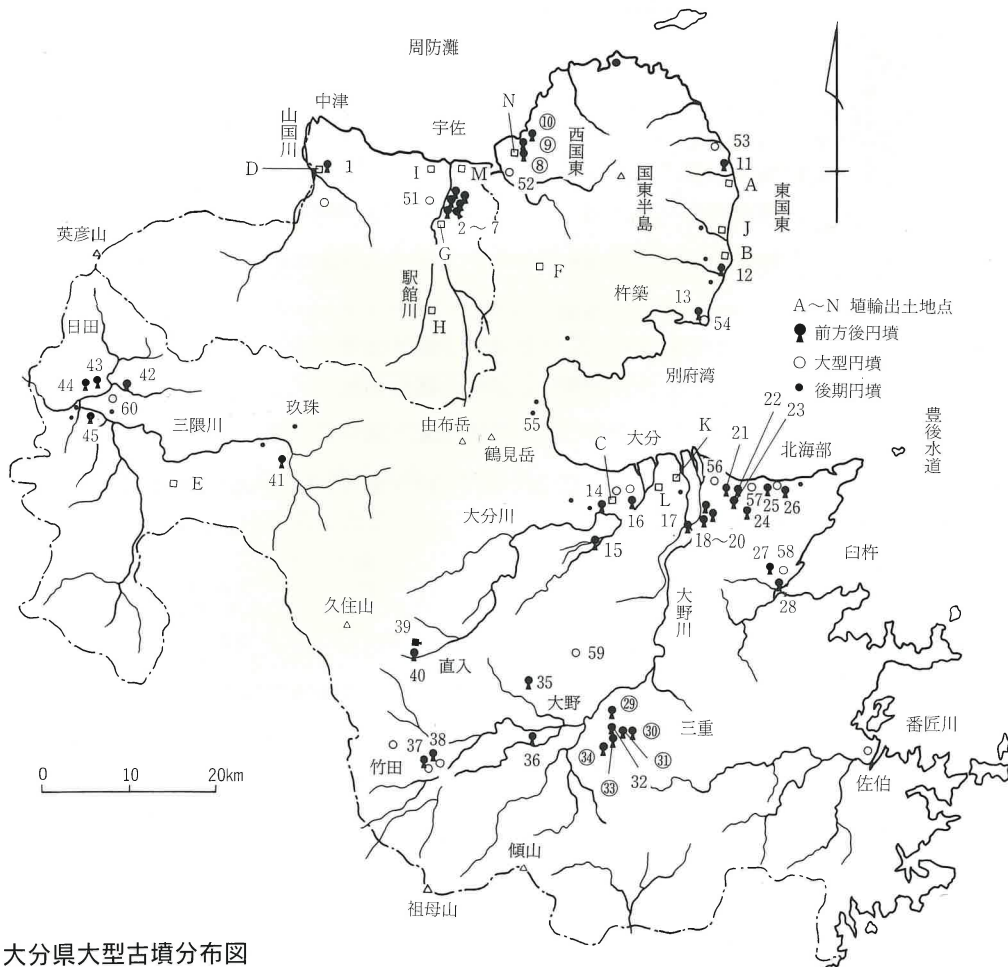


## 第2章 大分県の大規模古墳

### 第1節 大規模古墳の現況

ここでいう大規模古墳とは前方後円(方)墳と大型円墳である。県内の前方後円(方)墳は今のところ45基を確認した(第1表、以下古墳名の後に付した番号は第1図、第1・2表と共通する)。そのうち大半の44基は前方後円墳で、前方後方墳は一昨年に発見された久住町仏原千人塚1号墳(39)のみである。墳長120mに近い杵築市小熊山古墳(13)・大分市亀塚古墳(23)から、25m足らずの仏原千人塚1号墳(39)・安岐町下原古墳(12)にいたるまでかなり規模の差がある。また今回は墳径30m以上の円墳を第2表に示した。第3節で触れるように、最小規模の前方後円(方)墳には墳径20m級の円墳が対応することが判明したが、今回の調査では20m級の円墳を網羅するにいたらなかった。将来の調査課題である。

前方後円(方)墳のうち既に消滅した3基をのぞく、42基が今日なお旧状をとどめており、ほぼ完存している11基以外も損壊の程度に差はあれ、なお墳丘を確認することができる。径30m以上の円墳についても消滅した大在古墳(56)、周溝の一部のみ残存していた辻古墳(57)を除けば比較的保存状態はよい。今回リストアップした古墳55基のうち、国指定史跡は15基、県指定12基、市町村指定2基で、消滅した4基を除く残り22基はなお公的な指定保護を受けていない。基礎資料の整備状態としては何らかの墳丘測量図がない古墳が5基ある。ただし測量図があるといっても、等高線密度が粗く今日目で見て再測量が必要な古墳も多い。(田中)



第1表 大分県前方後円墳・前方後方墳一覧

| 番号 | 古墳名                      | 旧国名 | 所在地               | 墳形   | 段築           | 造出      | 周壕           | 規格(単位m) |       |       | 内部主体                     | 時期   | 指定状況 | 保存状態  | 測量図 | 備考      | 文献                     |
|----|--------------------------|-----|-------------------|------|--------------|---------|--------------|---------|-------|-------|--------------------------|------|------|-------|-----|---------|------------------------|
|    |                          |     |                   |      |              |         |              | 墳長      | 後円径   | 前方幅   |                          |      |      |       |     |         |                        |
| 1  | 亀山古墳<br>(かめやま)           | 豊前  | 中津市大字如木字亀山        | 前方後円 | —            | —       | —            | 70?     | —     | —     | —                        | ?    | 消滅   | なし    |     |         | 38                     |
| 2  | 赤塚古墳<br>(あかつか)           | 豊前  | 宇佐市大字高森字赤塚        | 前方後円 | 不明           | —       | 前方後円形        | 57.5    | 36    | 21    | 箱形石棺                     | 前期初  | 国指定  | 周辺損壊  | あり  | 史跡公園    | 4.6<br>42.54.58        |
| 3  | 角房古墳<br>(かくぼう)           | 豊前  | 宇佐市大字高森字角房        | 前方後円 | 不明           | —       | 前方後円形        | 47      | 30    | 18    | —                        | 前期   | 国指定  | 周辺損壊  | あり  | 史跡公園    | 42.58.65               |
| 4  | 車取古墳<br>(くるまどか)          | 豊前  | 宇佐市大字高森字車取        | 前方後円 | 不明           | —       | 前方後円形に近い     | 61      | 40    | 20    | —                        | 前期   | 国指定  | 周辺損壊  | あり  | 史跡公園    | 42.52.54               |
| 5  | 福勝寺古墳<br>(ふくしょうじ)        | 豊前  | 宇佐市大字川部字福勝寺       | 前方後円 | 不明           | 後円部北西   | なし           | 80      | 55    | 20    | —                        | 前期   | 国指定  | 完存    | あり  | 史跡公園    | 42                     |
| 6  | 鶴見古墳<br>(つるみ)            | 豊前  | 宇佐市大字高森字鶴見        | 前方後円 | 不明           | なし      | 前方後円形・2ヶ所に隣接 | 30      | 21    | 17    | 横穴式石室                    | 前期後半 | 国指定  | 周辺損壊  | あり  | 史跡公園    | 48.69                  |
| 7  | 免ヶ平古墳<br>(めがひら)          | 豊前  | 宇佐市大字川部字免ヶ平       | 前方後円 | 不明           | なし      | 馬蹄形          | 50      | 28    | 15    | ①割竹形木棺<br>縦穴式石槨<br>②箱形石棺 | 前期中葉 | 国指定  | 前方部消滅 | あり  | 史跡公園    | 44.55.70<br>92         |
| 8  | 猫石丸山古墳<br>(ねこいしまるやま)     | 豊後  | 豊後高田市大字草地字猫石      | 前方後円 | 後円3段         | なし      | 前方後円形        | 66      | 28    | 40    | 横穴式石室?                   | 後期前半 | 県指定  | 一部損壊  | あり  |         | 28.123                 |
| 9  | 野内古墳<br>(のうち)            | 豊後  | 西国東郡真玉町大字西真玉字赤坂   | 前方後円 | —            | 不明      | —            | 45以上    | —     | —     | 横穴式石室                    | 後期前半 | (未)  | 半壊    | あり  |         | 123                    |
| 10 | 真玉大塚古墳<br>(またまおおつか)      | 豊後  | 西国東郡真玉町大字金星       | 前方後円 | 後円3段<br>前方3段 | 不明      | 盾形、二重        | 100以上   | 60    | 約60   | 横穴式石室?                   | 中期後半 | (未)  | 一部損壊  | あり  | 調査中     | 38<br>129.133          |
| 11 | 番所ヶ鼻1号墳<br>(ばんしょがはな)     | 豊後  | 東国東郡国東町大字北江字粧崎    | 前方後円 | —            | —       | —            | 約33     | 約15   | —     | —                        | ?    | 町指定  | 半壊    | (未) |         | 41                     |
| 12 | 下原古墳<br>(しもはら)           | 豊後  | 東国東郡安岐町大字下原       | 前方後円 | 不明           | なし      | 馬蹄形          | 25未満?   | 15    | ?     | 組合式木棺・礎石                 | 前期初  | 消滅   | 消滅    | あり  | 全面調査    | 76                     |
| 13 | 小熊山古墳<br>(こぐまやま)         | 豊後  | 杵築市狩宿字小熊          | 前方後円 | 後円3段<br>前方2段 | —       | なし           | 113前後   | 71    | 35-40 | —                        | 前期中葉 | (未)  | 一部損壊  | あり  |         | 79.91.94<br>95.97      |
| 14 | 蓬萊山古墳<br>(ほうらいさん)        | 豊後  | 大分市庄ノ原            | 前方後円 | —            | —       | 馬蹄形          | 約60     | 約36   | 17    | 箱形石棺                     | 前期中葉 | 県指定  | 完存    | (未) |         | 47                     |
| 15 | 御蔵古墳<br>(ごくらう)           | 豊後  | 大分市木ノ上字原          | 前方後円 | 後円2段         | なし      | 不明           | 約78     | 55    | 20    | ①箱形石棺<br>②箱形石棺           | 前期末  | (消滅) | 一部残存  | あり  |         | 36.40                  |
| 16 | 大臣塚古墳<br>(だいじんづか)        | 豊後  | 大分市大字上野字六坊        | 前方後円 | —            | —       | あり           | 30以上    | 約25   | 10以上  | 箱形石棺                     | 中期中葉 | (未)  | 前方部消滅 | (未) |         | 68                     |
| 17 | 小牧山6号墳<br>(こまきやま)        | 豊後  | 大分市大字松岡字池の上       | 前方後円 | —            | なし      | なし           | 45      | 26    | 11    | 箱形石棺?                    | 前期末  | (未)  | 完存    | あり  |         | 124.128                |
| 18 | 野間1号墳<br>(のま)            | 豊後  | 大分市大字丹生字野間        | 前方後円 | —            | —       | —            | 復元48    | 25    | —     | 箱形石棺?                    | 前期後半 | (未)  | 前方部消滅 | あり  |         | 34                     |
| 19 | 野間2号墳                    | 豊後  | 大分市大字丹生字野間        | 前方後円 | —            | —       | —            | 約50?    | 25    | —     | 箱形石棺?                    | 前期後半 | (未)  | 前方部消滅 | あり  |         | 34                     |
| 20 | 野間3号墳                    | 豊後  | 大分市大字丹生字野間        | 前方後円 | —            | —       | —            | 約50?    | —     | —     | 箱形石棺(副室有)                | 前期?  | (未)  | 一部残存  | あり  |         | 34                     |
| 21 | 大蔵古墳<br>(おおくら)           | 豊後  | 大分市大字城原字大蔵        | 前方後円 | —            | —       | —            | 50      | —     | —     | 箱形石棺?                    | ?    | (未)  | 一部損壊  | あり  | 円墳2基?   | 101                    |
| 22 | 小亀塚古墳<br>(こかめづか)         | 豊後  | 大分市大字里字宝来         | 前方後円 | 後円2段<br>前方2段 | なし      | なし           | 約40     | 30    | 15以上  | ①くり抜き式石棺?<br>②石蓋土壇       | 中期後半 | 国指定  | 一部損壊  | あり  | 史跡公園    | 5.107.113              |
| 23 | 亀塚古墳<br>(かめづか)           | 豊後  | 大分市大字里字宝来         | 前方後円 | 後円3段<br>前方3段 | くびれ部1ヶ所 | なし           | 115前後   | 67    | 47    | ①箱形石棺<br>②くり抜き式石棺        | 中期初  | 国指定  | 完存    | あり  | 史跡公園    | 5.107.113              |
| 24 | 上ノ坊古墳<br>(うえんぼう)         | 豊後  | 大分市大字市尾字上坊        | 前方後円 | 後円2段         | なし      | なし           | 59      | 42    | 16    | 箱形石棺                     | 前期後半 | (未)  | 完存    | あり  |         | 85                     |
| 25 | 馬場古墳<br>(ばば)             | 豊後  | 北海道郡佐賀関町馬場字中原     | 前方後円 | —            | —       | —            | 60      | 32    | 15    | 箱形石棺                     | 前期   | (未)  | 一部損壊  | あり  |         | 35                     |
| 26 | 神崎築山古墳<br>(こうざきつきやま)     | 豊後  | 北海道郡佐賀関町神崎字成願寺    | 前方後円 | —            | ?       | 楕形           | 98      | 48    | 45    | ①箱形石棺<br>②箱形石棺           | 中期初  | 国指定  | 一部損壊  | あり  |         | 5.18.19<br>35          |
| 27 | 白塚古墳<br>(うすづか)           | 豊後  | 臼杵市大字福田字林、西平      | 前方後円 | —            | —       | 西側に痕跡        | 87      | 45    | 45    | ①舟形石棺<br>②舟形石棺           | 中期前半 | 国指定  | 一部損壊  | あり  |         | 14.30.67               |
| 28 | 下山古墳<br>(しもやま)           | 豊後  | 臼杵市大字諏訪字芝尾・淵元     | 前方後円 | 基段あり         | あり      | なし           | 65      | 38    | 38    | 組合式石棺                    | 中期前半 | 国指定  | 完存    | あり  |         | 23.25.43<br>67.122     |
| 29 | 立野古墳<br>(たての)            | 豊後  | 大野郡三重町大字上田原字立野    | 前方後円 | 後円2段?        | なし      | 馬蹄形          | 65      | 39    | 20    | —                        | 前期末  | 県指定  | 一部損壊  | あり  | 陸橋、周堤あり | 86                     |
| 30 | 小坂大塚古墳<br>(おさかおおつか)      | 豊後  | 大野郡三重町大字小坂字小坂     | 前方後円 | —            | なし      | —            | 43      | 26    | 10    | —                        | 前期   | 県指定  | 完存    | あり  |         | 9.75.86                |
| 31 | 道ノ上古墳<br>(みちのうえ)         | 豊後  | 大野郡三重町大字赤嶺字下赤嶺    | 前方後円 | —            | なし      | 東側に痕跡        | 73      | 48    | 30    | —                        | 前期   | 県指定  | 完存    | あり  |         | 75.86                  |
| 32 | 竜ヶ鼻古墳<br>(たつがはな)         | 豊後  | 大野郡三重町大字赤嶺字竜ヶ鼻    | 前方後円 | —            | —       | —            | 約32     | 約15   | —     | —                        | ?    | (未)  | 半壊    | あり  | 墳形未確認   | 75.86                  |
| 33 | 重政古墳<br>(しげまさ)           | 豊後  | 大野郡三重町大字内田字久知良    | 前方後円 | —            | なし      | なし           | 52~54   | 30    | 16    | —                        | 中期初  | 県指定  | 一部損壊  | あり  |         | 9.75.86<br>109.121.133 |
| 34 | 秋葉鬼塚古墳<br>(あきはおにづか)      | 豊後  | 大野郡三重町大字秋葉字鬼塚・木ノ下 | 前方後円 | —            | —       | なし           | 約49     | 28    | 約15   | —                        | 前期   | 県指定  | 半壊    | あり  |         | 9.75.86                |
| 35 | 坊ノ原古墳<br>(ぼうのはら)         | 豊後  | 大野郡大野町大字北園字ひょうたん塚 | 前方後円 | —            | なし      | —            | 45      | 27    | 10    | 箱形石棺?                    | 前期   | 県指定  | 完存    | あり  |         | 51.57                  |
| 36 | 大久保1号墳<br>(おおくぼ)         | 豊後  | 大野郡緒方町大字越生字大久保    | 前方後円 | —            | なし      | なし           | 35      | 20~24 | 8     | —                        | 前期   | (未)  | 完存    | あり  |         | 104                    |
| 37 | 七ツ森B古墳<br>(ななつもり)        | 豊後  | 竹田市大字戸上           | 前方後円 | —            | —       | —            | 49      | 30    | 10    | 箱形石棺                     | 前期   | 国指定  | 完存    | あり  | 史跡公園    | 13.20.62               |
| 38 | 七ツ森C古墳                   | 豊後  | 竹田市大字戸上           | 前方後円 | —            | —       | —            | 53      | 31    | 12    | 箱形石棺                     | 前期   | 国指定  | 完存    | あり  | 史跡公園    | 13.20.62               |
| 39 | 仏原千人塚1号墳<br>(ぶつばるせんになづか) | 豊後  | 久住町大字仏原字南         | 前方後方 | 不明           | なし      | 馬蹄形          | 25      | 一辺20  | —     | ?                        | 前期初  | (未)  | 半壊    | あり  |         | 136                    |
| 40 | 仏原千人塚2号墳                 | 豊後  | 久住町大字仏原字南         | 前方後円 | 不明           | なし      | 後円部のみ        | 33      | 22    | —     | ?                        | 前期前半 | (未)  | 半壊    | あり  |         | 136                    |

大分県前方後円墳・前方後方墳一覧

| 番号 | 古墳名              | 旧国名 | 所在地                | 墳形   | 段築 | 造出 | 周壕     | 規格(単位m) |     |     | 内部主体  | 時期   | 指定状況 | 保存状態  | 測量図 | 備考 | 文献       |
|----|------------------|-----|--------------------|------|----|----|--------|---------|-----|-----|-------|------|------|-------|-----|----|----------|
|    |                  |     |                    |      |    |    |        | 墳長      | 後円径 | 前方幅 |       |      |      |       |     |    |          |
| 41 | 亀都起古墳<br>(きつぎ)   | 豊後  | 玖珠郡玖珠町大字大隈<br>字亀都起 | 前方後円 | —  | —  | —      | 48以上    | 24  | 15  | —     | 後期中葉 | 町指定  | 一部損壊  | あり  |    | 78       |
| 42 | 城山古墳<br>(しろやま)   | 豊後  | 日田市大字東有田字城山        | 前方後円 | —  | —  | あり?    | 約31     | 19  | 6   |       | 前期?  | 県指定  | 一部損壊  | あり  |    | 78       |
| 43 | 天満1号墳<br>(てんまん)  | 豊後  | 日田市大字小迫字天神山        | 前方後円 | —  | —  | —      | 推定30    | —   | 13  | 横穴式石室 | 後期中頃 | (未)  | 後円部半壊 | (未) |    | 27.37.38 |
| 44 | 天満2号墳            | 豊後  | 日田市大字小迫字杉本原        | 前方後円 | —  | —  | 両剣菱形二重 | 約60     | 31  | 27  | 横穴式石室 | 後期前半 | (未)  | 後円部半壊 | あり  |    | 27.38    |
| 45 | 護願寺1号墳<br>(ごかんじ) | 豊後  | 日田市大字石井字古城         | 前方後円 | —  | —  | —      | 推定30    | —   | —   |       | 後期前半 | (未)  | 完存    | (未) |    |          |

第2表 大分県大型円墳一覧(径30cm以上)

| 番号 | 古墳名                   | 旧国名 | 所在地            | 墳形 | 段築   | 造出   | 周壕 | 規格(単位m) |     |     | 内部主体           | 時期   | 指定状況 | 保存状態 | 測量図 | 備考   | 文献          |
|----|-----------------------|-----|----------------|----|------|------|----|---------|-----|-----|----------------|------|------|------|-----|------|-------------|
|    |                       |     |                |    |      |      |    | 墳長      | 後円径 | 造出幅 |                |      |      |      |     |      |             |
| 51 | 葛原古墳<br>(くつはら)        | 豊前  | 宇佐市大字葛原字鬼塚     | 円  | 2段築成 | 1ヶ所  | 円形 | 56      | 52  | 17  | 竪穴系横口式石室       | 中期後半 | 国指定  | ほぼ完存 | あり  |      | 3.30.38.84  |
| 52 | 入津原丸山古墳<br>(いづはらまるやま) | 豊後  | 豊後高田市大字新築字磯    | 円  | 3段築成 | 1ヶ所  | 円形 | 77      | 70  | 23  | 箱形石棺           | 中期前半 | 県指定  | 一部損壊 | —   | 測量中  | 23.38       |
| 53 | 狐塚古墳<br>(きつづか)        | 豊後  | 東国東郡国東町大字浜崎字前山 | 円? | —    | 1ヶ所? | —  | 35以上    | 35  | —   | 箱形石棺           | 前期   | 県指定  | ほぼ完存 | あり  |      | 22.119      |
| 54 | 御塔山古墳<br>(おとうやま)      | 豊後  | 杵築市大字狩宿字御塔山ほか  | 円  | 3段築成 | 1ヶ所  | 円形 | 81      | 73  | 16  | 箱形石棺?          | 中期前半 | 県指定  | 一部損壊 | あり  |      | 74.87.95    |
| 55 | 鬼の岩屋2号墳<br>(おにのいわや)   | 豊後  | 別府市大字北石垣字塚原    | 円  | —    | なし   | —  | 30      | —   | —   | 横穴式石室          | 後期末  | 国指定  | 一部損壊 | あり  | 装飾古墳 | 8.21.63.116 |
| 56 | 大在古墳<br>(おおさい)        | 豊後  | 大分市大字角子原       | 円? | 2段築成 | —    | 盾形 | 35以上    | 約35 | —   | 箱形石棺ほか         | 中期中葉 | —    | 消滅   | あり  |      | 117         |
| 57 | 辻古墳<br>(つじ)           | 豊後  | 大分市大字里字辻       | 円? | 不明   | —    | 盾形 | 40以上    | 約40 | 不明  | —              | 中期末  | (未)  | ほぼ全壊 | —   |      | —           |
| 58 | 神下山古墳<br>(じんかやま)      | 豊後  | 臼杵市大字諏訪字芝尾・神下  | 円  | —    | なし   | なし | 34      | —   | —   | ①箱形石棺<br>②舟形石棺 | 中期初  | (未)  | 完存   | あり  |      | 72.89.103   |
| 59 | 御塚古墳<br>(おんづか)        | 豊後  | 大野郡大野町大字藤北字坪井  | 円  | —    | なし   | —  | 33      | —   | —   | —              | ?    | (未)  | 完存   | あり  |      | 57          |
| 60 | 薬師堂山古墳<br>(やくしどうやま)   | 豊後  | 日田市大字田島字畑江     | 円  | 3段築成 | なし   | なし | 30      | —   | —   | 箱形石棺           | 中期前半 | 県指定  | 完存   | 測量中 |      | —           |

(注) 宇佐市高倉古墳、宇佐市扇塚古墳、豊後高田市イト山3号・5号墳、玖珠町將軍塚古墳、玖珠町船岡山古墳が、径30m以上の可能性がある。

第2節 大型古墳の分布 (第1図)

大型古墳の分布をみると、旧豊前に前方後円墳7基・大型円墳1基、豊後に前方後円墳37基・前方後方墳1基、大型円墳9基となる。さらにやや細かくみると、大規模な河川流域には必ずといってよいほど大型古墳が分布している。駅館川、大分川、大野川、三隈川などである。県最南部の番匠川にのみ20 m以上の規模の古墳が知られていない。調査がおよんでいないためと考えられ、今後の発見が期待される。また国東半島と佐賀関半島一帯は河川流域ではなく沿岸部に大型古墳が立地するという特徴がある。

分布状態を検討すると一カ所に大型古墳が密集して視覚的に大型古墳群を形成する①密集型古墳群と、一カ所には密集しないが一盆地・一流域などの単位地域内の各所に散在して大型古墳が存在する②分散型古墳群と、一地域に単独で存在する③孤立型古墳の3パターンがある。①の密集型古墳群には宇佐市川部高森古墳群(2～7)、大分市野間古墳群(18～20)、久住町仏原千人塚古墳群(39・40)、竹田市七つ森古墳群(37・38)などがあたる。いずれも古墳時代前期に属し、その時期の大型古墳からなる古墳群の特徴といえよう。②の分散型古墳群は西国東の古墳群(8～10・52)、大分川下流域の古墳群(14～16)、北海部の古墳群(21～26・56・57)、臼杵の古墳群(27・28・58)、三重の古墳群(29～33)、日田の古墳群(42～45・60)がこれにあたり、中期の大型円墳を含むことが多い。形成時期については前期から中期にかけての大分川下流域と北海部、中期から後期にわたる西国東などの長期に形成された場合と、前期中心の三重、中期前半に集中する臼杵、後期前半に集中する日田などの短期形成の場合がある。そして③の孤立型古墳としては東国東の各古墳(11・12・53)、大野(35・36・59)、玖珠(41)が指摘できる。ただし③は将来新たな発見があれば②の分散型古墳群に解消する可能性がある。

ところで、東国東の杵築市小熊山古墳(13)と御塔山古墳(54)の場合と、北海部の亀塚古墳(23)と小亀塚古墳(24)の場合はどのパターンにも分類できない。前者は①②③どれにも当てはまりそうだがどれかといえば明確にいいない。後者は周辺的大型古墳と含めて扱えば②の分散型といえるが、2古墳が近接する点では①にしてもよい。この両古墳群は大分県内最大規模の古墳を含むだけにきわめて興味深い。

(田中)



### 第3節 大型古墳とその規模

(第3・4表)

大分県内の大型古墳には古墳の形によって前方後円墳・前方後方墳・円墳があり、円墳の中には様々な規模の造り出しを付設する例があることが判明している(第2表)。同時に当然ながら墳径10mにも満たない小古墳が各地に多数存在している。

今回の調査にあたって、大分県における大型古墳とはいかなるものかが、当然問題となった。この問題は県内各地の古墳時代の首長墳の認定の問題と重なっている。前方後円墳は大分県の場合、他の県で確認されているような20m未満の例はなく、最小で下原古墳の23～25mであった。そこでひとまず前方後円(方)墳については大型古墳と認めてよいことにした。ところで下原古墳以上の規模の古墳を大型

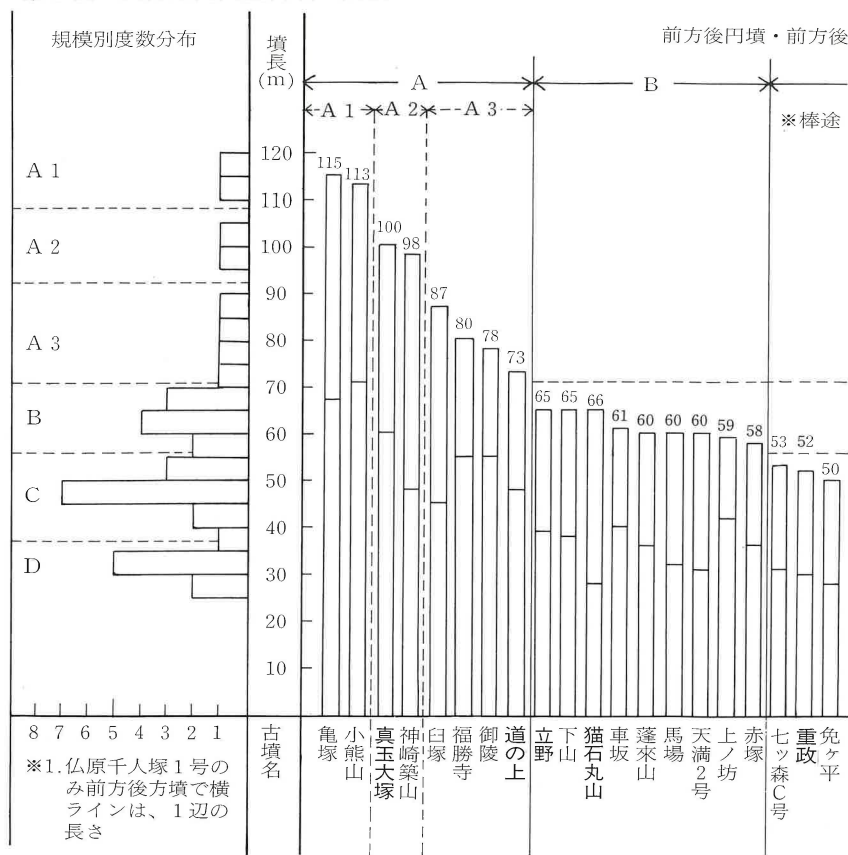
古墳と仮定すると2つの問題が持ち上がる。ひとつは100mを越える古墳と20m級の古墳を同じ性格の古墳とみてよいかという問題と、円墳の場合どの規模で大型古墳と小型古墳を分けるのかという問題である。これはどのような古墳が首長墳であるか? 首長墳のなかに階層差があるか? という問題でもある。そこで佐賀県の大規模古墳を規模から分類した蒲原宏行氏の方法(註1)にしたがって大分県の大規模古墳を整理したのが第3表である。また前方後円墳の墳長と大型円墳の墳長を等価に比較することはできないので、どの規模の前方後円墳がどの規模の大型円墳に対応するかを調べるために、大型古墳の円丘部の径を整理してみた結果が第4表である。以下に2つの表をもとに検討する。

前方後円墳ではその墳長の度数分布に明瞭に規模格差が現われる。墳長70mを越えるA類、60m強のB類、40m級のC類、そして35m以下のD類の古墳である。A類はよくみると、さらに県下最大規模で110m級のA1類、100m前後のA2類と70・80m級のA3類にわかれる。小熊山古墳(13)と亀塚古墳(23)が、豊後を代表する大規模古墳であることが確認できる。またA類の特徴として、A2類のみに周溝が存在し、A1類・A3類の前方後円墳にはいまだ明確な周溝が確認されていない。とくに特定の大古墳には周溝を掘らずに墳丘が構築された可能性が高い。

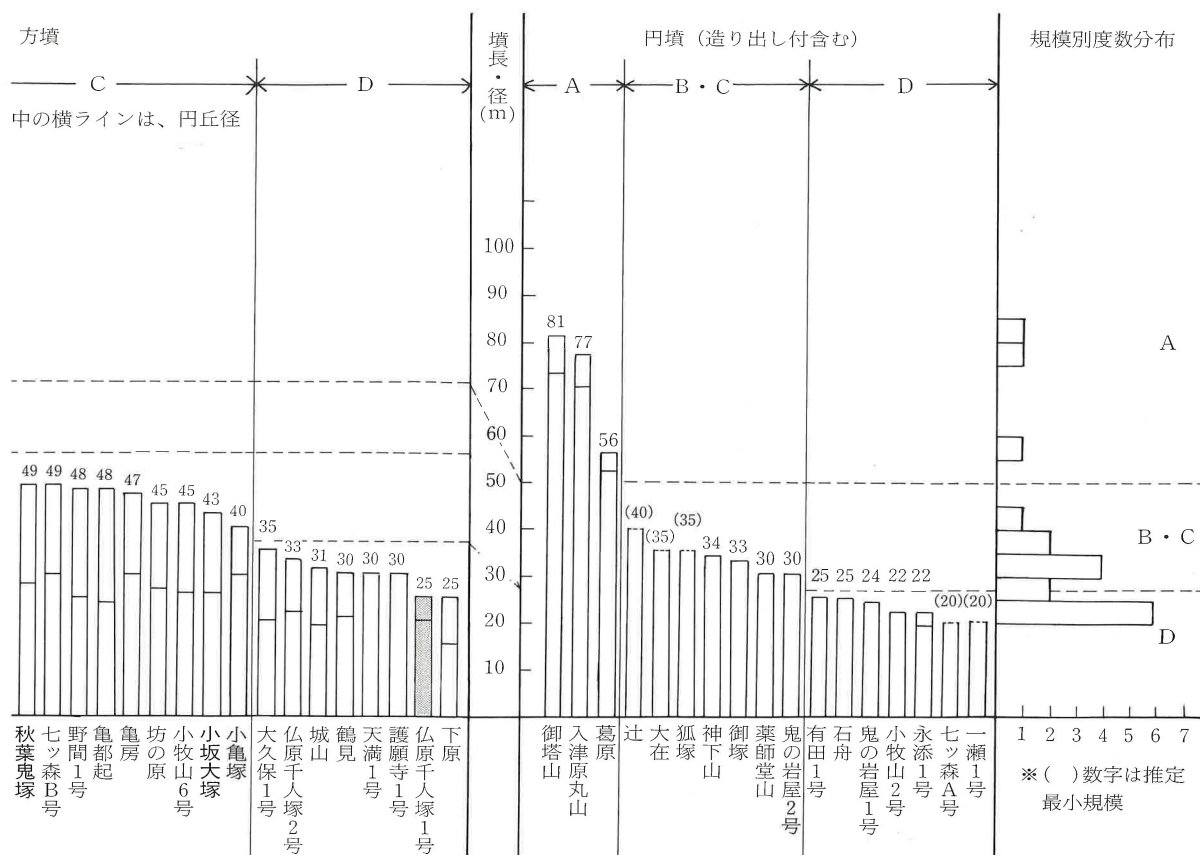
大型円墳については、墳径度数分布をみると3つに分類できる。墳径50mを超す3基、径30m級の一群と径20m級の一群である。最後の径20m級は、さらに統計をとれば10m級の円墳がさらに増えてゆき統計上の『山』をなしないと推定される。しかし県内の古墳時代各期の方(円)形周溝墓群と群集墳の規模をみると、構成古墳数の多い大規模な例ほど20mを越える古墳を含まないのである。いいかえれば径20m以上の古墳を造営する場合には群集墳から飛び出して別な場所に古墳群を作った場合が多いのである。その場合このクラスの規模の古墳は首長墳と認識されていたと推定される。したがって径20m級を大型円墳の規模類型として認めたい。

大型円墳の規模3分類が前方後円墳の規模4分類のどこに対応するかをみるために第4表を使うと、墳長50m以上の大型円墳は前方後円墳A類の円丘規模と一致する。次の『山』である30m級の円墳は前方後円墳B類・C類に対応し、20m級の円墳は前方後円墳D類にあたる。御塔山古墳(54)、入津原丸山古墳(52)、葛原古墳(51)は

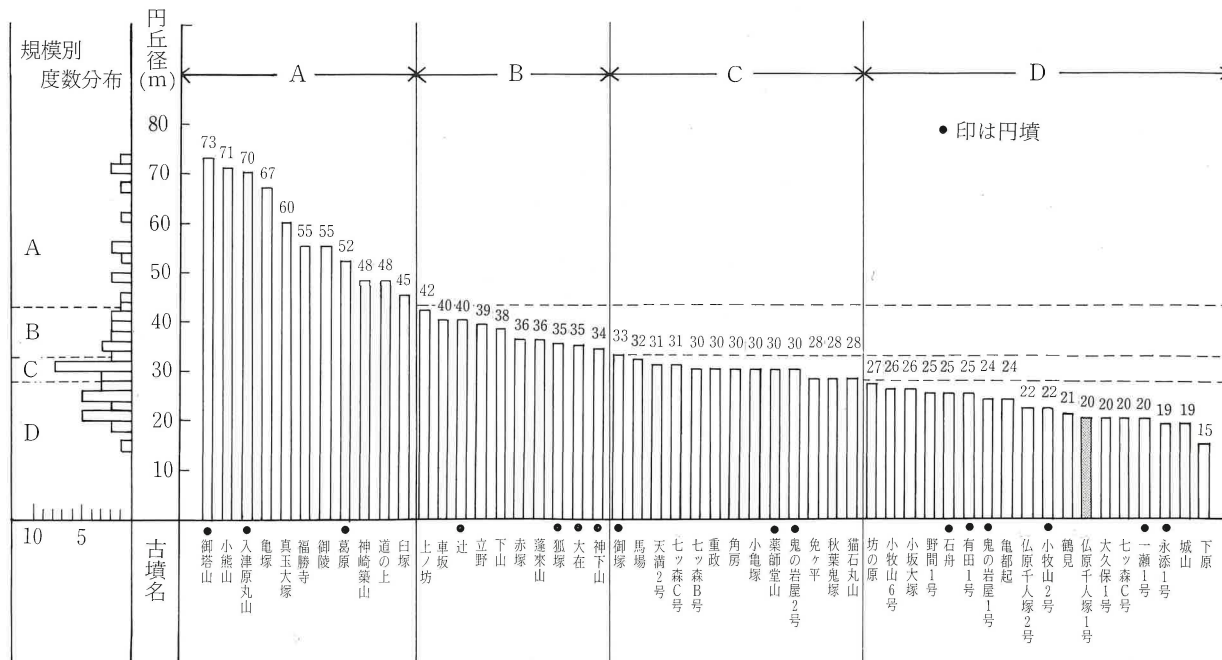
第3表 大分県内大型古墳の規模







第4表 大分県下大型古墳の円丘部の規模



前方後円墳A類とほぼ同じクラスの首長墳であると言え、わけても御塔山と入津原丸山は前方後円墳最大規模の  
小熊山・亀塚級であるとみなせよう。(田中)

註1、蒲原宏行「佐賀平野の首長墓系譜とその画期」『交流の考古学』1991 肥後考古学会

#### 第4節 大分県の埴輪（第5表）

3ヵ年の事業期間中、県内で過去に調査されたり採集された埴輪の情報を収集し、また調査中も埴輪の採集に努めた。その結果、第5表にみられるように現在のところ県内では41箇所で埴輪の出土を確認した。ただし宇佐市高倉古墳と豊後高田市鑑堂古墳では円筒埴輪の出土を確認したが、内容の調査まではいたらなかった。また壺形埴輪については、底部焼成前穿孔の壺形土器で古墳に供献された例を壺形埴輪とした。円筒埴輪を出土した遺跡は33箇所、壺形埴輪のみが6箇所、形象埴輪のみが2箇所となる。

第5表は観察した埴輪を分類しおおよそ年代順に整理した表である。円筒埴輪の分類と観察細目は筆者の分類案に準拠した（註1）。表左端列の「円筒埴輪の分類」項の1類上下が古墳時代前期、2A類から3類までが中期前半、4A類から4B類が中期後半、5A類以下が後期となる。また今回の調査期間中多くの器財・形象埴輪の存在が明らかになったので、埴輪全体の形式組成を比較するために近藤義郎氏の方法（註2）にしたがって壺形埴輪、器財・形象埴輪の各形式を整理してみた。項目のうち説明が必要な点を以下にあげる。①いわゆる朝顔形埴輪は朝顔形円筒埴輪として円筒埴輪にふくめた。②壺形埴輪の分類は新たに整理しなおした（註3）。1類は底部焼成前穿孔という特徴を除けば、大型の壺形土器と異ならないもの。2類は胴部が倒卵形に長胴化しながらもなお不安定な形態で、多くの場合後述する「器台形埴輪」と組み合わせると推定されるもの、3類は胴部長胴化が進行し底部は筒状になるか平底化し、円筒埴輪同様に底部を直接埋めて樹立可能なものである。④この表の「器台形埴輪」とは、誤解のないようにひとこと言えば、古墳時代前期前半の瀬戸内から畿内の大型古墳で使用される特殊器台形埴輪ではなく、古墳時代前期後半の豊後で発達する壺形埴輪2類を乗せるために作られた器台形土器のことである。この点については立野古墳の埴輪の報告で詳しく述べる。系譜的には在地の集落祭祀にもちいられた器台形土器から分岐したと推定されるが、今のところ同一形式の器台形土器は古墳の供献品としてのみ使われる傾向があることから「器台形埴輪」と呼びたい。埴輪形式の組成の項は後でのべる。

さて大分の大型古墳と埴輪の関わりについてのべれば、前節で前方後円墳とした44古墳のうち16古墳から、大型円墳10基のうち6古墳から埴輪の採集がある。前期の大型古墳には円筒埴輪はきわめて少なく壺形埴輪が使われる傾向にある。また古墳時代中期前半までは埴輪の使用は大型古墳に限定される傾向があったのに対して、中期後半の4A類円筒埴輪以後つまり穴窯焼成の埴輪が出現してからは大型古墳のみならず、10m級の円墳・方墳などでの使用が多くなる。この傾向は宇佐から国東地域にかけて顕著である。

次に埴輪形式の組成という観点から大分県の埴輪の変遷を整理しておきたい。

まずA類型は、壺形埴輪が埴輪使用の中心をなす類型で、古墳時代前期にあたる。細かくみると、壺形埴輪1類のみ使用されるA1類型と、円筒埴輪が加わりかつ供献用の壺形埴輪2類と「器台形埴輪」に加えて樹立用の壺形埴輪3類が登場するA2類型がある。A3類型は円筒埴輪はないが、壺形埴輪と「器台形埴輪」のセットに樹立用の壺形埴輪3類がある類型である。A類型の組成のもうひとつ重要な特徴は、朝顔形円筒埴輪が加わらないことにある。また円筒埴輪が壺形埴輪をのせる器台として使用されていない点も重要な特徴である（註4）。家形埴輪をふくめて器財埴輪をとみなさない点も指摘できる。

B類型は家形埴輪と器財埴輪が形式組成に定着する段階で、まだ馬形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪は加わらない。ほぼ古墳時代中期にあたる。この類型が登場した初期の中期前半にはまだA類型の名残で壺形埴輪3類を伴う古墳が多く、それをB2類型とし、また壺形埴輪3類のみからなる組成は、B類型の円筒埴輪と器財埴輪が省略された組成とみなしてB3類型とした。

C類型は馬形埴輪や人物埴輪などの形象埴輪が加わるもので、古墳時代後期にあたるが、大分市辻古墳では4A類の円筒埴輪に馬形埴輪が伴うので、この類型の出現は中期にさかのぼる可能性が高い。

埴輪の出土情報については関係各機関および各教育委員会担当者の協力を得たほか、埴輪の内容については川西宏幸・高橋徹・井上義也・吉田和彦の各氏から貴重な意見をいただいた。

（田中）

註1、田中裕介「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期(上)」『おおいた考古』7 1995 大分県考古学会

註4、註3レジメのなかでA類型の円筒埴輪を「器台円筒」としたが、井上義也氏の意見にしたがってその評価を撤回する。

●非常にいい      ◎かなり目につく      ○確認できる      ?かもしれない

| 円筒埴輪の分類 | 埴輪形式の組成 | 古 墳 名                | 所在地            | 円 筒 埴 輪      |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    | 壺形埴輪 |    |       | 器 財 ・ 形 象 埴 輪 |     |    |    |     |    |     |     |    |                | 赤色顔料塗布         | 焼成<br>野焼き | 穴窯 | 備 考 |     |    |    |
|---------|---------|----------------------|----------------|--------------|------------------|--------|------------|----|----|------|-------------|----|-------------|----|------|----|-------|---------------|-----|----|----|-----|----|-----|-----|----|----------------|----------------|-----------|----|-----|-----|----|----|
|         |         |                      |                | 外面調整         |                  | 最上段の長さ | 突起の形態      |    |    | 透かし穴 |             |    | 朝顔形<br>円筒埴輪 | 1類 | 2類   | 3類 | 器台形埴輪 | 家形            | 囲い形 | 盾形 | 靴形 | 衣笠形 | 船形 | 短甲形 | 人物形 | 馬形 |                |                |           |    |     |     |    |    |
|         |         |                      |                | 1次<br>タテハケのみ | 2次<br>ナテ<br>タテハケ |        | 横ハケ<br>A B | 短い | 同じ | 長い   | 高鋭<br>高台・高丸 | 台形 |             |    |      |    |       |               |     |    |    |     |    |     |     |    | 低台・三角          |                |           |    |     | 三角形 | 方形 | 円形 |
|         |         |                      |                |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      |    |       |               |     |    |    |     |    |     |     |    |                |                |           |    |     |     |    |    |
| —       | A1      | 蓬 葉 山                | 大 分 市          |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      | ○  |       |               |     |    |    |     |    |     |     | ○  | 表面採集           |                |           |    |     |     |    |    |
| 1       | A2      | 小 熊 山<br>立 野         | 杵 築 市<br>三 重 町 | ●            |                  |        | ○          |    |    | ●    |             |    |             | ◎  | ○    | ○  | —     | ○             | ○   | ?  |    |     |    |     |     |    | ○              | 部分発掘 ヒレ付半截筒円筒  |           |    |     |     |    |    |
|         |         |                      |                | ●            |                  |        | ○          | ○  |    | ●    |             |    |             | ◎  | ◎    | —  | ○     | ◎             | ○   |    |    |     |    |     |     | ●  | 部分発掘 線刻(三角・格子) |                |           |    |     |     |    |    |
| —       | A3      | 野 間 1 号<br>小 牧 山 6 号 | 大 分 市<br>大 分 市 |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      | —  | ○     | ○             | ○   |    |    |     |    |     |     | ○  | 部分発掘 線刻(波状)    |                |           |    |     |     |    |    |
|         |         |                      |                |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      | —  | ○     | ○             | ○   |    |    |     |    |     |     | ○  | 部分発掘           |                |           |    |     |     |    |    |
|         |         |                      | 庄の原遺跡群         | 大 分 市        |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      | —  | ○     | ○             | ○   |    |    |     |    |     |     | ○  | 全面発掘・H区1号土城    |                |           |    |     |     |    |    |
| ?       | ?       | 野 間 2 号              | 大 分 市          | ○            |                  |        |            |    |    |      | ○           |    |             |    |      |    |       |               |     |    |    |     |    |     |     |    | ○              | 部分発掘           |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 桜 八 幡 A              | 国 東 町          | ○            |                  |        |            |    |    |      | ○           |    |             |    |      |    |       |               |     |    |    |     |    |     |     |    | ○              | 表面採集           |           |    |     |     |    |    |
| 2A      | B?      | 御 陵                  | 大 分 市          | ●            | ◎                |        |            | ○  |    |      | ○           | ◎  | ○           |    | ?    | ◎  | ○     |               |     | ?  | ○  | ○   |    |     |     |    | ●              | 部分発掘 線刻(スジ貝?)  |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 亀 塚                  | 大 分 市          | ●            |                  | ○      |            | ○  | ○  |      | ○           | ●  | ○           |    | ○    | ○  | ○     |               | ○   | ?  | ○  | ○   |    | ○   |     | ○  | ○              | 全面発掘 線刻(スジ貝ほか) |           |    |     |     |    |    |
| 2B      | B2      | 臼 塚                  | 白 杵 市          | ○            |                  |        |            |    |    |      | ○           | ○  |             |    |      |    |       | ○             |     |    |    |     |    | ○   |     | ○  | ○              | 部分発掘 石人        |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 下 山                  | 白 杵 市          | ○            |                  |        |            | ○  |    |      | ○           |    |             | ?  | ?    | ○  |       | ○             |     |    |    |     |    |     | ○   | ○  | ○              | 部分発掘 2条突帯 石人   |           |    |     |     |    |    |
| —       | B3      | 勘助野地1号               | 中 津 市          |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      | —  |       |               |     |    |    |     |    |     | ○   | ○  | ○              | 全面発掘           |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 重 政                  | 三 重 町          |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      | —  |       | ○             |     |    |    |     |    |     |     | ○  | 部分発掘           |                |           |    |     |     |    |    |
| 2A      |         | 旭 が 丘                | 天 瀬 町          | ●            | ○                |        |            |    |    |      |             | ◎  | ○           |    |      | ○  | ○     |               |     |    |    |     |    |     |     | ●  | ○              | 表面採集           |           |    |     |     |    |    |
| 3       |         | 薬 師 堂 山              | 日 田 市          | ●            | ?                | ○      |            |    |    |      |             | ◎  | ○           |    | ◎    | ○  |       |               |     | ?  |    |     |    |     |     | ○  | ○              | 表面採集           |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 入 津 原 丸 山            | 豊 後 高 田 市      | ●            |                  | ○      | ?          |    |    |      |             | ◎  | ○           |    |      | ○  |       |               | ○   |    |    |     |    |     |     | ○  | ○              | 表面採集           |           |    |     |     |    |    |
| 4A      | B       | 御 塔 山                | 杵 築 市          | ◎            |                  |        | ○          |    |    |      |             | ○  | ○           |    | ○    | ○  | ◎     | ○             |     | ○  | ○  | ○   | ○  |     |     |    | ○              | ○              | 部分発掘      |    |     |     |    |    |
|         |         | 大 在                  | 大 分 市          | ○            | ○                |        |            | ●  | ●  |      |             | ●  | ○           |    | ●    | ○  | —     | —             | —   | ○  | ○  | ○   | ○  | ○   |     | ○  | ○              | ● 全面発掘 線刻(半円)  |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 大 臣 塚                | 大 分 市          | ◎            |                  | ○      |            |    |    |      |             | ●  |             |    |      | ○  | —     | —             | —   |    |    |     |    |     | ◎   | ◎  | ◎ 部分発掘 幅広突帯    |                |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 桜 八 幡 B              | 国 東 町          | ◎            |                  |        | ○          |    |    |      |             | ○  |             |    | ○    | ○  |       |               |     |    |    |     |    |     |     | ○  | ○              | ○ 表面採集 線刻(波形)  |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 大 原 A                | 山 香 町          | ◎            |                  |        | ○          | ◎  |    |      |             | ◎  | ○           |    | ●    |    | —     | —             | —   |    |    |     |    |     |     | ○  | ○              | ● 全面発掘 4条突帯    |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 川 部 1 4 号            | 宇 佐 市          | ◎            |                  |        | ●          | ●  |    |      |             | ○  | ◎           | ○  |      | ●  | ○     | —             | —   | ○  |    |     |    |     |     | ●  | ○              | ● 全面発掘 4条・3条突帯 |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 川 部 3 2 号            | 宇 佐 市          | ◎            |                  |        | ●          | ●  |    |      |             | ○  | ◎           | ○  |      | ●  |       | —             | —   | ○  |    |     |    |     | ◎   | ○  | ○              | ● 全面発掘 4条・3条突帯 |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 宗 禪 寺 1 号            | 安心院町           | ◎            |                  |        |            |    |    |      |             | ○  |             |    |      | ○  | —     | —             | —   | ○  |    |     |    |     |     | ○  | ○              | ◎ 全面発掘 韓式土器・器台 |           |    |     |     |    |    |
| 4B      |         | 葛 原                  | 宇 佐 市          | ●            |                  |        |            |    |    |      | ○           | ◎  | ○           |    | ●    | ○  | —     | —             | —   |    |    |     | ○  |     | ○   | ○  | ◎ 表面採集         |                |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 小 部 遺 跡              | 宇 佐 市          | ◎            |                  |        |            |    |    |      |             | ○  | ◎           |    |      | ○  | —     | —             | —   |    | ○  |     |    |     | ○   | ○  | ○ 部分発掘         |                |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 京 塚 1 号              | 宇 佐 市          | ●            |                  |        |            | ●  |    |      | ●           |    |             | ●  |      | —  | —     | —             | —   |    |    |     |    |     | ○   | ○  | ● 部分発掘 2条突帯    |                |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 行 者 原 2 号            | 武 蔵 町          | ○            |                  |        |            |    |    |      | ◎           |    |             | ○  |      | —  | —     | —             | —   |    |    |     |    |     |     | ○  | ○              | ○ 表面採集 第1古墳群   |           |    |     |     |    |    |
| 4A      | ?       | 真 玉 大 塚              | 真 玉 町          | ●            |                  |        |            | ◎  | ○  |      | ○           | ◎  |             | ●  | ○    |    |       |               | ○   |    |    |     |    |     | ○   | ○  | ○              | 部分発掘 底部形成淡輪技法  |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 辻                    | 大 分 市          | ○            |                  |        | ○          |    |    |      |             | ○  | ◎           |    | ○    | ○  |       |               | ○   |    |    |     |    |     | ○   | ○  | ○              | ◎ 部分発掘         |           |    |     |     |    |    |
| 5A      |         | 亀 都 起                | 玖 珠 町          | ●            |                  |        |            | ○  |    |      |             | ●  |             | ●  |      | —  | —     | —             |     |    |    |     |    | ○   | ○   | ○  | ○              | ● 表面採集 三角突帯    |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 野 内                  | 真 玉 町          | ●            |                  |        |            |    |    |      |             | ●  |             |    | ○    | ○  |       |               |     |    |    |     |    |     |     | ○  | ○              | ● 表面採集         |           |    |     |     |    |    |
| 5B      | C       | 猫 石 丸 山              | 豊 後 高 田 市      | ●            |                  |        |            | ●  |    |      | ●           |    | ●           | ○  | —    | —  | —     | ○             |     |    |    |     |    | ○   | ○   | ○  | ○              | ● 部分発掘 3条・2条突帯 |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 大 原 B                | 山 香 町          | ○            |                  |        |            |    |    |      |             | ○  |             | ○  |      | —  | —     | —             |     |    |    |     |    |     | ○   | ○  | ○              | ○ 全面発掘         |           |    |     |     |    |    |
| —       |         | 築 山                  | 安 岐 町          | ○            |                  |        |            |    |    |      |             | ○  |             |    | ○    |    | —     | —             | —   | ○  |    |     |    | ○   | ○   | ○  | ○              | ○ 表面採集 鳥形埴輪あり  |           |    |     |     |    |    |
|         |         | 地 蔵 原 遺 跡            | 大 分 市          |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      |    |       |               |     |    |    |     |    |     |     | ○  | ○              | ○ 土城混入 須恵質埴輪   |           |    |     |     |    |    |
| —       |         | 伝 牧 出 土              | 大 分 市          |              |                  |        |            |    |    |      |             |    |             |    |      |    |       |               |     |    |    |     |    | ○   | ○   | ○  | ○ 表面採集 頭部      |                |           |    |     |     |    |    |

| 古 墳 名      | 埴輪の保管場所             | 文 献      | 古 墳 名      | 埴輪の保管場所       | 文 献         | 古 墳 名     | 埴輪の保管場所       | 文 献         |
|------------|---------------------|----------|------------|---------------|-------------|-----------|---------------|-------------|
| 13 蓬 萊 山   | 大分県教育委員会            | 120      | 33 重 地 丘   | 三重町教育委員会      | 109.121.133 | I 小 塚 遺 跡 | 宇佐市教育委員会      | 106.114     |
| 14 小 熊 山   | 杵築市教育委員会            | 91.94.97 | E 旭 が 丘    | 天瀬町教育委員会      | 71          | G 郡 郷 1号  | 宇佐市土記の歴史民俗資料館 |             |
| 29 立 野     | 大分県教育委員会・三重町教育委員会   | 80.120   | 60 薬 師 堂 山 | 日田市教育委員会      |             | B 行者原2号   | 大分県教育委員会      |             |
| 18 野 間 1号  | 別府大学                | 34       | 52 入 澤 原 山 | 大分県教育委員会      |             | 10 真 土 塚  | 真土町教育委員会      | 118.130.134 |
| 17 小 牧 山6号 | 大分市教育委員会            | 124.128  | 54 御 塔 山   | 杵築市教育委員会      | 74.87       | 57 辻      | 大分市教育委員会      |             |
| C 庄の原遺跡群   | 大分県教育委員会            | 129      | 56 大 塚     | 大分県教育委員会      | 117         | 41 亀 部 起  | 大分県教育委員会      | 53.78       |
| C 野 間 2号   | 大分市教育委員会            |          | 16 大 臣 塚   | 大分県教育委員会      |             | 9 野 間     | 大分県教育委員会      | 123         |
| A 桜 八 幡 A  | 大分県教育委員会・国東町歴史民俗資料館 |          | A 桜 八 幡 B  | 国東町歴史民俗資料館    |             | 8 猫 石 丸 山 | 大分県教育委員会      | 123         |
| 15 御 陵     | 別府大学                |          | F 大 原 A    | 宇佐市土記の歴史民俗資料館 |             | F 大 原 B   | 宇佐市土記の歴史民俗資料館 | 83          |
| 23 龜 塚     | 大分市教育委員会            | 107.113  | G 川 部 14号  | 宇佐市教育委員会      | 108         | J 築 山     | 宇佐市土記の歴史民俗資料館 |             |
| 27 臼 塚     | 臼杵神社・臼杵市教育委員会       | 83       | G 川 部 32号  | 宇佐市教育委員会      | 108         | K 地蔵原遺跡   | 大分市歴史資料館      |             |
| 28 下 塚     | 臼杵市教育委員会            | 53.122   | H 空押寺1号    | 安心院町教育委員会     | 102         | L 飯 出 土   | 野田雅之氏蔵        |             |
| D 勘助野地1号   | 大分県教育委員会            | 77       | 51 葛 原     | 宇佐市教育委員会      | 84          | M 高 倉     | 宇佐市教育委員会      |             |



## 第5節 大分県前方後円墳調査史

最近の大分県における前方後円墳の調査・研究の成果は注目すべきものがある。それは相次ぐ前方後円墳の発見・確認と出土埴輪による年代の確定および墓域の確認・墳丘の測量等の基礎的作業が飛躍的に進んだことと、それら資料をもとにした論議が高まってきたことを指す。そうした背景は、赤塚古墳に象徴されるように何よりも豊地方が古墳時代の九州の中で、とりわけ政権中枢の畿内と密接な関係があることがあげられよう。

県下に所在する前方後円墳は50基に満たない。いうまでもなく前方後円墳は、他の考古学遺跡に比して、膨大な情報量を有するもので、規模の大小はあれ一つの地域における一基の前方後円墳のもつ意義は計り知れないものがある。しかし、これら県下の数少ない前方後円墳も、昭和30年代以降の高度経済成長下の急速な開発の波に度々その存在が危機に見舞われた。その最たるものが大分平野最奥部にあった全長80mの御陵古墳である。本古墳は、墳丘の保存良好な旧大分郡最大の中期古墳であったが、宅地造成事業によってさしたる保存活動もないまま短期間の調査で消滅させられた。当時はもちろん行政上の体制の不備の面はあったが県下有数の首長墳が消え去ったことは、大分県の文化財保護行政の歴史の中で、忘れてはならない反省材料として銘記すべきものである。

こうした反省に立って、昭和20年代以降の前方後円墳及び大型円墳に関わる調査について、便宜上4期に分けてその歩みをふり返ってみたい。なお、ここで大型円墳について触れているのは、それが明らかに前方後円墳と同様に主要な首長墳と考えられるものであり、本質的に地域の政治的・社会的な動勢をうかがう上で欠くことができない資料とされるからである。

### I 期（昭和20～45年）

戦後間もない昭和24年には、後に国指定史跡となった臼杵市下山古墳の発掘調査が行われたが、これは古墳の主体部の学術的な調査として戦後初の記念すべきものといえる。昭和35～42年には、大分市の新産都事業に係る事前の基礎資料調査として、野間古墳群、築山古墳、馬場古墳等の調査が行われた。一方、この時期までは文化財保護行政の体制が未整備の段階でもあって、調査については別府大学等の大学機関に依存せざるをえなかった。

### II 期（昭和46～57年）

昭和46年に大分県教育委員会に文化室が設置され、開発に関わる発掘調査も行政で対応可能となった。早速同年には県立宇佐風土記の丘公園予定地内の川部・高森古墳群の主要な前方後円墳の墳丘測量が行われ、同古墳群の史跡指定、整備のための基礎資料とした。またこの期間は、県内の遺跡分布調査によって、道の上古墳、入津原丸山古墳、猫石丸山古墳、坊ノ原古墳等の確認・測量調査が行われ、県史跡指定の措置がとられた。さらに、川部・高森古墳群の試掘等の調査によって、免ヶ平古墳の前方部が検出された。併行して赤塚古墳・角坊古墳の周溝や周辺調査によって方形周溝墓群が確認された。

### III 期（昭和58～平成3年）

この段階になると市町村教育委員会が主体となって、個別の主要な前方後円墳・大型円墳の新発見・確認がなされた。杵築市の御塔山古墳、小熊山古墳、日田市の薬師堂山古墳、三重町の立野古墳等が代表的なものである。とくに、小熊山古墳の発見は、東九州の古墳時代研究にとって画期となる発見であり、特記されよう。この間、大分県前方後円墳研究会によって、城山古墳、亀都起古墳等の墳丘測量調査が行われた。また、海部地方の主要な中期の円墳（前方後円墳？）である大在古墳は、保存状態がよくなかったとはいえ調査後壊されたことは惜しまれてならない。

### IV 期（平成4～9年）

主要古墳の整備・活用を視野に入れた調査が各地で行われるようになった。亀塚古墳、立野古墳、猫石丸山古墳、真玉大塚古墳、天満古墳群等である。とくに亀塚古墳は、墳丘及び主体部の発掘調査によって、豊の盟主墳たる全容が明らかになった。

以上、概略な経緯について述べたが、なお新発見前方後円墳の可能性はのこされており、こうした基礎的作業は続けられなければならない。また、前方後円墳の整備については、画一的でなく、その古墳の今日存在している歴史の重みを感じさせる復元がなされて然るべきと考える。

（清水）

第6表 大分県内前方後円墳・大型円墳調査関係年表

| 年 度         | 古 墳 名    | 所 在 地    | 事 項                | 調査主体        | 調査の契機        | 史 跡 指 定     | 文 献     | 備 考          |
|-------------|----------|----------|--------------------|-------------|--------------|-------------|---------|--------------|
| 昭和 24(1949) | 下山古墳     | 臼杵市      | 発掘調査(第1次)          |             | 学術調査         | —           | 23.25   |              |
| 昭和 26(1951) | 下山古墳     | 臼杵市      | 発掘調査(第2次)          |             | 学術調査         | 国・昭和32.7.10 | 23.25   |              |
| 昭和 26(1951) | 狐塚古墳     | 東国東郡国東町  | 発掘・測量調査            |             | 学術調査         | 県・昭和28.4.20 | 22      |              |
| 昭和 29(1954) | 七ツ森古墳群   | 竹田市      | 発掘調査               | 県教委         |              | 国・昭和34.5.13 | 20      |              |
| 昭和 35(1960) | 野間古墳群    | 大分市      | 発掘調査(第1次)          | 県教委         |              |             |         |              |
| 昭和 40(1965) | 野間古墳群    | 大分市      | 発掘調査(第2次)          | 県教委         |              |             | 34      |              |
| 昭和 41(1966) | 築山古墳     | 北海部郡佐賀関町 | 発掘・測量調査            | 県教委         |              | 国・昭和11.9.3  | 32      |              |
| 昭和 42(1967) | 馬場古墳     | 北海部郡佐賀関町 | 測量調査               | 県教委         |              |             | 32      |              |
| 昭和 43(1968) | 御陵古墳     | 大分市      | 発掘調査               | 県教委         | 宅地造成         |             | 36.40   | 消滅           |
| 昭和 45(1970) | 川部・高森古墳群 | 宇佐市川部・高森 | 測量調査(第1次)          | 県教委         | 範囲・規模確認      | —           | 42      | 別府大学へ委託      |
| 昭和 46(1971) | 道ノ上古墳    | 大野郡三重町   | 測量調査               | 県教委         | 規模確認         | 県・昭和47.3.21 | 75      |              |
| 昭和 46(1971) | 川部・高森古墳群 | 宇佐市川部・高森 | 測量調査(第2次)          | 県教委         |              | 国・昭和55.3.24 | 42      |              |
| 昭和 47(1972) | 入津原丸山古墳  | 豊後高田市    | 造り出し付<br>大型円墳の確認   | 県教委         | 分布調査         | 県・昭和49.3.19 |         |              |
| 昭和 47(1972) | 猫石丸山古墳   | 豊後高田市    | 前方後円墳の確認           | 県教委         | 分布調査         | 県・昭和49.3.19 |         |              |
| 昭和 47(1972) | 兎ヶ平古墳    | 宇佐市川部    | 発掘・測量調査            | 宇佐市教委       |              |             | 44.70   | 川部・高森古墳群     |
| 昭和 48(1973) | 鶴見古墳     | 宇佐市川部    | 発掘・測量調査            | 宇佐市教委       |              |             | 48      | 川部・高森古墳群     |
| 昭和 49(1974) | 下山古墳     | 臼杵市諏訪    | 墳丘測量調査             | 臼杵市教委       |              | —           | 67      |              |
| 昭和 49(1974) | 蓬萊山古墳    | 大分市      | 石棺実測調査             | 大分市教委       | 内部確認         | 県・昭和56.3.31 | 47      |              |
| 昭和 49(1974) | 大蔵古墳     | 大分市      | 前方後円墳の確認<br>測量調査   | 県教委         | 分布調査<br>道路建設 |             | 101     | 一部削平         |
| 昭和 51(1976) | 坊ノ原古墳    | 大野郡大野町   | 前方後円墳の確認<br>測量調査   | 大野町教委       | 分布調査         | 県・昭和51.3.30 | 51      |              |
| 昭和 52(1977) | 角房古墳     | 宇佐市高森    | 周溝の発掘調査            | 県教委         | 墳丘確認         | —           | 52      |              |
| 昭和 53(1978) | 赤塚古墳     | 宇佐市高森    | 周溝の発掘調査            | 県教委         |              |             | 54      |              |
| 昭和 53(1978) | 車坂古墳     | 宇佐市川部    | 周溝の発掘調査            | 県教委         |              |             | 54      |              |
| 昭和 54(1979) | 兎ヶ平古墳    | 宇佐市川部    | 周溝の発掘調査<br>前方部の確認  | 県教委         | 範囲確認         |             | 55      | 前方後円墳の確認     |
| 昭和 58(1983) | 御塔山古墳    | 杵築市      | 造りだし付<br>大型円墳の確認   |             | 分布調査         |             | 74      |              |
| 昭和 60(1985) | 下原古墳     | 東国東郡安岐町  | 前方後円墳の確認           | 県教委         | 道路建設         |             | 76      | 消滅           |
| 昭和 63(1988) | 立野古墳     | 大野郡三重町   | 前方後円墳の確認           | 県教委         | 分布調査         | 県・平成4.3.27  |         |              |
| 昭和 63(1988) | 小熊山古墳    | 杵築市      | 前方後円墳の確認           | 県教委         | 分布調査         |             | 79      |              |
| 昭和 63(1988) | 城山古墳     | 日田市      | 墳丘の測量調査            | 大分県前方後円墳研究会 | 規模確認         | 県・平成元3.30   | 78      |              |
| 昭和 63(1988) | 薬師堂山古墳   | 日田市      | 墳丘の測量調査            | 日田市教委       | 規模確認         | 県・平成2.3.29  |         | 前方後円墳の確認     |
| 平成 元(1989)  | 亀都起古墳    | 玖珠郡玖珠町   | 墳丘の測量調査            | 大分県前方後円墳研究会 | 規模確認         |             | 78      |              |
| 平成 元(1989)  | 大在古墳     | 大分市      | 大型円墳の確認<br>発掘調査    | 県教委         | 区画整理         |             | 117     | 消滅           |
| 平成 元(1989)  | 秋葉鬼塚古墳   | 大野郡三重町   | 墳丘の測量調査            | 諸岡郁         | 規模確認         | 県・平成6.3.25  | 本報告書    | 立野・重政古墳築も略測量 |
| 平成 元(1989)  | 御塔山古墳    | 杵築市      | 墳丘の測量調査<br>周溝の発掘調査 | 杵築市教委       | 規模確認         | 県・平成3.3.26  | 87      | 長径81m        |
| 平成 元(1989)  | 上ノ坊古墳    | 大分市      | 墳丘の測量調査            | 大分県前方後円墳研究会 | 規模確認         |             | 85      |              |
| 平成 2(1990)  | 小熊山古墳    | 杵築市      | 墳丘の測量・発掘調査         | 杵築市教委       | 規模確認         |             | 84      | 全長120m       |
| 平成 3(1991)  | 入津原丸山古墳  | 豊後高田市    | 墳丘の測量              | 大分県前方後円墳研究会 | 規模確認         |             |         | 長径75m        |
| 平成 5(1993)  | 亀塚古墳     | 大分市      | 墳丘の測量・発掘調査         | 大分市教委       |              | 国・平成8.3.28  | 107.113 | 全長120m       |
| 平成 6(1994)  | 小亀塚古墳    | 大分市      | 墳丘の測量・発掘調査         | 大分市教委       |              | 国・平成8.3.28  | 107.113 |              |
| 平成 7(1995)  | 立野古墳     | 大野郡三重町   | 墳丘の測量・周溝発掘         | 県教委         | 規模確認         |             | 本報告書    | 全長63m        |
| 平成 7(1995)  | 真玉大塚古墳   | 西国東郡真玉町  | 墳丘の測量              | 真玉町教委       | 規模確認         |             | 130     | 全長100m       |
| 平成 7(1995)  | 野内古墳     | 西国東郡真玉町  | 墳丘の測量              | 下村・江藤       | 学術調査         |             | 123     |              |
| 平成 8(1996)  | 猫石丸山古墳   | 豊後高田市    | 墳丘の測量・周溝<br>確認調査   | 県教委         |              |             | 本報告書    |              |
| 平成 8(1996)  | 真玉大塚古墳   | 西国東郡真玉町  | 墳丘の測量<br>周溝の発掘調査   | 真玉町教委       | 規模確認         |             | 134     | 二重周溝確認       |
| 平成 8(1996)  | 辻古墳      | 大分市      | 周溝確認               | 大分市教委       | 区画整理         |             |         | 径40mの周溝      |
| 平成 8(1996)  | 重政古墳     | 大野郡三重町   | 周辺発掘               | 三重町教委       | 規模確認         |             | 133     |              |
| 平成 9(1997)  | 天満古墳群    | 日田市朝日町   | 1.2号測量<br>2号墳周溝確認  | 日田市教委       | 規模確認         |             |         | 剣菱形二重周溝(2号)  |
| 平成 9(1997)  | 小坂大塚古墳   | 大野郡三重町   | 墳丘の測量調査            | 県教委         | 規模確認         |             | 本報告書    |              |

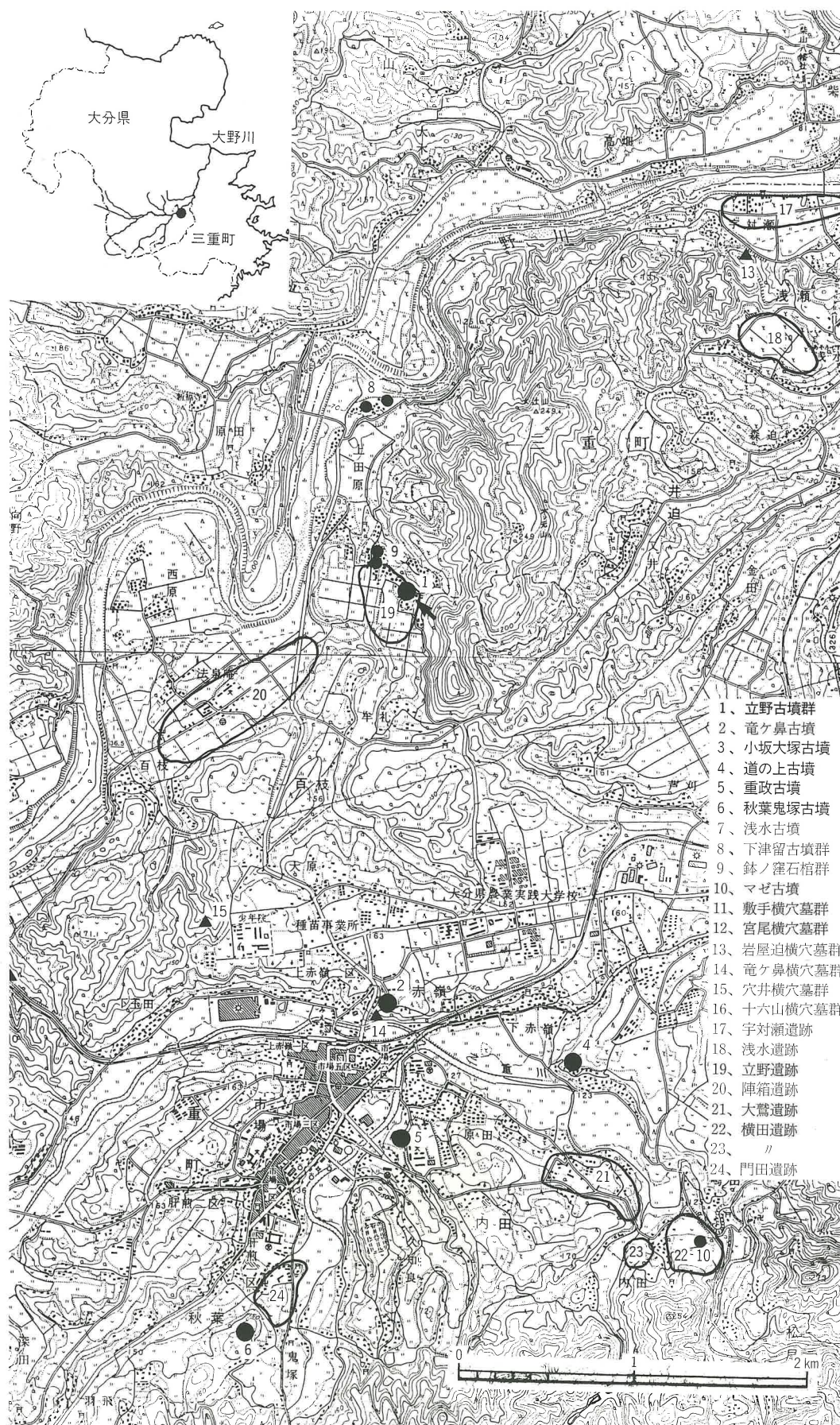
## 文献一覧

- 1 1915 河野清実「豊後西国東郡田原村灰土山古墳」『考古学雑誌』5-11、考古学会
- 2 1922 広瀬幸吉「長洲タケクラ古墳」大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書1
- 3 1922 広瀬幸吉「葛原ノ古墳」大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書1
- 4 1922 広瀬幸吉「赤塚古墳」大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書1
- 5 1923 梅原末治「北海部郡に於ける二三の古墳」『歴史と地理』12巻3号
- 6 1923 梅原末治「豊前宇佐郡赤塚古墳調査報告」『考古学雑誌』14-3、考古学会
- 7 1923 梅原末治「豊後速見郡八坂村本荘古墳の調査」大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書2
- 8 1924 梅原末治「豊後速見郡北石垣村の石室古墳」『考古学雑誌』14-4、考古学会
- 9 1924 本莊昇・前田多三郎「三重郷の史跡」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』3
- 10 1925 久多羅儀一郎「国東半島における古墳分布」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』4
- 11 1925 日名子太郎「速見・玖珠・日田三郡古墳調査一覧表」大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書4
- 12 1925 広瀬幸吉「下毛・宇佐両郡の古墳」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』4
- 13 1927 長山源雄「豊後国直入郡菅生村の古墳」『考古学雑誌』17-3、考古学会
- 14 1928 佐藤蔵太郎「臼塚」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』6
- 15 1928 日名子太郎「宇佐郡古墳横穴調査補遺」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』6
- 16 1929 日名子太郎「大野・直入両郡古墳横穴調査書」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』7
- 17 1933 河野清実「玖珠の二大古墳」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』11
- 18 1933 十時英司「神崎村築山古墳」『大分県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』11
- 19 1935 佐藤虎雄「築山古墳」
- 20 1951 賀川光夫「七ツ森古墳」大分県文化財調査報告書4（大分県教育委員会）
- 21 1952 賀川光夫「別府市北石垣鬼の岩屋古墳調査報告書」
- 22 1952 賀川光夫「東国東郡富来町大字浜崎狐塚古墳盗掘跡調査報告」
- 23 1952 賀川光夫・入江英親「臼杵市下山古墳特集」『大分県古代文化写真集』1
- 24 1953 賀川光夫「大分県における三つの竪穴式石槨を有する古墳」15『西日本史学』7
- 25 1953 賀川光夫・入江英親「古墳外形と内部構造」『大分県古代文化写真集』2
- 26 1955 賀川光夫「原始時代」『大分市史』上巻 大分市
- 27 1956 柿本辰雄「才田の前方後円墳」『日田文化』創刊号（日田市文化財調査委員会）
- 28 1957 酒井富蔵「豊後高田市誌」豊後高田市
- 29 1959 賀川光夫・小田富士雄ほか「法恩寺山古墳」日田市教育委員会
- 30 1961 賀川光夫「大分県史料」20巻・考古資料（大分県史料刊行会）
- 31 1962 賀川光夫「後期古墳の研究（豊）」『古代学研究』30、古代学研究会
- 32 1966 賀川光夫「昭和41年度緊急発掘調査概要一黒山遺跡・馬場・中ノ原古墳緊急調査」（大分県教育委員会）
- 33 1966 小田富士雄「古墳文化の地域的特色 九州」日本の考古学Ⅳ『古墳時代』上、河出書房
- 34 1967 賀川光夫・小田富士雄「野間古墳群・横尾貝塚・小池原貝塚緊急発掘調査報告書」（大分県教育委員会）
- 35 1968 小田富士雄・賀川光夫「中ノ原・馬場古墳緊急発掘調査」（大分県教育委員会）
- 36 1969 小田富士雄「昭和43年度緊急発掘調査概要一御陵古墳とその周辺」（大分県教育委員会）
- 37 1970 小田富士雄「古代の日田」『九州文化史研究紀要』15、九州大学九州文化史研究所
- 38 1971 賀川光夫「大分県の考古学」（吉川弘文館）
- 40 1972 賀川光夫・小田富士雄「御陵古墳緊急発掘調査」大分県文化財調査報告24（大分県教育委員会）
- 41 1973 賀川光夫「国東町史」（国東町史刊行会）
- 42 1973 賀川光夫・小田富士雄他「宇佐風土記の丘調査報告」（大分県教育委員会）
- 43 1974 小田富士雄「大分県・下山古墳出土の鉄鋌」『古文化談叢』2、九州古文化研究会
- 44 1974 小田富士雄・真野和夫・小倉正五「豊前・宇佐地方における古式古墳の調査」『考古学雑誌』60-2、日本考古学会
- 45 1974 後藤宗俊「大分川下流域における在地首長の成立と発展」『大分県地方史』73大分県地方史研究会
- 46 1974 後藤宗俊「豊後国海部地方における在地首長の成立と発展」『大分県地方史』74大分県地方史研究会
- 47 1975 富来隆・杉崎重臣「蓬萊山古墳」『大分市の文化財』Ⅲ、大分市教育委員会
- 48 1975 小田富士雄・真野和夫・小倉正五「鶴見古墳」宇佐市文化財調査報告1集（宇佐市教育委員会）
- 49 1976 清水宗昭「大分県前方後円墳一覧」『速見考古』5
- 50 1976 真野和夫「古墳時代」『大分の歴史（1）—ふるさと誕生—』大分合同新聞社
- 51 1977 清水宗昭「Ⅲ—5坊ノ原古墳」『大野原台地の遺跡』Ⅱ（大野町教育委員会）
- 52 1978 真野和夫「宇佐市川部・高森地区遺跡緊急発掘調査概報」Ⅰ（大分県教育委員会）
- 53 1978 高橋徹「大分県の埴輪」『大分県地方史』89大分県地方史研究会
- 54 1979 渋谷忠章「宇佐市川部・高森地区遺跡緊急発掘調査概報」Ⅱ（大分県教育委員会）
- 55 1980 渋谷忠章・栗田勝弘「宇佐市川部・高森地区遺跡緊急発掘調査概報」Ⅲ（大分県教育委員会）
- 56 1980 高橋徹編『宝剣山古墳』（佐伯市教育委員会）
- 57 1980 清水宗昭・牧尾義則「大野原台地の主要古墳」『大野原の遺跡』（大野町教育委員会）
- 58 1981 真野和夫・宮内克己「宇佐市川部・高森地区遺跡緊急発掘調査概報」Ⅳ（大分県教育委員会）
- 59 1981 小田富士雄「海部郡の古墳」森浩一編『探訪日本の古墳西日本編』、有斐閣
- 60 1982 後藤宗俊「1章大和国家の成立と二豊の在地首長」『大分県史』古代編Ⅰ大分県
- 61 1982 清水宗昭・高橋徹「大分の石棺」『九州考古学』56九州考古学会
- 62 1983 賀川光夫・清水宗昭「先史・原史時代」『竹田市史』上巻、竹田市
- 63 1984 坂田邦弘・副枝幸治「鬼の岩屋第2号墳の壁画について」『別府大学紀要』26、別府大学
- 64 1984 岩本仁蔵「各地域における最後の前方後円墳西日本Ⅰ大分県」『古代学研究』102、古代学研究会
- 65 1985 真野和夫「赤塚古墳とその周辺」『えとのす』29 新日本教育図書
- 66 1985 渋谷忠章「大分地方の古墳」『えとのす』29 新日本教育図書
- 67 1985 菊田徹「海部の古墳」『えとのす』29 新日本教育図書
- 68 1986 高橋徹「古墳を築いた人たち」『大分市史』上、大分市
- 69 1986 甲斐忠彦・宮内克己「鶴見古墳」史跡川部・高森古墳群保存修理事業報告書（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）



- 70 1986 小田富士雄・真野和夫『免ヶ平古墳発掘報告書』大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館研究紀要3
- 71 1986 後藤宗俊「古墳時代」『天瀬町誌』天瀬町
- 72 1986 菊田徹「神下山古墳について」『大分県考古学会報』2、大分県考古学会
- 73 1987 高橋徹・村上久和編『豊の国創世紀展（図録）』大分県・大分県教育委員会
- 74 1987 清水宗昭「杵築市御塔山古墳出土の埴輪について」『九州考古学』61九州考古学会
- 75 1987 玉永光洋「古墳時代」『大分県三重町誌総集編』三重町
- 76 1988 玉永光洋・小林昭彦『安岐城跡・下原古墳』（大分県教育委員会）
- 77 1988 村上久和・田中裕介「勘助野地遺跡」『一般国道・中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』1（大分県教育委員会）
- 78 1988 大分県前方後円墳研究会「大分の方後円墳集成」（1）『おおいた考古』1、大分県考古学会
- 79 1989 清水宗昭「杵築市小熊山古墳について―新発見の大型前方後円墳―」『おおいた考古』2、大分県考古学会
- 80 1989 渋谷忠章「2章1節2豊の古墳時代」『大分県史』先史編Ⅱ大分県
- 81 1989 真野和夫「2章3節古墳文化の浸透」『大分県史』先史編Ⅱ大分県
- 82 1989 渋谷忠章「2章4節古墳文化の展開」『大分県史』先史編Ⅱ大分県
- 83 1989 甲斐・真野・小柳編『古墳文化の世界（図録）』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）
- 84 1989 小倉正五・佐藤良二郎「葛原古墳再考」『古文化談叢』20下九州古文化研究会
- 85 1990 大分県前方後円墳研究会「大分県前方後円墳集成Ⅱ―大分市市尾上ノ坊古墳の測量調査」『おおいた考古』3、大分県考古学会
- 86 1990 諸岡郁「三重町の方後円墳」『おおいた考古』3、大分県考古学会
- 87 1990 平川信哉・清水宗昭「御塔山古墳」『杵築地区遺跡群発掘調査概報』Ⅰ杵築市教育委員会
- 88 1990 臼杵市史編さん室『臼杵市史 上』、臼杵市
- 89 1990 神田高士「大分の舟形石棺」『おおいた考古』3大分県考古学会
- 90 1990 真野和夫「2―3東部（大分）」『古墳時代の研究』10地域の古墳Ⅰ―西日本 雄山閣
- 91 1991 原田昭一・平川信哉「杵築地区遺跡群発掘調査概報」Ⅱ（杵築市教育委員会）
- 92 1991 甲斐忠彦・真野和夫・小柳和宏『免ヶ平古墳―史跡川辺・高森古墳群保存修理事業報告書』（大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館）
- 93 1991 後藤宗俊『東九州歴史考古学論考』山口書店
- 94 1992 原田昭一「杵築市小熊山古墳について」『おおいた考古』5大分県考古学会
- 95 1992 平川信哉ほか「杵築地区遺跡群発掘調査概報」Ⅲ 杵築市教育委員会
- 96 1992 平川信哉・後藤方彦・清水宗昭「御塔山古墳」『杵築地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ 杵築市教育委員会
- 97 1992 清水宗昭・原田昭一・平川信哉「大分県杵築市小熊山古墳」『日本考古学年報』43 日本考古学協会
- 98 1992 高橋徹「円筒埴輪―九州」『古墳時代の研究9』雄山閣
- 99 1992 村上久和「各地の概要―豊前」『前方後円墳集成―九州編―』山川出版社
- 100 1992 田中裕介「各地の概要―豊後」『前方後円墳集成―九州編―』山川出版社
- 101 1992 後藤重一ほか「大分県」『前方後円墳集成―九州編』山川出版社
- 102 1992 ヌ野勝教「大分県宇佐郡安心院町宗禅寺古墳出土の韓式系軟質土器について」『古文化談叢』28（九州古文化研究会）
- 103 1992 神田高士「臼杵の灰石製石棺」『臼杵史談』83 臼杵史談会
- 104 1993 田中裕介・神田高士ほか「緒方町越生にある漆生古墳群の観察」『おおいた考古』6 大分県考古学会
- 105 1993 清水宗昭「豊地方における古墳時代前・中期の首長層の動向について」『古文化談叢』30（中）九州古文化研究会
- 106 1993 佐藤良二郎「小部遺跡9次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』（宇佐市教育委員会）
- 107 1994 讀岐和夫「亀塚古墳―第1次発掘調査概報―」大分市教育委員会
- 108 1994 小倉正五・佐藤良二郎・江藤和幸「大分県宇佐市川部遺跡」『日本考古学年報』45 日本考古学協会
- 109 1994 諸岡郁「重政古墳出土の壺形埴輪について」『三重史談』11 三重史談会
- 110 1994 栗焼憲児『永添遺跡 中津城址（御用屋敷）ホヤ池窯跡』中津市文化財調査報告 13（中津市教育委員会）
- 111 1994 牧尾義則・田中裕介ほか編『大分県埋蔵文化財年報2―1992年度版―』（大分県教育委員会）
- 112 1994 菊田徹「白塚古墳とその被葬者―古墳出土の人骨が語るもの―」『臼杵史談』85 臼杵史談会
- 113 1994 讀岐和夫「亀塚古墳―保存整備事業第2次発掘調査概報―」（大分市教育委員会）
- 114 1994 佐藤良二郎「小部遺跡10次調査」『宇佐地区遺跡群発掘調査概報』（宇佐市教育委員会）
- 115 1995 小柳和宏ほか編『大分県埋蔵文化財年報』3（1993年度版）（大分県教育委員会）
- 116 1995 小柳和宏・村上久和・渋谷忠章編『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書92（大分県教育委員会）
- 117 1995 村上久和・宮内克己・田中裕介『大在古墳・浜遺跡第2地点』（大分県教育委員会）
- 118 1995 下村精一『真玉地区遺跡群発掘調査概報』2（真玉町教育委員会）
- 119 1995 賀川光夫「豊国の原像を求めて」『おおいた考古』7大分県考古学会
- 120 1995 田中裕介「東九州における古墳時代首長系譜の変遷と画期（上）」『おおいた考古』7大分県考古学会
- 121 1995 諸岡郁「大分県三重町重政古墳の測量調査と埴輪について」『おおいた考古』7大分県考古学会
- 122 1995 神田高士「下山古墳の壺形埴輪」『おおいた考古』7、大分県考古学会
- 123 1995 下村精一・江藤和幸「真玉町野内古墳の測量調査」『おおいた考古』7、大分県考古学会
- 124 1995 池邊千太郎「大分市松岡所在の小牧山古墳群について」『おおいた考古』7 大分県考古学会
- 125 1995 菊田徹「海部の古墳―海部とヤマト王権―」『風土記の考古学4―豊後国風土記の巻―』同成社
- 126 1995 小田富士雄「『豊国』の装飾古墳」『風土記の考古学4―豊後国風土記の巻―』同成社
- 127 1995 高橋徹「豊前・豊後」『全国古墳編年集成』雄山閣出版
- 128 1995 池邊千太郎「小牧山古墳群」『大分市埋蔵文化財調査年報』6（大分市教育委員会）
- 129 1996 江田豊ほか「庄の原遺跡群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』5（大分県教育委員会）
- 130 1996 下村精一『真玉地区遺跡群発掘調査概報』3（真玉町教育委員会）
- 131 1997 若杉竜太「九州石棺考」『先史学・考古学論究Ⅱ』龍田考古会
- 132 1997 小林昭彦・松本康弘編『大分県埋蔵文化財年報』5（平成7年度版）（大分県教育委員会）
- 133 1997 諸岡郁「三重地区遺跡群発掘調査概報」Ⅱ（三重町教育委員会）
- 134 1997 下村精一『真玉地区遺跡群発掘調査概報』4（真玉町教育委員会）
- 135 1997 『古代の豊予交流』（豊予海峡シンポジウムパンフレット・報告書）豊予海峡シンポジウム実行委員会・佐賀関町・佐賀関町教育委員会
- 136 1997 後藤宗俊「豊国の形成と展開」『大分県の歴史』（県史44）山川出版社
- 137 1997 宮内克己「大分県久住町原田遺跡群」九州考古学』72九州考古学会





第2図 三重地区の古墳時代遺跡分布図 (1/3万)



### 第3章 三重地区の前方後円墳

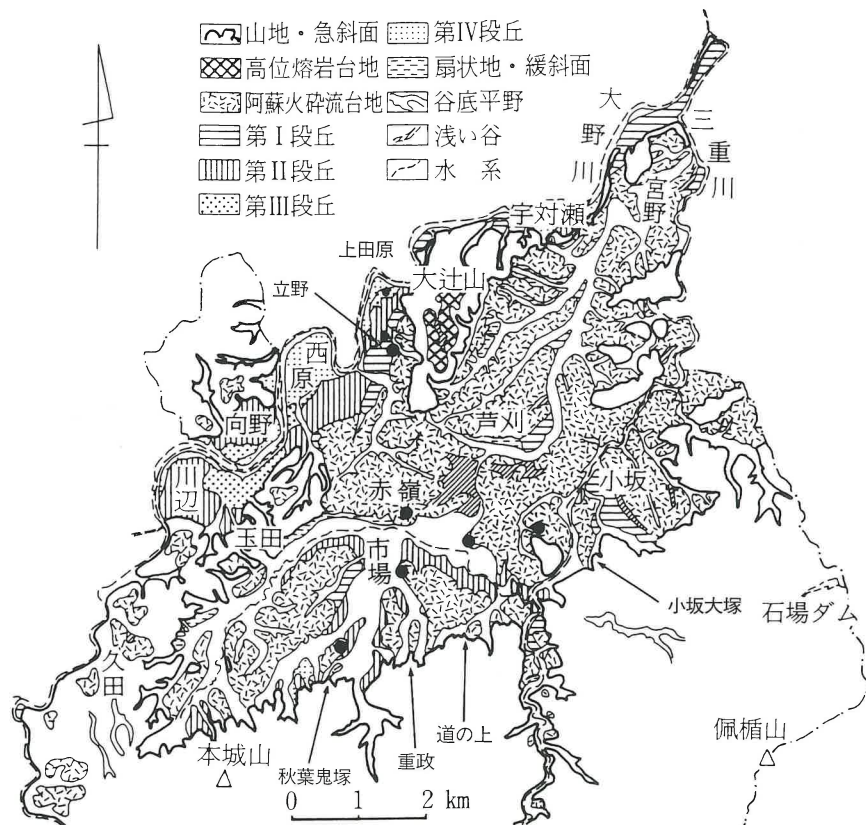
#### 第1節 歴史的地理的環境 —古墳時代を中心に— (第2・3図)

三重地区の古墳群は、大分県の南部内陸部のほぼ中央に位置し、現在の大野郡三重町(みえ)に所在する。三重町は南北に長く、北は大野川本流を境に大野郡千歳村(ちとせ)・大野町(おおの)に接し、南は傾山系に達して宮崎県と接する(第2図)。しかし南部の大半は急峻な山岳地帯で、古来より人々が生活した中心は北部低地に偏っていた。古墳群の分布するその三重町北部低地は河川からみてふたつに別れる(第3図)。河岸段丘が発達し沖積地の少ない大野川本流域と、大野川の支流三重川が八手状に分岐してまとまった沖積地を形成する三重川流域である。いずれも阿蘇火砕流台地を開析した地形で、阿蘇熔結凝灰岩が分布する。

大野川本流域は大辻山から幾重にも蛇行して、上田原・西原・向野・川辺などの段丘群を形成する。大野川が深く切り込むために川の周囲には崖が発達し、そのため沖積平地はほとんどない。西原段丘に立地する陣箱遺跡で弥生時代後期末から古墳時代前期前半の大規模な集落遺跡が発見されている(註1)。そこでは段丘上を利用した畑卓越型の集落が展開していたと推定される。この流域では上田原地区でのみ古墳群の継続的築造が認められる。前方後円墳をふくむ立野古墳群、鉢の窪石棺群、下津留石棺群が、古墳時代前期後半から中期後半まで築造され、この場所が古墳時代には特に意味のある場所であったことを示している。

一方三重川流域は小河川に分岐して、明瞭な段丘をもたない谷底平野がひろがる。この平野は水田耕作の点では大野川本流域よりはるかに適している。段丘の発達が少ない点からみても、三重川流域は水田卓越型の集落が展開していたと予想される。各谷底平野を見下ろす台地上に前方後円墳が孤立して立地する。大型古墳が点的に分布する分散型古墳群である。今のところ西から秋葉鬼塚・重政・道の上・小坂大塚の4古墳が前方後円墳と確認され、竜ヶ鼻古墳もその可能性がある。周辺に古墳・石棺群等がまったくなく、それぞれ孤立して立地する。上田原地区と対照的である。しかし前方後円墳を四基築造し、この地区最大の道の上古墳が存在する点と水田卓越型地域という点からみて、三重川流域のほうが経済的・政治的にも基本的に優勢な地域であったと推定される。

この地区は大野川中流域でも石棺を主体部とする古墳が集中する地域として知られていた。大野川中流域



第3図 三重町北部低地の地形と大型古墳の分布 (1/10万)  
(千田昇「地形」『三重町誌』に追加)



の三重盆地に前方後円墳が存在することは早く1924年に報告されていた(文9)。そのとき前方後円墳として報告されたのは重政古墳、小坂大塚古墳、秋葉鬼塚古墳の3基であった。その後1971年に道の上古墳が発見され県教育委員会によって測量されている。その経緯は第4節に詳しい。1987年には玉永光洋氏によって、その時点での三重町の前方後円墳と中小古墳としての石棺群がまとめられた(文75)。ところが1988年になって新たな前方後円墳が発見された。三重川流域から北にはなれて大野川本流域に面する立野古墳が清水宗昭氏によって確認

された。このような経過を歴て、大野川中流域の三重町北部は県内でも有数の前方後円墳集中地域であるということがわかってきた。その後この地区の前方後円墳は諸岡郁氏によって、すべて略測・報告されている(文86)。この古墳群は現在三重町教育委員会によって次々と測量がおこなわれ、史跡指定がそれに続いている(第6表)。

今回の調査では既往の調査を集約・公表するとともに、県指定史跡ながら墳丘の損壊が進行しつつある立野古墳の、今後の保護対策のための基礎資料をえるために、詳細な測量と範囲確認調査をおこなった。

(田中)

註1、諸岡郁『陣箱遺跡(C地区)』1996  
三重町教育委員会  
〈参考文献〉『大分県三重町誌総集編』1987 三重町



第4図 立野古墳の周辺 (1/1万)

## 第2節 立野古墳

### 1) 立地と環境 (第3・4図)

立野古墳が立地する上田原地区とその周辺は川と山に挟まれた河岸段丘地帯といえる。いわゆる沖積平野はこの地区および周辺にはまったくない。上田原地区の西には大野川の本流が北に流れ、下津留集落付近で大きく東に蛇行する。それから北はかなりの急流で大野川を下る際の難所のひとつである。東は標高200mをこえる大辻山の山地がつづき、眺望の良さとアジサイで知られている。この川と山に挟まれた場所に大野川の太古以来のたびかさなる侵食により4面の段丘が形成されていることが、千田昇氏によって明らかにされている(註1)。その研究を参照して上田原地区の古墳群を説明しよう(第3・4図)。

まず東から北には大野川本流が北流し蛇行する。このあたりで標高65～70mほどである。

段丘は低いほうから述べると、まず千田氏の第Ⅳ段丘が原田橋右岸の河川屈曲部に海拔70mの高さで川沿いに狭く広がる。大野川の氾濫時には頻繁に水没する地点で、現在は護岸工事を施して水田化しているが、かつては河川敷の畑地で、人の居住した形跡はない。

次の第Ⅲ段丘は標高75～80mの高さで、第Ⅲ段丘のすぐ上に幅500m奥行約100mにわたってひろがる狭い段丘面である。現在の下津留集落が立地している。この場所は一見低そうに見えるが、この段丘面までは大野川の氾濫はおよばない。下津留集落は中世までさかのぼる集落で集落内に堀・土塁・中世石塔群があり、その集落の性格は対岸の千歳村原田集落への川の渡し場に発達した宿場的集落と推定される。現在は全戸農家であるが、各家の屋号をきくと、薬屋・宿屋などをかつて経営していたことがわかり近世までは津渡しの宿場的集落であったと思われ、その性格は少なくとも中世までさかのぼる。同時にこの集落の中に硬質凝灰岩製の箱形石棺を主体部とする古墳が4基存在する(下津留古墳群)。現在でも墳丘が残存し、10～20m級の円墳であったと推定され、4号墳は前方後円墳の可能性もある。凝灰岩にほぞを穿った加工のゆきとどいた箱形石棺からみて古墳時代中期後半(5世紀後半)の比較的短期間のうちに築造されたと推定される。

その上の第Ⅱ段丘は標高90～100m高さで、現在の県道三重新殿線が南北に通る面である。段丘面南側に現在の上田原の集落の中心が広がり、段丘面の最も奥に上田原全体の旧村社である御手洗神社(みたらい)が鎮座する。この神社には天然の湧水があり、池になっている。この段丘面は現在全面水田化されているが、この面の東の谷に築かれた溜池がかりによるもの(第4図A・B)で、近世以降の開発の可能性が高く、それ以前は御手洗神社の湧水を利用した狭小な水田以外は畑地として利用されていたと推定される。

第Ⅱ段丘の南に大野川に向かってせりだす標高120～130mの面が第Ⅰ段丘である。この段丘の北東部に現在鉢の窪集落があり、その集落の庭先や畑に7基の鉢の窪石棺群が散在する(鉢の窪古墳群)。3号墳が箱形石棺である以外はいずれも軟質凝灰岩製の刳貫式舟形石棺で、石棺3には石枕上の彫りだしがあり古墳時代中期前葉にさかのぼることを示している。1号墳周辺の調査によれば、周溝と葺石があり1号墳は本来径10m程の円墳であったと推定される(文133)。かつては石棺を主体部とする円墳が群集していたと推定される。ところでこの段丘面は戦後の耕地開発で水田化したもので、近世までは畑地であったことが上田原地区の近世村絵図から明らかである。

さて最後に立野古墳の立地する面は千田氏によれば阿蘇火砕流台地に分類される面で、標高140mの最も傾斜の急な地形である。立野古墳はその台地の北縁にのびる最高所近くに位置している。現在の立野集落の中央である。この付近もまた立野古墳を中心とした古墳群を形成している(立野古墳群)。測定の結果、判明した立野古墳周堤部の高まりを2号墳とすると、その道を挟んだ50m西に、周囲を削平されているが現状で高さ2m以上、径10m程の円墳状の高まりがあり、すぐ南の畑にも低墳丘状の高まりがあつて箱形石棺がでたと伝える。前者を3号墳、後者を4号墳とする。3号墳と4号墳は本来ひとつの古墳で、分断された前方後円墳という見方もある。その場合3号墳が後円部といえる。立野古墳群の時期は古墳時代前期後半と言えよう。この台地の水田化もまた近代のことであり、近世には立野集落の村人が耕作する畑が広がっていた。

以上のように上田原地区の地形と古墳群の関わりをたどっていくと、次の2点を指摘できる。



第1は、各古墳群は半世紀単位で次第に低い段丘に立地を変えながら築造されていったこと。すなわち、4世紀後半の古墳時代前期後半に立野古墳群が最高所の台地上に作られてから、5世紀前半の中期前半には一段低い第Ⅰ段丘に鉢の窪古墳群が築造され、その後5世紀後半の中期後半にはさらに低い第Ⅲ段丘に下津留古墳群が造られる。このようにこの3古墳群は、立野古墳を始まりにした一連の首長系譜の墓所として累代的につくられた一連の古墳群と考えられる。

第2は、ほとんど水田のない地帯を背景にしていることである。さきに各段丘の説明の中でふれたように、現在の上田原地区は広大な水田がひろがる乾田地帯であるが、近世になってやっと第Ⅱ・Ⅲ段丘が溜池掛かりで水田化されたにすぎず、それ以前とくに古墳群が造られた4・5世紀の頃には、御手洗神社の湧水を利用した小規模な水田と現在の溜池A・Bあたりの谷水を利用した谷水田が第Ⅱ段丘の一部でおこなわれていたと最大限に推定できるにすぎず、残り部分も畑地として利用された状況であったと推定される。こう考えると鉢の窪古墳群と下津留古墳群の間の第Ⅱ段丘面に古墳群がなく、ひとつ段丘を飛ばして古墳群が築造されている事実は、大きな意味をもってくる。つまり古墳時代中期の時点では第Ⅱ段丘面のみに耕作地あるいは集落が存在したために、古墳の築造がはばかれたといえまいか。さてそのように考えたにしても、60m級の前方後円墳を築造した首長の本拠地としてはきわめて小さな生産基盤を背景としているとしかいえない。少なくとも農業生産力だけをとりあげればこの場所を本拠にした首長の直接的な背景はきわめて弱いと評価せざるを得ない。前方後円墳の築造という歴史的事実の背景には別の観点から評価する必要がある。

ところで東側の大辻山山塊は阿蘇熔結凝灰岩からなり、古墳群の側にも2箇所の凝灰岩の石切場跡がある。ひとつは土柳石(つちやないし)とよばれるピンク色の凝灰岩である(石切場1)。この付近の集落建物礎石・石垣などにもちいられ、中世の一石五輪塔や近世墓石にも使われている。また古墳時代には鉢の窪1号石棺古墳の葺石にも利用されている(文133)。しかしこの付近で盛んに作られた箱形石棺や刳貫式舟形石棺には利用されていない。露頭を観察したところではこのピンク石には非常に多くの節理がはいっており、約1m以上の大きさの石塊を切り出すのは不可能と推察される。そのために古くからこの石が利用されながら、石垣の個々の石や五輪塔・近世墓石の石材にとどまり、それ以上の大きさを必要とする石棺などには利用できなかったと考えられる。

さらにもう一か所北の谷奥にケイサコ石と呼ばれる硬質の白色安山岩質凝灰岩の石切場跡(石切場2)がある。今世紀前半まで切りだされていたと伝える。実際この付近の板碑・近世墓石はこの石で作られているものが多い。鉢の窪2号箱形石棺や下津留古墳群の箱形石棺の多くがこの石を利用していると推測される。しかし鉢の窪古墳群の舟形石棺はいずれも軟質の凝灰岩で、ケイサコ石ではないと考えられる。今後厳密な石材鑑定を行なう必要がある。

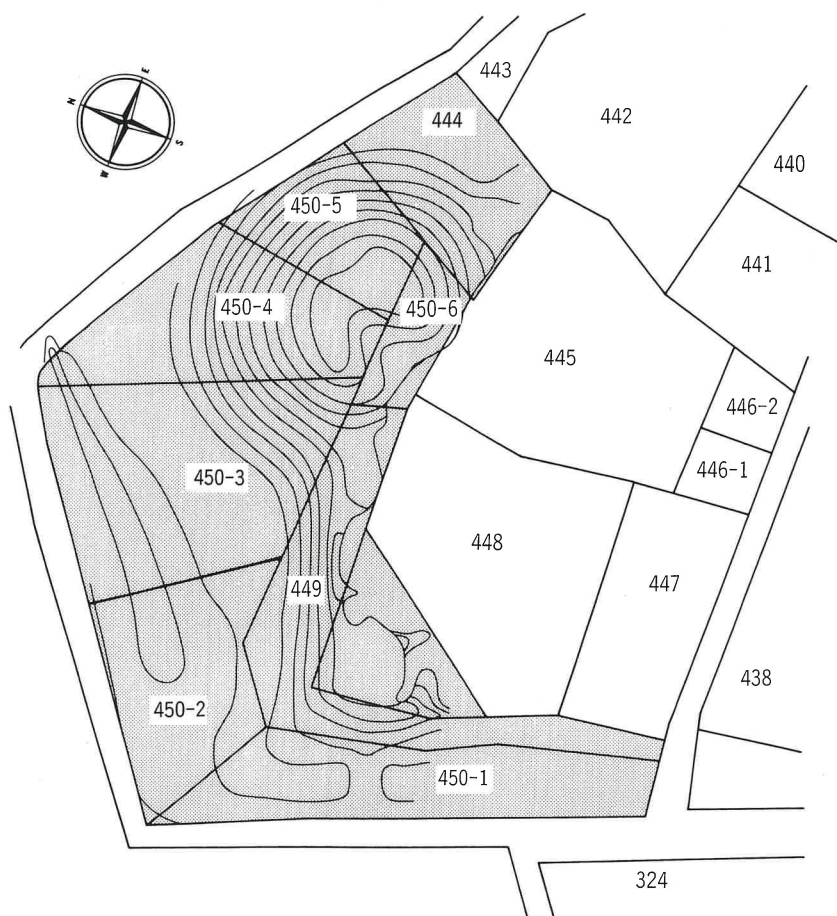
註1、千田昇「地形」『大分県三重町誌総集編』1987 三重町

## 2) 調査歴と調査方針

1988年に清水宗昭が分布調査の際に確認して円筒埴輪と壺形埴輪を採集。1989年に当時別府大学学生であった諸岡郁氏(現在三重町教育委員会)が1m等高線による測量をおこない、その調査結果は『おおいた考古』3号(文86)に報告されている。それによれば、墳長約60m、後円部径約35m、前方部長約25mの周溝を備えた前方後円墳と報告され、北側には周堤が残り、前方部前端に陸橋状の高まりがあることが指摘された。また周溝は西側で谷に落ち全周していないこともわかった。氏の測量図を第5図の地籍図に重ねておいた。概略に誤りはなく、立野古墳の墳丘についての基礎的な事柄が確定した。

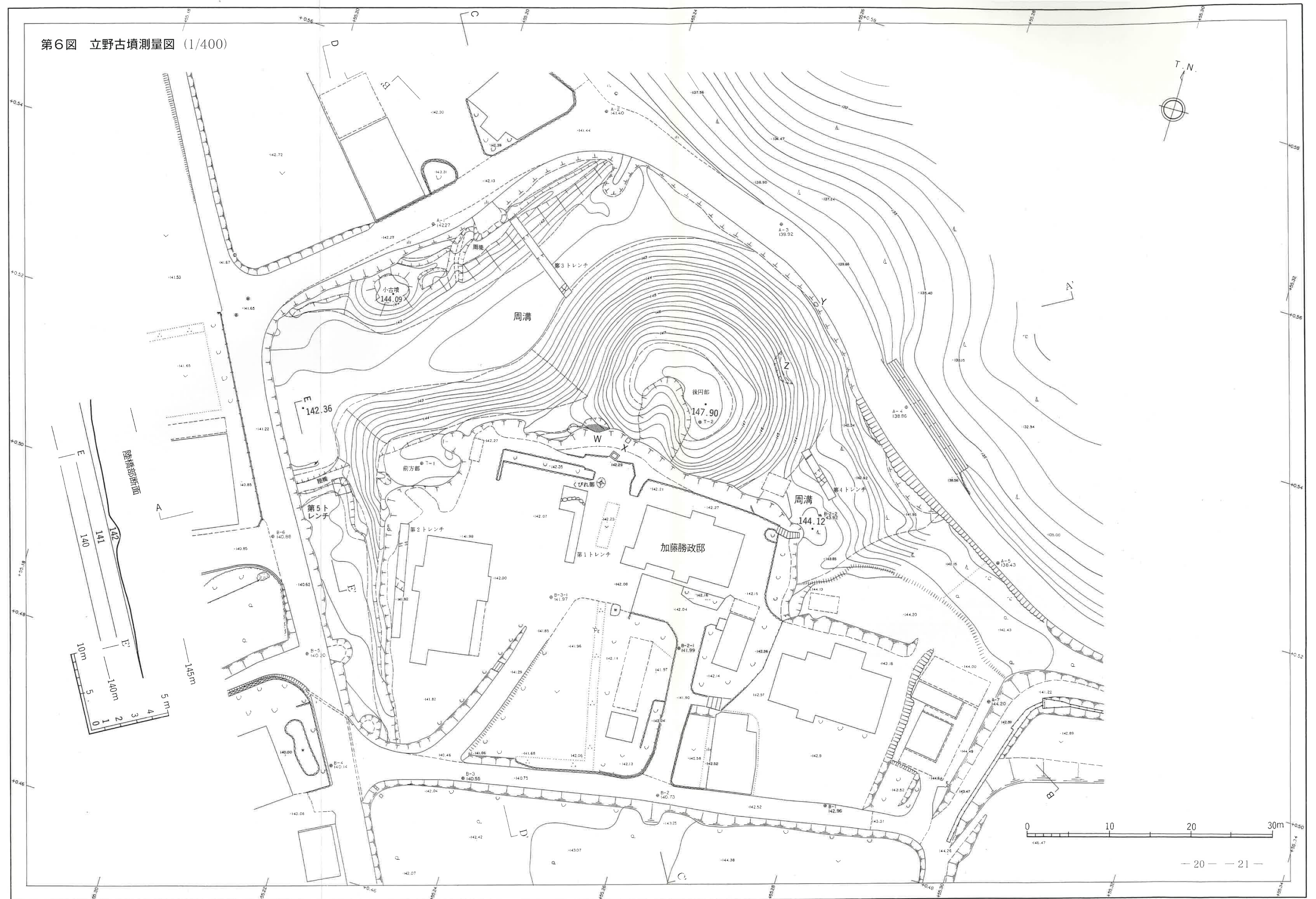
その後平成4(1992)年3月27日付けで、立野古墳は県史跡に指定された。史跡指定の範囲は第5図に示したとおり、道路に挟まれた墳丘残部と周溝・周堤を含んでいる。すでに宅地に利用されて大きく削られている445・448番地は除かれている。今回の調査は正確な測量と発掘調査によって周溝の範囲とくに宅地化された部分の解明と、陸橋・周堤の確認をおこない、埴輪の検出によって正確な築造時期を確定することを目的とした。





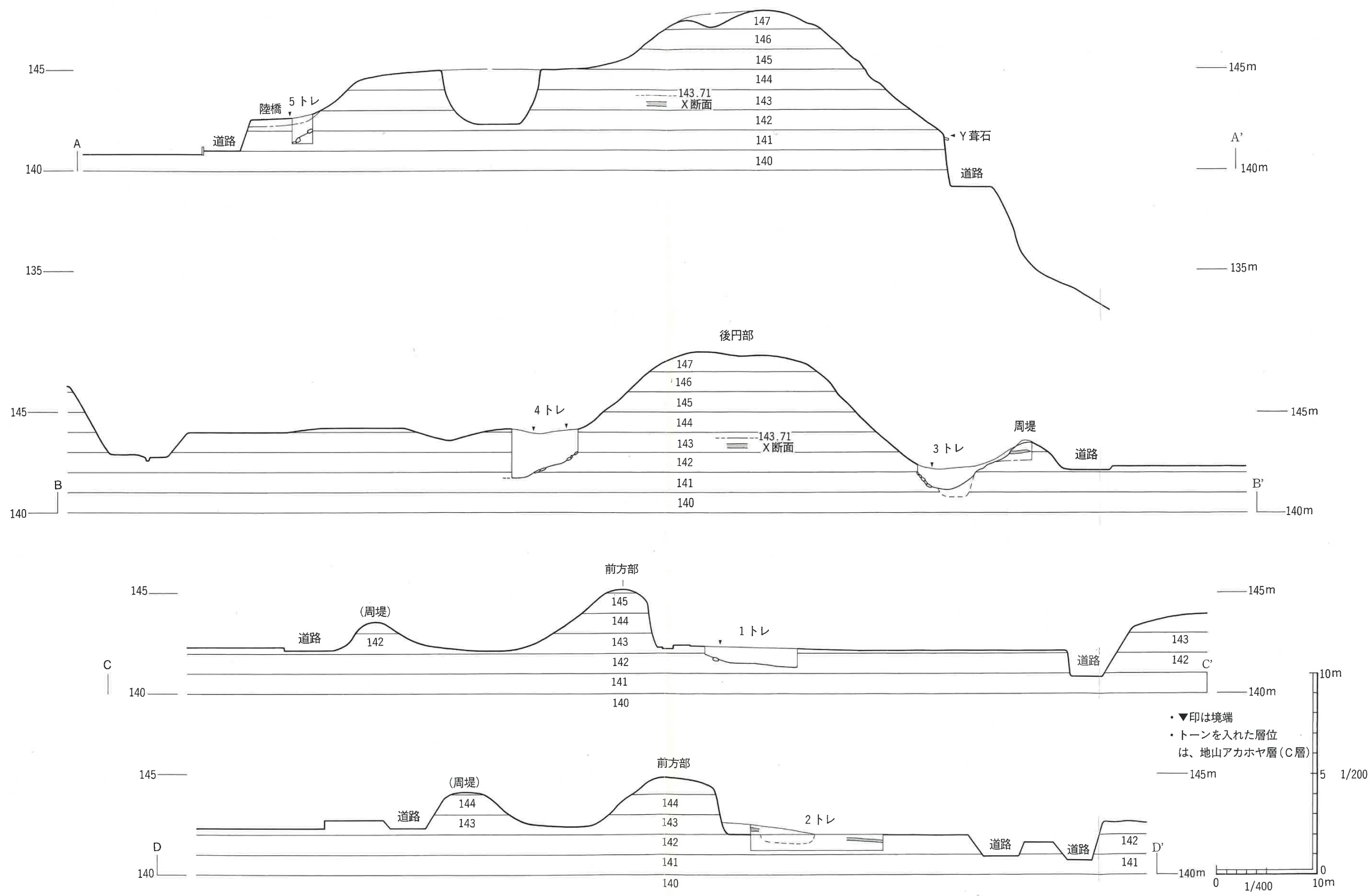
第5図 立野古墳周辺の地籍と史跡指定範囲

第6図 立野古墳測量図 (1/400)





第7図 立野古墳の墳丘断面図 (1/400 : 1/200)





### 3) 墳丘測量 (第6・7図)

測量は100分の1で25cm等高線を基本方針とした。また測量図を国土座標に入れて正確な位置と方位を測定することにした。そのため基準点の設定と測量を(株)パスコに委託した。また立野古墳の東西と北の道路より外側および南側の宅地部分の平板測量も委託した。そうして完成したドーナツ状の測量図に、県の調査員が測量した図面をはめこんで、製図したものが第6図である。平面図上のT-1、T-2とした点が測量基準点で、座標は前者がX=+511.922 m、Y=55223.500 m、H=144.713 mで、後者はX=+526.632 m、Y=55255.074 m、H=147.807 mである。この基準点と周辺に配置した多くの副基準点(第6図のA-数字、B-数字の点)を利用して、開放トラバース、光波平板使用で測量をおこなった。そしてその成果をもとにいくつかのラインで墳丘断面図を作成したのが第7図である。

測量とその際の観察の結果をまとめると、①墳長は約65 mに達すること。②前方部頂は平坦で高まりをもたないこと。③周堤とされる北側の土塁状高まりの西端に径10 m弱の円墳状の高まりがあり、小古墳が付設している可能性があること。そしてそこで周堤が途切れること。④後円部の東墳端は台地崖すれすれのところの位置しており、A-A'断面をみても周溝が存在した可能性はないこと。すなわち周溝は全周しないように設計されていること。第4トレンチのあたりも南側周溝の可能性が高いこと。⑤前方部前端に陸橋上の土塁がつづいていること。⑥後円部・前方部ともかなり急な傾斜をなし途中で段築の平坦面を推定できなかった。もしかりに段築があるとしても、かなり幅の狭いものであると推定される。⑦また大量の葦石が存在すること。⑧意外に埴輪がひろえないこと。などである。測量時の数値は発掘調査の結果訂正されたので、13)項①で詳しく述べる。

以上の結果からまた幾つかの疑問もおこった。1)、②の結果からみて柄鏡形の平面形が予想されるが、前方部頂が平坦なまま前方部が広がる形態もある(例-小熊山古墳)。いずれか? 第1・2トレンチはこの点を確かめるために設定した。2)、③の結果からみて周堤がはたして人工の構築物であるかどうか? それを確かめ、周溝との関係をつかむ必要がある。そこで第3トレンチを設定した。3)、④の点からみて南側に周溝はめぐるかどうかが? そのために第4トレンチを設定した。5) ⑤の陸橋ははたして立野古墳築造時のものかどうか? この問題を確かめるために第5トレンチを設定した。

⑥の問題の解決は、今回の調査ではみおくり、将来にゆだねた。⑦⑧の点は各トレンチで解決されるはずである。同時にこの調査によって墳丘の範囲をほぼ定めることができるから、将来の史跡整備にむけての基礎的な資料がえられることが確信された。

### 4) 立野古墳の層序-自然層と考古学的層位-(第7・8表)

各トレンチの調査内容を説明する前にまず層序の説明をおこなっておきたい。層序の解釈は現地で各トレンチの層位を比較しながらおこなったが、部分調査という制約のため結論をだせない層位もおおかつた。調査後整理の過程で現地調査での解釈を再検討するために、出土遺物の帰属層位を検討しながら、いわゆるハリス・マトリックスを作成し(註1)、その方法にしたがって立野古墳調査層序を

#### 立野古墳調査日誌抄

1995(平成7)年

12月4日(月) 加藤勝政氏宅を訪れ、調査協力依頼。快諾。

19日(火) 三重町教育委員会に協力依頼。

1996(平成8)年

1月24・25日(水・木) (株)パスコによる基準点測量と周辺測量。田中立会い。

2月13日(火) 測量用補助杭設定。いよいよ調査開始。トレンチの位置をきめる。

14日(水) 第1トレンチから掘り下げ開始。

15日(木) 後円部から測量開始。1トレンチの掘り下げおわる。柔らかい土で速い。葦石の根石発見。埴輪の出土づく。くびれ部をねらってトレンチ拡張を決断。2トレンチ開始。見学者2名。

16日(金) 見学者3名。都良男さん。

19日(月) 後円部の墳端の一部は道路で削られていることが判明(のちに葦石露出を確認)。

20日(火) 3トレンチ掘り下げ開始。

22日(木) 3トレンチで葦石と墳端確認。周堤が盛土か否かが問題。柳沢一男氏調査指導(～23日)

23日(金) 4トレンチ掘り下げ開始。

25日(日) 三重町文化財愛護少年団40名見学。田中・諸岡案内。

27日(火) 4トレンチで墳端葦石確認。テラスがあるか? 古代朝鮮文化を考える会30名見学。

28日(水) 2・4トレンチともに延長する。三重町教育長、社会教育課長視察。見学者9名。

29日(木) 1トレンチ拡張。4トレンチはテラスが判明。見学者6名。丸小野さん。

3月1日(金) 1トレンチ拡張区でくびれの根石を検出。見学者3名。墳丘測量終了。

2日(土) くびれの精査。見学者4名。

3日(日) 現地説明会。参加者60名。

4日(月) 今日から各トレンチの土層精査と写真撮影。5トレンチ開始賀川光夫・後藤宗俊両先生(別府大学)見学。

5日(火) 大分短大の佐々木先生プラントオペラル資料採取。3トレンチでは周溝の底の下にさらに人為的な層がある。5トレンチで陸橋の下に葦石があることが判明。

7日(木) 芦刈政治先生見学。

12日(火) 以後毎日実測。

14日(木) ビデオ撮影。埋め戻し開始。

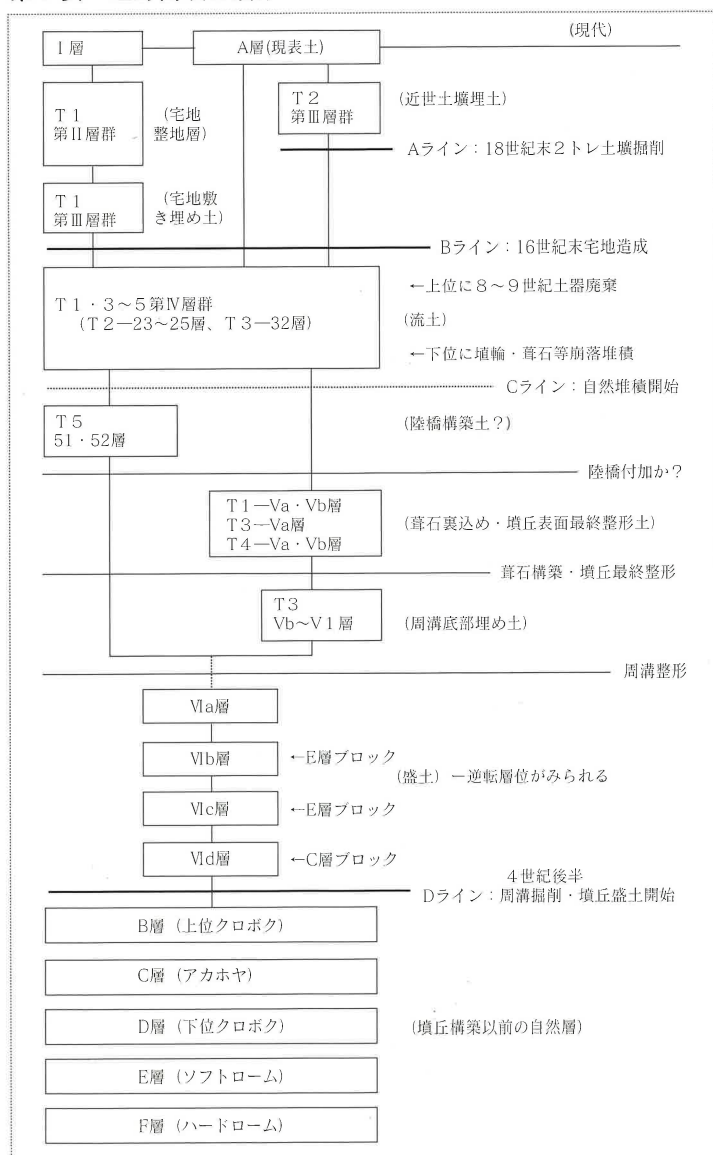
18日(月) 実測・埋め戻し終了。撤収。

整理した。最終的なかたちに整理したのが第7表である。第8表は整理過程の各トレンチの層位をしめしたもので、層位の対応関係を検討するための情報をのせている。ハリスの概念の最大の特徴である破壊境界面（註2）を層単位として認識する点については、土層の厚みをもたない面を層位として数えることに抵抗をおぼえるので、この報告ではラインと表現した。第7・8表の太い黒線で示したものがそれである。

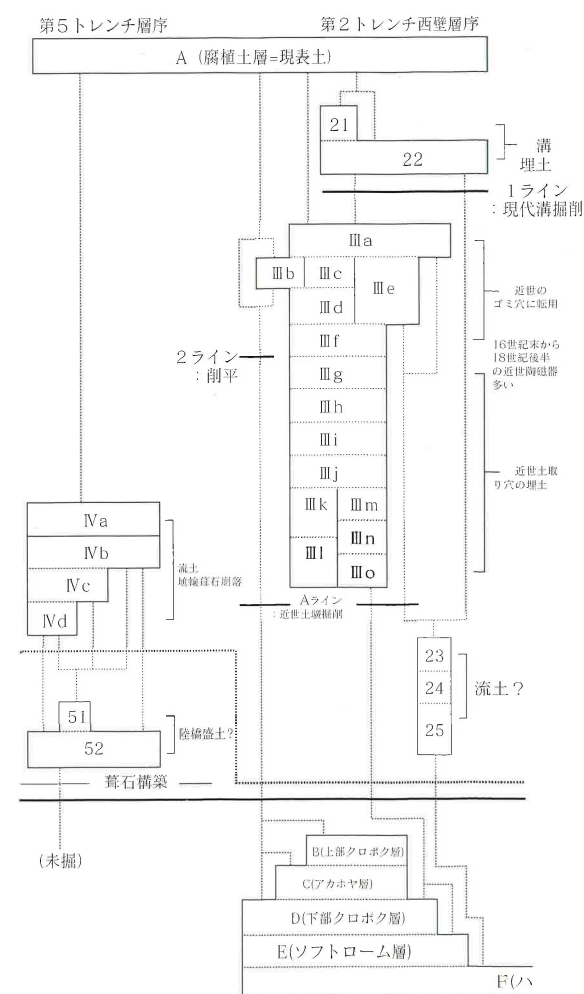
**自然層** 表の解説をしながら層序の説明をすると、アルファベットのA～Fで示した層は人為の加わらない自然層である。立野古墳の立地した台地では、下からF層（ハードローム層）、E層（ソフトローム層）、D層（下部クロボク層）、C層（アカホヤ層）、B層（上部クロボク層）、A層（腐植土層）となり、A層は現在形成中の層で長期間堆積するとB層に変化していく。立野古墳築造以前の遺構は調査では確認されなかった。したがって人為的な層位はB層とA層の間にライン（破壊境界面）を介して堆積している。これらの自然層の堆積レベルと傾斜の様子を記録することで、ほぼ立野古墳築造以前の旧地形を復元できる。立野古墳ではC層とE層が観察しやすいため、それを基準に分層観察をおこなった。

**考古学的層位** この中には埋土・盛土・整地土・ゴミ穴堆積物などの人間が意図的に運んで堆積した層位と、人間が掘った凹み・堀などに自然の作用によって堆積したいわゆる流土などの間接的に人に起因する層位がある。前者を直接層位、後者を間接層位と呼ぶことにする。この2つの層位群は必ず破壊境界面すなわちラインを介して堆積を開始するという特徴がある。

第7表 立野古墳の層序



第8表 立野古墳の層位関係表



察された近世から近代にかけて繰り返し堆積した整地土層で直接層位である。第Ⅲ層群はやはり近世の堆積で、第1トレンチのⅢ層群は宅地化のための埋め土である。宅地造成時の掘削・葺石抜き取り作業のために形成されたBライン上に堆積する。第2トレンチでは18世紀の末頃に掘られた土壌の埋土をⅢ層とした。土壌掘削によるAライン上に堆積する。いずれも直接層位である。第Ⅳ層群は、立野古墳の築造後周溝内に堆積したいわゆる流土で土質そのものはB層によく似ている。間接層位である。したがって立野古墳築造後相当長期に堆積した層で、第1トレンチでは下層から崩落した埴輪片が出土するが、30 cmほど上位では奈良・平安時代の土師器が出土する。この層群は前方後円墳完成時の面であるCライン上に堆積している。第Ⅴ層群は従来盛土として認識されている層位の一部で、葺石の裏込土・押さえの土、周溝底部の整地土などの墳丘最終整形時の直接層位である。周溝掘削時の到達面であるDライン上に堆積している。第Ⅵ層群は通常の墳丘盛り土でX地点で確認した。Dライン上に盛られている。

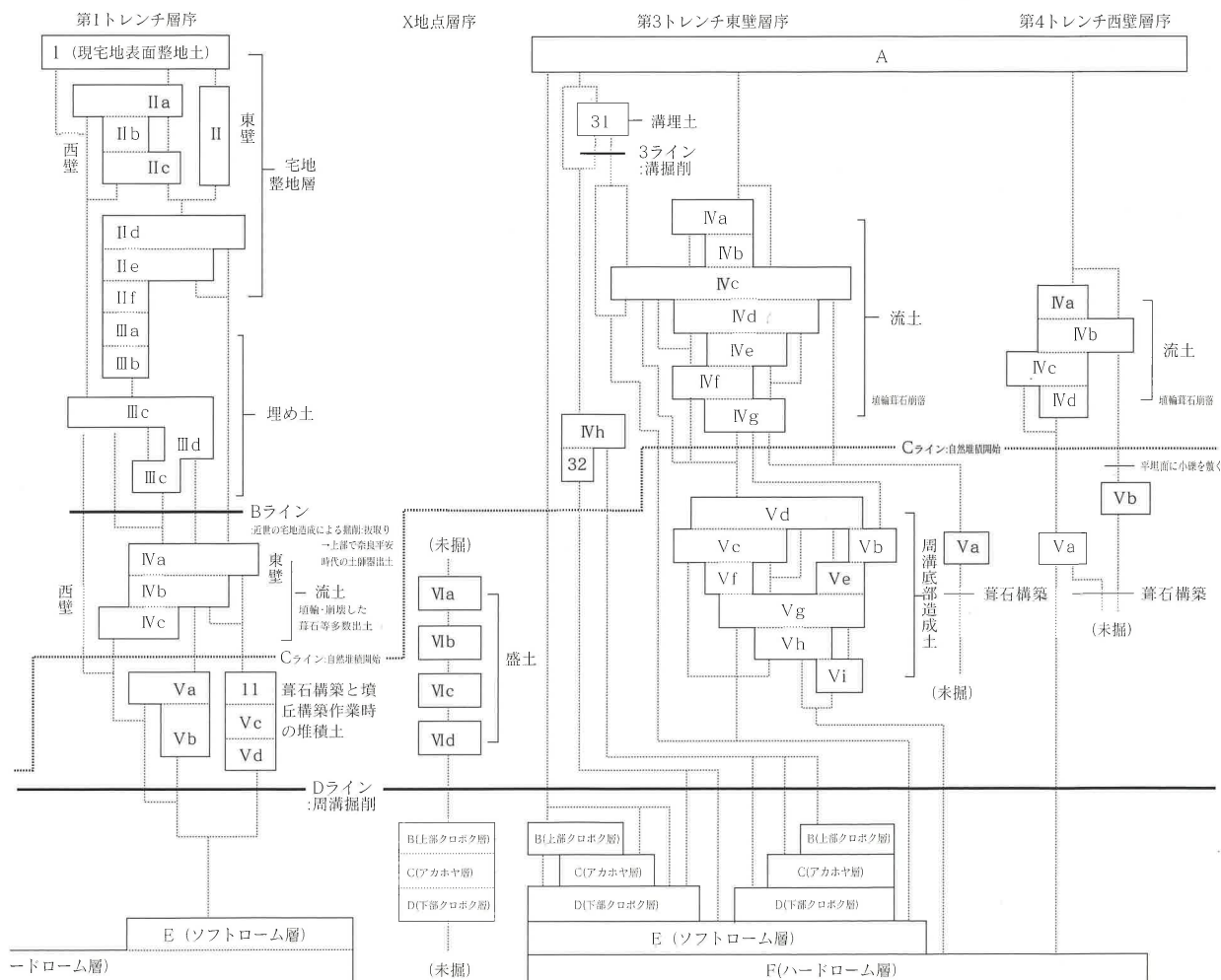
なお算用数字2桁で51層、32層などと表現した層位は10桁がトレンチ番号を表している。これらの層は上下の層群(Ⅱ・Ⅲなど)のいずれに帰属するか今回の調査のみでは判断が定まらない層位である。また算用数字1・2・3ラインは19世紀以後の破壊境界面だが、帰属時期が不明なラインである。その解決は今後の調査にゆだねられたといえる。

註1、エドワード・ハリス(小沢一雅訳)『考古学における層位学入門』雄山閣 1995

註2、いわゆる切り合いのラインで、層と層の間が自然に整合しない地質学で言うところの不整合面のことであるが、人為的に形成された不整合面をハリスは破壊境界面とよぶ。

## 5) 第1トレンチ (第8図・図版1・2・巻頭カラー図版1上)

くびれ部を検出し前方部付根の幅を復元する資料を得、同時に良好な出土状態の埴輪を検出すること目的に、





幅1mのトレンチを南北に設定した。残存する葦石の根石を検出したので、くびれの屈折点をもとめて西に2×3m拡張した。その結果根石の並びが屈折した明確なくびれ部墳端を検出できた(写真2)。

**葦石** 後円部側5個、前方部側5個の根石一列検出した。D-D'断面の部分で3列目まで遺存していたほかは、近世初めの宅地造成時に抜き取られていた。面を荒っぽく揃えて並べ、裏込めの土(Vb層)で固定している。同時によくしまった暗黄褐色の硬い土(Va層)が根石列正面を押さえるようにはりつけられていた。その範囲は第8図の破線矢印で示した。その層は埴輪片や礫はまったく含まず当初はそこで底面がでたと考えたほどである。葦石の基礎を安定させるために外側からむかえうった押さえの土層と評価できる。したがって葦石完成時には根石の大半はこの層中に没して、上面のみが顔をだしていたと考えられる。根石の列は130°の角度で開く。人頭大から50cm大の凝灰岩角礫が使われている(第8図石材分類図)。角礫にも3種類の石がありaの赤黄褐色礫は、いわゆるピンク石で立野古墳のすぐ東にある土柳石によく似ている。b・cは黒灰色の凝灰岩角礫である。ともに山地表面で採集できる石である。IV層群の流土中に混ざる多量の拳大から人頭大の円礫の大半は河原石であって、大野川河床の転礫である。その多くが円礫であるところから根石から上は円礫で葦きあげていたと推定される。

**墳丘** 根石列の背後にはVb層の詰まった掘形が認められる(平面図のVb層矢印)。地山のE層を切りかつ背後のE層は高くなるので、この部分の墳丘は削りだして造っている。

**周溝** トレンチの南端でも立ち上がりは認められず周溝の外縁はさらに南に達すると推定される。周溝掘削のDラインは南側でさらに低くなり、その低い部分には硬く無遺物だが汚れた層(Vc・Vd層)が堆積している。墳丘構築作業中に踏みしめて堆積した土か、あるいは周溝底面を平坦にするために凹みに敷いた整地土のいずれかと考えられる。その上の11・11'層も同質の堆積土だが、IV層かV層かをきめる手がかりが乏しく土質のみで言えばV層に近いと判断できかねた。

**遺物と出土状態** 根石列前面のIVb層から中から転落した葦石と埴輪片が多く出土した。いずれも破片化して



写真1 くびれ部の埴輪

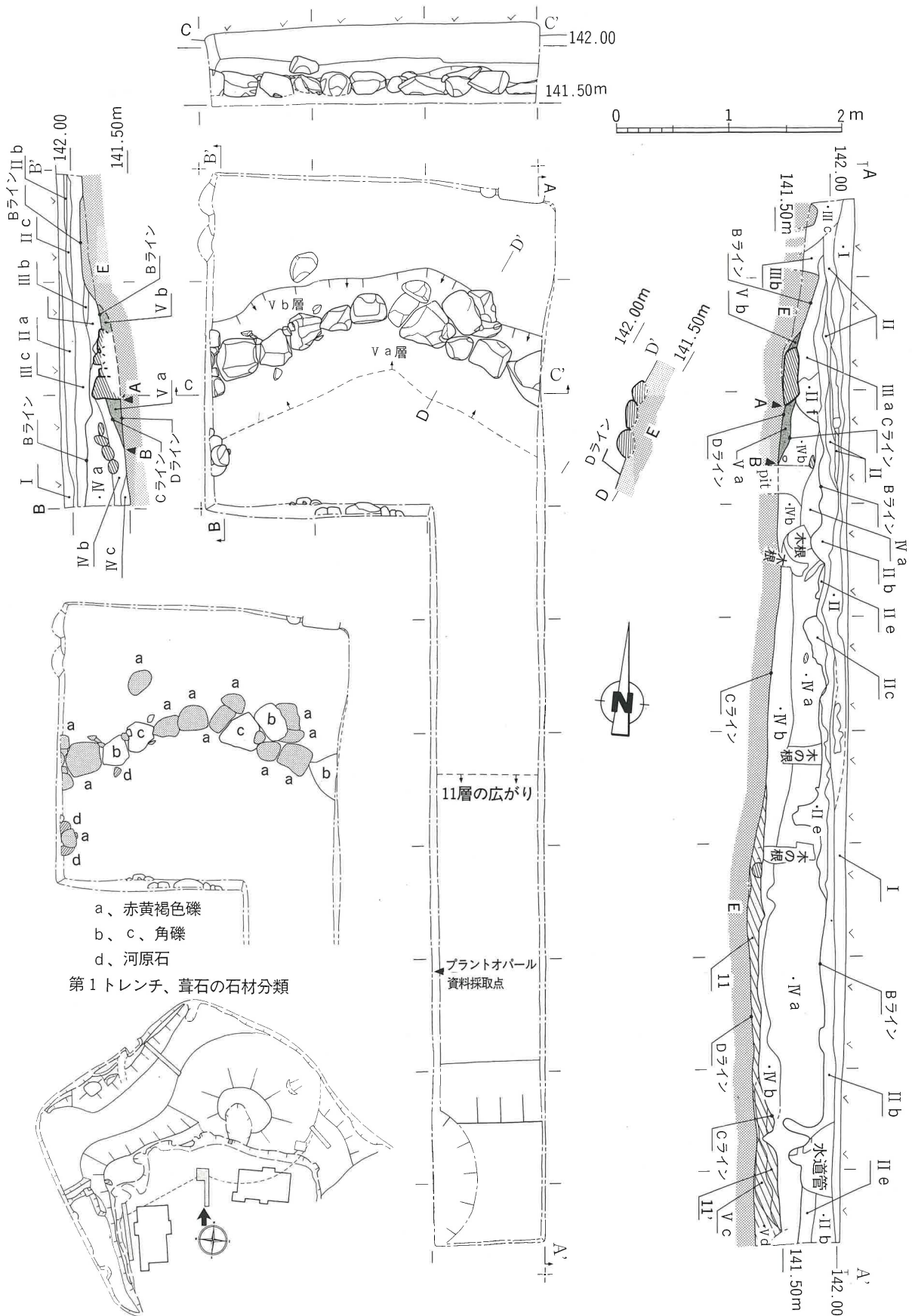


写真2 第1トレンチくびれ部葦石列と後円部

### 第1トレンチ層位一覧

| 層位   | 色調・土質・他                            | 包 含 物                                                           | 備 考                                                              |
|------|------------------------------------|-----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------|
| I    | 細かくて堅くしまる細土<br>黄色土ブロック             | 小円礫と近世遺物および、埴輪片を混入                                              | 現宅地の整地土                                                          |
| IIa  | 黒褐色軟質細土<br>(堅くしまる)                 | 黄色土ブロック(1~5cm)入る<br>小円礫と近世遺物および、埴輪片を混入                          | 加藤家造成後の<br>堆積土                                                   |
| IIb  | 灰層                                 | 小円礫と近世遺物および、埴輪片を混入                                              |                                                                  |
| IIc  | 淡黒褐色土                              | 黄色土ブロック(3cm)多く入る<br>小円礫と近世遺物および、埴輪片を混入                          |                                                                  |
| IId  | 暗黄褐色軟質土                            | 黄色土ブロック(5cm)多く入る<br>ピンク石ブロック少し入る                                |                                                                  |
| IIe  | 淡黒褐色軟質土                            | 黄色土ブロック(5cm大)多く入る                                               |                                                                  |
| IIf  | 黒褐色軟質土<br>(ボロボロ)                   |                                                                 |                                                                  |
| IIIa | 暗褐色軟質土                             |                                                                 | 葦石の抜き取り痕を<br>うめた土                                                |
| IIIb | 暗褐色軟質土                             | 黄色土・ピンク石ブロック入る                                                  | 加藤家・造成時の堆積土<br>(近世初め)・整地層                                        |
| IIIc | 暗黄褐色軟質細土                           | 黄色土ブロック(3~5cm)非常に多く入る<br>小円礫と近世遺物および、埴輪片を混入                     |                                                                  |
| IIId | 黄色土ブロック層                           | 小円礫と近世遺物および、埴輪片を混入                                              |                                                                  |
| IIIf | 淡黒褐色軟質土<br>(ボロボロ)                  | 黄色土ブロック(1cm)多く入る<br>小円礫と近世遺物および、埴輪片を混入                          | 周溝内流土・埴輪片は、<br>墳丘上から葦石とともに<br>流れ込んだもの、原位置<br>にあったと考えられる破<br>片はない |
| IVa  | 黒褐色軟質細土                            | 黄色土ブロック少ない<br>円礫(葦石)と埴輪片(5~10cm大が円礫<br>の中、上下に入る)の流れ込みが非常に<br>多い |                                                                  |
| IVb  | 淡黒褐色軟質細土<br>やや黄色がかっている             | ・IVb層上部から上に特に多い<br>・IVb層の上部から8~9世紀の土師器<br>出土                    |                                                                  |
| IVc  | 暗褐色軟質細土<br>(細かい黄色土入る)              |                                                                 | 周溝内底部埋土か?<br>構築中の堆積で、<br>ふみしめの土か?<br>円礫、埴輪なし                     |
| II   | 暗黄褐色軟質細土<br>(IVabに比べて堅く<br>しまっている) |                                                                 |                                                                  |
| II   | 暗黄褐色硬質の粘質土                         |                                                                 | 葦石構築に伴う土                                                         |
| Va   | 暗黄褐色硬質土<br><br>(よくしまる)             | うすい黄色土ブロック(2cm)入る<br>・葦石の根石を安定させるために<br>向かえうった土である              |                                                                  |
| Vb   | 黒褐色軟質土                             | 黄色土ブロック(1cm)多く入る<br>(葦石のうらごめ土)                                  | 円礫や、埴輪の混入<br>全くなし                                                |
| Vc   | 黄褐色硬質粘質土                           | 円礫、埴輪はない                                                        | 構築中の堆積、<br>ふみしめの土                                                |
| Vd   | 黄褐色硬質粘質土<br>やや暗い                   |                                                                 |                                                                  |
| E    | ソフトローム層                            |                                                                 |                                                                  |

第8図 立野古墳第1トレンチの遺構と層序 (1/50)





転落した状態で、墳裾に樹立されたり置かれた状態ではなかった（写真1）。そこでは円筒埴輪・壺形埴輪・「器台形埴輪」と赤色顔料の付着した土師器壺の破片が出土した（第17・18図1～22）。円筒埴輪a類と壺形埴輪a類が多く、数個体に分けられるが、全量は1～2個体分の出土にすぎず、少ない。またトレンチ南側のIVa層上部から8世紀後半～9世紀の土師器数個体を検出した（第19図42～48）。周溝埋没中に廃棄されている。

## 6) 第2トレンチ（第9・10図）

前方部南側の周溝と墳端の確認を目的として設定したが、18世紀末に掘られたと推定される大きな土壌とそれより新しい溝によって、墳端と周溝の外縁は破壊されていることが判明した。

**墳丘と周溝** 土壌と溝の間にわずかに周溝の底面が残っていた。底面のレベルが第1トレンチの底面と一致するので、そう判断したが、わずかに残った埋土（23・24・25層）には遺物はなく、土質も第1トレンチのIV層群には似ていない。北端に自然層（B・C・D層）が残ってこの付近が削りだして造られたとみられるから、周溝内流土の一種と見做したいが、この点は今後の課題である。そのため墳端ラインについては、①先の層を流土とみた場合は第10図中のa～b間に墳端が、②盛土とみた場合はC点より左にくると想定される。

**近世土壌** 周溝を大きく破壊した土壌は下部に土取りと推定される穴が接続しており、F層ハードロームの採取を目的としたと推定される。下部は一気にうめられたとみられるが上部は礫や近世陶磁器片が多く混入してゴミ穴に転用されていた（Ⅲ層）。

**出土遺物** 土壌埋土には埴輪片がいくらか混入している。円筒埴輪a類と壺形埴輪a類（第18図23・24）にかぎられる。近世陶磁器（第19図51～60）は17世紀初頭の唐津胎土目皿から18世紀後半の肥前磁器までである。遺物からみて近世の宅地化の時期が17世紀初めで、土壌の掘削が18世紀末であったことを推測させる。

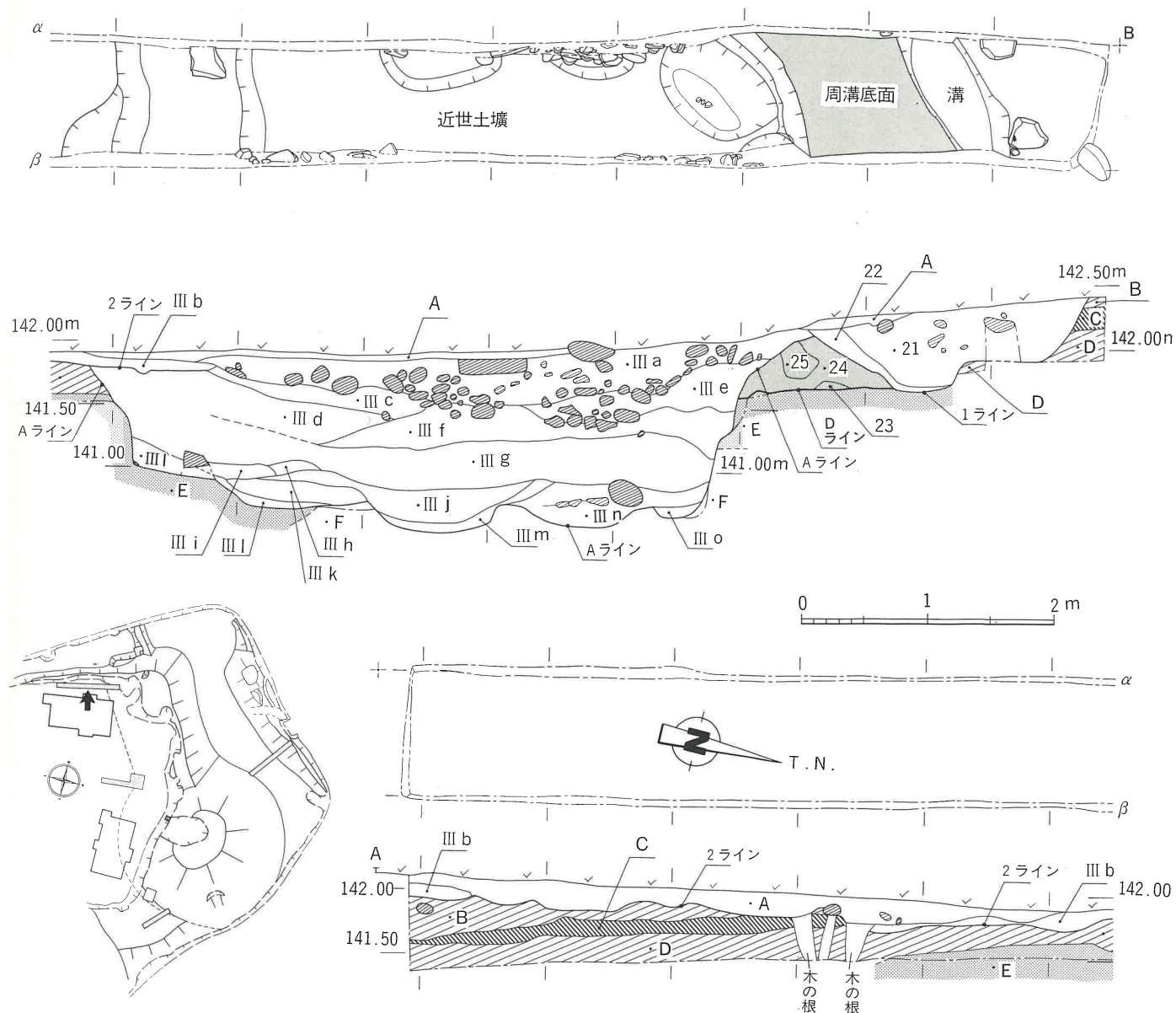
写真3 第2トレンチ完掘状態（北から）



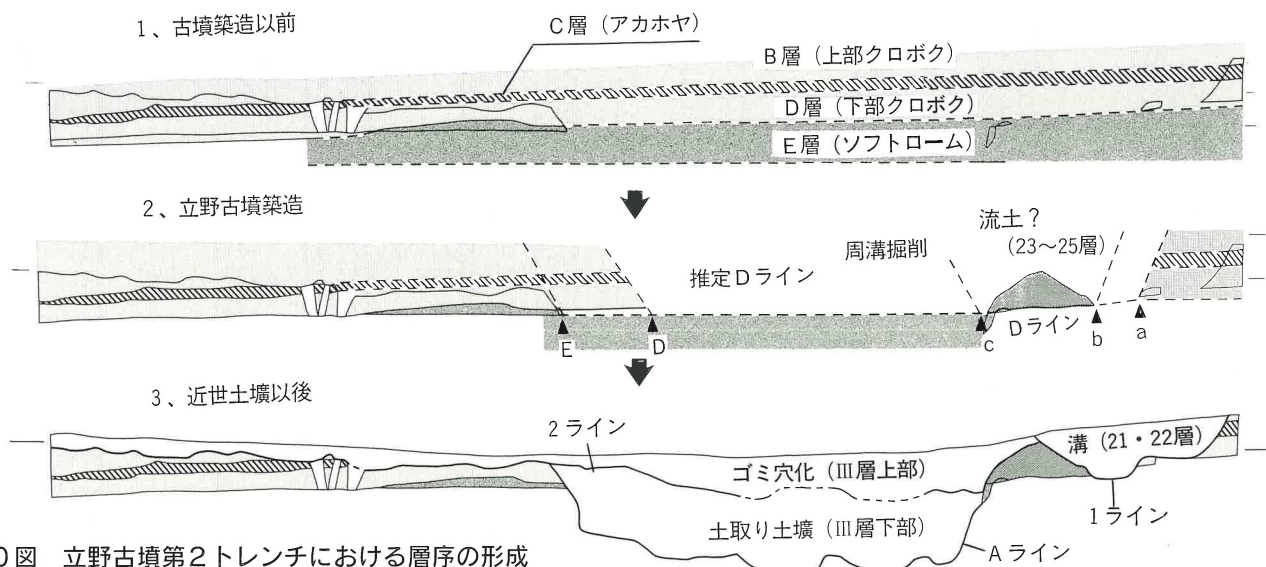
## 第2トレンチ層位一覧

| 層位 | 色調・土質他                                       | 包 含 物                                              | 備 考                                           |
|----|----------------------------------------------|----------------------------------------------------|-----------------------------------------------|
| A  | 腐植土<br>・暗褐色軟質土<br>(ぼろぼろ)                     | 根が多い<br>円礫、近～現代の遺物混入                               | 現代形成中の腐植土                                     |
| B  | クロボク<br>・淡黒褐色軟質土<br>(きめ細やか)                  | 無遺物層<br>円礫自然レキは含まない                                | 自然層<br>古墳築造<br>前の地山                           |
| C  | アカホヤ                                         | 明黄色細土が、ブロック<br>状に入る層                               |                                               |
| D  | 黒褐色硬質土<br>・濃黒褐色硬質土<br>(よくしまり堅い)<br>・やや粘質をおびる |                                                    | 下部クロボク                                        |
| E  | 明黄褐色細土<br>・やや粘質                              |                                                    | ソフトローム                                        |
| F  | 暗黄褐色硬質土<br>(ねばり多い)                           |                                                    | ハードローム                                        |
| 21 | 淡黒褐色土<br>(ぼろぼろ)                              | 円礫混入・現代鉄器出土                                        |                                               |
| 22 | 黒色土                                          | 黄色(E層)ブロック混じり<br>円礫混入・現代鉄器出土                       | 近現代の溝埋土                                       |
| 23 | 黒色土と黄色土<br>ブロック(5cm)の混層                      |                                                    | 周溝の埋土の<br>可能性あり、<br>溝と土壌<br>の掘削以前の<br>掘り込みである |
| 24 | 暗黄褐色軟質細土                                     |                                                    |                                               |
| 25 | 黒色土と淡黄色土<br>ブロック(5cm)の混層                     |                                                    |                                               |
| Ⅲa | 黒褐色軟質細土                                      | 黄色ブロック・円礫を多く<br>含む・近世近代の遺物多い                       |                                               |
| Ⅲb | 濃褐色土                                         | E層のブロック                                            | 近世～近代<br>・整地土                                 |
| Ⅲc | 淡黒褐色軟質土                                      | 黄色ブロック少ない                                          | 土壌の埋土                                         |
| Ⅲd | 黒褐色軟質細土                                      | 黄色ブロック・円礫少ない                                       | 途中からⅢg層と<br>区別不能<br>土壌の埋土                     |
| Ⅲe | 淡黒褐色軟質土                                      | 黄色ブロック(5cm)多く含む、<br>円礫は少ない部分と多い部分<br>がある。近世近代の遺物多い | これより上は、<br>近世のゴミ穴<br>化している                    |
| Ⅲf | 暗黄褐色軟質細土                                     | 黄色(E層)ブロック(3～5cm)<br>多く含む。近世、近代の<br>遺物多い           | 土壌の埋土                                         |
| Ⅲg | 黒褐色軟質細土                                      | 黄色ブロック(5cm)が少し入る<br>・円礫少ない<br>遺物は少く埴輪片が数点混入        |                                               |
| Ⅲh | 黒褐色軟質細土<br>やや黄色をおびる                          |                                                    |                                               |
| Ⅲi | 暗黄色土                                         | E層のブロック                                            |                                               |
| Ⅲj | 暗黄褐色軟質細土                                     | 黄色ブロック少ない・円礫少ない                                    |                                               |
| Ⅲk | 黒褐色軟質細土<br>(よくしまる)                           |                                                    |                                               |
| Ⅲl | 暗黄褐色軟質細土                                     | 黄色ブロック(1～5cm)が多い                                   | 底部小土壌が<br>3つ順次掘ら<br>れたのちの、<br>その埋土<br>(土取りか?) |
| Ⅲm | 暗黄褐色軟質細土                                     | 黄色ブロック(1～5cm)が多い<br>・円礫が3点入る                       |                                               |
| Ⅲn | 黒褐色土<br>混黄色ブロック<br>(1～5cm)                   | 円礫が入る                                              |                                               |
| Ⅲo | 黒褐色軟質土                                       | 小さく薄い黄色土ブロック多<br>く入る                               |                                               |





第9図 立野古墳第2トレンチの遺構と層序 (1/50)



第10図 立野古墳第2トレンチにおける層序の形成

### 7) 第3トレンチ (第11図・図版3)

後円部の墳端の一点を確認し、周溝の規模と周堤の構造を確認するために設定したトレンチである。その結果葺石の根石列とそれに続く葺石を確認し、周溝の外側が2段になっていることが判明した。また周堤と考えられてきた土塁状の高まりは、盛土ではなく後世に削り残された自然地形の名残である可能性が強まった。

**葺石と墳端** トレンチ東端で葺石の根石を確認し、墳端をおさえた(第11図断面エ点)。根石は一抱えもある大型の平たい凝灰岩角礫を墳端斜面に斜めに貼るようにすえている。第1トレンチと同じく根石の前面には押さえの土をかためている(Va層)。この大型の石を利用するのは根石列のみで、それより上は人頭大の赤黄褐色礫と円礫を利用している(第11図葺石石材)。第1トレンチよりも大型の石を使っている。墳端の高さは第1トレンチくびれ部よりも約20cm低い位置に設定されている。

**周溝と埋没状態** トレンチ西側ではすぐに自然層(E層)に達したのに、東側では1m以上掘り下げてやっと周溝底面であるCラインを確認した。その結果周溝は外側で二段になるように構築されたと判明した。外側上段テラスは新しい溝(3ライン・31層)によって破壊されているので不明確だが、その幅(アーイ間)は約3mで、高さ142.5mあたりである。そこから東にゆるい斜面をなして下段底面(ウ点)に達している。下段底面はゆるやかに窪んでいるが、墳端までの幅は約2.7mである。底面の高さは141.2mで他のトレンチよりやや深い。

ところで周溝底にサブトレンチを入れてみたところ、硬化してはっきりと区別できた下段底面(Cライン)の下は自然層ではなく、黄色土の自然層ブロックや粒子(おそらくE・F層土)の混ざった層位が続いた。それが第V層群で、無遺物だが間接層位ではなかった。上段テラスの方向から堆積したことが層位群の傾斜から明白で、おそらく周溝掘削時に盛土採取のためこの部分を深くほり、墳丘整形時にふたたび埋めて周溝底面の高さを整えたと推定される。

周溝の埋没状況は下段で深さ120cmに達している。途中IVd層とIVe層の間のラインでいったん自然堆積が停止して、畑地耕作による削平をうけた可能性があるものの、現在までの1600年間でこの厚さである。400年間で約30cmというわけである。すると第1トレンチの南部IVa層上部の、下から30～40cmの高さから古代の土師器が検出されたのは、第IV層群形成過程からみて当然の位置である。

**「周堤」** 周堤の半分を掘ったところ、この部分では盛土が認められず、すぐに自然層があらわれた。アカホヤ(C層)の高さも、他のトレンチの高さとあっている(第7図B-B')。測量時の周堤状の高まりは少なくとも人工的な盛り土構築物ではないことが判明した。したがって削り残して周堤としたか、または自然地形の名残であると考えられる。

**遺物** 出土遺物はきわめて少なく、葺石の上の第IV層群から埴輪片を検出したのみで、大半は壺形埴輪であった(第18図25)。

### 8) 第4トレンチ (第12図・巻頭カラー図版1下・図版4)

後円部南側の墳端と周溝の確認をめざして設定した。調査の結果、葺石根石列を2箇所を確認し、この部分の墳裾には、テラス状の施設が存在することも明らかとなった。

第3トレンチ層位一覧

| 層位  | 色調・土質他                    | 包 含 物                    | 備 考                            |
|-----|---------------------------|--------------------------|--------------------------------|
| A   | 腐植土・暗褐色軟質土・細根が多い＝現在堆積中の層  |                          |                                |
| B   | クロボク(上部)暗褐色軟質土・さらさら       | 黄色ブロックは入らず均一な層           |                                |
| C   | アカホヤ                      |                          |                                |
| D   | 黒色硬質土、よくしまっていて、漆黒(下部クロボク) |                          | この地点では無遺物                      |
| E   | ソフトローム                    |                          |                                |
| 31  | 暗黄褐色軟質土(非常にやわらかい)         | 軟質の黄色土ブロックを含む            | 周溝内埋土を切る、溝埋土                   |
| 32  | 暗褐色軟質土                    | 黄色土ブロック(2～3cm)入る         | 特に32層は部分的な盛土かあるいは上部周溝の盛土の流れ落ちか |
| IVa | 暗褐色軟質土(ぼろぼろ)              | 小黄色土ブロック入る               |                                |
| IVb | 暗褐色軟質細土                   | 黄色ブロック(5cm)少し入る          |                                |
| IVc | 暗褐色軟質細土                   | 小黄色土ブロック非常に多い            |                                |
| IVd | 淡黒褐色軟質土(IVc層よりしまる)        | 小黄色土ブロック少ない              | 葺石完成後の流入土                      |
| IVe | 黒褐色軟質土(よくしまっている)          |                          |                                |
| IVf | 暗褐色軟質土(よくしまる)             | 黄色ブロック、粒子多い              |                                |
| IVg | 淡黒褐色軟質土                   | 黄色ブロック、粒子少ない             | 葺石完成後の流入土<br>墳丘側に埴輪が流れ込む       |
| IVh | 暗黄褐色細土                    |                          | テラスの流土                         |
| Va  | 混黄色ブロック<br>黒色土            |                          | 葺石の周囲をかためている                   |
| Vb  | 暗褐色細土                     | 黄色粒子多い                   |                                |
| Vc  | 暗黄褐色土、Vb層より黄色い            |                          |                                |
| Vd  | 暗褐色細土(堅くしまる)              | 円礫もわずかに含む、黄色土(E層)粒子非常に多い | 周堤方向からの堆積土である(無遺物)             |
| Ve  | 黒褐色細土(堅くしまる)              | 黄色土粒子(E層)非常に多い           |                                |
| Vf  | 黄褐色土、Vc層より明るい             |                          |                                |
| Vg  | 暗黄褐色土                     | 黄色ブロック(2～3cm)、粒子、非常に多い   |                                |
| Vh  | 暗褐色細土                     | 黄色ブロック(2～3cm)、粒子、やや少ない   |                                |
| Vi  | 暗褐色粘質土(堅い)                | 黄色ブロック(2～3cm)、粒子、多い      |                                |





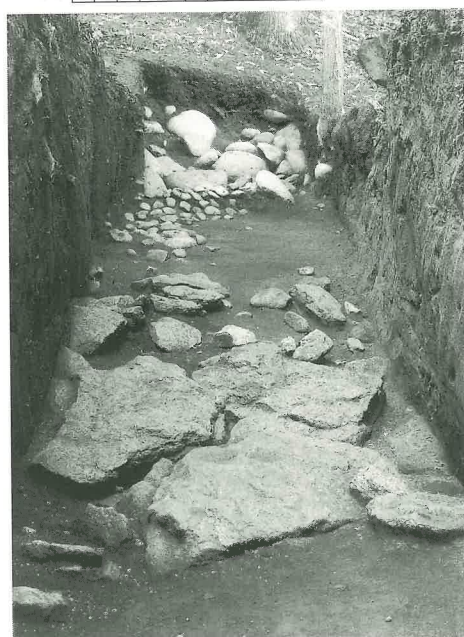


葺石と墳端・テラス ほかのトレンチと異なり、ここでは下段に大型凝灰岩角礫を貼りつけた根石列と、上段に大型円礫（河原石）の根石列をあわせて二列検出した。その間（イーウ点）は緩やかな傾斜のテラスになっていた。そこには小円礫をもちいた敷石が施されており、計画的に墳裾に平坦面を造り出している。テラスの高さは142.5 m前後である。下段の根石の凝灰岩角礫をもちいる点から、墳端はア点とみられる。その高さは141.9 mである。また墳端から周溝底にかけてに流土（Ⅳ層）とも自然層（このあたりではF層）とも異なる層位があり、根石の固め・周溝底の最終整形土と評価してV層とした。

遺物 出土遺物はきわめて少なく、葺石上のⅣ層群から埴輪片を検出した。大半は円筒埴輪a類であるが図示

## 第4トレンチ層位一覽

| 腐位  | 色調・土質                 | 他 | 包 | 含 | 物                           | 備考                                         |
|-----|-----------------------|---|---|---|-----------------------------|--------------------------------------------|
| IVa | 暗黄褐色軟質細土              |   |   |   | 黄色ブロック(1-5cm)多い             |                                            |
| IVb | 淡黒色軟質土                |   |   |   | 黄色粒子のIVaより少ない               |                                            |
| IVc | 黒色土(よくしまる)            |   |   |   | 黄色ブロック 粒子、少ない<br>円礫、川石、珧輪含む | 流土                                         |
| IVd | 淡黒色細土(よくしまる)          |   |   |   | 円礫堆積含む                      |                                            |
| Va  | 黄色土・黒色土の混層<br>(よくしまる) |   |   |   | 角礫の破片                       | 下部基石を築成した土層<br>古墳築成中の堆積土<br>・トレンチVa、Vb層に似る |
| Vb  | 明黄褐色軟質土               |   |   |   |                             | 円礫(小礫堆)の下部の土                               |
| F   | ハードローム                |   |   |   |                             |                                            |



第12図 立野古墳第4トレンチの遺構と層序 (1/50)

写真4 第4トレンチの葺石（南から）

できるほどの破片はない。

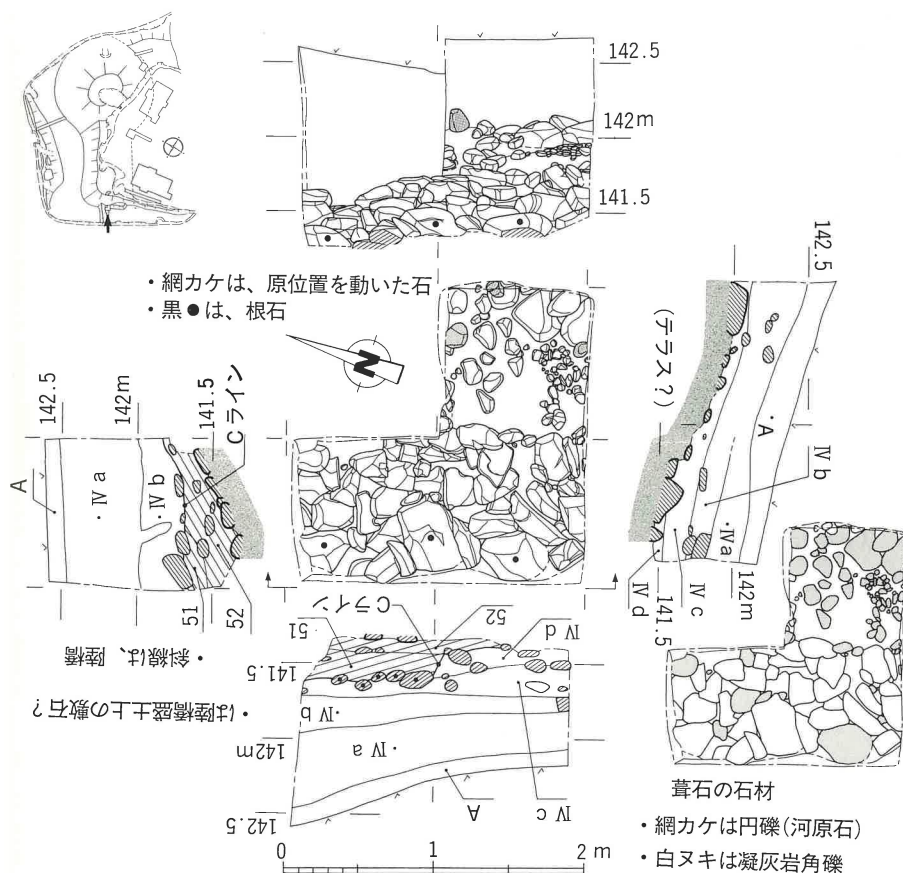
## 9) 第5トレンチ (第13図)

前方部前端の確認と陸橋の存否を目的として設定したが、拡張できなかったので問題を残した。しかし葦石の根石とみられる大型礫を確認し、陸橋は填丘完成後に土を盛って付設された可能性が高くなった。

**葦石と埴端** 測量で推定した位置よりも外側に埴端があることが判明した。かろうじて西端で大型凝灰岩角礫を確認し、その大きさをほかのトレンチの根石と勘案して根石列と判断した (第13図ドット)。したがって埴端はそのすぐ西で高さは141.2 mになると推定される。石材は根石付近では河原石が一部混じるものの大部分人頭大の凝灰岩角礫で、斜面を上に行くと途中から河原石に変わる。途中角礫から円礫に変わる地点で心なしか石が少なく、やや傾斜の鈍る面がある。狭いテラスの可能性もあるが断定はひかえたい。

**陸橋** ところでこのトレンチでは現状の陸橋を切るように北に1 m拡張した。掘り下げの途中で円礫の集中

(西断面●礫)があり、それを抜くと51・52層がありそれまで大量に検出されていた埴輪がでてこなくなった。そしてその下には葦石がしっかりと存在していた。この埴輪の混じらない51・52層は地上の陸橋の下のみ存在し、南側では葦石の上面まで大量の埴輪が出



第5トレンチの層位一覧

| 層   | 色調・土質他        | 含有物           | 備考         |
|-----|---------------|---------------|------------|
| A   | 腐植土           | 近世遺物          |            |
| IVa | 淡黒褐色軟質土       | 黄色粒子少し        | 葦石完成後の流土   |
| IVb | 黒色軟質細土 (やや堅い) | 下にくぼく、円礫、埴輪多い |            |
| IVc | 暗褐色細土 (しまる)   | くずれた葦石・埴輪多い   |            |
| IVd | 黒褐色軟質土        | 埴輪片多い         |            |
| 51  | 黒褐色軟質土        | 埴輪含まず         | 陸橋盛土の可能性あり |
| 52  | 暗黄褐色硬質土       | 埴輪1片含む        |            |

第13図 第5トレンチの遺構と層序 (1/50)

写真5 第5トレンチの葦石 (西から)



写真6 第5トレンチの葦石 (南から)





土した (IV c・d 層)。しかし最終清掃の段階で 52 層下の葦石の間から埴輪片を 1 点確認した。そのため 51・52 層を築造時の立野古墳に伴う構築物とする判断は差し控えたい。しかしこの層上には 1 m 近い流土 (第 IV 層群) が堆積しており、後世の付加とは見做しがたい。おそらくいったん古墳が完成し埴輪が前方部に立てられたのち、まだ埴輪が崩落しないごく近い時期に、前方部前端の中央に盛り土の陸橋を渡したと推定される。広い意味での古墳の施設のひとつとみなせよう。

遺物と出土状態 わずか 3 m<sup>2</sup> のトレンチにすぎないのに比較的大量の埴輪片が堆積していた。密度としては第 1 トレンチに次ぐ感じをもった (第 18 図 26～28)。すべて前方部上から転落してきたものと推定される。しかし埴輪は円筒埴輪 b 類一種類に限られ、壺形埴輪などは一切ない。前方部に飾られた埴輪は円筒埴輪それも b 類のみであったことを示している。

## 10) X 地点断面 (第 14 図)

加藤家宅地の裏側の後円部の最も崩落の進んだ地点で墳丘の断面を観察することができた (写真 7)。その結果、自然層と墳丘盛り土 (VI 層) を確認した。

盛土 下から D・C・B 層の自然層を確認し、B 層＝上部クロボク層の上に 4 つの層単位をみとめた。興味深いこ

第 14 図 立野古墳 X 地点土層図  
(S = 1/50)

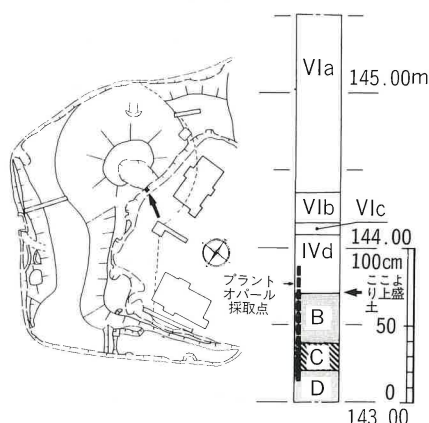


写真 7 X 地点

X 地点の層位一覧

| 層    | 色調・土質他          | 包 含 物                               | 備 考           |
|------|-----------------|-------------------------------------|---------------|
| VI a | 黄色土             | 黄色土ブロックの集合で、すき間に黒色土含む               | EF 層の混成土      |
| VI b | 暗黒褐色細土          | E 層ブロック (1~5 cm 大) 入る               | E 層を盛り上げた層    |
| VI c | 黄色土ブロック         | アカホヤのブロック (1~5 cm 大) の (C 層) が、多く入る | B・C・D 層が混ざった土 |
| VI d | 黒褐色軟質細土         |                                     | 自然土層の地山       |
| B    | 上部クロボク          |                                     |               |
| C    | アカホヤ            |                                     |               |
| D    | 堅くしまった黒色下部クロボク土 |                                     |               |

とに上に盛られた土ほど自然層の下層のブロックが混じっている。一種の逆転層序である。この盛土状態は周溝を上から掘り下

げていくときに出てくる自然層を、そのまま順に墳丘に盛り上げていったことを示している。また盛土をはじめた高さは約 143.7 m 付近である。

なお盛土のはじまる B 層と VI b 層の間には焼き払われた層などは観察できなかった。そこで畑遺構などの存否をふくめた墳丘築造以前の土地利用状況を調べるためにプラントオパール分析をおこなったが、畑利用をうかがわせる資料は検出できなかった (註 1)。墳丘築造時に表土等のやわらかい部分は、盛土の安定化のために取りのぞかれた可能性がある。

註 1、この古墳の層序のプラントオパール分析という問題設定は佐々木章先生による。

## 11) プラントオパール分析

調査中に立野古墳の堆積土層を観察していただいた大分短期大学の佐々木章先生から、プラントオパール分析のすすめがあり早速実施していただいた。第 1 トレンチ、第 3 トレンチ、X 地点の 3 箇所資料採取をおこなった。佐々木先生の問題意識は次節にくわしいが、結果はイネ科の植物プラントオパールはほとんど検出されず、前節でふれたように、X 地点の墳丘築造以前の土地利用状況の復元までには至らなかった。

しかし第 1・3 トレンチの流土 (第 IV 層群) の分析結果として、畑にほとんど利用された可能性がなく、笹原などとして推移したのではないかと推定は層序の観察結果とも一致している。墳丘築造以後現在にいたるまで 1600 年間、畑地にも転用されず、保存されてきたという希有の出来事を物語っている。

(田中)



## 立野古墳土壌のプラント・オパール分析

大分短期大学 助教授 佐々木 章

はじめに

我が国では、唐古遺跡（奈良県）・登呂遺跡（静岡県）・安国寺遺跡（大分県）などの発掘調査によって、弥生時代から水田イナ作があったことが知られていた。その後1960年代後半になって水田関連の発掘があいついだ。大中の湖南遺跡（滋賀県）・津島遺跡（岡山県）などである。1970年代に入ると日高遺跡（群馬県）で東日本にも弥生時代の水田が検出され、しかもそれが「ミニ水田」と呼ばれるような小区画水田であることがわかった。西日本でも大阪平野・岡山平野・福岡平野を中心に水田の発掘調査が相次いだ。さらに1977・1978年の板付遺跡（福岡県）の夜白式土器単純層の水田の検出、1980年の山の寺式土器層に伴う水田の検出で、それまで縄文晩期に分類されていた土器型式時代の水田が検出され、その時代を弥生時代に組み入れて弥生早期とする見解の発端になった。

一方、我が国では水田とならんで畑作も重要な比重を占めてきたと考えられるにもかかわらず、畑作址を検出できた例は少ない。水田遺構が検出できるのは、多くの場合、洪水によって一度に埋没したためであると言える。しかし、一般に畑は水の便が悪い場所に立地することが多く、洪水によって埋没する可能性は少ない。また畝立てをしていない場合には、遺構を残していない可能性も大きい。これらの原因が、畑作址の検出を困難にしているといえよう。10 mを越える厚い洪水堆積層に埋もれた大阪周辺や、赤城山、榛名山からの火山放出物に覆われた群馬県などでわずかに知られているにすぎない。

今まではほとんど注目されて来なかったが、人工的に多量の土砂が覆った場合も、畑作址が検出される可能性がある。その一つに古墳に代表される墳丘墓があげられよう。またこれは、時期を特定できるという意味でも優れている。生産址は住居址や埋葬址とくらべて遺物が少なく、時期を特定することが難しい。墳丘墓は、ほぼ弥生後期から古墳時代に限定されるが、これに覆われていることは、生産に利用されていた年代の下限を決めることができる。

なお、畝立て栽培していたとしても、墳丘の造成時に畝が破壊されている可能性があるので、プラント・オパール分析を試みる。

プラント・オパール分析は、主としてイネ科植物の葉身中に存在する珪化機動細胞の化石（プラント・オパール）を顕微鏡下で検出することで、給源植物の種類や量を推定する方法である。埋没水田の事前探査にも用いられ、1981年以降の垂柳遺跡（青森県）などで確かめられたように、分析による推定範囲と本発掘による水田遺構の検出範囲は一致する場合が多い。1992年から1995年にかけて行った中国の草鞋山遺跡の調査では、イネ機動細胞プラント・オパールを多量に含む馬家浜文化期の最下層で世界最古の水田址が検出された。

畑では多種類の作物が栽培されたであろうが、そのうち、プラント・オパール分析で種まで同定可能なのは野生の近縁種が分析していないイネとシコクビエだけである。ヒエ、アワ、キビ、モロコシ、ハトムギなどでは、属レベルまで同定できるので、これらが栽培されていた可能性を指摘できる。しかし、ムギ類は検出できない。

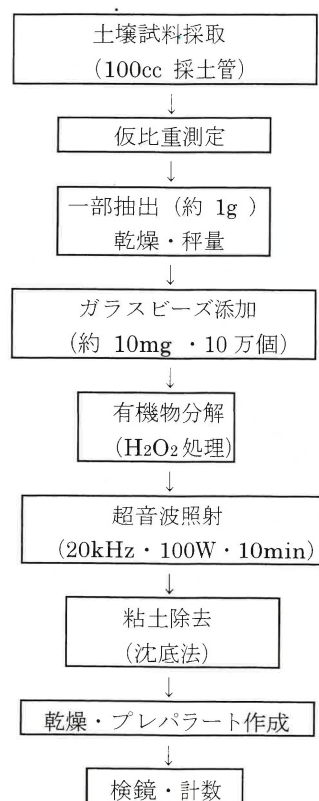


図1 プラント・オパール定量分析手順

表 1 植物体中の珪化機動細胞密度

| プラント・オパール<br>分析分類名 | 代表植物 | 植物体中密度<br>( $10^4$ 個/g)      |
|--------------------|------|------------------------------|
| イネ                 | イネ   | <i>Oryza sativa</i>          |
| キビ族                | ヒエ   | <i>Echinochloa utilis</i>    |
| ヨシ属                | ヨシ   | <i>Phragmites communis</i>   |
| タケ亜科               | ゴキダケ | <i>Pleioblastus Chino</i>    |
|                    |      | var <i>virides f pumilis</i> |
| ウシクサ族              | ススキ  | <i>Miscanthus sinensis</i>   |
|                    |      |                              |

## 分析方法

基本層序は、当時の地表を覆う墳体部の下に、上から黒色のクロボク層、黄褐色のアカホヤ層、漆黒色のクロニガ層の順に重なる。第1トレンチ、第3トレンチ、墳丘欠損部崩落面の3個所でプラント・オパール分析試料を採取した。

プラント・オパールの大きさは

50  $\mu$ m程度で、肉眼では観察できない。そのため後代の攪乱や採取時の汚染（コンタミネーション）に対して細心の注意が必要である。そのため、採土管を用いて注意深く採取した。採取した試料は採土管につめたまま研究室に持ち帰った。層が薄い場合は、やむを得ないので、そのつど洗浄した器具をつかって採集し、ポリエチレン袋につめた。

研究室に持ち帰った試料は、図1に示す手順に従って定量分析を行った。

## 分析結果および考察

分析結果を植物体重に換算して図2に示す。単位は広さ10a（1,000 m<sup>2</sup>）深さ1 cmの土壤中に埋没した植物の地上部乾物重（t）で示してある。イネについては、生産されたであろう粉量も推定してあわせ示した（ハッチ部）。植物体重に換算するには表1の植物体中の珪化機動細胞密度を使った。

現在まで発掘によって畦畔などの遺構が検出された水田遺構の作土層の分析結果では経験的にイネ粉に換算して1（t/10 a/cm）を超えることが多い。そこで、この値を超えると、水田の可能性が高いと判断している。一方、畑ではイネを連作すると連作障害が起こるので、他の作物と組み合わせて輪作するのが普通である。そのため畑でイネを栽培していたとしても、畑のイネ機動細胞プラント・オパール密度は1桁ほど少ないであろう。そこで、検出精度を通常の10倍にあげた。

イネ機動細胞プラント・オパールが検出されたのは、崩落面のクロボク層の④層と3トレ③層だけで、しかも極くわずかであった。おそらく、ここで生産されたものではなく、他の場所で栽培したイネのプラント・オパールが紛れ込んだものであろう。

他のイネ科植物で、作物の可能性のあるのは、キビ族である。しかし、プラント・オパールの形や大きさから見ると、作物と言うよりもむしろ雑草のエノコログサやイヌビエ形に似ている。おそらく栽培ではないであろう。

タケ・ササ類は、イネ科タケ亜科に属する。独立させてタケ科とする研究者もあるが、古くからの分類法に従ってタケ亜科とした。やや高冷地の落葉樹林や人工の加わった疎林の林床に生じるほか、河川の氾濫原や荒地を広く被って「竹藪」や「笹原」を構成する。タケ亜科の機動細胞プラント・オパールの形状を細分する研究もあるが、まだ実用的でないのでタケ亜科にまとめた。タケ亜科は、ウシクサ族に次いで多い。検出したタケ亜科の分類学的な検討は終了していないが、多くはタケ類で、中にはササ類の特徴を示すものが含まれる。

ヨシ属は、一般のヨシと、早い流水中に自生するツルヨシに分類される。プラント・オパール分析でもほぼ分類できるが、まとめてヨシ属とした。ヨシ属も非常に少なく、クロニガ層を中心にその上層で検出されただけである。これはツルヨシに類似していた。しかし、立地条件から周辺には河川は無く、一時湿地状になっていたのではあるまいか。3トレの上部でもごくわずかに検出されるが、古墳が営まれ、周壕が建設されているので、そのためであろう。

ススキ・チガヤなど路肩や堤防草原などに普通のイネ科植物を含むウシクサ族は機動細胞の形状が変異性に富み細分が困難であるのでウシクサ族にまとめた。これは非常に多い。周囲はササ原の状況で、古墳営造後もその景観が続いていたと想定できる。



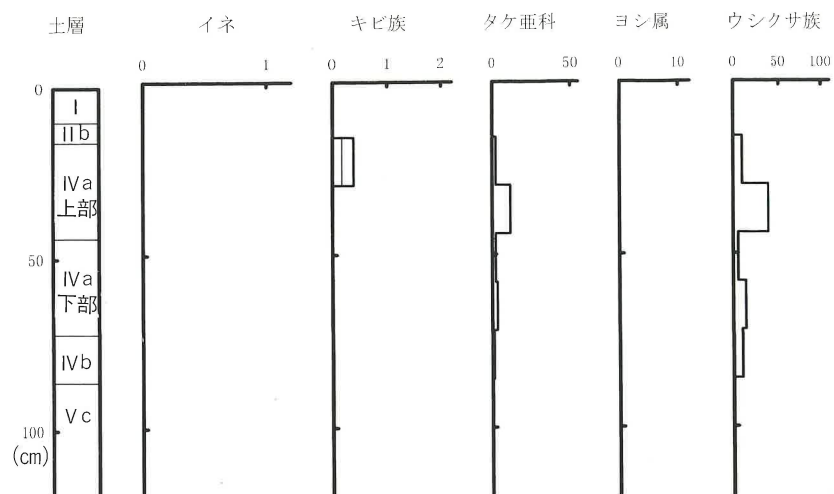


図2 1トレ土壤のプラント・オパール密度から推定した植物量  
(t/10 a/cm)

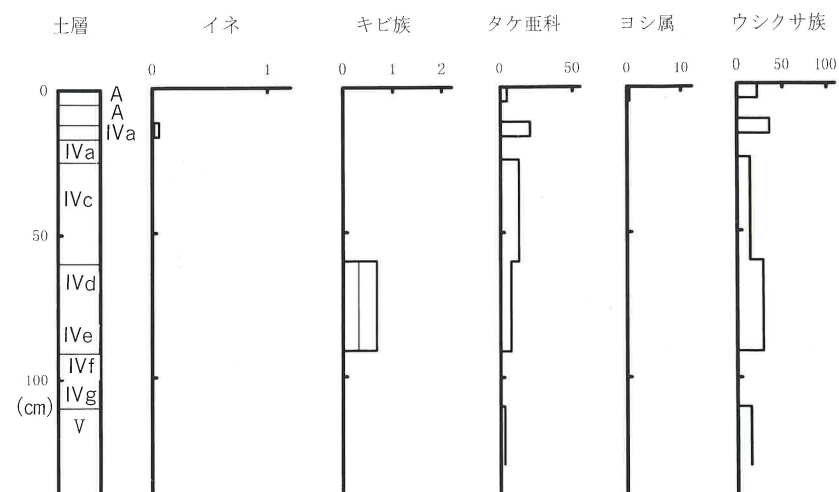


図3 3トレ土壤のプラント・オパール密度から推定した植物量  
(t/10 a/cm)

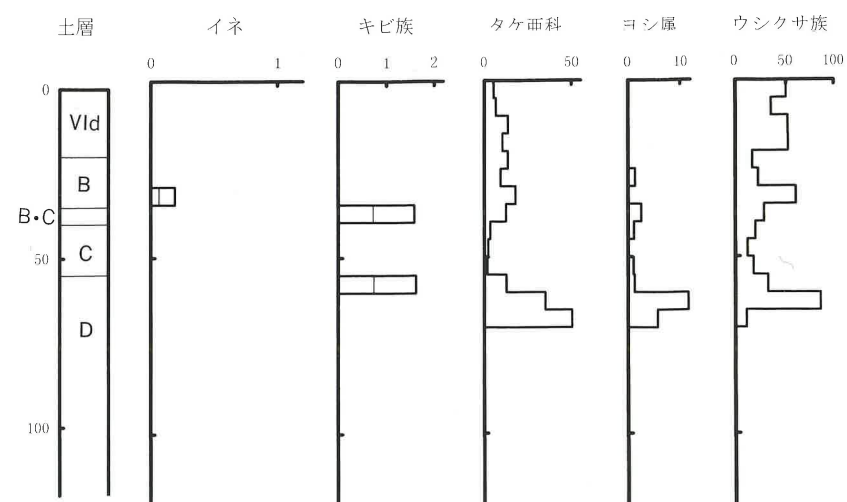


図4 崩壊地点土壤のプラント・オパール密度から推定した植物量  
(X地点) (t/10 a/cm)

## 12) 出土遺物

### ①埴輪 (第17・18図、第9表、図版4～6)

第17・18図に各トレンチ毎に実測図をのせた。第18図のZ地点表採資料は発見時の採集資料で文献85で紹介されたものの再録である。同じくW地点表採資料は昨年9月の台風で崩落した前方部からの加藤勝政氏採集資料である。採集地点は第6図に示した。

**埴輪の形式と数量** 立野古墳から検出された埴輪の種類は以下のとおりである。各トレンチの出土数は、13)③で、ふれる。個体数は最小個体数を示す。破片数は第1・5トレンチでは小片を含めて100点以上だが、第2・3・4トレンチでは10数点から数10点である。焼成の状態が非常に均一のため破片を個体分類する事は難しい。口縁と底部で個体識別をした数字である。当然本来の数量ではないが一定の傾向は示している。

|         |            |               |
|---------|------------|---------------|
| 円筒埴輪    | 普通円筒埴輪 a 類 | ・ 2 個体以上。     |
|         | 普通円筒埴輪 b 類 | ・ 2 個体以上。     |
|         | 朝顔形円筒埴輪    | ・ ・ ・ ・ ・ なし。 |
| 壺形埴輪    | a 類        | ・ 8 個体以上      |
|         | b 類        | ・ 5 個体以上。     |
| 「器台形埴輪」 |            | 1 個体以上。       |
| (土師器壺)  |            | 1 個体。         |

**埴輪の形式組成** 壺形埴輪を主体に、その一部を乗せるためと推定される「器台形埴輪」が若干、それに円筒埴輪が少数伴うことがわかる。注目されるのは円筒埴輪のなかに朝顔形円筒埴輪の破片が1点も含まれないことである。また家形埴輪・器財埴輪の破片も1点もない。このように壺形埴輪主体でそれに普通円筒埴輪のみがともなう組成は、県内では杵築市小熊山古墳で認められる。第2章第4節でのべたA2類型にあたる。

**埴輪群全体の特徴** 円筒埴輪と壺形埴輪・「器台形埴輪」に共通する属性は次の4点があげられる。胎土、成形技法、焼成技術、丹塗りである。この点についてまず報告する。

**胎土の砂礫組成は、**1mm大の小角閃石と長石が含まれ、雲母は一切含まない。立野古墳の埴輪の胎土の注目すべき特徴は、3~5mm大の大形白色石英粒子が含まれる点にある。第9表の観察表胎土の項目で「大形粒有」と表現したものである。大量に入るわけではないが、大きな粒子だけに目につく特徴である。大分県内の土器胎土は、凝灰岩～安山岩質の地質に起因するために石英粒は少なく角閃石・長石を中心とする砂礫構成である。しかし北海道地域から国東半島の一部、および大分川流域の一部にかけては、石英が角閃石・長石と同量かそれ以上含まれる胎土を使用する(註1)。その中で石英の粒子が3mmを超え、時に1cm近い大形石英を含む胎土は、別府湾南岸の大野川以東のきわめて限定された地域に限られる。またこの粒子を多く含む場合には結晶片岩の大形粒子をふくむ。したがって石英と結晶片岩の大形粒子をともに含む胎土の場合には、その産地を大野川以東の佐賀関半島周辺の海部地域と推定できる。

立野古墳の円筒埴輪と壺形埴輪等とともにこの大形白色石英粒子が観察される。小片では混入密度が低いいため認められなかった破片も多いが、ほかの砂礫組成は同じであり、すべての埴輪がこの粒子を含む胎土を使用したと考えてさしつかえない。この事実は立野古墳の埴輪が海部地域と関係が深いことを示唆する。ところが結晶片岩の大形粒子はまったく観察されなかった。この事実はどういうことだろうか？ また土師器壺(第18図22)の胎土も、この大形石英粒子を含む。近接する陣箱遺跡の弥生土器・土師器の胎土には大形石英粒はまったく含まれていない。整理の途中までは大形石英粒子が含まれたことから立野古墳の埴輪は海部地域で製作され、この内陸まで搬入されたのではないかと疑ったが、大形結晶片岩粒がないところからみて、海部地域製作ではなく、やはり古墳周辺の在地で製作されたと推定される。その際胎土への混入材として大形石英粒子のみが海部から持ち込まれたと考えられる(註2)。いずれにしても、海部地区との関係を指摘できる。

成形技法として、円筒埴輪および壺形埴輪における粘土帯の積み上げ方法は、接合面を内傾させるという共通する手法が用いられている。ところが「器台形埴輪」とした第18図21は接合面が外傾しており、倒立成形で製

作された可能性が高い。その点はあとでふれる。

焼成技術を見ると、埴輪破片はすべて、淡褐色から赤褐色系の色調で、供献された土師器壺（第18図22）より明るい色調で堅緻な焼き上がりである。今回の調査で検出した破片には、明瞭な黒斑を観察できなかったが、全体に良質の土師質であって、穴窯焼成ではなくいわゆる「野焼き」と推定される。

丹塗りについて。円筒埴輪・壺形埴輪ともに外面に赤色顔料が観察される。濃赤色で同一の顔料を使用したと推定される。とくに円筒埴輪は底部まで丹塗りがおよんでおり、完成時には真っ赤な色調だったとおもわれる。

以上のように、立野古墳の埴輪製作については、埴輪製作工程の各段階―胎土作り・成形調整・焼成・丹塗り―で、円筒埴輪・壺形埴輪・「器台形埴輪」に共通点が認められる。この事実は、胎土作りから焼成にいたる一貫した埴輪製作技術を保持した工人集団が、埴輪製作にたずさわった結果と推定される。

以上の点をふまえた上で、以下に円筒埴輪・壺形埴輪・「器台形埴輪」の順で観察結果を報告する。

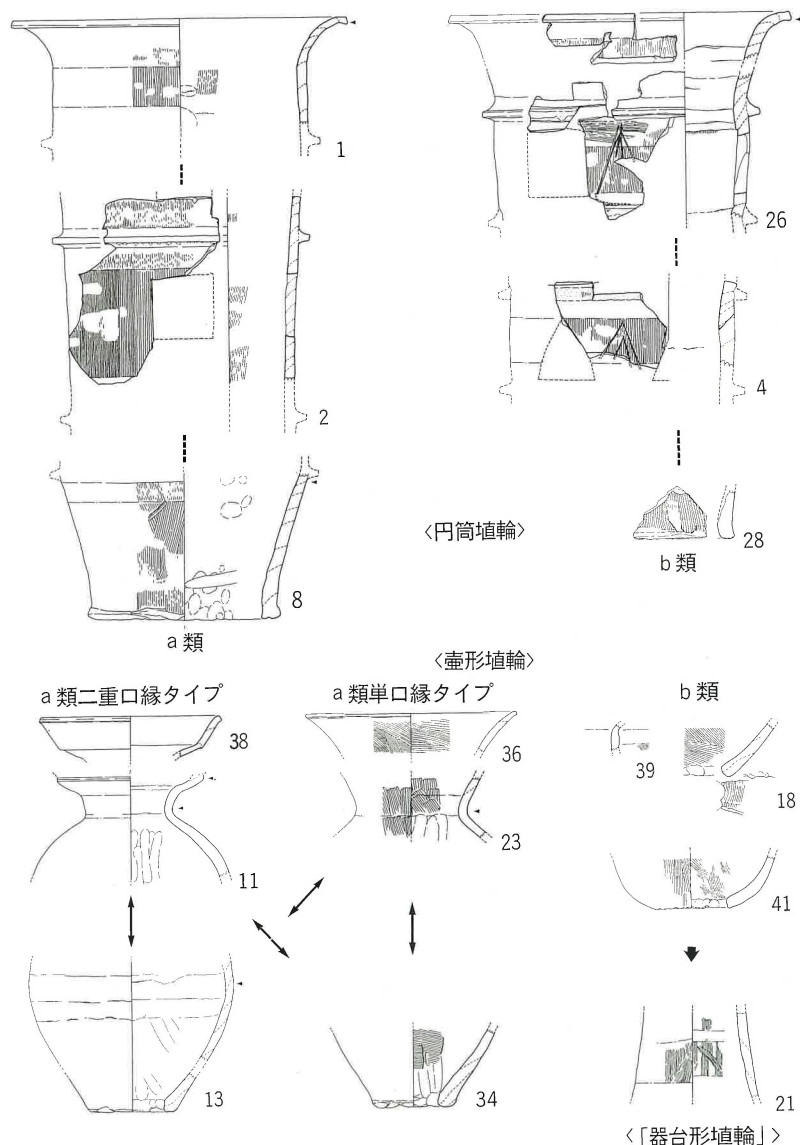
#### a 円筒埴輪（第15・17図1～8図、第18図26～32・35、図版4～6）

まず断面観である。全周復元例がないので正円か楕円形か判断できないが、実測の際の円周曲線を見ると歪みがないので、正円個体であったと推測される。側面観については、第17図1～4・8、第18図26をみるかぎり最上段口縁部が大きく外反するほかは、胴部は円筒状である。基底部は8のように、下すぼまりになるようである。

規格をみると、口径は1・26から、36 cm前後。胴部径は24～27 cm程で、基底部径は8から約20 cmとなる。最上段と基底部には透穴がないので、突帯間にのみ透穴が施されたとすると、2・4からみて少なくとも3条の突帯があったと復元できる。ここまでは円筒埴輪全体に共通する規格だが、突帯間幅などから高さを復元すると立野古墳の普通円筒埴輪は次の2種類に別れることが判明する。なお2条の突帯が同一破片に遺存した例はないが、剥離痕やヨコナデ調整の位置からおおよそ復元できる（第15図）。

円筒埴輪 a 類 最上段高が約12 cm(1)、突帯間幅16～17 cm(2)、基底部高約15 cm(8)で、最上段幅が突帯間幅より幾分短く、突帯接合部の幅を2 cmと見積もって三条突帯で復元すると高さは約66 cmとなる。今ひとつの特徴は、器壁の厚さが平均1 cm未満ときわめて薄い点にある。またあとでふれるが、透穴は方形で、文様は格子形を特徴とする。

円筒埴輪 b 類 最上段高が約9～10 cm(26)、突帯間幅9～10 cm(4・26)、最上段幅が突帯間幅と等しく、基底部高を10 cmと仮定して三条突帯で復元すると高さは約45 cmほど



第15図 立野古墳出土埴輪の分類と形式組成



となる。そうすると口径に比べてあまりにも器高が低いので、突帯数はまだ多かった可能性がある。もうひとつの特徴は、器壁が平均1.5cmと厚く、a類と対照的で、破片でも区別できる（第9表）。透穴は方形と正三角形で、文様は三角形を特徴とする。

以上から、普通円筒埴輪には、形態はほぼ同一だが、規格の異なる2種類があったことがわかる。次に細部の形態、調整技法等を記述していく。

外面調整技法は1次調整タテハケのみが丁寧に施されている。29はかつて2次調整タテハケではないかとした資料（文献120）だが、今回の調査資料では2次調整は認められなかったもので、撤回したい。内面調整については、a類とb類でやや異なる。a類は丁寧にタテハケ調整とナデを併用し、基底部では指圧痕をよく残すものの総じて接合痕を残さないように仕上げる。これに対しb類は一部にハケメが認められるがナデ調整が基本である。しかしナデは不徹底で粘土帯接合痕が内面に明瞭に残る例が多い。ヘラケズリは、まったく観察できなかった。

基底部成形技法は比較的薄い作りで、粘土紐巻きあげの出发点となる厚い粘土帯を張り合わせた基底部を作らずそのまま積み上げていくと考えられる。そのため底部破片も比較的薄い作りである。特別な底部調整もおこなわれていない。接地面にも調整はなく、乾燥時についたと推定される圧痕が残っている例が多い。

最上段口縁部の形態は、端部が水平になるまで外反する形態である(1・26)。口唇部は下端が少し飛び出すように2本指で最終的に仕上げる。突帯の断面形態は、高く突出した台形で、いずれも3本指をあててヨコナデ調整したものである。第18図29・30のようにあまり高くない例もあるが、前者が圧倒的に多い。上面と側面に気を使う製作者のくせか、下面のヨコナデが十分でなく、突帯下面に接合痕や指圧痕が残る例が多い(2・35)。突帯の接合方法で接合面に沈線などを施す破片はなかったが、一条のヨコナデをいれてハケメが消える例がある。

透穴の形態については、方形(2・3・7・26)と正三角形(4・5・27・31)で円形透かしはなかった。方形透穴は一辺7cmほどの正方形で、a類では突帯間の上位(2・3)に穿孔される。b類では同じ大きさの方形透穴を狭い突帯間に穿孔するので中央いっぱいになる(26)。またa類では突帯上下の同じ位置に配される例がある(2)。三角透穴はいまのところb類のみにあり、4のように同一突帯間に近接して多数配されると考えられる例があり、その場合上下の突帯間では交互に配されたとみられる。

文様としてヘラ描き沈線による、三角形・格子形・X字形の3種類が認められる。ヘラには透穴穿孔と同じ鋭利な工具を使用したものがほとんどだが、植物の茎を使用したと推定される例(26)もある。三角は二重線をなす4・26があり、いずれも透穴の間に配され、26は稚拙である。格子は6・7。X字形は31で、三角透穴の横に配されている。円筒埴輪a類には格子形が、円筒埴輪b類には三角形が配されている。

円筒埴輪のまとめ 立野古墳の円筒埴輪は、普通円筒埴輪のみから構成される。朝顔形円筒埴輪は使われていないと推定される。普通円筒埴輪の中にはa類とb類の二者があり、形態的にはほぼ同じである。しかし規格と作りは大きく異なり、透穴と文様構成も異なる傾向がある。胎土・焼成・色調はa類b類共通しており、それだけではまったく区別がつかない。したがって同一時に同一工房で立野古墳のために製作された可能性が高く、a、b二者が意図的に作り分けられたとみられる。

#### b 壺形埴輪（第15図・17図9～20、18図23～25、33、34～41 図版5・6）

まず底部をみると成形時に底部を開放してつくる成形時開放ですべて作られていて、いったん底部を作った上で焼成前に穿孔する型式（第4節の壺形埴輪1類）はみいだせない。さらに詳細に観察すると底部端面外側に粘土帯を重ねて厚くしっかり底部をつくるa類(13・14・24・34・40)と、そのまま薄く仕上げるb類(17・18・19・20・41)とがある。成形技法にも違いがあり、a類は内面に接合痕を残すタテ方向の指ナデでしあげ、外面もナデしあげのことが多い。一方b類は内外面ともハケメ調整でしあげ、とくに内面底部までハケメが及ぶ点に特徴がある。b類が土師器壺の調整に近く、a類は調整をかなり省略した型式である。

側面観と規格をみると、さらに二種に大別される。口縁形態が二重口縁タイプ(9・11・37・38・39)と単口縁タイプ(23・25・36)である。a類は頸部が外反気味に伸び、口縁部は短く納まり、端部を軽く外に向ける特徴があり、口径は16～18cm前後。a類の単口縁タイプは口径22cm(36)ほど。胴部径は、ともに22～24cm程で、底径は約9cmとなる。器高は30cm強と推定される。胴部はいわゆる「長胴形」に近く、墳丘樹立を前提とした作りである。

b類は口縁部の破片がないが、39からみて頸部が直立する二重口縁タイプが存在する。規格はわからないが破片からみてa類より小振りになることは疑いない。胴部は倒卵形で底部はまだ不安定な要素を残す。

壺形埴輪のまとめ 埴輪化のより進行したa類と、やや小型でまだ土師器壺の面影を残すb類があり、二重口縁と単口縁があり、単口縁の方が数は少ない。またa類よりb類の方が数は少ない。ところで、壺形埴輪と円筒埴輪の規格を比べると、壺形埴輪の胴部最大径は推定22～24cm程で、円筒埴輪の胴部内径は推定22～25cmである。これは実際にあててみると壺形埴輪が円筒埴輪のなかにスッポリ入ってしまう値である。したがって立野古墳の円筒埴輪の上に壺形埴輪を乗せることはなかったと考えてよい(註3)。

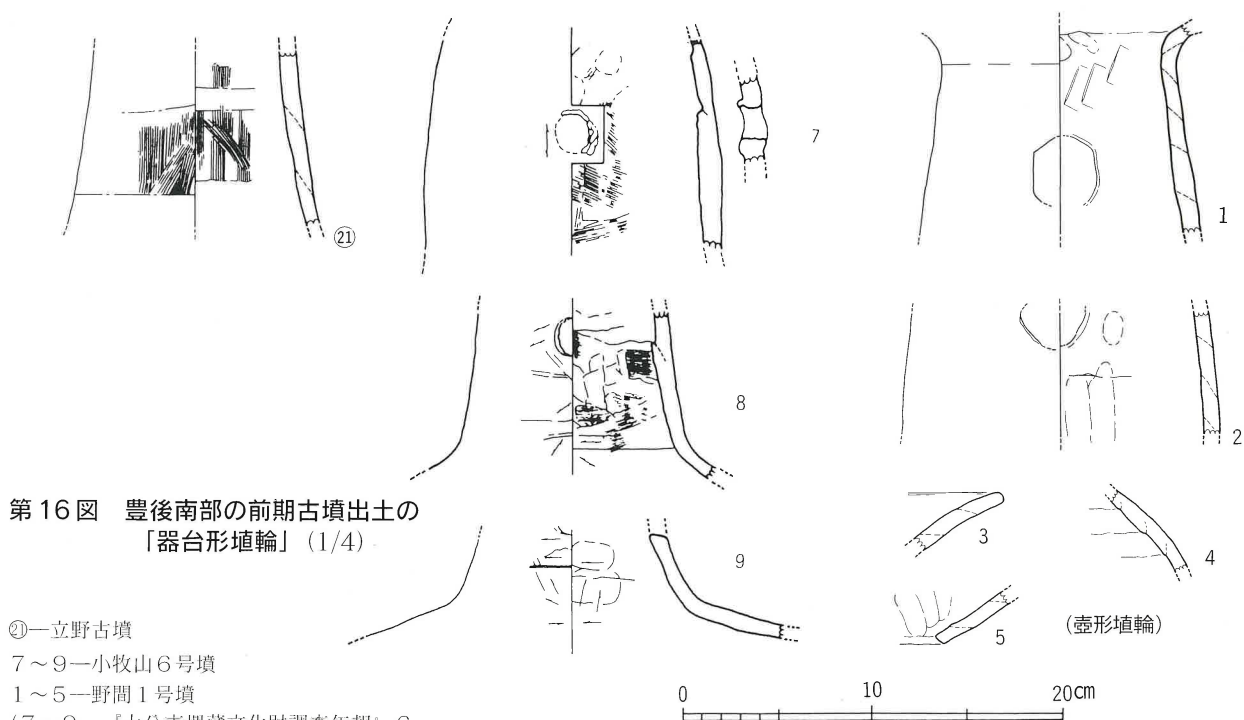
#### c 「器台形埴輪」(第15・16図、18図21、図版6)

21は胎土・焼成・色調・丹塗りの点で埴輪と同一の破片である。しかし他の埴輪と製作技法が異なり、粘土帯が外傾接合である。そして内外面に丁寧なタテハケが施されている。はじめ壺形埴輪の頸部と考えたが、第16図に示すように類例が存在するので、機能は器台であると考える。第16図7・8・9は大分市小牧山6号墳出土資料(文献128)の胴部から脚部で、胴部に小型の円形透穴があり、接合痕も外傾する。1～5は別府大学に所蔵されている未報告の大分市野間1号墳の埴輪である。精製胎土を用いて薄手に赤く焼かれている。1・2は胴部にややいびつな円形透穴を穿ち、外傾接合で成形されている。3・4・5は壺形埴輪で、3は口縁部、4は内面に接合痕の残る第4節の2類壺形埴輪、5は焼成前穿孔の1類壺形埴輪にあたる(註4)。

以上の二例からみて、胴部が発達し脚部が開く形態で胴部に透穴のある器形は、これまでの県内の壺形埴輪の頸部にこのような例がないので、現状では器台にもっとも近いといえる。また今のところ前方後円墳でのみ出土しており、壺形埴輪とかならず共伴する点から埴輪の一型式とみられる。しかしまだ全形が復元できる資料に恵まれないので、ここでは「器台形埴輪」と括弧つきで呼んでおく。

#### d 土師器壺 (第18図22)

1個体のみ第1トレンチから埴輪とともに出土した(22)。胎土は埴輪と同じく大形石英粒が入るが、焼成と色調は異なり、やや暗くもろい感じを与える。破片の内面と割れ口に赤色顔料が付着しており、埋葬にかかわる土器である可能性が高い。内面にハケメをほどこす在地型式の丸底の壺とみられるが、埴輪と同時・同一工房で製作されたものではない。赤色顔料の容器とみられる点からみて、海部地域からの搬入品の可能性もある。



第16図 豊後南部の前期古墳出土の「器台形埴輪」(1/4)

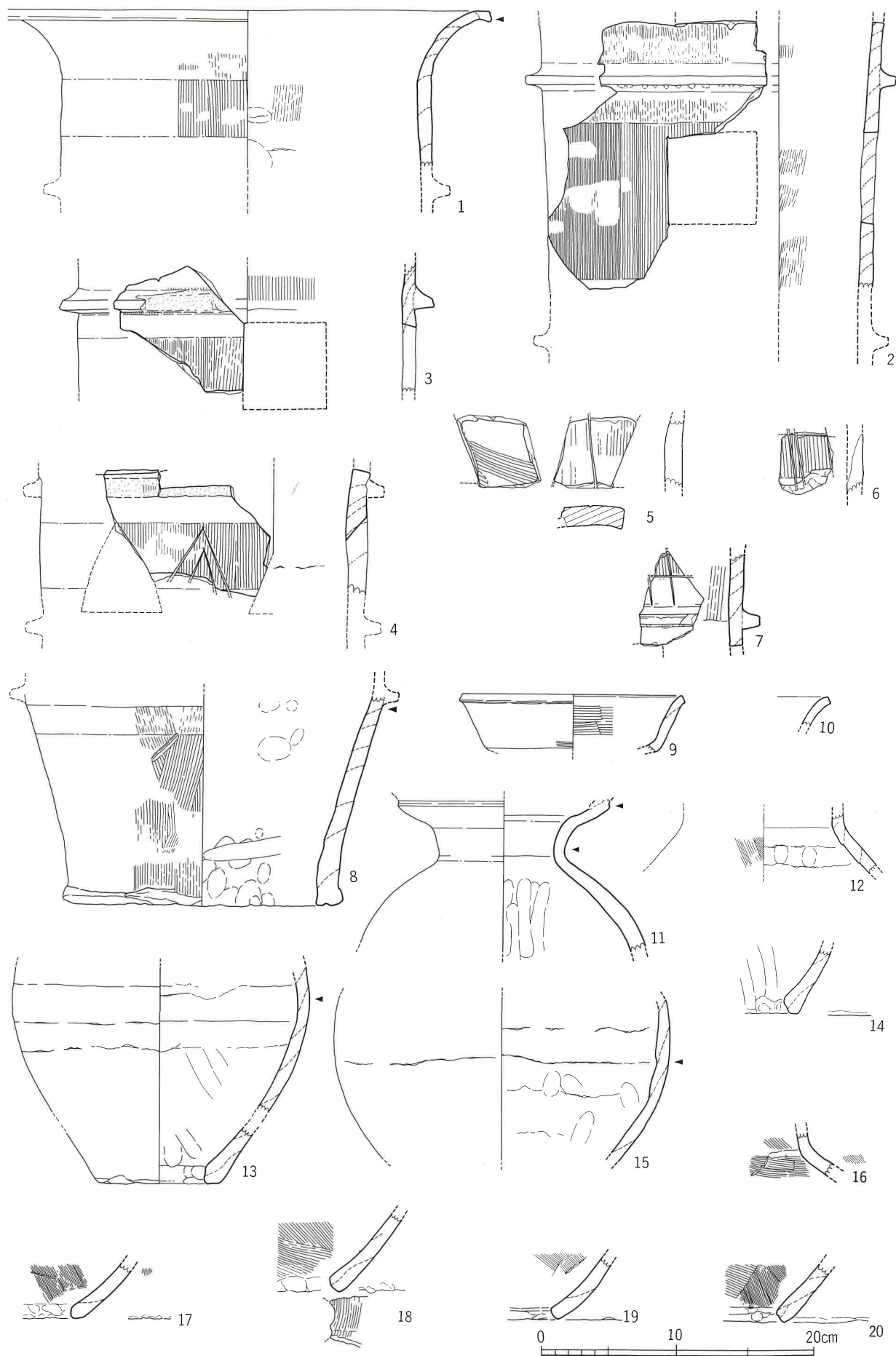
②一立野古墳

7～9一小牧山6号墳

1～5一野間1号墳

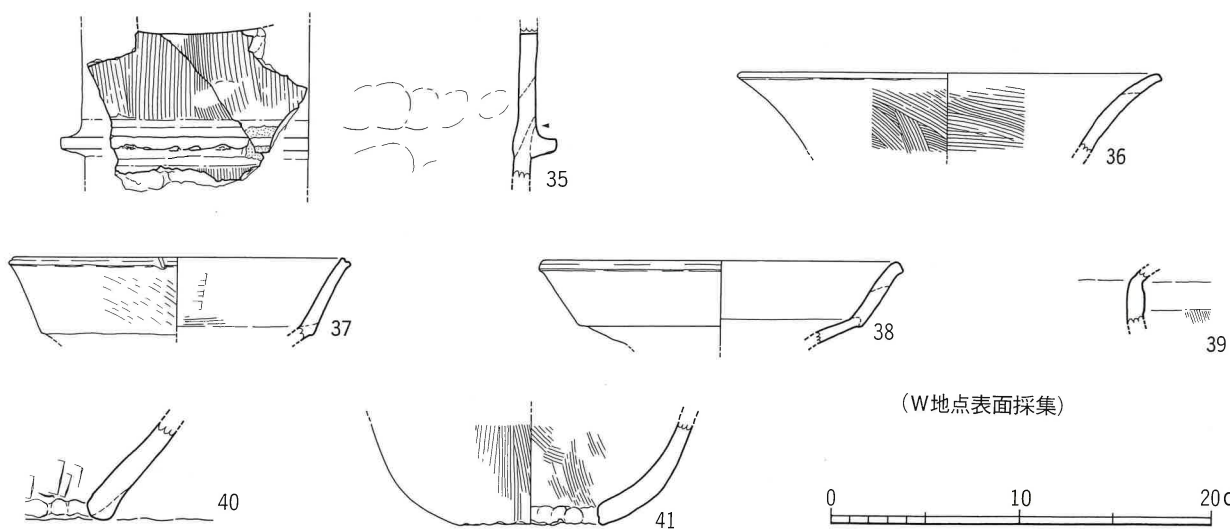
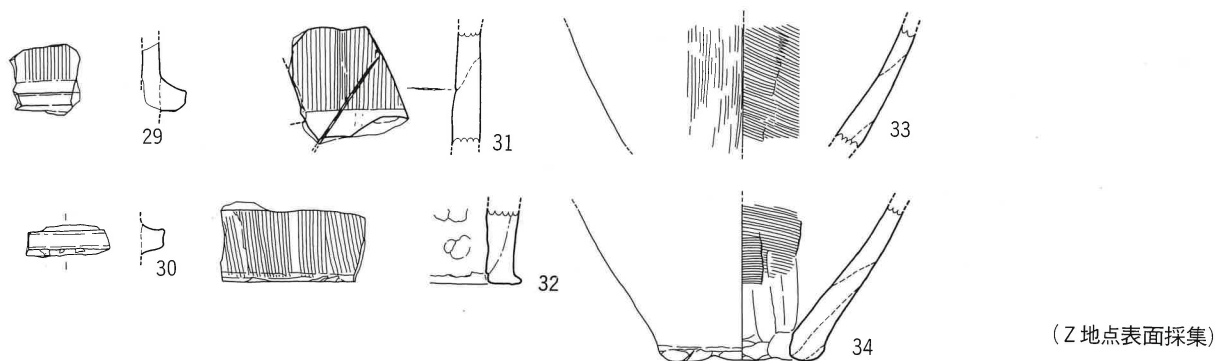
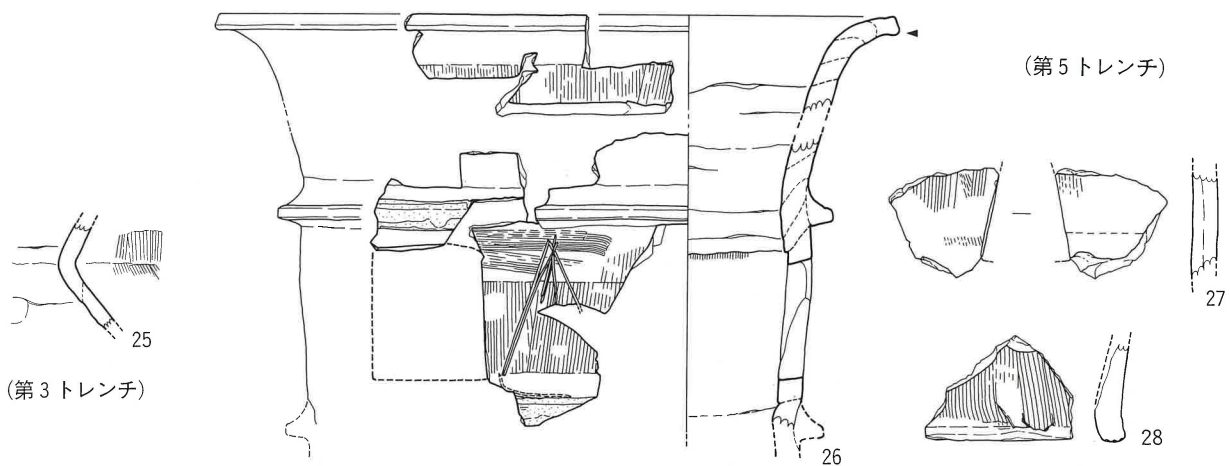
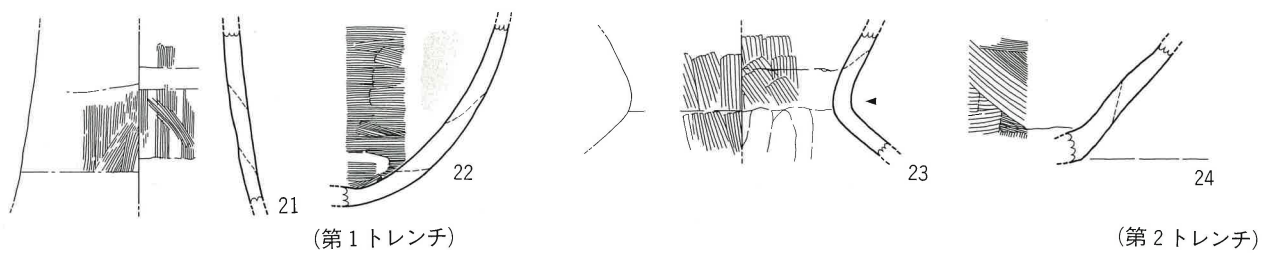
(7～9・『大分市埋蔵文化財調査年報』6

第42図・No.7～9出典)



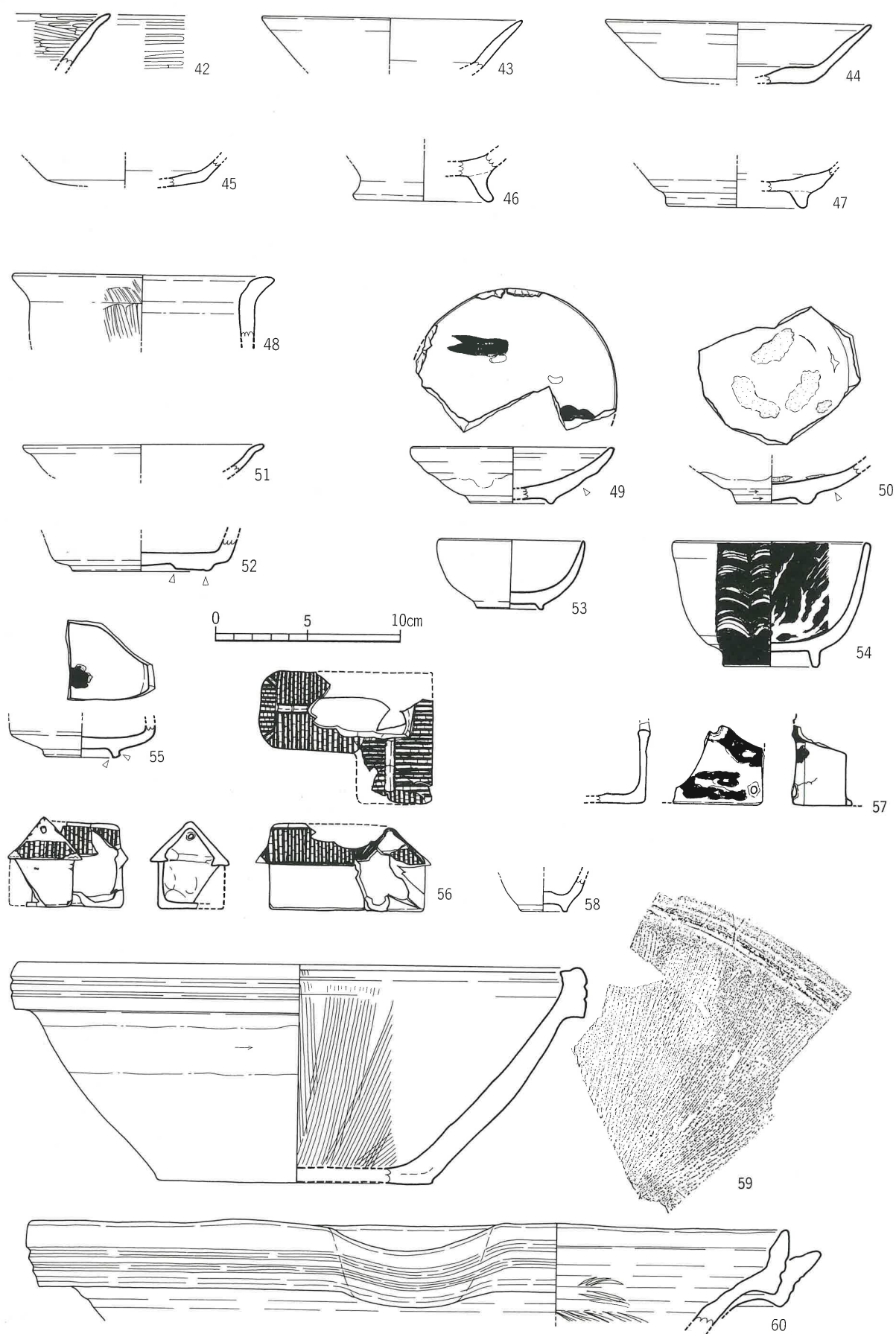
第17図 立野古墳出土埴輪1 (1/4) — (第1トレンチ) —





0 10 20 cm

第18図 立野古墳出土埴輪2 (1/4)



第19図 立野古墳出土古代土師器・近世陶磁器 (1/3)

第9表 立野古墳出土遺物観察表

| NO | 出土位置・層位        | 形式と分類        | 規格 ( ) つきは復元径・単位(cm) |         |     |                | 胎土     | 成形         | 調整        |                      | 焼成                 | 色  |          |      | 突起   | 透し穴  | 刻劃   | 赤色   | 備考      |                          |
|----|----------------|--------------|----------------------|---------|-----|----------------|--------|------------|-----------|----------------------|--------------------|----|----------|------|------|------|------|------|---------|--------------------------|
|    |                |              | 器口                   | 口径      | 角部径 | 胴部径            |        |            | 底径        | 調整                   |                    | 外面 | 内面       | 断面   |      |      |      |      |         |                          |
|    |                |              |                      |         |     |                |        |            |           | 調整                   |                    |    |          |      |      |      |      |      |         | 調整                       |
| 1  | 1トレンチⅣ層        | 円筒埴輪a類       | —                    | (35.8)  | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | 縦ハケ後ナデ             | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 黄灰色  | 高い台形 | —    | —    | 最上段2と同一 |                          |
| 2  | 1トレンチⅣ層        | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | (23.8-25.3)    | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | 縦ハケ後ナデ             | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 黄灰色  | 高い台形 | 方形   | —    | あり      | 胴部、1と同一                  |
| 3  | 1トレンチⅣ層        | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | (25.6)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | 縦ハケ(5-6本/1cm)・ナデ   | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 灰色   | 高い台形 | 方形   | —    | あり      | 胴部                       |
| 4  | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | (24.0)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | ナデ                 | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 黄灰色  | 高い台形 | 三角形  | 二重三角 | あり      | 胴部、突部接合後透し穴穿孔            |
| 5  | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ       | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | 斜めハケ(5-6本/1cm)・ナデ  | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 灰色   | 高い台形 | 三角形  | あり   | あり      | 胴部                       |
| 6  | 1トレンチⅣ層        | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ       | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | 縦ハケ                | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 灰色   | 高い台形 | —    | 格子？  | あり      | 胴部                       |
| 7  | 1トレンチⅣ層        | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ                | 縦ハケ・横ナデ            | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 灰色   | 高い台形 | 方形？  | 格子？  | あり      | 胴部                       |
| 8  | 1トレンチⅠ・Ⅲ・Ⅳ層    | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | (20.5)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | 指圧痕・ナデ             | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 黄灰色  | —    | —    | —    | あり      | 底部                       |
| 9  | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪a類(二重口縁) | —                    | (16.6)  | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 横ハケ後横ナデ              | 横ハケ(6本/1cm)→横ナデ    | 良好 | 明褐色      | —    | —    | —    | —    | —    | あり      | 口縁部                      |
| 10 | 1トレンチⅠ・Ⅲ層      | 変形埴輪a類(二重口縁) | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 横ナデ                  | 横ナデ                | 良好 | 明褐色      | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 口縁部                      |
| 11 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪a類(二重口縁) | —                    | —       | —   | (8.8)          | (17.6) | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ       | 横ナデ                  | 指ナデ・横ナデ            | 良好 | 明褐色      | 茶褐色  | —    | —    | —    | —    | —       | 胴部、胴部(右上半1/2片)           |
| 12 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪a類       | —                    | —       | —   | (11.7)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 斜めハケ(6本/1cm)後横ナデ     | 横ナデ・指圧痕(接合痕残す)     | 良好 | 明褐色      | 明茶褐色 | —    | —    | —    | —    | あり      | 胴部、成形時底部開放               |
| 13 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪a類       | —                    | —       | —   | (21.8)         | (8.8)  | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | ヘラナデ・縦ナデ(接合痕残す)      | 横ナデ                | 良好 | 明茶褐色     | 濃青灰色 | —    | —    | —    | —    | —       | 胴部、成形時底部開放               |
| 14 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪a類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 縦ナデ(接合痕残す)           | 横ナデ                | 良好 | 明茶褐色     | 濃青灰色 | —    | —    | —    | —    | —       | 底部(4×5cm片)、13と同一、成形時底部開放 |
| 15 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪a類       | —                    | —       | —   | (21.8-24.6)    | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 丁寧なナデ                | 指圧痕(接合痕残す)         | 良好 | 明褐色      | 明茶褐色 | —    | —    | —    | —    | あり      | 胴部、成形時底部開放               |
| 16 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ       | 斜めハケ後横ナデ             | 横ハケ(6本/1cm)斜めハケ    | 良好 | 明褐色      | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 胴部(7×5cm片)               |
| 17 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | ナデ                   | 指おさえ→斜めハケ目         | 良好 | 明茶褐色     | 濃青灰色 | —    | —    | —    | —    | —       | 底部(5×7cm片)、成形時底部開放       |
| 18 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | ナデ                   | 斜めハケ目(5本/1cm)指おさえ  | 良好 | 明茶褐色     | 濃青灰色 | —    | —    | —    | —    | —       | 底部、成形時底部開放               |
| 19 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | ナデ                   | 指おさえ→斜めハケ(7本/1cm)  | 良好 | 明褐色      | 濃青灰色 | —    | —    | —    | —    | —       | 底部(5×6cm片)、成形時底部開放       |
| 20 | 1トレンチⅣ層        | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | ナデ                   | 指ナデ→斜めハケ(6-9本/1cm) | 良好 | 淡褐色      | 濃青灰色 | —    | —    | —    | —    | —       | 底部(6×6cm片)、成形時底部開放       |
| 21 | 1トレンチⅠ・Ⅲ層下部・Ⅳ層 | 器台形埴輪        | —                    | —       | —   | 上(10.8)下(13.5) | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(外組接合) | 縦ハケ(6-7本/1cm)後横ナデ    | 縦ハケ(7本/1cm)→横ナデ    | 良好 | 明褐色      | 茶色   | 黒灰色  | —    | —    | —    | あり      | 胴部、頸部、頸部(1/5片)           |
| 22 | 1トレンチⅣ層        | 土師器a類        | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 横ナデ                  | 横ハケ(8本/1cm)        | 良好 | 淡褐色黒灰色   | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 内面と外面に赤色顔料付着             |
| 23 | 2トレンチ21・22層    | 変形埴輪a類(単口縁)  | —                    | —       | —   | (23.1)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 縦ハケ(6本/1cm)          | 横ハケ(6本/1cm)指ナデ     | 良好 | 淡明褐色濃青褐色 | 濃青褐色 | 濃青褐色 | 黒灰色  | —    | —    | —       | 胴部(1/5片)                 |
| 24 | 2トレンチⅢ層        | 変形埴輪？        | —                    | —       | —   | —              | (12.0) | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(外組接合) | ヘラナデ                 | 斜めハケ(4-9本/1cm)     | 良好 | 明褐色      | —    | 青灰色  | —    | —    | —    | —       | 底部？                      |
| 25 | 3トレンチⅣ層        | 変形埴輪a類(単口縁)  | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 縦・斜めハケ・ナデ            | 横ナデ・指圧痕            | 良好 | 淡赤褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 胴部                       |
| 26 | 5トレンチⅣ層        | 円筒埴輪b類       | —                    | (36.5)  | —   | (27.1)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)      | ナデ・縦ハケ後ナデ          | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 黄灰色  | 高い台形 | 方形   | 三角   | あり      | 口縁→胴部                    |
| 27 | 5トレンチⅣ層        | 円筒埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | —         | 1次縦ハケ(5本/1cm)        | 縦ハケ(5本/1cm)→ナデ     | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 灰色   | —    | 三角形？ | —    | あり      | 胴部                       |
| 28 | 5トレンチⅣ層        | 円筒埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | —         | 1次縦ハケ(5-6本/1cm)下部横ナデ | 不明                 | 良好 | 赤褐色      | 赤褐色  | 灰色   | —    | —    | —    | —       | 底部                       |
| 29 | Z地点表様          | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 横ナデ・2次縦ハケ(5本/1cm)    | ナデ・指圧痕             | 良好 | 淡褐色      | 濃青灰色 | 濃黒灰色 | 高い台形 | —    | —    | —       | 胴部                       |
| 30 | Z地点表様          | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 横ナデ・指圧痕残す            | —                  | 良好 | 淡褐色      | 濃青灰色 | 濃黒灰色 | —    | —    | —    | —       | 突部                       |
| 31 | Z地点表様          | 円筒埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(4-5本/1cm)横ナデ   | 指ナデ                | 良好 | 淡褐色      | —    | —    | 三角形  | あり   | —    | —       | 胴部                       |
| 32 | Z地点表様          | 円筒埴輪b類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 縦ハケ(5本/1cm)          | 指ナデ・指圧痕            | 良好 | 淡褐色      | 濃青灰色 | 濃黒灰色 | —    | —    | —    | —       | 底部                       |
| 33 | Z地点表様          | 変形埴輪a類       | —                    | —       | —   | 上(14.2)        | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 縦ハケ後ナデ               | 左上り斜めハケ(4本/1cm)    | 良好 | 明褐色      | 茶褐色  | —    | —    | —    | —    | —       | 底部                       |
| 34 | Z地点表様          | 変形埴輪a類       | —                    | —       | —   | 8.9            | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | ナデ                   | 指ナデ・横ハケ(7本/1cm)    | 良好 | 明褐色      | 茶褐色  | 濃青灰色 | 濃青灰色 | —    | —    | —       | 底部、成形時底部開放               |
| 35 | W地点表様          | 円筒埴輪a類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 1次縦ハケ(5-8本/1cm)      | ナデ・指圧痕             | 良好 | 淡褐色      | 濃青褐色 | 濃青褐色 | 高い台形 | 方形   | —    | —       | 胴部                       |
| 36 | W地点表様          | 変形埴輪a類(単口縁)  | —                    | (22.4)  | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 斜めハケ(7本/1cm)         | 横ハケ(5本/1cm)        | 良好 | 赤褐色      | 明褐色  | 暗褐色  | —    | —    | —    | あり      | 口縁部(1/8片)                |
| 37 | W地点表様          | 変形埴輪a類(単口縁)  | —                    | (18.0)  | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 斜めハケ(4本/1cm)→横ナデ     | 横ハケ(4本/1cm)→横ナデ    | 良好 | 明茶褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 口縁部(1/8片)                |
| 38 | W地点表様          | 変形埴輪a類(二重口縁) | —                    | (19.2)  | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 横ナデ                  | ナデ・不明              | 良好 | 淡褐色      | 濃褐色  | —    | —    | —    | —    | あり      | 口縁部(1/6片)                |
| 39 | W地点表様          | 変形埴輪b類(二重口縁) | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 縦ハケ→横ナデ              | ナデ                 | 良好 | 淡茶褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 胴部(3×3cm片)               |
| 40 | W地点表様          | 変形埴輪a類       | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | ナデ                   | ヘラナデ指圧痕            | 良好 | 明褐色      | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 底部(5×6cm片)、成形時底部開放       |
| 41 | W地点表様          | 変形埴輪b類       | —                    | —       | —   | (16.9)         | (7.5)  | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ(内組接合) | 縦ハケ(5-6本/1cm)・ナデ     | 斜めハケ(5本/1cm)       | 良好 | 淡褐色濃青褐色  | 明褐色  | 淡灰色  | —    | —    | —    | —       | 胴部(1/5片)・流成前穿孔？          |
| 42 | 1トレンチⅣ層上部      | 土師器a類(精製)    | —                    | —       | —   | —              | —      | 砂粒少ない精緻な粘土 | 横上げ       | 回転横ナデ→横ナデ            | 回転横ナデ              | 良好 | 明茶褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 口縁片                      |
| 43 | 1トレンチⅣ層上部      | 土師器a類(精製)    | —                    | —       | —   | (14.0)         | —      | 砂粒少ない精緻な粘土 | 横上げ       | 回転横ナデ→横ナデ            | 回転横ナデ              | 良好 | 明茶褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 口縁片、スズ付蓋・No.44と同一個体？     |
| 44 | 1トレンチⅠ・Ⅲ層・Ⅳ層   | 土師器a類(精製)    | 3.2                  | (14.2)  | —   | (8.0)          | —      | 砂粒少ない精緻な粘土 | 横上げ       | 回転横ナデ→横ナデ            | 回転横ナデ              | 良好 | 明茶褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 口縁片、No.43と同一個体？          |
| 45 | 3トレンチⅠ・Ⅳ層中層    | 土師器a類(精製)    | —                    | —       | —   | (8.4)          | —      | 砂粒少ない精緻な粘土 | 横上げ       | 回転横ナデ→横ナデ            | 回転横ナデ              | 良好 | 淡赤褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 底部片                      |
| 46 | 1トレンチⅣ層        | 土師器a類        | —                    | —       | —   | (7.2)          | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ       | 回転横ナデ→横ナデ            | 回転横ナデ              | 良好 | 赤褐色      | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 底部片                      |
| 47 | 1トレンチⅠ・Ⅲ層      | 土師器a類        | —                    | —       | —   | (7.2)          | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ       | 回転横ナデ→横ナデ            | 回転横ナデ              | 良好 | 明茶褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 底部片                      |
| 48 | 1トレンチⅣ層        | 土師器a類        | —                    | (13.8)  | —   | —              | —      | 砂粒多い大形粒有   | 横上げ       | 縦ハケ                  | 横ナデ→ナデ             | 良好 | 暗赤褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 口縁部                      |
| 49 | 2トレンチⅢ層        | 唐津陶器皿(胎土目)   | 3.0                  | 11.0    | —   | —              | 4.4    | 淡赤褐色       | 口口口成形     | 胴部半ばまで彫出し高台          | 輪がけ(灰釉)            | 良好 | 灰色       | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 1590～1610年               |
| 50 | 2トレンチⅢ層        | 唐津陶器皿(胎土目)   | —                    | —       | —   | —              | 4.0    | 淡赤褐色       | 口口口成形     | 胴部半ばまで彫出し高台          | 輪がけ(灰釉)            | 良好 | 淡赤褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 1610～1630年代              |
| 51 | 2トレンチⅢ層        | 陶器皿(灰釉)      | —                    | —       | —   | (12.8)         | —      | 砂粒がある灰色    | 口口口成形     | 透明輪がけ                | 透明輪がけ              | 良好 | 灰色       | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 17世紀初～前半                 |
| 52 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | —                    | —       | —   | —              | 7.4    | 灰白色        | 口口口成形     | 胎の目益台                | 無釉                 | 良好 | 淡青緑色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀後半                   |
| 53 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | 3.7                  | 7.8     | —   | —              | 3.6    | 白色         | 口口口成形     | 輪がけ(全面)→透明           | 輪がけ                | 良好 | 淡緑白色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀後半                   |
| 54 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | 6.7                  | (10.0)  | —   | —              | 5.0    | 暗茶色        | 口口口成形     | 輪がけ                  | 輪がけ                | 良好 | 暗茶褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 17世紀末～18世紀前半             |
| 55 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | —                    | —       | —   | (9.9)          | (3.8)  | 灰色         | 口口口成形     | 輪がけ                  | 輪がけ                | 不良 | 淡緑色      | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀後半                   |
| 56 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | 4.7                  | 9.5(長さ) | —   | 6.5            | —      | —          | 口口口成形     | 輪がけ                  | 輪がけ                | 良好 | 淡青白色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀？                    |
| 57 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | —                    | —       | —   | —              | —      | —          | 口口口成形     | 輪がけ                  | 輪がけ                | 良好 | 濃藍色      | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀代                    |
| 58 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | —                    | —       | —   | —              | 2.4    | 明灰色        | 口口口成形     | 輪がけ                  | 輪がけ                | 良好 | 淡青白色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀代                    |
| 59 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | 1.7                  | (30.9)  | —   | (14.9)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 口口口成形     | 口口口成形                | 口口口成形              | 良好 | 赤茶色      | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀代                    |
| 60 | 2トレンチⅢ層        | 胎前青磁器(灰釉)    | —                    | —       | —   | (40.8)         | —      | 砂粒多い大形粒有   | 口口口成形     | 口口口成形                | 口口口成形              | 良好 | 淡赤褐色     | —    | —    | —    | —    | —    | —       | 18世紀代                    |



## ②古代土師器（第19図42～48・第9表）

第1トレンチ周溝内流土上部より古代の土師器が出土した。42は精製胎土の坏でヨコヘラミガキで内外面を丁寧に調整する。43～46も精製胎土の坏だがミガキはなく、ヘラ切り未調整である。46・47は通常胎土の碗。48は小型の甕。いずれも8世紀後半から9世紀前半の製作で、立野古墳の埋没途中の周溝内に投棄されたと推定され、食器が中心の組成からみて、なんらかの儀礼等が古墳のそばでおこなわれたと考えられる。

## ③近世陶磁器（第19図49～60・第9表）

第2トレンチの近世土壌に投棄されたもので、その年代幅を検討することで現在の墳丘南側の宅地化の時期が推定できる。加藤勝政氏によれば氏の祖先は江戸時代に今の場所に住宅を営み、その位置は変わっていないという。実際加藤家の近世墓を拝見すると、元禄年間まで墓碑銘をさかのぼれ、少なくとも17世紀末にはこの地に居住していたことがわかる。近世陶磁器には唐津産胎土目陶器皿(49)や砂目陶器皿(50)があり、その製品は17世紀初頭までさかのぼる。その時期に使用していたとすれば、加藤家が住宅を構えたのは江戸時代の極く初めのころといえる。そして土壌の遺物に19世紀以後の製品を含まない点と、土壌が土取り穴であったとみられる点から、18世紀末頃に大規模な住宅と宅地の改修があったと推測される。（田中）

註1、野田雅之氏教示。

註2、弥生時代後期末～古墳時代前期前半の複合口縁壺Aが大分平野から大野川上流域に運ばれた事が指摘されているので、埴輪そのものの搬入の可能性も残されている。

小柳和宏・三辻利一「大野川流域における土器の移動」『おおいた考古』2 1989 大分県考古学会

註3、この点は井上義也氏の指摘による。

註4、野間1号墳の壺形埴輪は文献34で、小田富士雄氏によって紹介されている。その中には2類壺形埴輪の底部があるほか、頸部とされた破片がここでいう「器台形埴輪」にあたるのではなかろうか。この紹介を許された小田富士雄・賀川光夫両先生に謝意を表します。

## 13) 立野古墳のまとめ

### ①墳丘の設計・規格・施工（第20図）

測量と発掘の結果を集約して、立野古墳の築造過程を復元しよう。まず古墳の選地である（第4図）。比較的高い台地上に立地して北と西に展望がひらける。この立地は三重地区のほかの前方後円墳と共通し、大分県南部の古墳全体と同じである。高い山上ではないが台地のいちばん目立つところである。さらに台地上のどこに作られたかをみよう。第4図をみると台地北部にあたる。第7図の断面図にいた自然層のアカホヤの堆積高度をもとに微地形を復元すると、約142mの第2トレンチから143.7mのX地点にかけて旧地表は緩やかに上昇し、第3トレンチ「周堤」付近はX地点と同じ高さで推移する。またB-B'断面の左、後円部の東側は次第に高くなり、146mに達している。築造前この付近は、南から緩やかに上昇し、北側の深い谷に達して急に落ち、谷の手前で東南東から西北西に低くなる尾根状地形であったと復元できる。後円部をその尾根上に置き、周溝を掘って両側の尾根を切断したことになる。

また前方部の向きはどのように決められたのだろうか。前方部の方向(第20図A-D)は方位角237度で、おおよそ西南西を向く。この点について三重町所在の5基の前方後円墳の前方部の向きが西から南西方向にほぼ一致するという興味深い指摘が諸岡郁氏によってなされ、主軸方向が意図的に統一されているのではないかと推定されている(文86)。たしかに台地の広さには十分な余裕がありどの方位でも設計可能な状況のなかで、この向きをとることは、立野古墳と三重川流域の前方後円墳群との強い結びつきを裏付けている(註1)。

実際の設計では、墳丘が完全な形に築造できるように墳端（第20図A点）を急傾斜地ぎりぎりにしており、そこを起点に墳丘の設計をしたと推定される。周溝は当初から全周しない設計であることは明白である。A点に近いY点で墳端の葺石根石が露出しているから墳丘平面は墳端ラインで設計されたと推定される。そこで各トレンチの根石端を墳端ラインとして作図したのが第20図である。第1・3トレンチの墳端とA点の3点から中心点Bを導き、後円部を正円に復元するとよく納まる。ただし第4トレンチでは、復元ラインはテラス上を通過する。下段と上段の根石をそれぞれ通過するようにA-I間に二重にラインを引いた。テラスを付けたためにやや張り出すと推定される。また前方部はB点から

陸橋中央のD点を結ぶラインを軸に第1トレンチのくびれから左右対称に柄鏡状に折り返すとほぼ納まる。また前方部頂もほぼ平坦で、立野古墳は典型的な柄鏡型の平面規格といえる。また前方部の陸橋は当初の設計にはなかったと考えられる。

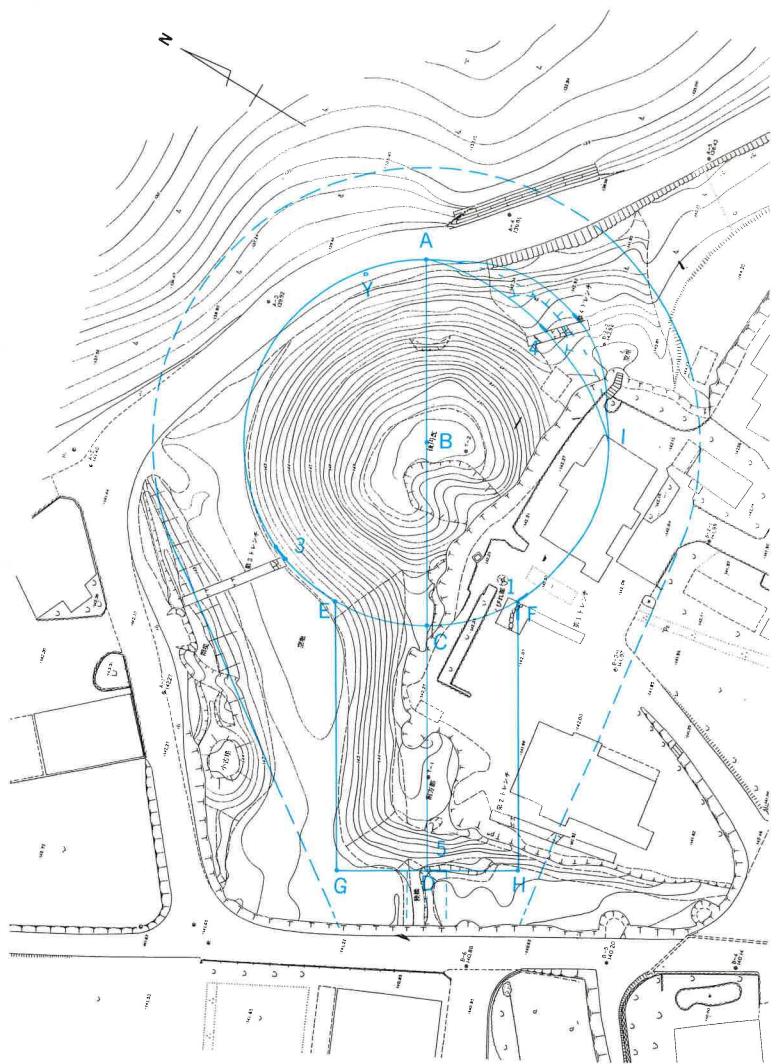
この復元案を基にすると立野古墳の平面規格は墳長約65.0m、後円径約38.5m、前方長約26.5m、くびれ幅・前方幅ともに約20.0mとなる。また後円高約6.5m、前方高3.5mと推定される。基底線が水平なので前方頂と後円頂の比高差は約3mである。後円頂径はやや崩れてはつきりしないが10～12mとなろう。また「周堤」の上場からみて後円部の周溝幅は約10mで、周溝の平面形は前方部に向かってせばまるかなり極端な馬蹄形と推定される。墳長規模はB類である。

さてこの規格の施工状態を復元すると次の特徴がある。①旧地形は両端で2m程度の差をもつ緩斜面に作られているにもかかわらず墳端高からみた基底線はほぼ水平で、厳格に施工されている。②墳丘盛土は周溝掘削土から取得されている。そのため周溝の深さは第3トレンチのように少なくとも2m以上掘り下げている。すなわち後円部では高さ6.5mのうち下2mは削りだし、前方部で高さ3.5mのうち下1mは削りだしていることになり、盛土の墳丘体積にしめる割合は半分以下であると推定され、周溝の規格もその土量をまかなえる規模に設計されたと推定される。ところで施工の実際はかなり柔軟で、第3トレンチの底部のように一旦かなり深く掘って最終整形時にうめ戻して整えている。盛土に適したE層土を取得するためと推定される。③「周堤」には盛土はなく、周堤土塁は本来なかったと考えられる。④周溝は、第3トレンチでは外側で2段になっている。下段は馬蹄形で前方部まで全周していたと推定されるが、上段は「周堤」がきれる地点（小古墳のあたり）から南西方向にはないと推定される。次に葦石だが、根石には大形凝灰岩角礫を使用し、ほかは川原石を利用する。前者が山地から後者は大野川から採集したと推定される。ちなみに根石に大形角礫を使うのは、県内では今のところ小熊山古墳のみである。段築は測量では認められなかったが、狭い段がつく可能性は残されている。主体部はまったく不明だが、のちに前方部に陸橋が付設されていることから、追葬あるいは複数主体の可能性はある。

## ②築造時期

立野古墳の築造時期を推定する手がかりは、墳丘規格・埴輪の二点である。①墳丘規格は典型的な柄鏡型で、周溝は前方部に向かってせばまる馬蹄形である。この2点は大部分の前方後円墳においては古墳時代前期後半に限られる特徴である(文献120)。②円筒埴輪は、口縁部が大きく外反し円形透穴がない点などからみて川西編年(註2)の第1期に近い。しかし最上段がかなり長い点は新しい特徴である。壺形埴輪では樹立用のa類が多い点の特徴である。a類は前期後葉～末に急速に発達する形式ある。以上の点からひとまず集成編年(註3)4期の古い時期、和田編年(註4)の4期と推定しておきたい。しかし葦石の点で小熊山古墳と共通性があり、墳丘の築造は3期にさかのぼる可能性がある。その場合はいわゆる寿陵とみなして、埴輪を使った埋葬儀礼は4期におこなわれたという想定も可能である。つまり立野古墳は古墳時代前期後葉から末の築造と推定される。

## ③埴輪の形式組成から埴輪儀礼の様式へ (第21図・22図)



第20図 立野古墳の墳丘規格想定案 (1/800)



立野古墳の埴輪はどのように配置されていたのだろうか。調査では樹立した埴輪は検出されず、少なくとも墳端にめぐらせることはなかったと考えてよい。つまりどの埴輪も墳丘上に配置されていたと推定される。そこで各トレンチ毎の埴輪形式の出土状態をまとめたのが第21図である。近世以後の攪乱が激しい第2トレンチを省いて考えると、興味深い配置を復元できる。

すなわち壺形埴輪と「器台形埴輪」は後円部周囲のみ検出され、円筒埴輪a類も後円部周辺に偏る。土師器壺も後円部上で使われたと考えられる。一方円筒埴輪b類は後円部周辺で少数検出されたが、大部分は前方部前端の第5トレンチに集中し、そこでは他の形式の埴輪をみない。この傾向は埴輪の形式によって配置場所が異なることを意味する。

さらに個体数の傾向を加味すると次のように想定復元できる。個体数の多い壺形埴輪a類が後円部頂周囲に樹立配列され、その中に少数の壺形埴輪b類が供献され、一部は「器台形埴輪」の上に乘せられる。円筒埴輪の個体数は少なく、等間隔の配列に不可欠の朝顔形円筒埴輪が無いから、円筒埴輪a類と少数のb類もその中に供献されていたとみられる。その際円筒埴輪は規格からみて壺形埴輪をのせる器台として使用されず、あくまでひとつの供献品である。一方前方部頂の端部近くには円筒埴輪b類のみが、少数供献されていたと推定される。

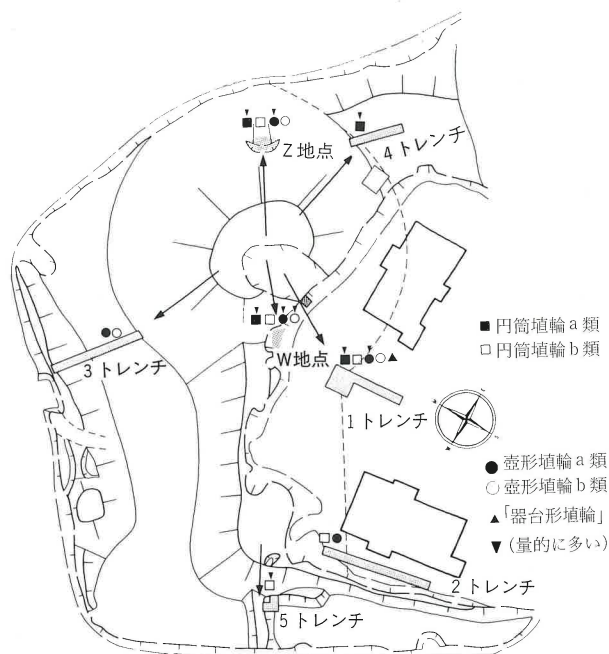
以上のように埴輪形式の組成に基づいて埴輪の使用法を復元すると、立野古墳においては壺形埴輪が埋葬儀礼の主役で、円筒埴輪は脇役にあたる事が明瞭である。これを埴輪儀礼の様式ととらえると壺形埴輪中心の儀礼に円筒埴輪が一定の役割をはたした様式と評価できる。同一の様式として小熊山古墳、福岡県の老司古墳があげられる。また墳長規模が小さなC類の前方後円墳では、円筒埴輪の供献がなく壺形埴輪主体で埋葬儀礼がおこなわれる。その好例が小牧山6号墳である（第22図）。墳長45mの柄鏡型的前方後円墳で、立野古墳とほぼ同時期の築造である。ほかに野間1号墳も後者の例である。首長の階層差が墳長規模と埴輪儀礼の違いにあらわれていると評価できる。

註1、ちなみに大分県南部の前方後円墳で三重地区と同じ向きに前方部を向ける例は、神崎築山古墳・野間1・3号墳に限られる。

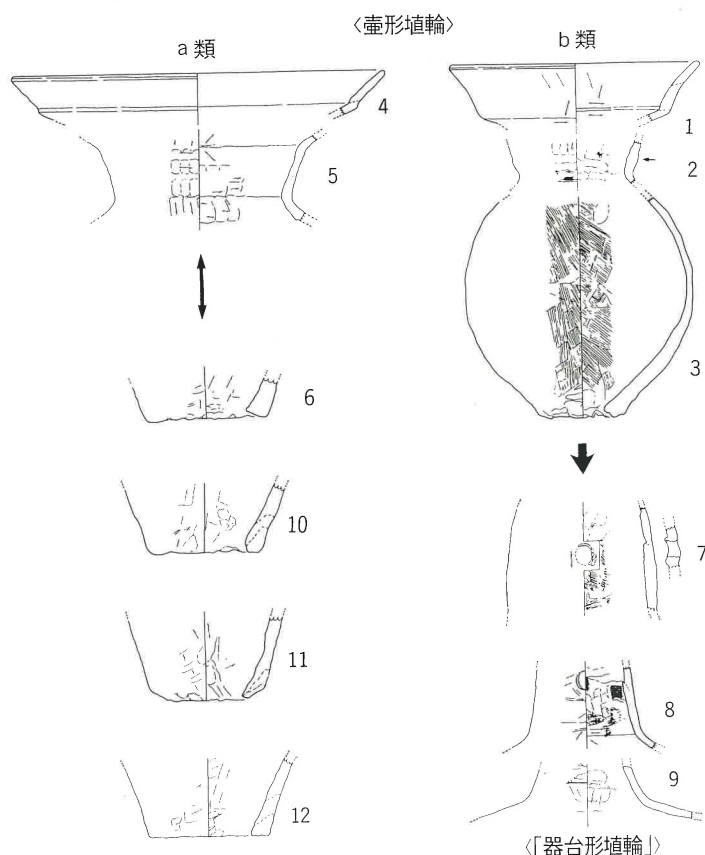
註2、川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64-2 1978 日本考古学会

註3、『前方後円墳集成』1991~94 山川出版社

註4、和田晴吾「古墳時代の時代区分をめぐって」『考古学研究』34-2 1987 考古学研究会



第21図 立野古墳の各調査区における埴輪の出土状況



第22図 大分市小牧山6号墳出土埴輪の形式組成 (1/8)  
 (『大分市埋蔵文化財調査年報』6 第42図を編集)

(田中)



### 第3節 小坂大塚古墳

小坂大塚古墳は、大分県大野郡三重町の標高約150 mの阿蘇溶結凝灰岩の堆積による独立した台地上に位置し、町内に所在する道ノ上古墳をはじめとした他の前方後円墳とは異なり、三重盆地からやや離れた大野川の支流三重川の下流域方面に所在する。古墳は主軸をMN—68° Eにとる前方後円墳である。古墳の全長は現状で約43 mで、墳丘の規模としては、町内に所在する6基の前方後円墳のうち秋葉鬼塚古墳（全長約49 m）に次いで5番目の規模となる。

前方墳端部西側が崖で欠落しており、墳裾の輪郭は一部はつきりとしなない。また後円部の墳頂には近世の庚申塔が造立されてはいるが、保存状態は良好と言える。

後円部の規模は墳丘主軸方向の径が約27 m、これに直交する径が約25.6 mでほぼ真円形の平面形態を呈していると言える。

前方部は、前述したように欠落しているため実測図から復元すると、長さが約16 m、くびれ部の幅が約10 m、前方部先端の幅も約10 mである。

次に古墳の各部の比高をみると、主軸方向の後円部墳端から後円部墳頂までが約3.2 m、これと直行する方向で、後円部南東側墳端から後円部墳頂までは約3.1 m、後円部北西側墳端から後円部墳頂までは約4.6 mを測り、南東側墳端からと北西側墳端からとでは約1.5 mの差異がみられる。

また、前方部北西側墳端から前方部墳頂までが約1.8 m、前方部南東側墳端から前方部墳頂までが約0.8 mである。南東側と北西側からでは約1 mの差異がある。このように後円部、前方部ともに南東側墳端からと北西側墳端からとでは、その墳頂までの比高に差異がみられる。これは墳丘全体の北西側と南東側の墳端の高さの差に起因するものである。そして、後円部墳頂から前方部墳頂まででは比高差が約3 mある。

以上、後円部と前方部の規模と比高についてみてきたが、これからすると、古墳の築成に関しては自然地形による影響を少なからず受けている。それは前方部、後円部共に北西側が東南側に比べ、低くなっていることから読み取れる。つまり墳丘は緩やかな斜面を取り込み築成されており、北西側からの側面観を意識し、墳丘をより大きく見せようとしている。またその形態についてみると、前方部が細長く延び、墳端部に向かうまでほぼ同じ幅で推移しており、墳形は柄鏡型といってよい平面形態になっている。加えて後円部に比較して前方部は随分と低く、前方部の高さは後円部の高さに対して約3分の1程度とその比高差は大きい。これは、すでに田中裕介氏が小坂大塚古墳をA1型墳丘という類型に分類している<sup>(1)</sup>ことを確証付けるものである。

墳丘上には拳大～人頭大の円礫が若干見受けられ、葺石であるとおもわれる（第24図A点、写真8）。埴輪等については現在のところ見つかってはいない。

主体部についても発掘調査が行われてはいないため、その施設は明らかではない。

また後円部の北東側の主軸線上に隣接して、径約6 m、高さ約1 m程度の塚状の盛土があるが、培塚なのか古墳に付属する何らかの施設なのかその詳細については明らかではない。

以上小坂大塚古墳について述べてきたが、その結果から次のような特徴が見出される。小坂大塚古墳は町内に所在する他の古墳と同様に、前方部を西側にとり、その主軸をほぼ東西の方向に統一し築成されており、墳形は他の4基（竜ヶ鼻古墳については崩壊が著しいため明らかではない。）の前方後円墳とともに柄鏡型<sup>(2)</sup>という墳形をしており、またいずれの古墳に関しても標高約150 m程の台地上に築成されている。このことから小坂大塚古墳をはじめとしたこの地域の前方後円墳には、築成に関する何らかの規制が働いていた可能性が考えられる。加えて立地条件からみると他の古墳とは異なり、盆地の周辺ではなくやや離れた場所に所在しており、その周辺の景観と生産地の少なさにはこの古墳独自の特異性が見受けられる。このことが三重地域の首長系譜とどのように関連するのかは定かではないが、何らかの重要性を帯びてこの地に築成されたと言えるのではないだろうか。

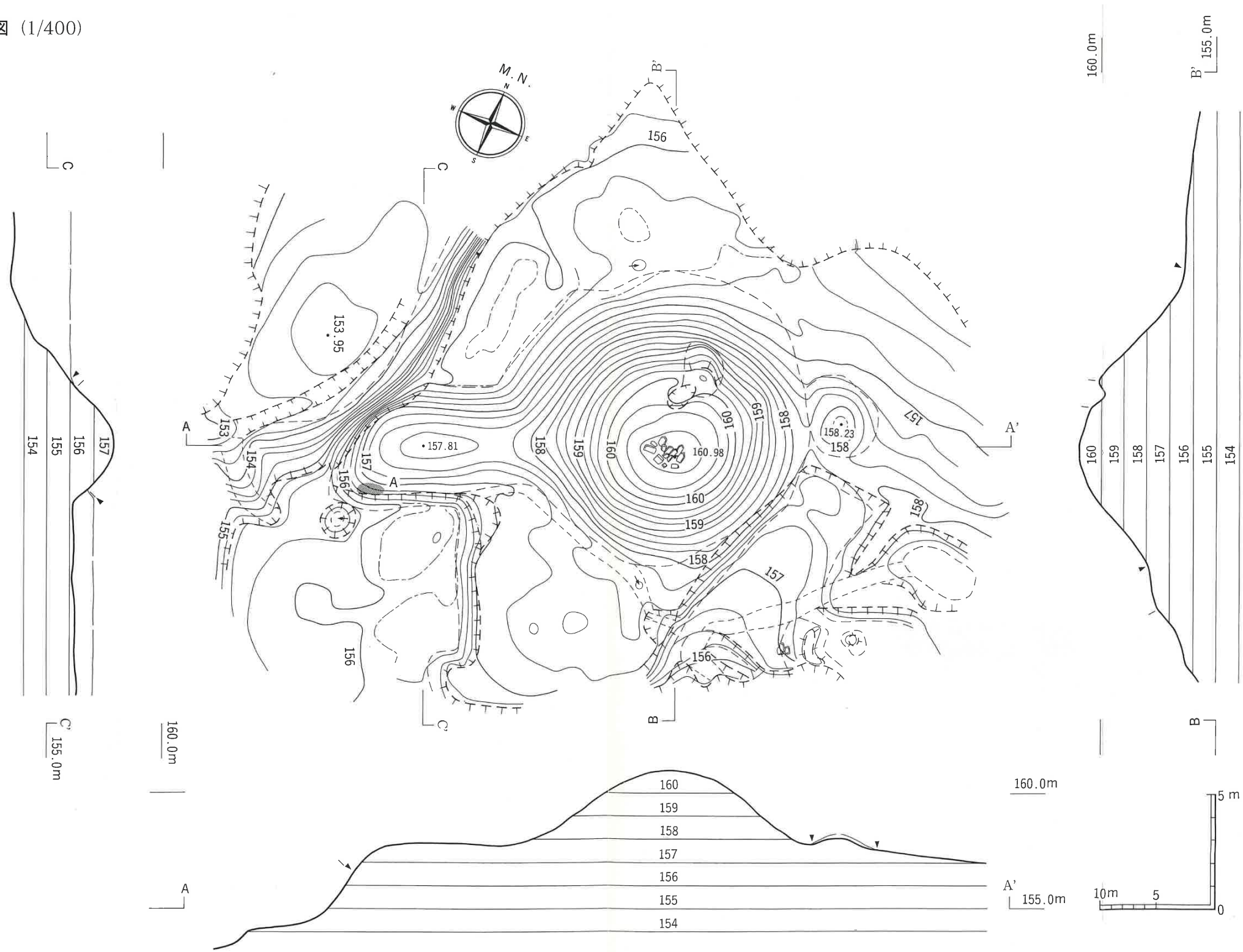
（橋本）





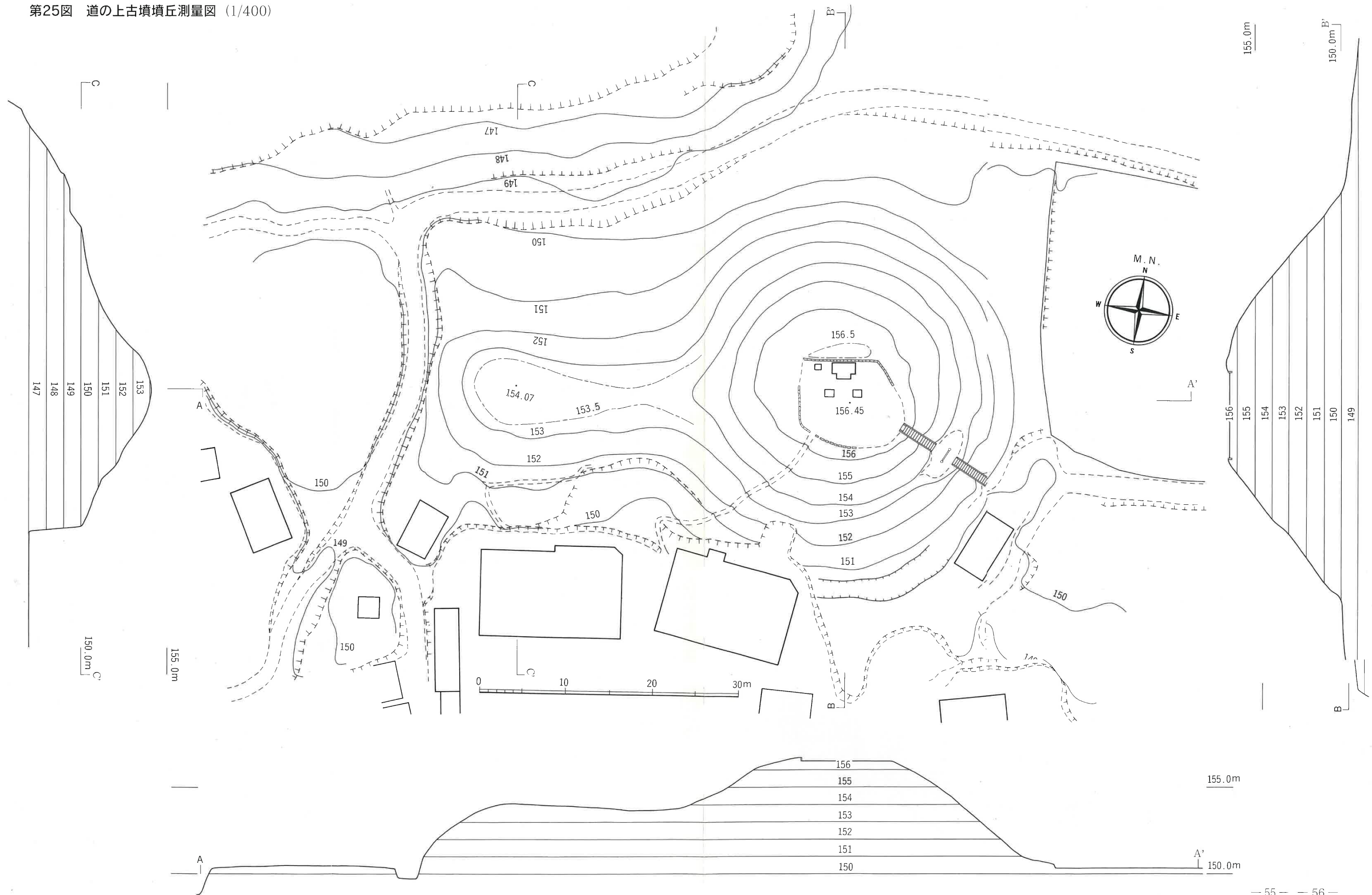


第24図 小坂大塚古墳墳丘測量図 (1/400)





第25図 道の上古墳墳丘測量図 (1/400)



## 第4節 道の上古墳

### 1) 測量調査の経緯

大野郡三重町大字赤嶺字下赤嶺に所在する道ノ上古墳は、県下有数の規模をもつ前方後円墳でありながら、当時その存在がほとんど知られていなかった。そうした折、昭和46年6月、三重町教育委員会から同町竜ヶ鼻地区の横穴墓群の調査の依頼が県教育委員会にあり、入江英親氏（大分県文化財専門委員・故人）、同文化室の後藤宗俊主任（当時）、清水宗昭臨時職員（当時）が現地に出向き、併せて道ノ上古墳の墳丘外形の確認を行った。この時、一見して墳形整美、保存良好な予想を越える規模の前方後円墳であることを確認し、早速墳丘の測量調査を実施することにした。

同古墳は、大野川中流域の交通の要衝である三重町の中心部の小盆地を臨む赤嶺台地の舌状の先端部に立地しており、首長墳の立地としてふさわしい位置に築かれている。測量調査は、前述の3名に加え、別府大学嘱託の岩尾松美氏（故人）の応援を得て平板測量を行った。実測の等高線は、1mと間隔が大きいものであったが、限られた日数の中での調査であり止むをえないものであった。それでも墳丘の特徴を把握するには十分であった。その結果、後円部に比して前方部が小さく古式の前方後円墳と直感された。全長は71mに達するもので、大野川上中流域（旧大野・直入郡域）最大の首長墳であることが確認された。後円部頂部には、石造古塔類が祀られているものの大きな改変はなく、埋葬主体部は原状のままである可能性が高い。

道ノ上古墳の大型の前方後円墳としての確認は、その後、同町内の小坂大塚古墳、重政古墳、秋葉鬼塚古墳、竜ヶ鼻古墳、立野古墳の再評価・発見の端緒となったもので、同地域のみならず大分県下の古墳時代首長墳の調査・研究の一つの画期となる意義深いものであった。（清水）

### 2) 観察所見

1971年の測量図から新たに断面図を作成した(第25図)。当時の所見は、墳長71m、後円径42m、前方長33m、前方幅25～30m、後円高6.5m、前方高4.5mで、前方部はやや開き、人頭大の川原石の葺石があると報告されている(文献75)。今回現地踏査をおこなって、やや修正すべき点がある。台地上から飛び出す尾根上に立地し前方部はほぼ西を向く。前方部の形態は前端に向かってやや開くと同時に前方部頂も緩やかに高くなる(註1)。後円径は標高150mよりやや下で48m、墳長は前方部前端が道路で削られているので少なくとも73m以上となる。大型古墳のA3類にあたる。前方幅も30m近くなると推定される。前方部の形態は一見中期古墳的だが、後円部の大きさに対して前方部がかなり小さく、前期前方後円墳の規格である。三重地区で唯一のA類大型古墳であるために墳丘規格が柄鏡型でないと推定される。後円部の周囲で周溝らしい地形を認められるが、前方部にはない。153m付近にテラスがあり段築の存在が予想される。葺石はあるが、埴輪は未だ採集されていない。(田中)

註1、一緒に踏査した指導委員の柳沢一男先生の指摘による。

#### 立野古墳発見の経緯

大野郡三重町上田原地区は、大野川中流南岸の河岸段丘が発達するところであり、刳拔式石棺で知られる鉢ノ窪石棺群が所在するところである。昭和63年11月、同町上田原在住の都良男氏が同地を別件で訪れた県文化課埋蔵文化財第1係長清水宗昭に、古墳と思われる大きな塚があるので調べてほしいとの依頼があり、探査したところ紛れもなく前方後円墳であることを確認した。古墳名は都氏と相談し、小字名をとり立野古墳とした。

立野古墳の位置は、鉢ノ窪石棺群の東に接する山麓部にあり、里道と民家に囲まれた林地の中に所在する。古墳前方部の南側半分は、民家の造成によって大きく削平されているものの、北側は周濠を含め保存状態が良好である。しかも前方部西端には陸橋と思しき施設が見られた。墳丘本体の全長は略測で60mに達する大型のもので、墳形は前方部低平かつ狭長な前期古墳と推定される特徴が看取された。後円部の中心付近には大きな凹地があり、主体部が盗掘を受けている可能性があったものの、前方後円墳が多く所在する三重町にあっては、道ノ上古墳に次ぐ規模の首長墳であることは明らかであった。そして何よりも立野古墳の立地が、同町内の他の5基の前方後円墳が三重町中心部の小盆地を囲む位置に造営されているのに対し、大野川本流を望む離れた位置に孤立していることである。ともあれ、その位置と規模からして、同古墳の発見は、旧大野郡域の首長墳の動向を論じる上で大きなカギとなるものであった。（清水）



## 第5節 重政古墳

大野郡三重町大字内田字重政の、通称重政原と呼ばれる台地上に所在する。そこは三重盆地中心部を東方向より見おろす位置で、台地から西方向に派生する丘陵上にかけて墳丘を築造している。周辺は現在中学校のグラウンド施設により造成されており後円部の一部にも削平が及んでいるがおおむね良好に保存されている。標高は約158 mで、台地下とは25 mの比高差がある。

後円部の北側から東側にかけて削平を受けているものの規模は推定できる。現状で全長約52 mを計るが、削平部分を考慮して本来は54 mまで達するものと思われる。後円部径は30 m、墳頂平坦部は径約10 m、高さは約4 mで、墳頂に金比羅祠、斜面に鳥居が設置されている。前方部は長さ27 m、高さ約2 mで後円部との比高差は2 mである。

前方部の幅はくびれ部から先端に向かうにつれすばまっているが、これは南接している山道による削平と考えられる。そのため原形は、幅16 mでほぼ平行に延びる柄鏡状の平面観であったと思われる。また前方部の墳頂平坦部は水平で、方位はN—70°—Wでほぼ東西に主軸をとるが、下り勾配の痩せ尾根上という立地地形による制約に左右されていると考えられる。墳丘上に礫がみられ葦石の存在が確認できるが、段築は確認できない。周溝について現状では確認できないが、平成7年度に三重町教育委員会によってトレンチ調査を行い、周溝状の掘込みを検出したが攪乱が著しく全容は明確でない。周溝はたとえ存在しても地形的制約から後円部の周囲のみ敷設されたものと考えられる。

遺物について、明治10年頃に盗掘されて管玉・鏡等が出土したと伝承されているがその所在は不明である。また主体部施設については伝承はなく、手がかりもみられない。埴輪は壺形埴輪片が出土しており、墳丘上に樹立されていたと推定される。壺形埴輪の底部が2点あり、4は昭和37年に後円部北側の削平時の際に採集されたもので底部を形成して焼成前に穿孔されている。3は出土経緯は不明であるが、注書により昭和41年に本古墳より出土したものと考えられ、4とは同様の底部になると思われる。また平成7年度のトレンチ調査で、壺形埴輪と思われる口縁部及び頸部片(1・2)等が出土している。しかし点数が少なくその他の形態の埴輪は今のところ未確認である。

(諸岡)

文献 木莊昇・前田多三郎「三重郷の史跡」『大分県史跡名勝天然記念物調査報告』第三輯 1924

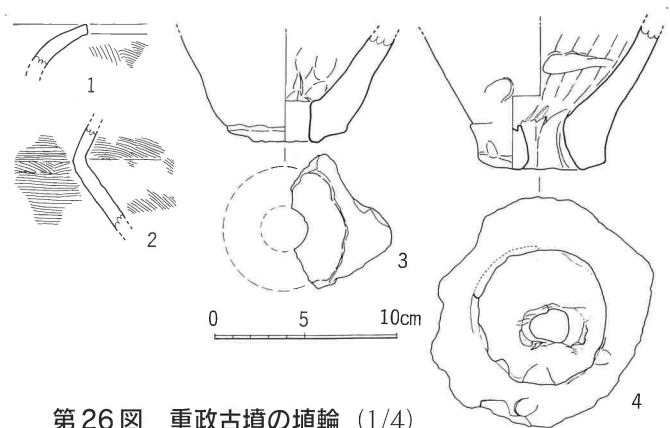
玉永光洋「古墳時代」『三重町誌総集編』1987

久知良区誌編集委員会『三重町久知良区誌ふるさとくじら』1993

諸岡 郁「三重町の前円後円墳」『おおいた考古第3集』1990

諸岡 郁「大分県三重町重政古墳の測量調査と採集埴輪について」『おおいた考古第7集』1995

三重町教育委員会『三重地区遺跡群発掘調査概報II』1997



第26図 重政古墳の埴輪 (1/4)



写真10 重政古墳 近景写真



写真11 重政古墳 第1トレンチ写真





第 27 図 重政古墳墳丘測量図 (1/400)

## 第6節 秋葉鬼塚古墳

大野郡三重町大字秋葉字鬼塚及び木ノ下に所在する。三重川の形成する沖積平野である三重盆地中心部を南方向から見下ろす舌状台地上にあり、後円部は台地斜面に接続する先端部に位置する。標高は152 mで台地下との比高差は約30 mである。現在鬱蒼とした山林内にあり、集落地名である「鬼塚」の由来ともいわれている。

前方部南側から後円部南西、東側にかけて削平が著しく、そこはかつて畑地だったところから開墾により失われたと考えられ、わずかに前方後円墳としての形態が確認できる程度しか残存していない。現状で残長42 mが計れるが、墳長は本来は49～50 m近くまで達すると推定される。前方部長約21 m、後円部径約28 mで、前方部幅はくびれ部で11 m、先端部分で15 mに広がる形態が推定される。前方部はN—82°—Wの方向で、ほぼ東西に主軸をとっている。後円部の高さは北側で3 m、南側で2 mを計り、南から北へ下る傾斜地に築かれていることがわかる。

後円部墳頂は径15 m程もの平坦部があり、側面観は前方後円墳としては偏平な形態であることがいえる。前方部との比高差は1 m弱で、見た目にもそれほど差は感じられない。墳丘の残りの良い北側で観察した限り、前方部については墳端は明瞭に確認できるが、後円部については墳丘斜面が台地斜面へとそのまま続くためか墳端はやや不明瞭でしかも円形ラインを呈してない。段築について、後円部のみに墳丘斜面角度の変化部分が観察できるものの、明確でないため断定はできない。周溝についても現状では存在は認められない。墳丘の至るところで拳大程度の礫がみられるため、葺石の存在は確認できる。後円部北側など一部では集中して見られるが、葺石として敷設されていたのが崩れ落ちたものと思われる。

埴輪等の遺物については確認されておらず、今のところ時期を明確にする手がかりはない。伝承によると盗掘を受けた可能性が指摘されるものの詳細は明らかでない。墳頂部に凝灰岩製の石材があるが、主体部施設に関する石材ではなく後世の石塔類の崩壊したものと思われる。

(諸岡)

文献 玉永光洋 「古墳時代」『三重町誌総集編』1987、三重町

諸岡 郁 「三重町の前方後円墳」『おおいた考古第3集』1990、大分県考古学会

大分県教育委員会 『大分県埋蔵文化財年報3』1995

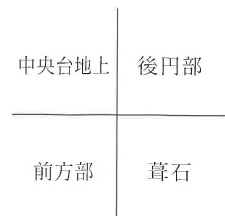
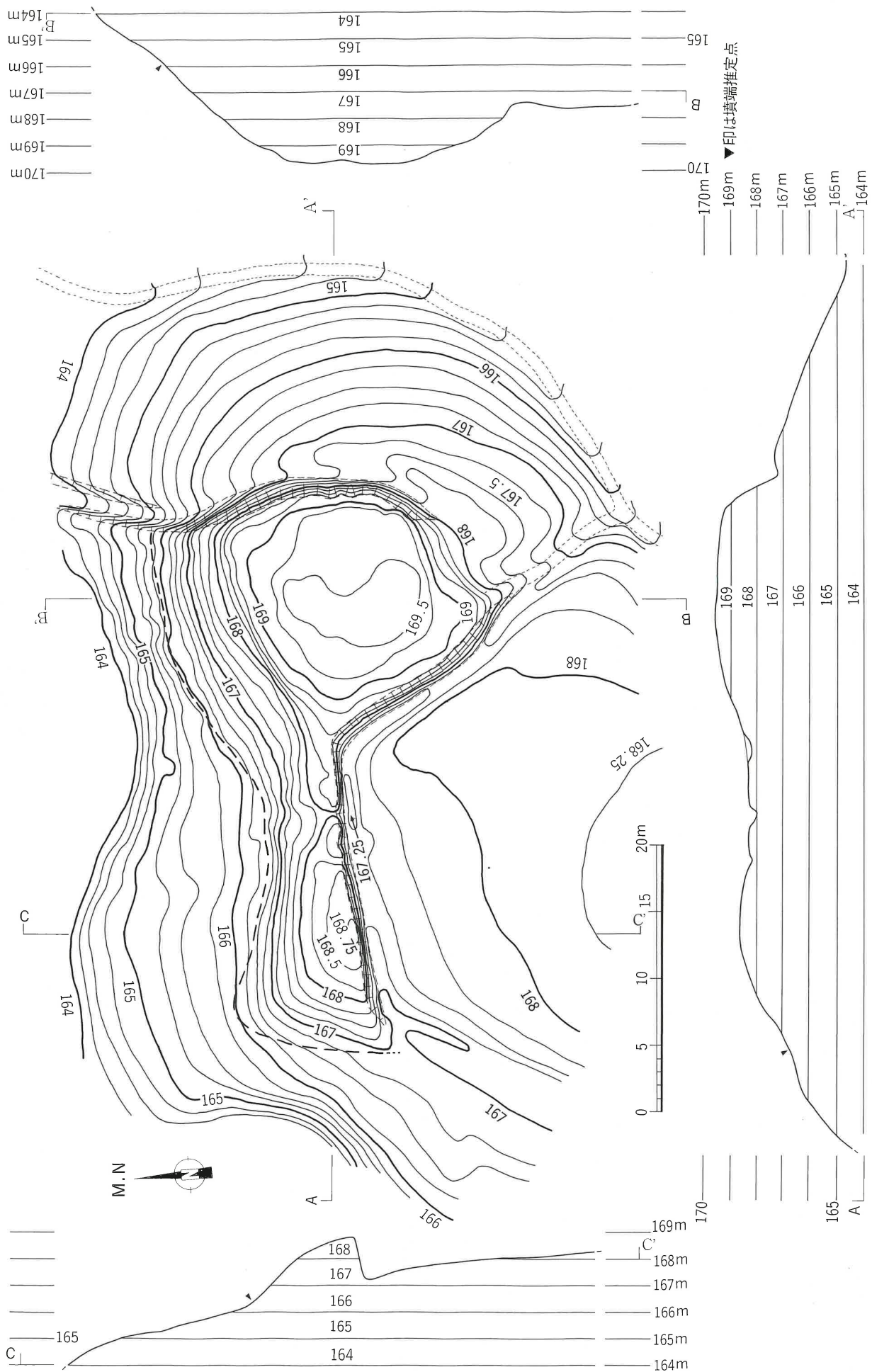


写真12 秋葉鬼塚古墳



第 28 図 秋葉鬼塚古墳測量図 (1/400)



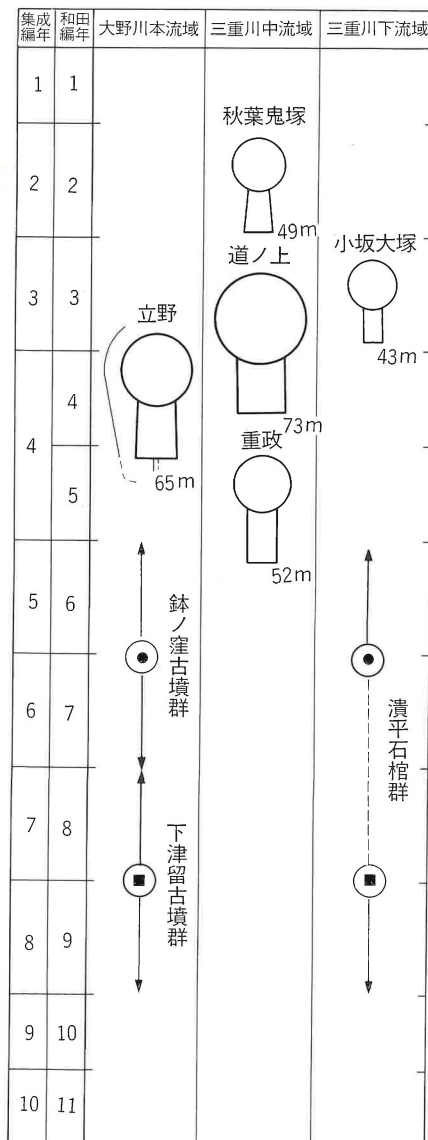
## 第7節 まとめ ―三重地区における前方後円墳の変遷とその性格― (第29・30図)

前方後円墳の規模では道の上古墳が最大で73mを越え、大型古墳の規模A3類で県内最大規模の前方後円墳のひとつである(2章3節)。それに次いで立野古墳が墳長65mで規模B類である。残る3古墳は重政が52m、秋葉鬼塚が49m、小坂大塚が43mでいずれも規模C類である。三重地区の前方後円墳の中で規模の点で道の上古墳と立野古墳が傑出していることがわかる。

墳丘の規格でも道の上古墳がやはり特異で前方部は小型ながら広がり、高くなる。立野・重政・小坂大塚は、前方部の形態はそれぞれ異なるが側面が平行で前方部頂が水平な柄鏡型である。これに対し秋葉鬼塚古墳は前方部が小さく前方部頂もほぼ水平なのだが、前方部前端がかなり開く。墳端推定ラインを見ると、バチ形かあるいはくびれ部が不明瞭なままバチ形にひらく福岡県那珂八幡古墳の類型に近いと考えられる。いずれにしても最古式の墳形になると推定される。墳丘規模に対して後円部墳頂平坦面が非常に広い点も、この推定を支持する。さて柄鏡型の前方後円墳は大分県では古墳時代前期後半に集中して築造され、道の上古墳のような墳形は大型前方後円墳にかぎって前期にも作られることを指摘したことがある(文献120)。そうすると墳丘規格の上から三重地区の前方後円墳群の変遷は次のようになる。まず今のところ最古の前方後円墳として秋葉鬼塚古墳が古墳時代前期前半にさかのぼる。次いで前期後半にあついで小坂大塚・道の上・立野・重政の各古墳が築造され、中期以後になると前方後円墳は築造されなくなり、三重地区の前方後円墳築造は古墳時代前期に集中したことがわかる。

出土遺物では、いずれの古墳も主体部と副葬品の内容は不明なので、埴輪が唯一の手がかりである。立野古墳では、円筒埴輪と壺形埴輪が出土した。壺形埴輪の特徴からみて前期後半でも新しい時期にあたる。重政古墳の壺形埴輪(第26図)は底部を平底に作って焼成前に穿孔する手法をもち、中津市勘助野地1号墳の壺形埴輪(文献77)と同一型式である。また樹立用の3類壺形埴輪ばかりで供献用の2類壺形埴輪(2章4節)がない点とその型式からみて、前期でも最末期または中期初めの製作と考えられる。したがって重政古墳は立野古墳より後の築造である。残る秋葉鬼塚・道の上・小坂大塚では測量時にかなり清掃したのに埴輪は採集されていない。立野古墳のように壺形埴輪や少数の円筒埴輪がもちいられた可能性は残るが、円筒埴輪が大量に樹立されたとは考えがたい。ちなみに大分県の中期の前方後円墳では円筒埴輪の大量樹立が認められるので、この点からも3古墳を前期古墳とする間接証拠となろう。

以上をまとめ、水系別に配列したのが第29図である(註1)。立野古墳が立地する大野川本流域と三重川流域では生産基盤が異なり前者が畑地卓越型、後者が水田卓越型であることを第1節で指摘した。また三重川流域を中流域と下流域にわけたが、両者は同一水系で近接しておりきわめて密接な関係があったと考えられるので、この三重地区では大野川本流域と三重川流域の二つが、古墳時代に継続的に首長を輩出した単位地域であつたとみられる。実際中期になると、大野川本流域では立野古墳に継続して鉢ノ窪古墳群・下津留古墳群という舟形石棺と大形箱形石棺を主体部とする首長墳が継続する。同様に三重川流域では中流域で舟形石棺・箱形石棺を主体部とする潰平石棺(ツエヒラ)が築造される(文献75)。このように単位地域が2つあったとすると、秋葉鬼塚・小坂大塚・道の上・重政の各古墳は一つの首長系譜の墓と考えられる。古墳時代前期最古の秋葉鬼塚古墳と最新の重政古墳の間に小坂大塚古墳と道の上古墳が作られたことになる。その順序は不明だがいずれも墳形からみて前期後半の築造であろう。一方大野川本流域では立野古墳が前期後半のある時期に大型前方後円墳として築造される。前後の時期の首長墳は小型円墳であるから特別な事情が考えられる。ところで鉢ノ窪と



第29図 三重地区主要古墳編年表  
(●舟形石棺・■組合箱形石棺)

濃平の舟形石棺と箱形石棺の型式は同一で他の地域と区別されること(文献89)と、前方後円墳の前方部の向きが同じで同一の規範にもとづくことから、この2地域は相互に強い結びつきがあったことは明らかである。そうすると立野古墳築造の背景には、首長系譜が三重川流域から1代限りで移動したか、あるいは三重川流域の首長の容認のもとに一時期前方後円墳が併存したか、のいずれかの事態が起こったと考えられる。

では大野川本流域に立野古墳が築造された理由、すなわち首長がそのような地位をえた歴史的契機とはなんだろうか。大野川本流域の地形はその時期に生産基盤の転換や拡大があったという見方を許さない(第1節)。かわりに物と人の流通システムすなわち交通事情の変化が関わっていたと考える理由がある。それは大野川本流域に直面する生産基盤が狭隘な地域に、1代限りの前方後円墳が立野古墳とほぼ同時期に流域各所で築造されることである。第30図に示す8小牧山6号墳、16大久保1号墳がそれで、いずれも墳形・出土遺物から立野古墳に近い時期の築造である。後者の場合後続する中期の古墳群の石棺型式まで立野周辺と酷似する(文献104)。いずれの古墳も大野川の河川交通の要所に立地する。特に立野古墳の下流は中近世の大野川河川交通上の難所で、いったん陸送で中継ぎする河川の港が多く立地した。そこを遡れば17七ツ森古墳群のある竹田市域の近くまで舟航が可能であった。それを考慮すると立野古墳が大型前方後円墳でかつ河口部の海部と関係の深い円筒埴輪をもつことは示唆的である。また7野間古墳群も大野川に面しており、野間1号・小牧山6号・立野は「器台形埴輪」を共有する。つまりこの大野川本流域沿いに同時期に造られた各古墳の首長は、大野川河口部を掌握する海部の首長と密接な関係がある。前期後半という時期に海上交通を握る勢力すなわち小熊山古墳や亀塚古墳の大首長が海上交通の延長として大野川流域の河川交通の整備と掌握をおこなったのではないか。その事態を背景として、河川交通の要所の首長が大首長により階層的に編成され、その初代の首長が地位の証として前方後円墳の築造をおこなった、あるいはおこなうことを許されたのではあるまいか。立野古墳はそのような事態を考慮しなければ、三重地区の前方後円墳のなかに位置付けることが困難な内容をもつ古墳である。(田中)

註1、編年表の時期区分は以下の文献により、集成編年1～4期が古墳時代前期、5～8期を中期としている。1・2期が前期前半、3・4期が前期後半にあたる。

広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』九州編 1992 山川出版

和田晴吾「古墳時代の時代区分をめぐって」『考古学研究』34-2 1987 考古学研究会



- 1、御陵古墳 2、蓬来山古墳 3、大臣塚古墳 4、大在古墳 5、亀塚古墳・小亀塚古墳 6、上ノ坊古墳 7、野間1～3号古墳  
8、小牧山6号墳 9、御塚古墳 10、坊ノ原古墳 11、立野古墳 12、小坂大塚古墳 13、道ノ上古墳 14、重政古墳 15、秋葉塚古墳  
16、大久保1号墳 17、七ツ森古墳群





第31図 西国東の古墳 (1/3万)



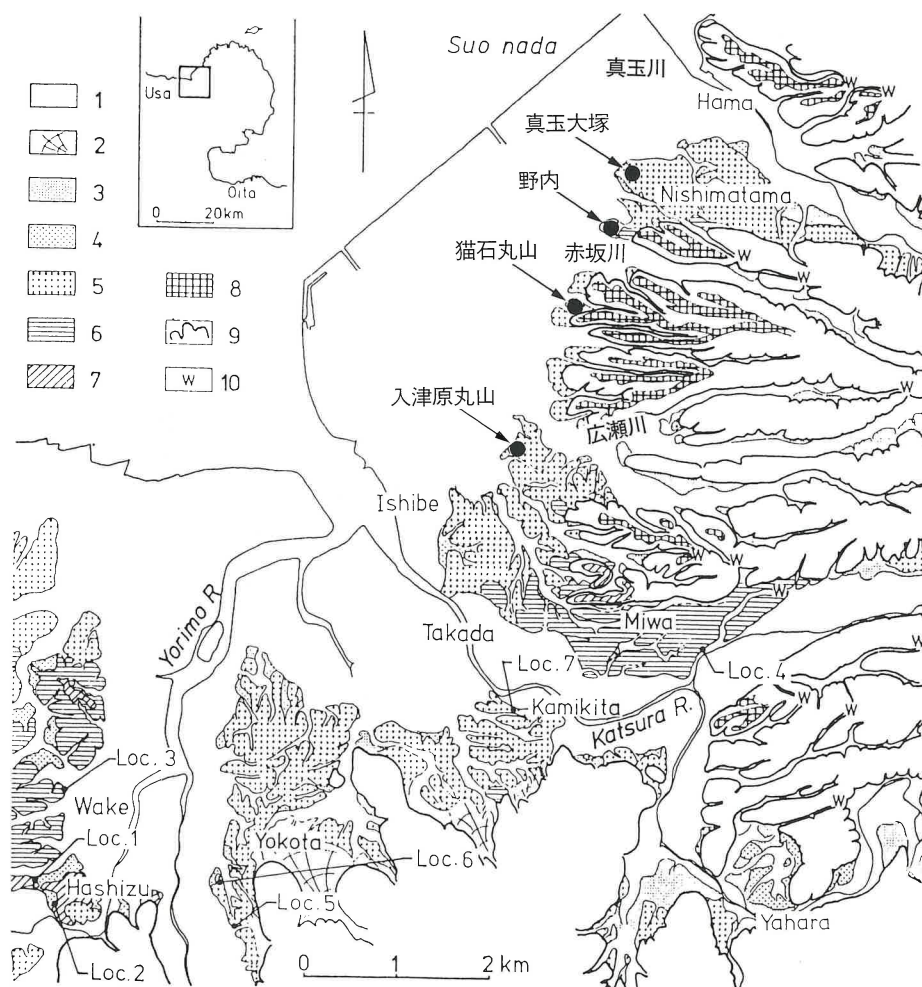
## 第4章 西国東地区の前方後円墳

### 第1節 歴史的地理的環境 —古墳時代を中心に— (第31・32図)

**位置** 西国東地区の前方後円墳群は、大分県の北部国東半島西端に位置し、現在の西国東郡真玉町(またま)から豊後高田市(ぶんごたかた)にかけて分布する(第31図)。旧豊後国国東郡の一画である。北の真玉町に真玉大塚古墳と野内古墳が、南の豊後高田市に猫石丸山古墳と大型円墳の入津原丸山古墳が存在し、周辺には大小の方墳・円墳群が分布する。この地域は国東半島の西の根元であって、寄藻川(よりも)を境界にして旧豊前国宇佐郡と接する。

**地形** 国東半島は中央の両子山から放射状にのびる山地がそのまま瀬戸内海に没する地形で、急峻な開析谷と尾根をくりかえす地形である。放射状にのびる山地の先端が急峻なまま海没する地域と先端に平坦な台地を形成する地域に分かれる。真玉町・豊後高田市は後者に属する。第32図の千田昇氏の地形分類図を参考にして説明しよう(註1)。半島中央から西に向かって八手状に山地がのび、それを開析した細長い谷が幾条ものびている。その谷には北から真玉川、赤坂川、広瀬川、桂川の4本の川が走る。赤坂川が真玉町と豊後高田市の境界である。真玉川と桂川は流域に沖積低地が発達し、その中流域には古代の条里遺構が残されている。川と川に挟まれた山地の先端には海拔10～20mの中位段丘がのびている。真玉川以北にはこのような段丘は形成されていない。ところで近世以後の干拓の進行により現在の海岸線は、段丘面よりはるか沖合に前進しているが、かつては段丘面がそのまま海に落ち海岸線となっていた。また河川流域では海がかなり谷の奥までは入り入海となって、良好な港として機能したと推定される。この付近は古代の「国東津」の推定地でもある。古墳時代の地形を想定すると、古墳の立地する段丘は海岸に突き出した岬状の景観をなし、集落と耕作地は、谷あいの沖積地周辺に分布し、段丘上は古墳を造る適地ではあっても、集落や耕作地としては適していなかったと推定される。事実真玉大塚古墳のの段丘面の調査成果によれば、

墓地以外の生活遺構が段丘面に進出するのは奈良時代以後で、段丘面の開発が進行するのは中世以後という



1 : 沖積面および干拓地, 2 : 沖積扇状地, 3 : L<sub>2</sub>面, 4 : L<sub>1</sub>面, 5 : M<sub>2</sub>面, 6 : M<sub>1</sub>面, 7 : H<sub>2</sub>面, 8 : H<sub>1</sub>面, 9 : 山地および丘陵地, 10 : 風隙

第32図 西国東地区の段丘面分布と大型古墳

(千田昇氏「国東半島の地形」『国東半島』大分大学1983、第3図に古墳地点を付加)

(註2)。したがって古墳時代の墓地は海岸線に沿った大変目立つ場所に造られたといえる。

**古墳群** さて古墳群の分布をみると、まちかに海岸をを見下ろす段丘上に前方後円墳と大型円墳がそれぞれ孤立して立地する。大型古墳が点的に分布する分散型古墳群である。墳長100mをこす真玉大塚古墳・墳長50mをこす野内古墳・墳長63mの猫石丸山古墳の3つの前方後円墳が北から順に段丘を異にしながら築造され、広瀬川の南の段丘上には墳長77mの造出し付きの大型円墳である入津原丸山古墳が存在する。周辺には古墳・石棺群等が数多く知られている。第31図を解説しながら古墳群の構成を見てみよう(註3)。

**真玉大塚周辺** 古墳時代中期の後半(5世紀後半)に築造された大型前方後円墳2真玉大塚古墳のすぐ西には、前期の箱形石棺を主体部とする1下の山石棺群がある。谷ひとつ隔てた南の丘陵上に前期の箱形石棺を主体部とする方形周溝墓から始まり、後期後半の横穴式石室墓まで継続する4和田鼻古墳群がある(文献130)。また真玉大塚の近くには時期不明ながら円墳の3小塚古墳が知られている。この地区は古墳時代前期から後期にいたる継続的な墓地として利用されたと推定される。真玉川流域が彼らの集落であったとみられる。

**赤坂川両岸** 赤坂川の北岸の中位段丘上に横穴式石室を主体部とし後期前半に築造された5野内古墳があり、その背後に径15mの円墳6野内2号墳が存在する。また南岸には今回調査して後期前半(6世紀前半)の築造と判明した前方後円墳7猫石丸山古墳が存在する。その南側の丘陵上には横穴式石室を主体部とする5基の円墳群8花仕切古墳群が知られている。この地区はそれぞれの前方後円墳の築造を契機に古墳時代後期になって横穴式石室墳の築造が始まったと推定される。後背地と考えられる赤坂川流域は流域面積が狭く、前中期の古墳群が見当たらないことと関係があると推定される。

**広瀬川両岸** 北岸には神人車馬竜虎画像鏡を副葬し円筒埴輪をもった中期後半と推定される13鑑堂古墳(かがんどう)があり、その北に横穴式石室墳が4基知られている。南岸の入津原の段丘上には中期前葉の大型円墳16入津原丸山古墳がある。径は70m近く、三段築成で大型の造りだしを付設し周溝をめぐる。埴輪を使用し主体部は安山岩製の箱形石棺である。副葬品として、鏡・革綴短甲・玉類・滑石製品が知られている(文献83)。その南に箱形石棺を主体部とする長方形墳17大原古墳がある。また広瀬川に面する丘陵上に11基の円墳からなる15イド山古墳群があり、その中に径30mをこえる円墳が2基含まれている。主体部は箱形石棺である。その先端の14権現山古墳群は2基の横穴式石室墳からなる。南にかなり離れた18志手金比羅古墳は後期前半の横穴式石室墳である(文献82)。入津原丸山周辺の古墳群は、真玉大塚周辺と同様に古墳時代前期から古墳群の形成が始まり、後期まで継続したことを示している。広瀬川流域は真玉川につぐ広さの沖積低地を擁しており、そこを生産基盤とした集団を背景として墓域を形成したと推定される。

以上をまとめると、真玉大塚周辺と入津原丸山周辺の古墳群はそれぞれ真玉川と広瀬川流域の集団を背景に古墳時代を通じて継続的に墓地を築き、中期の一時期のみ首長墓である大型古墳をそれぞれの墓域のなかに築造したと考えられるのに対し、赤坂川流域の造墓は後期になって首長墓である前方後円墳をもって始まりその時期のみ継続する。赤坂川流域には、真玉川や広瀬川の流域に肩を並べるほどの集団が存在したとは考えられないから、野内古墳と猫石丸山古墳を築造したのは真玉川流域と広瀬川流域の両集団で、その首長の墓域を後期になって赤坂川河口の段丘上に移動させた可能性を指摘しておきたい。

**保存・調査の歴史** 西国東に大型古墳が存在することは早く1932年に知られていた(註4)が、調査の対象となるのは戦後のことであり、賀川光夫氏による真玉大塚古墳の測量をはじめとする(文献30・38)。その後その重要性が認識され、1970年代に入津原丸山古墳と猫石丸山古墳が県指定史跡となった。しかし測量等の基礎資料の整備はおこなわれていなかった。90年代になって、野内古墳(文献123)・真玉大塚古墳(文献118)の測量がおこなわれ、入津原丸山古墳も大分県前方後円墳研究会による測量調査が完成しつつある。このような状況のなかで猫石丸山古墳はその内容が不明のままであった。

そこで今回の調査では既往の調査を集約・公表し、県指定史跡ながら墳丘測量のおこなわれていなかった猫石丸山古墳の基礎資料をえるために、詳細な測量と範囲確認調査をおこなった。(田中)

註1、千田昇「国東半島の地形」『国東半島』1983 大分大学

註2、圃場整備に伴う発掘調査がここ数年大規模におこなわれた。真玉町教育委員会下村精一氏教示。

註3、渋谷忠章「古墳時代」『真玉町誌』1978 真玉町

註4、河野清実『豊後国東半島史』1932



## 第2節 猫石丸山古墳

### 1) 立地と環境 (第34図)

猫石丸山古墳は赤坂川河口部の南に位置し、海に向かって突き出す丘陵の先端の段丘上に立地する。この丘陵には猫石丸山古墳の乗る中位段丘2面と丘陵頂部に広がる高位段丘1面の、ふたつの平坦面地形が存在する(第32図)。しかしいずれも周辺地区の段丘面に比べて著しく狭い。それらの段丘には多くの小さな谷がはいり、いずれも急な地形で湧水がなく天水を利用できるのみである。またこの地区の標高3mラインまでが江戸時代の海であり、第34図の猫石集落のなかにある貴船神社の境内には地名の起源となった「猫石」と呼ばれる海蝕岩がある。そのような地形を考慮すると猫石丸山古墳の周辺はかつては海が迫り、花仕切古墳群(ハナシキリ)の南側の谷でさへ、海が進入していたと推定される。

さて以上の地形のなかで猫石丸山古墳は丘陵の先端のわずかな中位段丘面のなかでも、「小谷池」のある谷の西側の最も高い位置に、丘陵尾根を背にして築造されている。また横穴式石室墳である花仕切古墳群が丘陵の南斜面に3基、猫石丸山古墳と同じ段丘面西側に2基所在している(註1)。今のところ猫石丸山古墳周辺では古墳時代後期の横穴式石室墳のみが見つかり、石棺等の出土をきかない。「小谷池」の南岸で猫石丸山古墳と同じ埴輪を採集できる。埴丘から転落した可能性もあるが埴輪窯が存在する可能性もある。今後注意すべき場所である。

ところで猫石丸山古墳の立地場所つまり選地にはふたつの特徴がある。ひとつは西国東地区の他の大型古墳と同じように海岸に突出する段丘面に立地するという共通性である。もうひとつはその段丘平坦面のなかでも猫石丸山古墳はやや奥まった位置に造られるという異質性である。古墳時代中期に築造された入津原丸山古墳と真玉大塚古墳は中位段丘2面の中でも海岸にほとんど接する位置にあり、沖合からも海岸からも容易に視認でき、うちよせる波音がすぐそばで聞こえる海岸線近くが選地されている。これに対して猫石丸山古墳は海岸線からやや離れ視認しにくい。同じことは野内古墳で言え、海に突き出した標高の高い中位段丘1面上にあるため、野内古墳は沖合からはよく見えるが逆に海岸近くからは見えないという場所に造られている。後期の方後円墳の選地思想は中期のそれと微妙に異なっているのである。(田中)

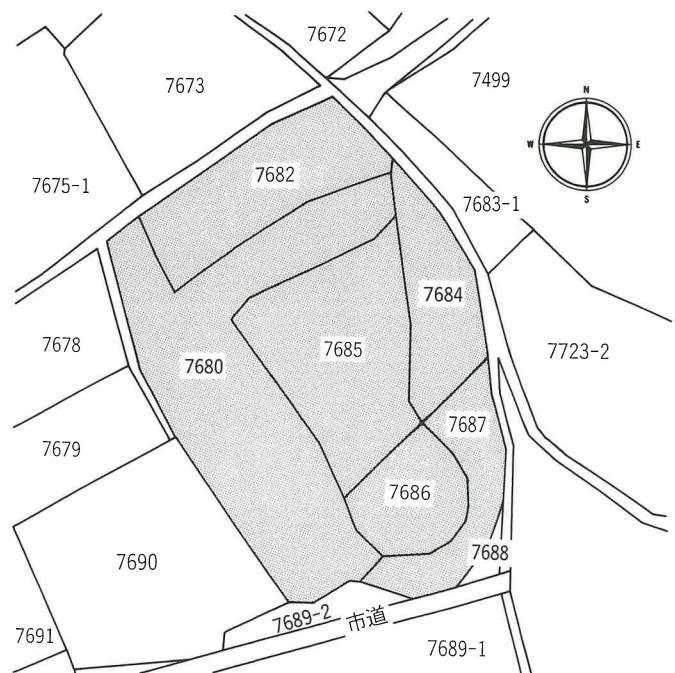
註1、1970年代の分布調査で1～3号墳が確認されたが、今回の調査中4・5号墳を発見した。

### 2) 調査歴と調査方針

昭和のはじめ河野清実氏が前方後円墳と初めて報告した(註1)。戦後の昭和20年代にこの地域を調査した賀川光夫氏は円墳ではないかとしたが、埴輪の存在をはじめて報告した(文献30・38)。その後1973年に前方後円墳と再確認され、昭和49(1974)年3月19日付けで猫石丸山古墳は県史跡に指定された。しかし測量等はおこなわれず、略測をもとに墳長55mで周溝が存在することが知られたにとどまった。

史跡指定の範囲は第33図に示したとおり、道路に囲まれた墳丘と周溝推定範囲を含んでいる。南側の市道に周溝がかかる可能性があり、今回の調査は正確な測量と発掘調査によって墳丘形態と周溝の範囲の解明、および埴輪の検出によって正確な築造時期を確定することを目的とした。(田中)

註1、河野清実『豊後国東半島史』1932



第33図 猫石丸山古墳周辺の地籍と史跡指定範囲

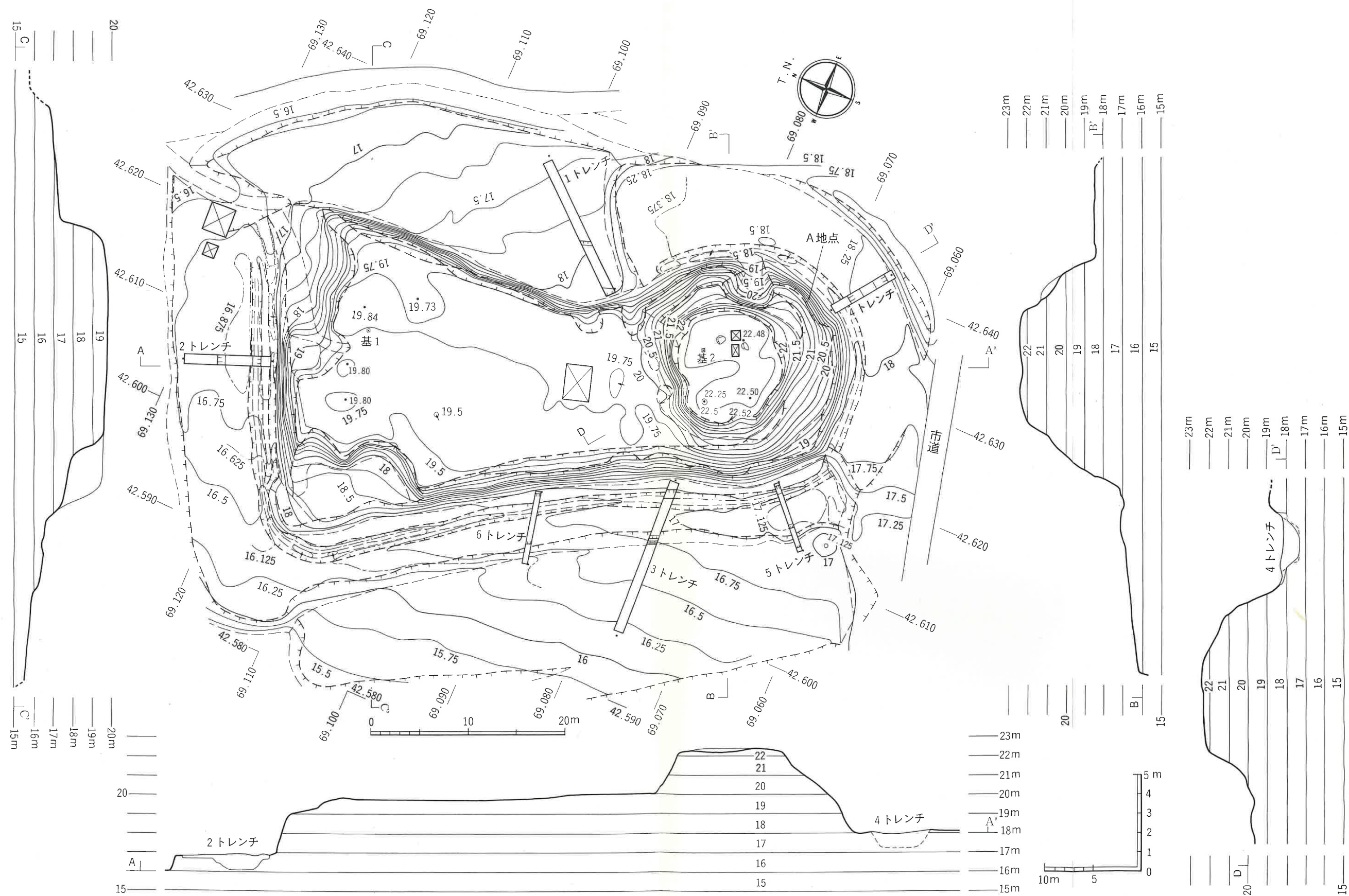




第34図 猫石丸山古墳周辺地形図 (1/5000) 1～5は花仕切古墳群



第35図 猫石丸山古墳測量図 (1/400)



### 3) 墳丘測量 (第35図、巻頭カラー図版2上、図版8・9)

測量は100分の1の25cm等高線を基本方針とした。また測量図を国土座標に入れて、正確な位置と方位を測定することにした。そのため基準点の設定を(株)パスコに委託した。指定地内に猫石丸山古墳はほぼ納まると推測されたので測量範囲は最小限にとどめた。その基準点を使って県の調査員が測量したものが第35図である。平面図上の基1、基2とした点が測量基準点で、座標は前者が $X=65112.817\text{ m}$ 、 $Y=42614.923\text{ m}$ 、 $H=19.837\text{ m}$ で、後者は $X=65080.126\text{ m}$ 、 $Y=42627.001\text{ m}$ 、 $H=22.376\text{ m}$ である。この基準点と周辺に配置した多くの副基準点を利用して、開放トラバース、光波平板使用で測量をおこなった。そしてその平面図をもとに4つのラインで墳丘断面図を作成した。わかりやすくするために高さの縮尺を2倍にして表現している。なお現状は前方部が平坦になっているが、昭和の初期に住宅建設のため土取りが行なわれた結果であり、本来前方部はまだ高かったと推測される。その後昭和10年に所有者近藤宗雄氏によって前方部は均されて「丸山公園」として地元猫石集落の花見の場所として親しまれていた。最初に前方後円墳と認識した河野氏は土取り以前の姿を観察し、賀川氏が戦後円墳ではないかとしたのはこの前方部の変容後の姿を見たためではないかと推測される。また後円部には大きく掘り崩された場所があり、明治年間に矛十数口が出土したといわれ、主体部はかつて掘られた可能性が高い。

測量とその際の観察の結果をまとめると、①墳長残丘は約60mであるが、裾まわりが畑地化で削平されているので、本来の墳長はなお若干大きくなること。②後円部径が25mほどなのに、前方部前端幅が35mを越え、著しく前方部の発達した平面規格であること。③後円部の南東に周溝の痕跡を確認でき(D-D'断面)、前方部の周囲も畑地として利用されているので地上にその痕跡をとどめないが、周溝がめぐる可能性が高いこと。④後円部の裾まわりが削平されているので一見急傾斜の墳丘に見えるが、後円部には三段築成の痕跡と推定される平坦面が残されている。一段目テラスと推定される高さで転倒した円筒埴輪が露出していた(第35図A地点、第54図83)。前方部は削平と地均しが著しく段築を観察できない。⑤葺石とかんがえるべき礫があまり落ちていないこと。⑥埴輪が清掃時に墳頂部、段築推定部、墳丘斜面のいたるところで採集され、本来墳頂部、各段テラスに円筒埴輪の樹立圍繞がおこなわれていたと考えられる。以上である。測量時の計測値は発掘調査の結果訂正されたので、10)項で詳しく述べる。

以上の結果からまた幾つかの課題が生まれた。1)、①から大型の前方後円墳といえるが、その墳長規模を確定するため、第2・4トレンチを設定した。2)②の結果からみて前方部が発達する平面形が予想されるが、くびれ部幅を確定することで平面規格を復元する。そこで第1・3トレンチを設定した。3)、③からみて周溝はめぐるかどうか? すべてのトレンチはその課題をになう。④⑥の問題の解決は、今回の調査ではみおくり、将来にゆだねた。⑤の点は各トレンチで解決されるはずである。

同時にこの調査によって墳丘の範囲をほぼ定めることができるから、将来の史跡整備にむけての基礎的な資料がえられると確信された。(田中)

#### 猫石丸山古墳調査日誌抄

1996(平成8)年

9月11日(水)豊後高田市教育委員会、猫石区長近藤義洋氏に協力依頼。

18日(水)地権者近藤四郎氏を訪ねる。

10月22・23日(火・水)(株)パスコによる基準点測量。

11月5日(火)現地打ち合せ。田中・河野・大久保

6日(水)竹の伐採開始。河野忠臣氏活躍

15日(金)伐採やっと終わる。補助杭設定。

18日(月)墳丘測量開始。埴輪がいっぱい。

26日(火)墳長判明。残丘で60mこえる。

12月2日(月)1トレンチ掘下げ開始。

3日(火)周溝検出。底は埴輪がびっしり。葺石はない。

4日(水)2トレンチ開始。

6日(金)3トレンチ開始。

9日(月)真玉町文化財調査委員会6名視察。

12日(木)写真撮影開始。

13日(金)4トレンチ開始。3トレンチで須恵器・形象埴輪出土。

18日(水)実測開始。

19日(木)豊後高田市教育長視察。

20・21日(金・土)川西宏幸先生調査指導。

23日(日)現地説明会参加者45名。

25日(火)西谷正先生(九大)見学。埋戻し開始

1997(平成9)年

1月9日(木)豊後高田俳句の会8名見学。

10日(金)小田先生(福大)、賀川先生(別大)視察。前方部が左右対象か否かが問題となる。

5・6トレンチ開始。

13日(月)断面検討。遺物とりあげ。補足測量調査のおおづめ。

17日(金)すべて終了。



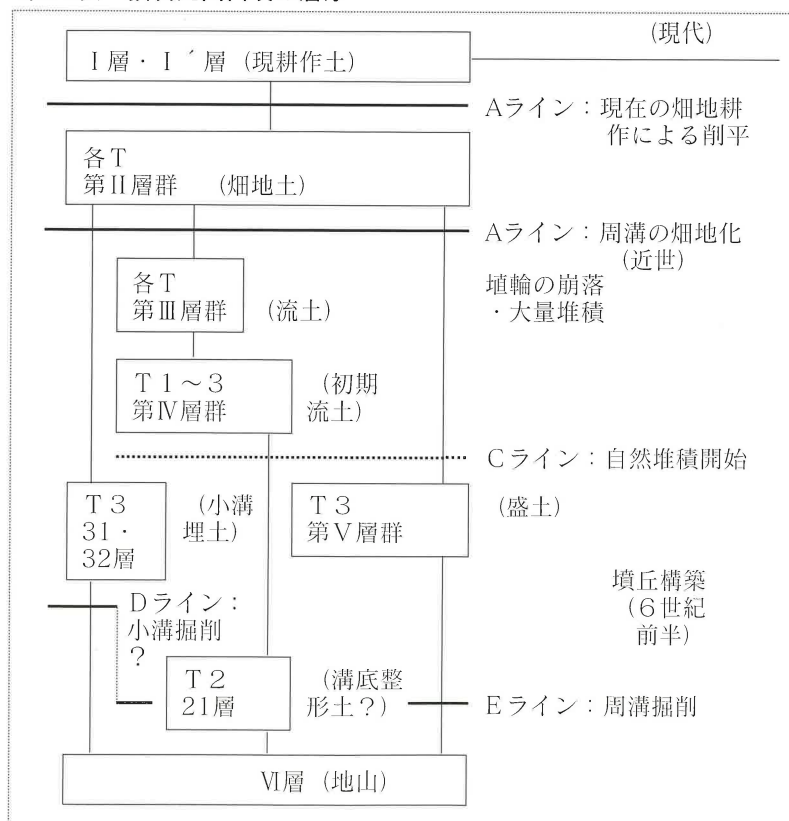
#### 4) 猫石丸山古墳の層序 —自然層と考古学的層位— (第10・11表)

各トレンチの調査内容を説明する前に層序の説明をおこなう。層序の解釈は現地で各トレンチの層位を比較しておこなったが、部分調査という制約のため結論をだせない層位もおおかった。調査後整理の過程でその解釈を再検討するために、出土遺物の帰属層位を確定し、立野古墳と同じようにハリス・マトリックスによって層序を整理した。最終的なかたちに整理したのが第10表である。第11表は整理過程の各トレンチの層位を示し、層位の対応関係を検討するための情報をのせている。破壊境界面は立野古墳層序と同じくラインと表現した。そのラインは第10・11表の太い黒線で示した。ただしCラインとした破線は破壊境界面ではなく、墳丘構築のための盛土といわゆる流土を区別するために設定したもので、周溝掘削限界線であるEラインと重なることが多い。

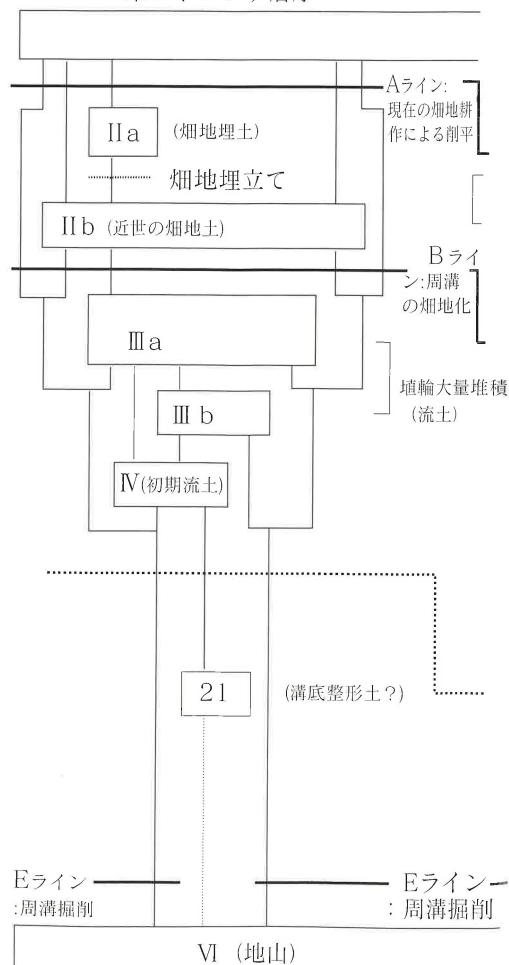
**自然層** VI層は人為の加わらない自然層である。猫石丸山古墳の立地する段丘面は洪積層で、黄褐色から赤褐色の粘質土に凝灰岩質安山岩の握り拳大から人頭大の風化した円礫が多量に含まれる。土質は堅くよく締まっていて、「この土を移植ごてで掘って」というと、たいていの作業員さんはいやな顔をする。本来なら現在進行中の自然層である表土層が地表面にあるのだが、各トレンチは畑地あるいは果樹栽培がおこなわれているので断面図には記録されていない。猫石丸山古墳築造以前の遺構は確認されなかった。したがって人為的な層位はVI層より上にライン（破壊境界面）を介して堆積している。猫石丸山古墳周辺は畑地による人為的な地形改変が著しいので、自然層の堆積から古墳築造以前の微地形を復元することは難しい。

**考古学的層位** この中には墳丘盛土・整形土などの人間が意図的に運んで堆積した層位と、人間が掘った凹み・堀などに自然の作用によって堆積したいわゆる流土などの人に起因する層位がある。前者を直接層位、後者を間接層位とする。畑の耕作土は猫石丸山古墳の層序の場合、流土という間接層位の土を利用しているのだが、人間が手を入れて畑地として土壌を改良していることから直接層位と評価したい。この直接層位と間接層位のふたつの層位群は必ず破壊境界面すなわちラインを介して堆積を開始する。

第10表 猫石丸山古墳の層序

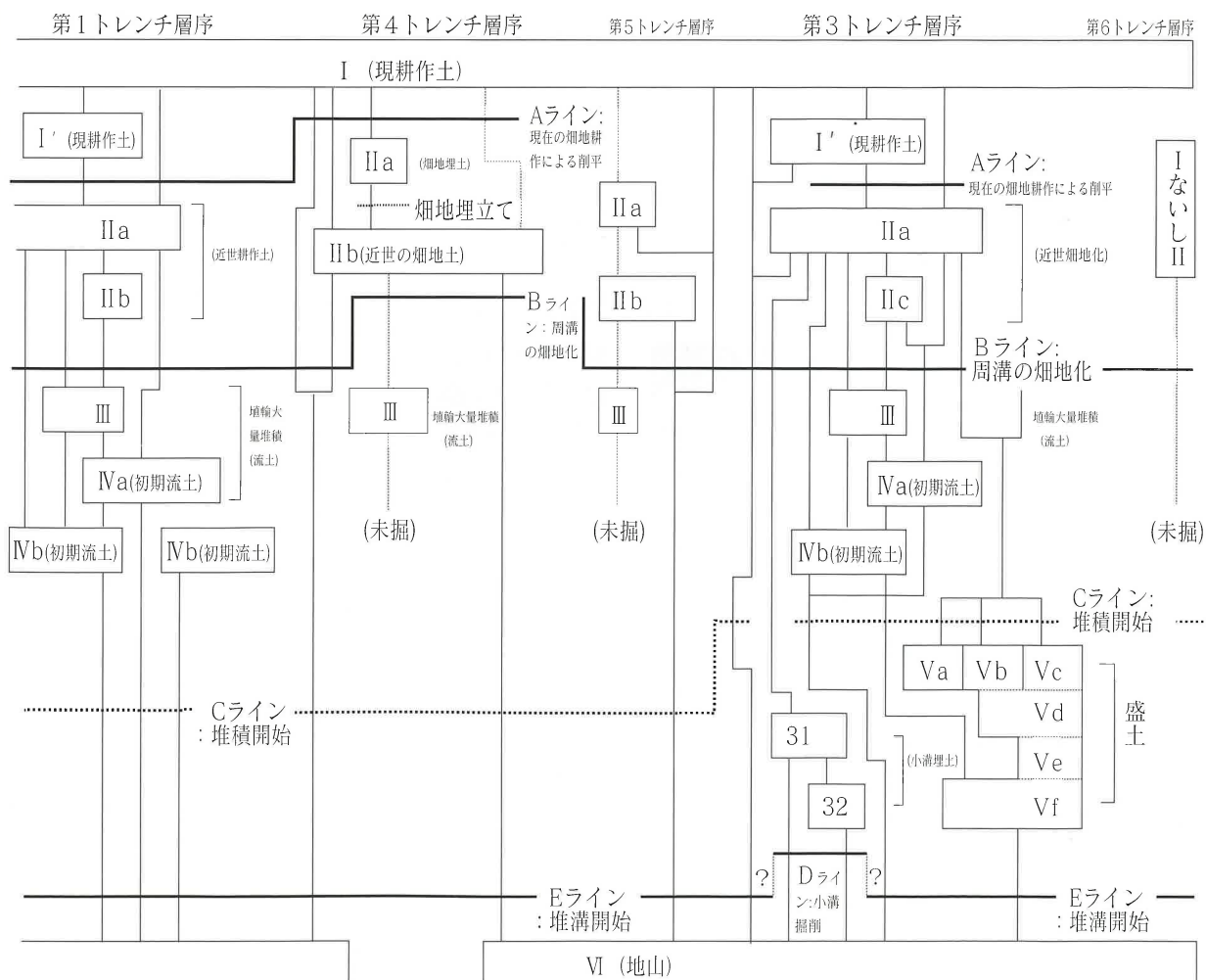


第11表 猫石丸山古墳の層位関係表  
第2トレンチ層序



猫石丸山古墳ではⅠ～Ⅴ層の各層が考古学的層位にあたる。Ⅰ・Ⅰ'層は現在の畑地耕作土で20世紀の直接層位である。墳丘周辺の広い範囲に認められる。現畑地の耕作下限であるAライン上に堆積する。第Ⅱ層群はすべてのトレンチで観察された。近世から近代にかけて猫石丸山古墳の周溝を利用した畑地の耕作土である。糸切り底の中世土師質土器の小片が1点混入していたので畑地化は中世までさかのぼるかもしれない。周溝の部分が周辺より一段下がっているので、現在の形状に畑地が改変されるつい最近まで周溝の痕跡が明瞭に畑の形として残っていたと推定される。畑地の手入れがよかったせいか埴輪片の混入は少なく、第Ⅲ層群と対照的であった。直接層位で畑地造成時の破壊境界面であるBライン上に堆積する。第Ⅲ・Ⅳ層群は、猫石丸山古墳の築造後周溝内に堆積したいわゆる流土で、黒色軟質をなし再下部に大量の埴輪が堆積した第Ⅲ層群とその堆積が始まる以前に短時間ながら時の経過があったことを示す第Ⅳ層群に別れる。後者を初期流土と呼ぶことにした。いずれも間接層位である。第Ⅲ層群は築造後相当長期に堆積した層であり、墳丘側に近づくほど黒色が薄れる傾向があるので墳丘盛土の自然流失土と周溝内に自然堆積してゆく腐植土からなると推定される。第Ⅳ層群は埴輪の大量堆積が始まる以前の流土で、第Ⅲ層群ほど黒色化せず埴輪も少数ながら含まれる。トレンチでの堆積状態にはばらつきがあり、周溝底の両隅に堆積している。盛土あるいは墳丘最終整形土とも考えたが、第1トレンチの層序から初期流土と判断した。前方後円墳完成時の面であるCライン上に堆積する。第Ⅴ層群は盛土と認識した層位で、第3トレンチでのみ確認した。周溝掘削時の到達面であるEライン上に堆積している。

なお算用数字2桁で21層、32層と表現した層位は10桁がトレンチ番号を表わす。これらの層は上下のいずれの層群に帰属するか今回の調査のみでは判断が別れる層位である。(田中)





## 5) 第1トレンチ (第36図、図版10・11)

くびれ部と周溝を検出し前方部付根の幅を復元する資料をえることと埴輪を検出することを目的に、幅1mのトレンチを埴丘北側に設定した。その結果、周溝と削り出しの前方部側面埴端を検出した。埴輪が予想外に大量に出土したため調査に時間がかかり、くびれ部の屈折点を確かめるためのトレンチ拡張は断念した(写真13)。

**埴端** トレンチの西端で地山礫層(VI層)が急角度で上昇した。残存埴丘の位置と立ち上がりの方向からみて、前方部側面の埴端にあたるとみられる(第36図断面イ点)。くびれ部屈折点は予想以上に後円部に近いと考えられる。同時に埴端に葦石が施されていないことも判明し、当初の予想を裏付けた。

**周溝と埋没状態** トレンチの中央で埴端ラインと平行する落ち込みを認め周溝を確認した。周溝外側が二段になっているのは、近世に畑地化された際に拡張されたもので、下段が古墳築造時の周溝である。周溝掘削のEラインをみると周溝はほぼ逆台形に掘削され中央部が一段さがっている。これはその地点にわずかな湧水があるためで、排水のためにやや掘り下げている可能性がある。周溝底の幅は断面図A・イ点を端部とし、トレンチと周溝の方向が斜行しているのを補正すると、約4.0mとなる。深さは現状では約1mだが、第4トレンチの状況からみてさらに数十cmは深かった可能性がある。底面の高さは標高約16.9～17.0m。

周溝内にはまず両隅にIVb層が堆積し、この層には遺物の混入はなくC・Eライン上の層位である。その間に埴輪片と地山礫を大量に含むIVa層があり、埴丘に向かって次第に厚く堆積していた。埴輪の混入も次第に少なくなる。このIV層群はよく締まりあまり黒色化していないので埴丘完成後まもなく堆積した初期流土で、その堆積の最終時期に埴輪の大量崩落が始まったことを示す。その上にIII層が堆積し下部に埴輪の堆積が引き続きみられ、長期間にわたる自然堆積の流土が形成されている。次のBラインの破壊境界面(近世)でIII・IVa層の上部がカットされ、かつ左右に周溝が拡張されて畑地となる。そこにII層群の畑地耕作土が形成され、その後周溝外の面が削平されて(Aライン形成)I'・I層の堆積する単一面の畑地が形成されている。

**遺物と出土状態** 近世陶磁器小片と埴輪片が少量混入したのでII層群は近世の畑地耕作土であることが判明した。埴輪片は下層からの残留遺物である。III層の下部からIVa層にかけての周溝中央部に連続して埴輪片の大量堆積を認めた(第36図)。それを3回にわけてとりあげた。この埴輪堆積の中には形象埴輪は含まず、須恵器も壺小片1点(第42図1)がIII層から出土したのみである。下部の堆積(3回目取上げ・IVa層)には拳大から人頭大の地山礫が多く含まれる。葦石がないのに不思議である。盛土内に含まれていた礫が埴輪とともに崩落したか、あるいは埴輪の堆積の初期に礫をもちいた何らかの行為があったかのいずれかであろう。埴輪の堆積は上部(III層)で底部片が多く、下部(IVa層)で口縁片が多いという逆転現象が認められるが、この現象は埴丘上の樹立されていた円筒埴輪が口縁部から順に毀れて崩落したことを推測させる。

しかし通常埴丘に残ることの多い底部が大量に出土することは奇妙で、埴丘の破壊がまだ古墳時代のうちにおこなわれた可能性がある。(田中)

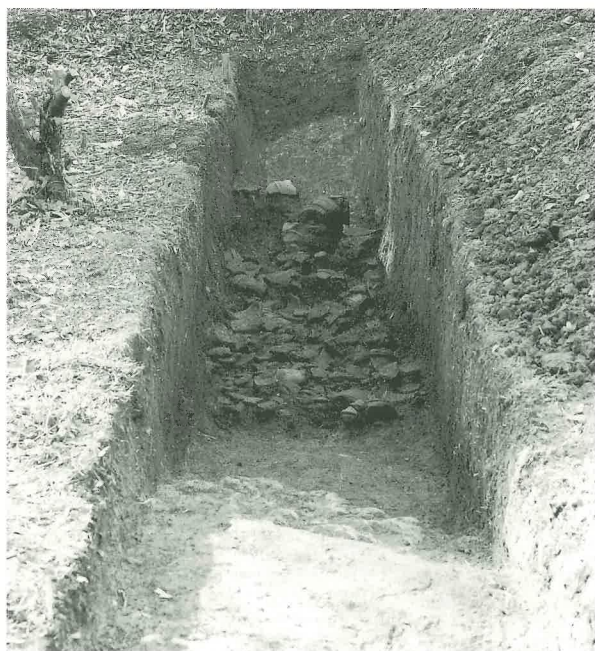


写真13 第1トレンチ 出土状況

## 第1トレンチ層位一覧

| 層   | 色調・土質他        | 包 含 物                                   | 備 考                         |
|-----|---------------|-----------------------------------------|-----------------------------|
| I   | 暗褐色砂質・腐植土     | ひげ根が多いが、基盤の粒子は少ない                       | 現在耕作土                       |
| I'  | 暗褐色土(もろい)     | 地山礫(1~2cm・花崗岩礫)が、多く混じる                  | 現畑地の整地土                     |
| IIa | 暗黄褐色土         | 地山小礫(1~5cm)は少ない<br>埴輪片少し・近世陶磁器まれに含む     | 近世の畑地の造成土                   |
| IIb | 暗黄褐色土<br>粘質強い | 地山小礫(1~5cm)をきわめて多く含む<br>埴輪片少し・近世陶器まれに含む |                             |
| III | 黒色土           | 下部に埴輪片が集中                               | 流土                          |
| IVa | 暗黄褐色土(硬い)     | 最下部に埴輪片(大型破片)が集中<br>地山礫(1~3cm)が多い       | 初期流土<br>下部に湧水があり<br>ジトジトである |
| IVb | 暗茶褐色土(硬い)     | 埴輪なし<br>地山礫(1~3cm)が多い                   | 初期流土                        |
| VI  | 地山礫層          |                                         | 基盤                          |



第36図 猫石丸山古墳第1トレンチの遺構と層序 (1/50)



## 6) 第2トレンチ (第37図、図版11)

前方部前端的の周溝と墳端の確認を目的とした。その結果周溝と削出しの墳端を検出し、埴輪の堆積を認めた。

**墳端** トレンチ南端で地山礫層(VI層)が急角度で上昇した。残存墳丘の位置からみて前方部前端的の墳端にあたると思われる(第37図断面ア点)。墳端に葺石は施されていない。

**周溝と埋没状態** トレンチ中央で墳端ラインに対応する立ち上がりを確認周溝と確認した。周溝外側が二段になるのは第1トレンチ同様近世の畑地化による拡張である。周溝は逆台形に掘削されている。周溝底の幅は断面図ア・イ点を端部として、約2.8~2.9mとなる。深さは現状で約0.8mだが、周溝外側が削平されているのでまだ深かった可能性が高い。底面の高さは標高約16.0~16.1mでほかのトレンチに比べて1mほど低い。

周溝内にはまず両隅にIV層が堆積する。遺物の混入はない。墳丘側のIV層のほうが厚い。この層をはぐと地山礫層(VI層)が露出するが底面はやや汚れている。薄い整形土あるいは墳丘工事の踏みしめ層が存在すると推定されるが、確認していないので21層

として判断を保留した。IV層は黒色化していないので墳丘完成後まもなく堆積した初期流土である。その上に黒色のⅢ層群が堆積し下部に埴輪の堆積がみられる。黒色化の状態からみて長期間に形成した流土と推定され、その堆積の初期に埴輪の崩落があったことを示す。次にBラインの破壊境界面(近世)でⅢ層上部がカットされ、左右に周溝が拡幅されて畑地となる。中央の凹みは畑地造成土で埋められているとみられる。そこにⅡ層群の畑地耕作土が形成され、その後周溝外の面が削平されて(Aライン形成)Ⅰ層の堆積する単一面の畑地ができあがる。

| 層    | 色調・土質他             | 包                    | 含           | 物     | 備                           | 考 |
|------|--------------------|----------------------|-------------|-------|-----------------------------|---|
| I    | 暗褐色砂質<br>・腐植土      | ひげ根が多いが、             | 基礎の         | 粒子は少  | 現在耕作土                       |   |
| IIa  | 暗黄褐色土              | 地山小礫(1-5cm)は少い       | 埴輪片少し・近世陶磁器 | まれに含む | 近世の畑地の造成土                   |   |
| IIb  | 暗黄褐色土              | 地山小礫(1-5cm)をきわめて多く含む | 埴輪片少し・近世陶磁器 | まれに含む |                             |   |
| IIIa | 黒褐色粘質土<br>(ややわらかい) | 地山小礫少ない              |             |       | Ⅲa下層からⅢb層にかけて埴輪が集中(底部直上)流土。 |   |
| IIIb | 淡黒褐色土<br>(やや硬い)    | 地山礫多い                |             |       |                             |   |
| IV   | 暗黄褐色<br>粘質土        | (埴輪等は含まない)           |             |       | よこれしていないので完成直後の堆積           |   |
| 21   | 暗褐色+地山礫層(硬い)       | 地山?                  | 周溝底に敷いたもの?  |       | 整形土? 21層とIV層の境界は周溝完成時の底     |   |
| VI   | 地山礫層               |                      |             |       | 基礎                          |   |

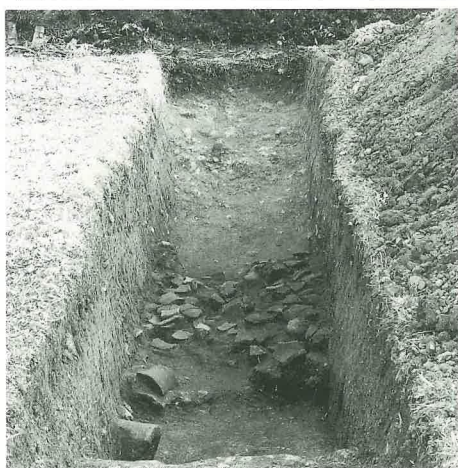
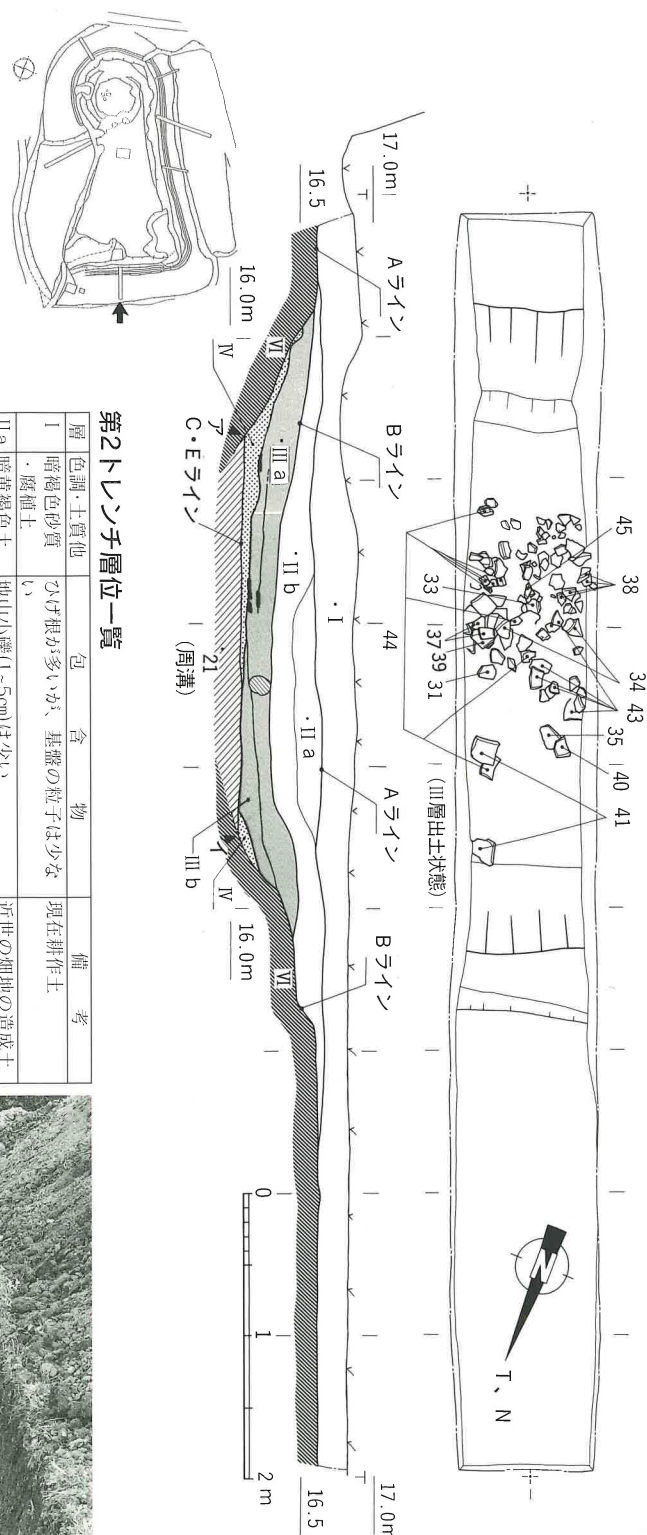


写真14 第2トレンチ 埴輪出土状況 (北から)



第37図 猫石丸山古墳第2トレンチの遺構と層序 (1/50)

遺物と出土状態 II層群には近世陶磁器小片と埴輪片が少量混入した。III層群下部の周溝中央に埴輪片の堆積を認めた(第37図)。この埴輪堆積の中には形象埴輪と須恵器は含まれず、土鍾が1点共伴した(第54図99)。堆積には拳大の地山礫が多く含まれる。埴輪には10)②でA類とする大型の円筒埴輪が多く、前方部前端斜面には大型品がより多く樹立されていたと推定される。

#### 7) 第4トレンチ (第38図、図版13)

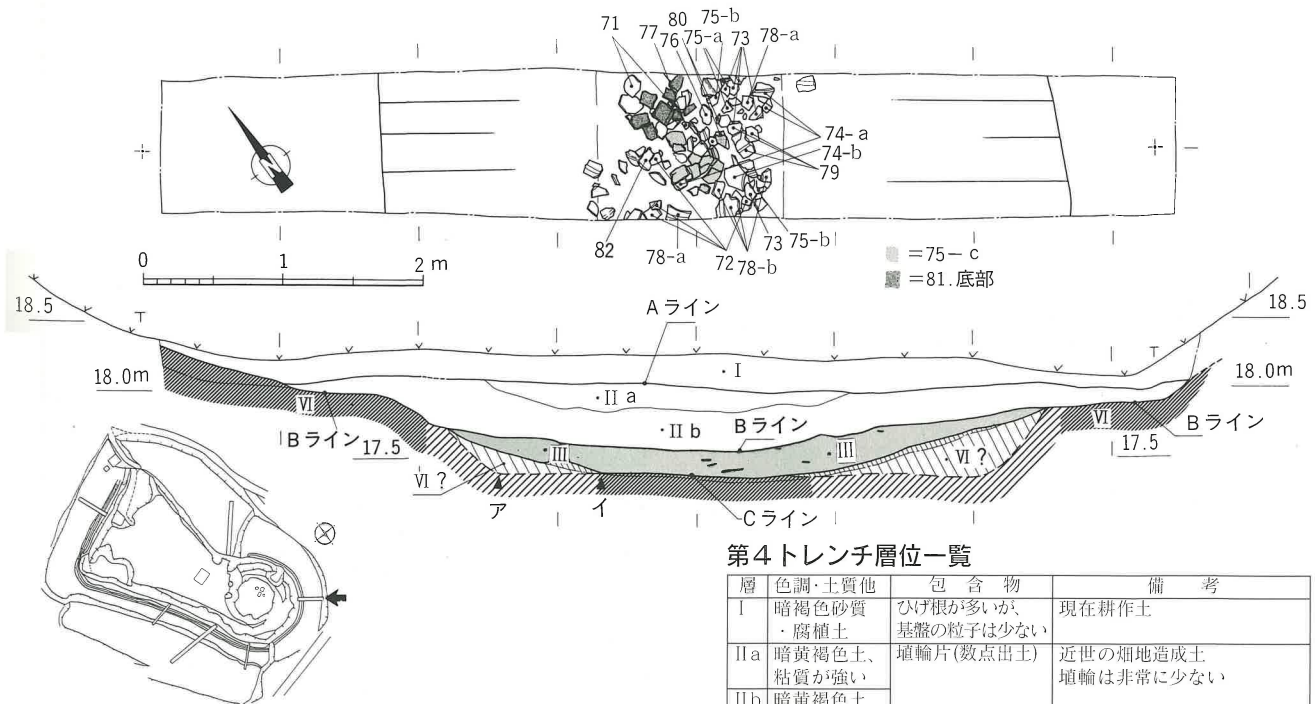
後円部周溝と埴端の確認を目的とする。その結果周溝と削り出しの埴端を検出。埴輪が底部に堆積していた。

埴端 トレンチ中央で地山礫層(VI層)の立ち上がりを検出した。残存埴丘の位置と立ち上がりの方向からみて、後円部の埴端にあたる(第38図断面イ点)。埴端に葺石は施されていない。

周溝と埋没状態 トレンチ右端の埴端ラインに対応する立ち上りを周溝と確認した。周溝の両側(Bライン)が二段になるのは近世の畑地化による拡張である。周溝形態は断面図では半円形であるが、それはIII層の下面をもって周溝底と速断して埋め戻したため、他のトレンチから類推すると逆台形の可能性が高く、初期流土のIV層を地山VI層と誤認した可能性が高い。断面図には逆台形の場合の推定線を加えている。その場合埴端はア点となる。周溝底の幅は仮に埴端をア点とすると約3.5mとなる。深さは現状では約1mだが、周溝外側の削平されていない旧地形から測ると約1.5mとなる。底面の高さは標高約17.3~17.4mでほかのトレンチに比べてやや高い。初期流土の存在が推定され、その上に黒色のIII層が堆積し下部に埴輪の堆積がみられる。黒色化の状態からみて長期の自然堆積の流土と推定され、その堆積の初期に埴輪の崩落があったといえる。次にBラインの破壊境界面(近世)でIII層上部がカットされ、かつ左右に周溝が拡張されて畑地となる。そのため現状のような広い周溝になったとみられる。中央の凹みは畑地造成土で埋めていると推定される。そこにII層群の畑地耕作土が形成され、その後さらに削平されて(Aライン形成)I層の堆積する現在の畑地が形成されている。

遺物と出土状態 II層群には埴輪片が少量混入した。下層からの残留遺物である。III層下部の周溝底部中央に埴輪片の堆積を認めた(第38図)。この埴輪堆積の中には形象埴輪は含まれず、須恵器も壺小片1点(第42図4)がIII層から出土したのみである。地山礫は少ない。朝顔形円筒埴輪がないが、これはトレンチの規模からみて偶然であろう。

(田中)



第38図 猫石丸山古墳第4トレンチの遺構と層序 (1/50)



8) 第3トレンチ (第39・40図・図版12・13)

西側のくびれ部と周溝を検出し前方部付根幅を復元する資料を得ることを目的に設定した。その結果周溝と盛土の墳端を検出した。埴輪が大量に出土したためくびれ部の屈折点を確かめるためのトレンチ拡張は断念した。

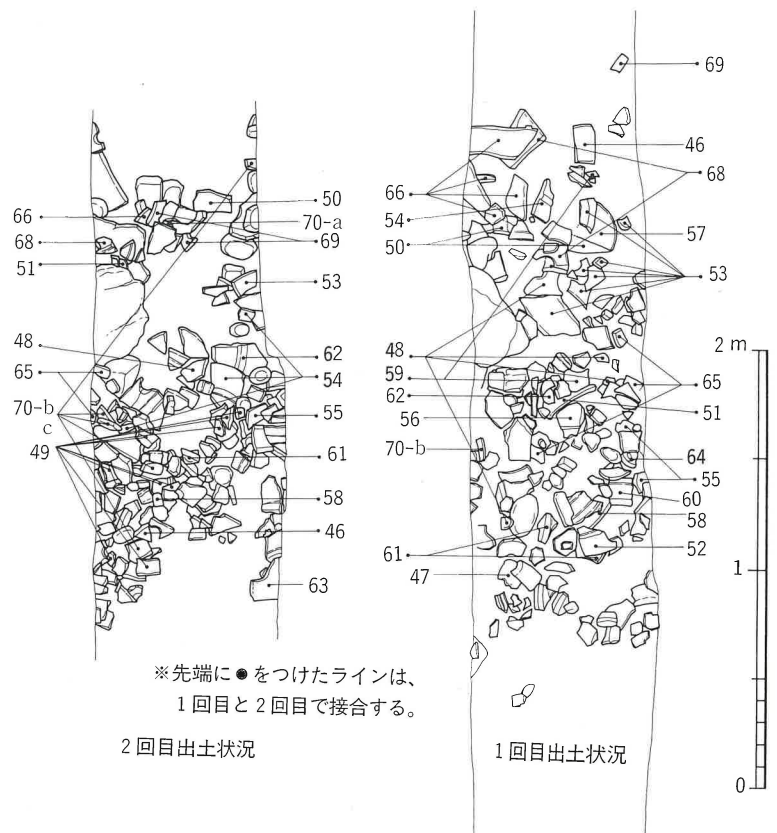
**墳端** トレンチ東端で流土(Ⅲ・Ⅳ層)とは異なる硬い土層を検出した。Ⅵ層の小ブロックを多量に含み、Ⅵ層土の塊や地山礫が入って、細かくレンズ状に分層可能であった。遺物は含まれていない。墳丘盛土の可能性が高くⅤ層群とした。その層が周溝底に接して消滅する第40図イ点が墳端と推定される。くびれを確認していないので判断が難しいが、墳丘と位置からみて後円部側面の墳端にあたるとみられる。盛土斜面上に葺石はなかった。

**周溝と埋没状態** トレンチ中央で立ち上がり認め周溝を確認した。周溝は逆台形に掘削・整形されている。周溝底の幅は断面図A・イ点を端部とし、トレンチと周溝方向の斜行を補正すると、約4.1mとなる。深さは現状では約1mだが、第4トレンチの状況からみてさらに数十cmは深かった可能性がある。底面の高さは標高約15.8～15.9mで、この部分がもっとも低い。

周溝内にはまず両隅に厚く中央で薄くⅣ層群が堆積し、この層には遺物の混入はない。このⅣ層群は粘質が強く黒色化していないので墳丘完成後まもなく堆積した初期流土とみられ、第1トレンチ同様くびれ部付近では厚い。その上にⅢ層が堆積し下部に埴輪の大量堆積がみられる。その後Bラインの破壊境界面(近世)でⅢ・Ⅳa層と盛土Ⅴ層の上部がカットされ、畑地となる。そこにⅡ層群の畑地耕作土が形成され、その後周溝外の面が削平されて(Aライン形成)Ⅰ'・Ⅰ層の堆積する現在の畑地が形成されている。

**小溝** 周溝外側で、周溝ラインに平行するように幅40cm、深さ15cmほどの断面逆台形の溝を検出した(写真15)。埋土(31・32層)に遺物はなくいつ掘られたか不明だが、近世の畑地造成時のBラインによって上面を削平されており、中世以前の掘削は間違いない。猫石丸山古墳にともなう可能性もあるが今回の調査では結論はだせなかった。

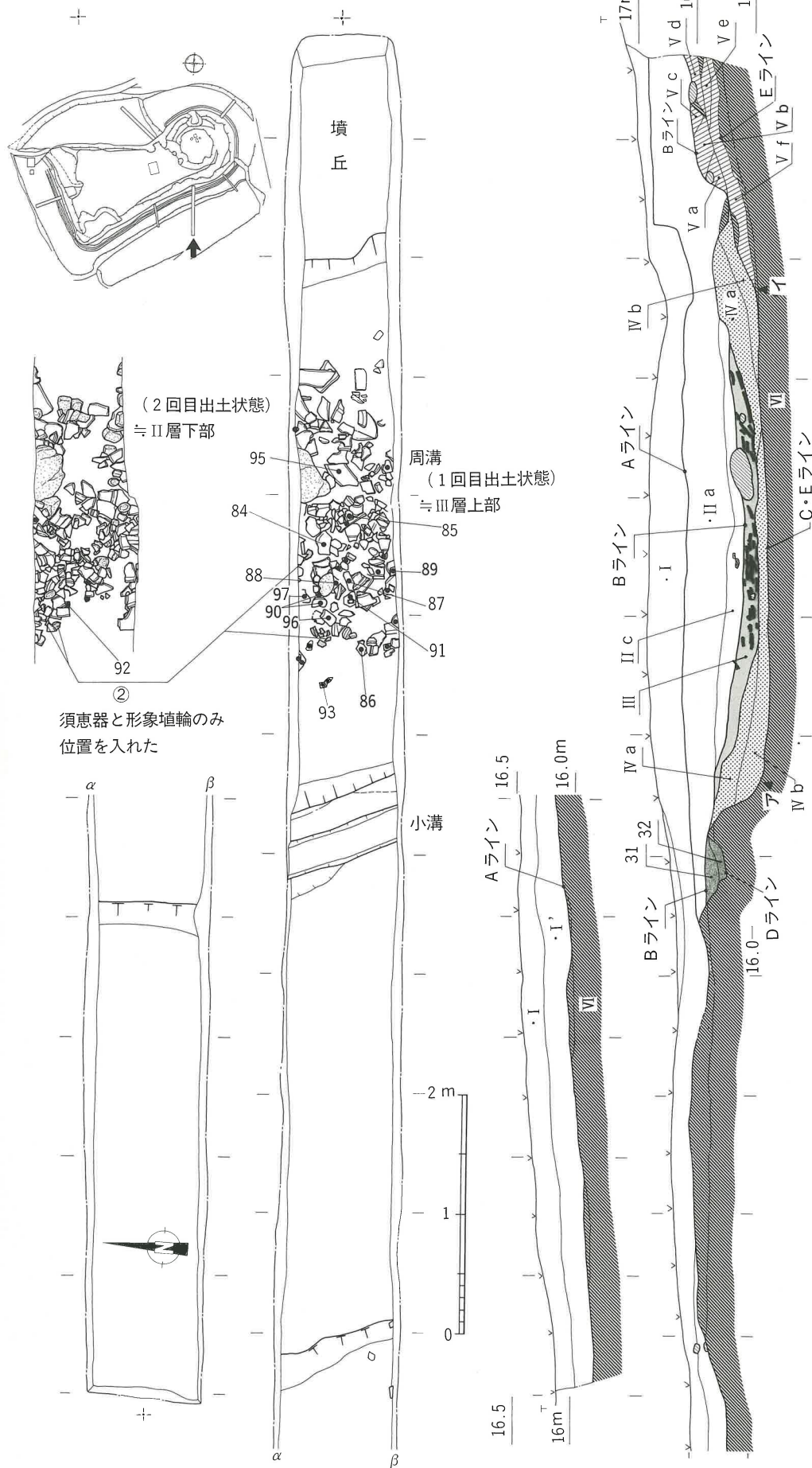
**遺物と出土状態** Ⅲ層の中央部に埴輪片の大量堆積を認めた(第38図)。それを2回にわけてとりあげた(第39図)。形象埴輪はこの埴輪堆積の上位に集中する。また須恵器も甕がⅢ層、脚部片(第42図2・3)がⅡ層から出土した(第40図)。埴輪堆積には拳大から人頭大の地山礫が多く含まれる。第1トレンチの状況と酷似する。埴輪堆積は上位で底部片が多く、下位で口縁片が多いという傾向が認められる。また形象埴輪がこのトレンチのみに集中するのは、形象埴輪の配列場所が西側くびれ部斜面のテラス上であったことを示唆している。(田中)



第39図 第3トレンチ出土土筒埴輪の出土状況と接合関係



写真15 第3トレンチ周溝の外側の小溝



第40図 猫石丸山古墳 第3トレンチの遺構と層序 (1/50)

### 第3トレンチ層位一覧

| 層   | 色調・土質     | 含物                                    | 備考                                      |
|-----|-----------|---------------------------------------|-----------------------------------------|
| I   | 暗褐色砂質・腐植土 | ひげ根が多いが、墓壁の粒子は少ない                     | 現在耕作土                                   |
| I'  | 暗黄褐色軟質土   | 地山ブロック(1-3cm)を多く含む埴輪片を含む              | IV層をおこしてつくられた、畑地の耕作土                    |
| IIa | 暗黄褐色土     | 埴輪片、近世陶磁器まれに含む                        | 近世畑地の造成土                                |
| IIc | 暗黄褐色粘質土   | III層黒色土のブロックを含む・地山礫はきわめて少ない、埴輪片が零星に入る | III層の上部を削りとり、埋めた土、中世・近世に周囲の部分を変えて細にしたもの |

| III | 黒色土                    | 須恵器・形象埴輪集中         | 流土   |
|-----|------------------------|--------------------|------|
| IVa | 暗黄褐色粘質土                | 地山ブロック(1-3cm)を多く含む | 初期流土 |
| IVb | 暗黄褐色粘質土                | 地山礫少し・灰色の粘土ブロックが多い |      |
| Va  | 明褐色土(かたい)              | 地山礫(1-8cm)を多く含む    |      |
| Vb  | 淡黒褐色硬質土・黒ずんでいる(かたい)    | 地山ブロック(1-3cm)を多く含む | 盛土   |
| Vc  | 暗褐色+地山ブロック(2cm)混層(かたい) | 遺物なし               |      |

|    |                     |                    |                          |
|----|---------------------|--------------------|--------------------------|
| Vd | 淡黒褐色硬質土・黒ずんでいる(かたい) | 地山ブロック(1-3cm)を多く含む | 5c層と5f層の間には、地山ブロックが入る・盛土 |
| Ve | 淡黒褐色硬質土・黒ずんでいる(かたい) | 地山ブロック(1-3cm)を多く含む | 盛土                       |
| Vf | 淡黒褐色硬質土・黒ずんでいる(かたい) | 地山ブロック(1-3cm)を多く含む |                          |
| 31 | 暗褐色粘質土              | 遺物なし               | 小溝埋土                     |
| 32 | 暗褐色粘質土              | 遺物なし               | VI層の粘土ブロックを多く含む          |
| VI | 地山礫層                | 遺物なし               | 基礎                       |



## 9) 第5・6トレンチ (第41図)

測量時には墳丘に接して西側にのびる一段高くなった現代の畑地面(第35図)が周溝の位置を反映しているのではないかと推測されたが、第3トレンチでくびれの屈折点を押さえられなかったために墳丘西側の周溝の位置が問題となった(註1)。周溝の位置によっては後円部の径と前方部のくびれ幅の推定が大きく異なるのである。第1～4トレンチの調査がほぼ終了した時点で、間接的な方法として後円部に第5トレンチ、前方部側面に第6トレンチを設定した。幅50cmで周溝の落ちを検出することのみを目的としたので、底部まで掘り下げていない。

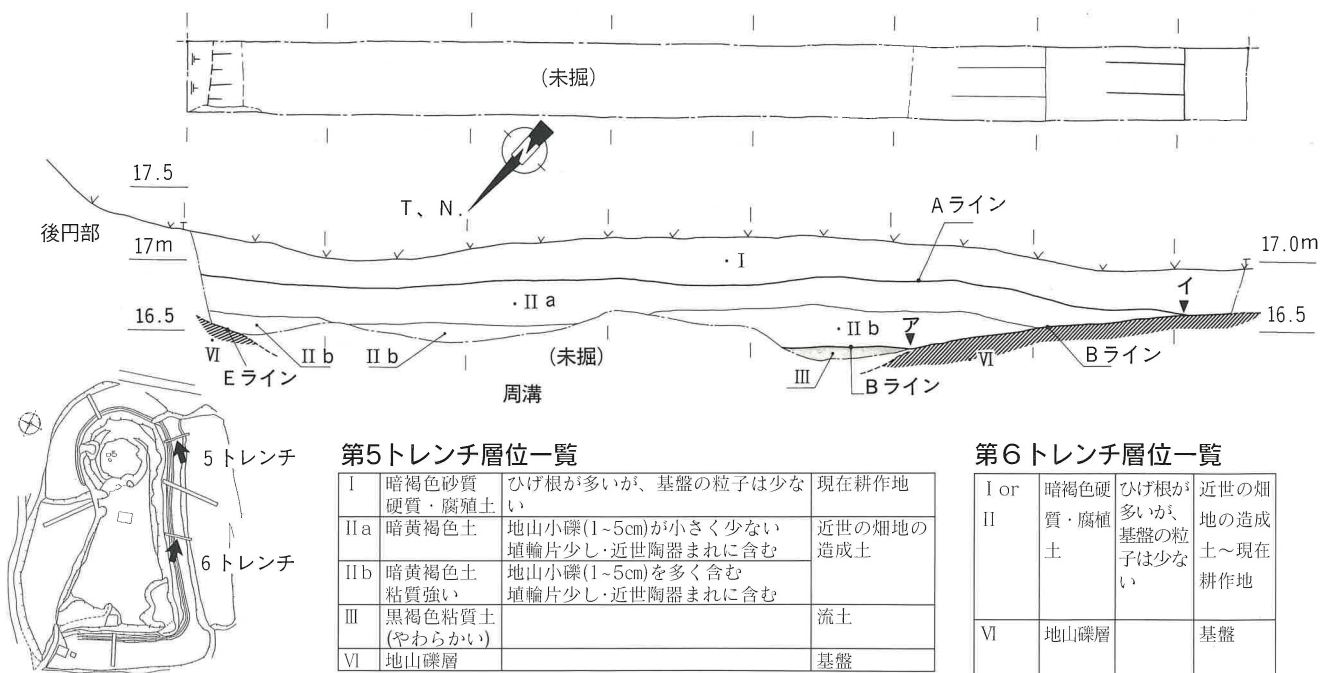
第5トレンチ 畑地耕作土のⅠ・Ⅱ層を除去し、Ⅲ層が顔を出しはじめるあたりで、Ⅵ層の肩を両端で検出した。この部分の墳丘基底は盛土ではなく削りだしである。予想外に墳丘に近く、後円部はかなり小さく復元されると考えられる。また周溝の上端幅は約4.5mで、周溝底は幅3mほどと推定される。第4トレンチと同じ規模と推定される。

第6トレンチ 畑地耕作土のⅠ・Ⅱ層を除去中に、Ⅵ層の肩を両端で検出した。この部分の墳丘基底は盛土ではなく削りだしである。また周溝の上端幅は約4mで、周溝底幅3mよりかなり狭いと推定される。

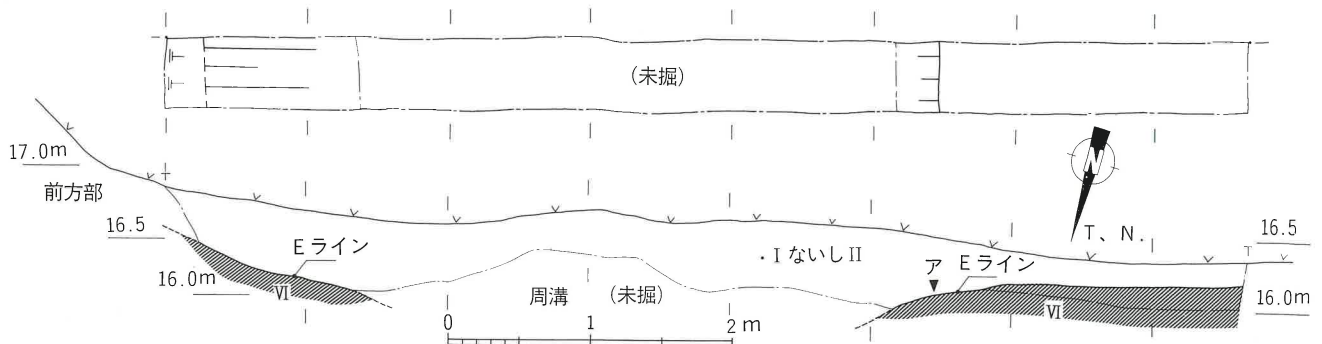
この2つのトレンチと第3トレンチの状況から推定して、墳丘に接して西側にのびる一段高くなった現代の畑地面が、周溝の位置をかなり正確に踏襲することが明らかになった。(田中)

註1、小田富士雄・賀川光夫両先生のご指摘による。

### 第5トレンチ



### 第6トレンチ



第41図 猫石丸山古墳 第5・6トレンチの遺構と層序 (1/50)

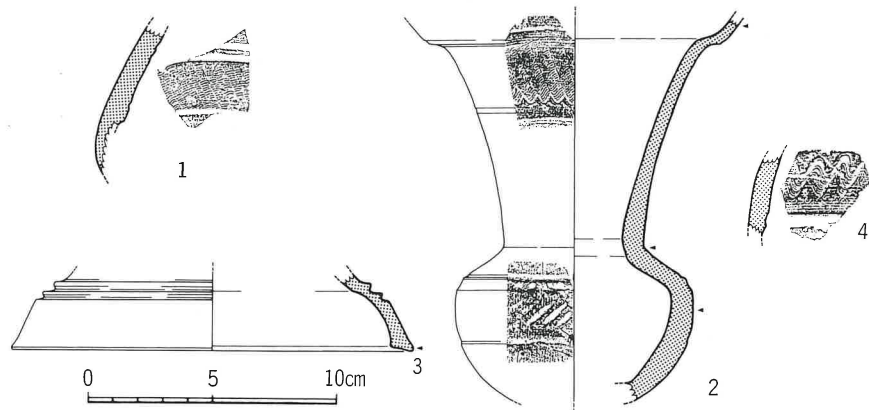
## 10) 出土遺物

### ①須恵器 (第42図、第12表、図版14)

第1・3・4トレンチの後円部周辺から須恵器が出土した。特に西側くびれ近くの第3トレンチに多いが、個体数はきわめて少ない。器種も壺・甕などに限られ、坏はない。かなり細片化して大型の破片はない。第3トレンチでは形象埴輪と同じ埴輪堆積上位から検出されたので、本来形象埴輪群の中あるいは周囲におかれていた可能性が高い。

1は第1トレンチ唯一の須恵器で埴輪堆積に伴う。壺または甕の頸部から口縁部破片である。外面に二条と一条の沈線にはさまれた細かい櫛描波状文がある。2は第3トレンチで検出した10点ほどの破片を接合したもので、頸部の沈線より上に細かい櫛描波状文を施し、体部には二条と一条の沈線にはさまれて、波状文と同じ工具で斜位に刺突を重ねる。胴部最大径は上位にあり、口縁は胴部最大径よりかなり大きい。頸部は細くない。3は第3トレンチのII層に残留した台付き壺等の脚端部破片である。4は第4トレンチのII層に残留した壺または甕の口縁部片。沈線の上に櫛描波状文を施す。

2の甕からみて須恵器の製作時期は陶邑編年のTK10型式にあたる。猫石丸山古墳で埋葬儀礼がおこなわれた時期を示している。(田中)



第42図 猫石丸山古墳出土須恵器 (1/3)

### ②埴輪(第48～54図、第13・14表、カラー図版2下、図版14～22)

埴輪の形式と数量 猫石丸山古墳から出土した埴輪

の種類は以下のとおりである。個体数は最小個体数を示す。焼成の状態が非常に均一のため破片を個体分類する事は難しい。口縁と底部で個体識別をした数字である。調査面積が限定されているので当然本来の数量ではないが、個体数比率の一定の傾向は示している。

- 円筒埴輪
  - 普通円筒埴輪・・・30個体以上。
  - 朝顔形円筒埴輪・・・8個体以上。
- 形象埴輪
  - 家形埴輪・・・2個体以上。
  - 馬形埴輪・・・1個体

第12表 猫石丸山古墳出土須恵器観察表

| No. | 出土位置<br>層位    | 器種        | 規格( )つきは復元後・単位(cm) |      |     |      | 胎土        | 成形          | 調整             |       |              | 備考     |
|-----|---------------|-----------|--------------------|------|-----|------|-----------|-------------|----------------|-------|--------------|--------|
|     |               |           | 器高                 | 口径   | 頸部径 | 底部径  |           |             | 外面             | 内面    | 外・内面         |        |
| 1   | 1トレンチ<br>III層 | 須恵器<br>壺  | —                  | —    | —   | —    | 砂粒<br>少ない | 積み上げ<br>ロクロ | 回転横ナデ<br>櫛描波状文 | 回転横ナデ | 淡青灰色         | —      |
| 2   | 3トレンチ<br>III層 | 須恵器<br>甕  | —                  | 13.5 | 5.6 | —    | 砂粒<br>少ない | 積み上げ<br>ロクロ | 櫛描波状文<br>回転ナデ  | —     | 淡青灰色・<br>濃緑色 | 自然釉かかる |
| 3   | 3トレンチ<br>II層  | 須恵器<br>脚部 | —                  | —    | —   | 16.2 | 砂粒<br>少ない | 積み上げ<br>ロクロ | —              | —     | 濃青灰色・<br>淡灰色 | 脚端部    |
| 4   | 4トレンチ<br>II層  | 須恵器<br>壺? | —                  | —    | —   | —    | 砂粒<br>少ない | 積み上げ<br>ロクロ | 櫛描波状文<br>カキ目   | 回転ナデ  | 暗茶色          | —      |

埴輪の形式組成 壺形埴輪・器財埴輪は伴っていない。墳丘全体の各段に樹立されたと推定される円筒埴輪が主体で、普通円筒と朝顔形円筒の比率からみて、一定間隔に朝顔形円筒埴輪を立てていたと思われる。このように円筒埴輪主体でそれに形象埴輪をとまなう組成は、県内では古墳時代後期に一般的になる組成である。第2章第4節でのべたC類型にあたる。

埴輪群共通の特徴 円筒埴輪と形象埴輪に共通する属性が存在する。胎土、成形技法、焼成技術、丹塗りの4点である。この点についてまず報告する。

胎土の砂礫組成は、1mm大の小角閃石と長石・白色粒子・赤色粒子を含み、雲母は含まない。時に小石英を含



むこともあるが、猫石丸山古墳の埴輪の胎土の注目すべき特徴は、①角閃石を包含した5～10mm大の大形安山岩角礫粒子が含まれる点にある。第13・14表の観察表胎土の項目で「大形粒有」と表現したものである。大量に入っているわけではないが、大きな粒子だけに目につく。この大形粒子を除く胎土の砂礫は、西国東の弥生土器・土師器と共通している。国東半島の地質が基本的に両子山(ふたごさん)溶岩に起因する凝灰岩質安山岩からなることを考えれば、大形安山岩角礫粒子も地元で採集された埴輪胎土の混和材と推定される。②次に胎土の粘土そのものが細かく精良で乾燥すると粉を吹くようになる。精製土師器胎土特有の縞状の色調の変化が認められる。きわめて上質の粘土を使用し、同時に赤く発色する胎土が選択されている。

成形技法として、円筒埴輪および形象埴輪における粘土帯の積み上げ方法は、接合面を内傾させる共通の手法が用いられている。家形・馬形埴輪も粘土板を利用せずに、粘土紐をまきあげる製作方法である。

焼成技術を見ると、埴輪破片は淡褐色から赤褐色系の色調が多く、黒斑はなく、部分的に青灰色の須恵質に焼き上がっている破片も多い。基本的にすべて穴窯焼成の埴輪と考えてよい。

丹塗りあるいは赤色胎土について。円筒埴輪の外面に赤色顔料が観察されるものが数点ある。濃赤色で同一の顔料を使用したと推定される。しかし大半の埴輪には赤色顔料は認められず、その代わり焼き上がりの色調そのものが明るく赤い。またおおくの埴輪の表面には化粧土ともみられるような明褐色の胎土が認められる。赤色顔料の塗布を省略するために胎土そのものに工夫がこらされていると推察される。

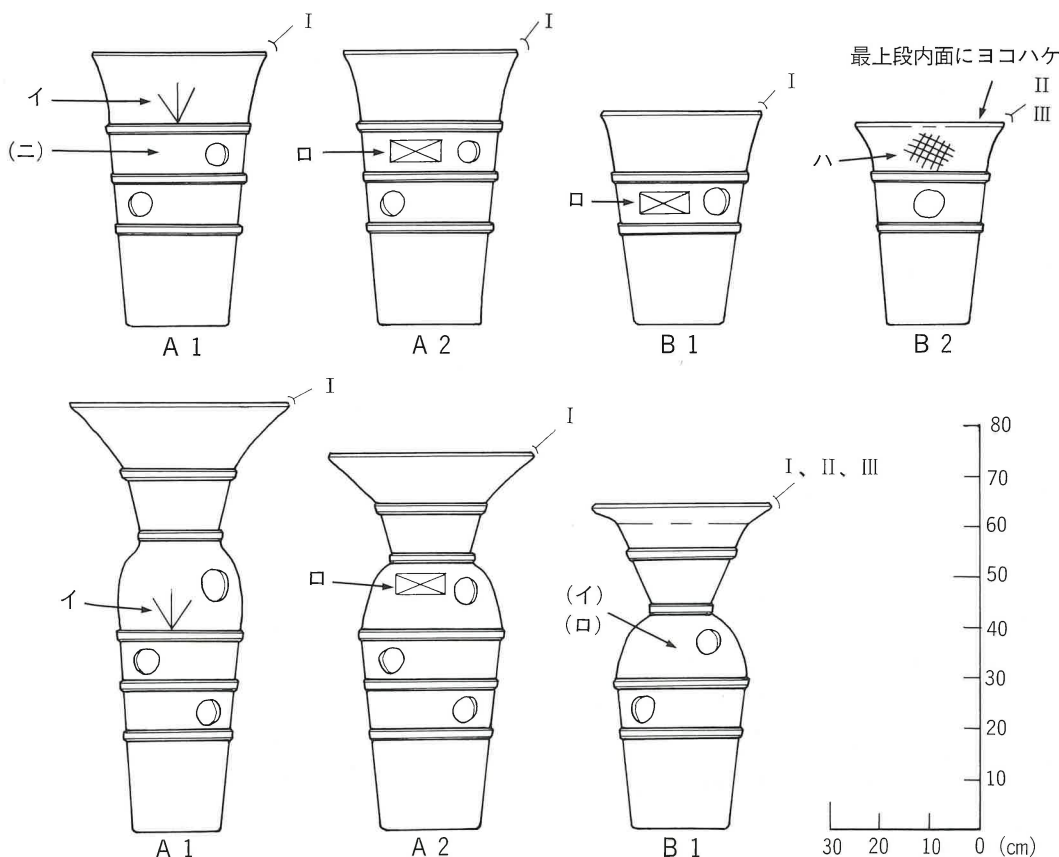
さらにある限られた埴輪にのみ認められることだが、A1類と後で分類する大形の円筒埴輪の一部(26・53・68・76)の突帯と、家形埴輪の一部(89・90)には、赤の下地に黄色の突帯というような色調の異なる胎土がもちいられている。これは共通の特徴ではなく、特定の工人の嗜好である可能性がある。

以上のように、猫石丸山古墳の埴輪製作には、埴輪製作工程の各段階―胎土作り・成形・焼成等―で、円筒埴輪と形象埴輪に共通点が認められる。この事実は、胎土作りから焼成にいたる各段階で統一的な埴輪製作技術を保持した工人集団が、埴輪製作を指導・運営した結果と推定される。

以上の点をふまえた上で、以下に円筒埴輪・形象埴輪の観察結果を報告する。

a 円筒埴輪(第49～54図、第13表、図版14～19)

円筒埴輪には普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の2種類があるが胴部以下の破片で区別できないので、あわせて観察をまとめる。まず断面観である。基底部の全周復元例が多く、断面形は正円である。側面観は、全体に口縁が底部に比べて大きく広がるラッパ形状態で、朝顔形



第43図 猫石丸山古墳出円筒埴輪の分類と想定復元

円筒の胴部も胴部破片で区別できないのと同じ形態であると考えてよい。

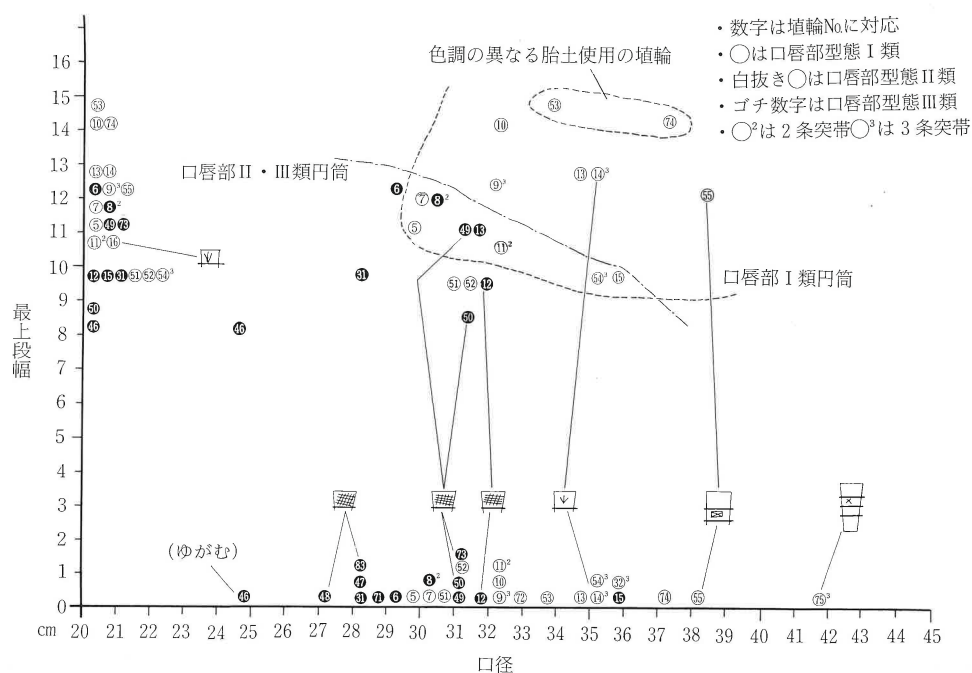
**規格** まず三条突帯と二条突帯の円筒埴輪がある。完全に復元できる個体は11と66のみだが、突帯の上下に透かし穴のある破片を検討するかぎり、この2種類に限られる。朝顔形円筒も肩部の上下幅が15 cm以上と長く(44・70)、4条突帯には復元できない。

三条突帯の円筒埴輪をA類、二条突帯の円筒埴輪をB類とする。

口径(第44図下口径度数分布)と基底部径(第45図下基底部径度数分布)をみると口径31～32 cmを中心に28 cm強・35 cm台などいくつかの山があり、基底部径にも20 cm強を中心に16 cm強・22 cm強に山があるので、円筒埴輪の径にはいくつかのタイプがあったと推定される。そして三条突帯のA類が大きく、二条突帯のB類が小さい傾向にある(第44・45図)。同時に普通円筒の場合には径の大小に、最上段上下幅のばらつきが対応する(第44図左最上段幅度数分布)。すなわち最上段幅には14 cm台と12～11 cm弱および10 cm弱以下の3群があり、その相関をみると径が大きくなるほど最上段幅が長くなる傾向がある(第44図)。例数は少ないが普通円筒A類の最上段幅は長く、B類は短い傾向にある。

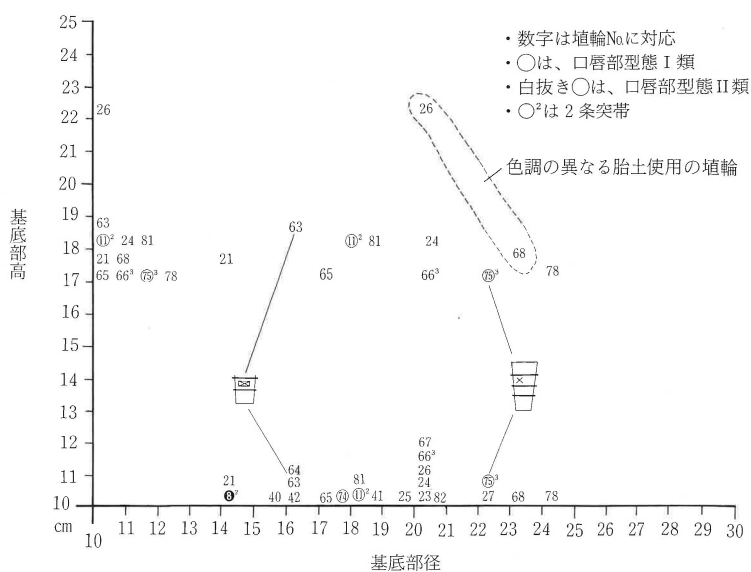
以上のように円筒埴輪の径の大小に対応して最上段幅と突帯数が変化する傾向がある一方で、基底部の高さや突帯間の上下幅はほとんど変化しない。

第44図 円筒埴輪の計測値①—口径・最上段幅の度数分布とその相関—

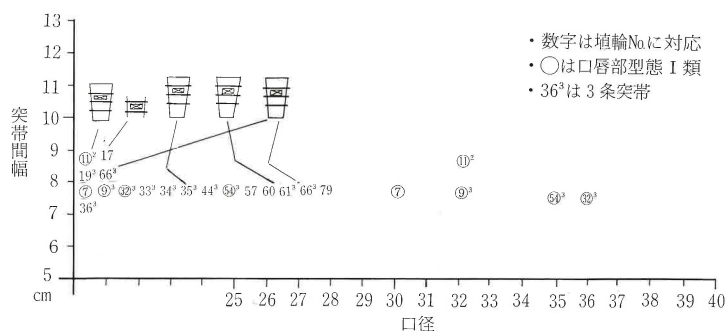


第45図 円筒埴輪の計測値②

—基底部径・基底部高の度数分布とその相関—



第46図 円筒埴輪の計測値③ —突帯間幅の度数分布と口径との相関—





基底部高は17～18cm台に集中し、径の大小には対応せず、突帯数と相関しない(第45図)。突帯間幅も8cm弱に極端に集中し、径と突帯数には無関係である(第46図)。ということは円筒埴輪製作時に、径の大小や突帯数すなわち円筒埴輪の高さには関係なく、基底部の高さと突帯の位置が同一の値に揃えられていたこと、つまり同じものさしを用いて突帯を割り付けていったことを示している。しかも普通円筒だけでなく朝顔形円筒の胴部にも例外がないから、朝顔形円筒の肩部以下の製作は普通円筒と同じ規格で作られていたことになる。

なお基底部高は突帯間幅の約2倍だが、平均値でみると $18-(8 \times 2)=2$ cmとなり正確に2倍ではない。突帯そのものの幅(約2cm)を考慮すると本来あるべき第1突帯が省略されたと考えられる。そして突帯と突帯の間の一単位は約10cmであり、その単位を割り付けたものさしが使用されたと推定される。さてこのような基底部の高い円筒埴輪は岸本圭氏によって「嘉穂型」円筒埴輪と名付けられている(註1)。まさにそれにあたる。嘉穂型円筒埴輪は福岡県遠賀川流域の嘉穂地方に留まることなく東にその分布をひろげ、豊後国東半島に達することが明らかになった。さて突帯が同一の幅で割り付けられたとすると、突帯数と最上段幅の値をもとに普通円筒の器高を推定することができる。突帯そのものの上下幅は平均2cmであるから、三条突帯のA類は基底から第1突帯まで20cm、第2突帯まで10cm、第3突帯まで10cm、最上段幅は10～15cmとなり器高は約50～55cmと推定される。二条突帯のB類は同じく第1突帯まで20cm、第2突帯まで10cmで最上段幅は10～13cmで、器高約40～43cmとなる。高さの微妙な違いは最上段の上下幅と径の大小に対応していたと推定される。

次に朝顔形円筒埴輪の場合は資料数が少ないのでかなり思い切った復元なのだが、口径と頸部径にばらつきがあり、それが朝顔口縁部最上段の長さと同様である(第47図)。つまり頸部径が大きいほど口径も大きく朝顔の最上段が長くのびる傾向がある。また三条突帯の44のように頸部径の大きな朝顔形円筒には肩部の上下幅が20cmと高いものと、70のように肩部幅約15cmと低いものがある。前者を朝顔形円筒A1類、後者を朝顔形円筒A2類とする。また頸部径が11cm台と小さな28のように朝顔部の開きと高さが小さな一群がある(29・42)。このタイプは朝顔口縁部の最上段が途中で外に屈折する傾向がある(28)。これはA類の朝顔部が中央突帯で屈折するように作ることから考えて、屈折部までは同じように作りながら中央突帯を下にずらして接合し、口縁部を短く止めた製作技法に起因すると考えられる。そうすると事例はないのだが小型の胴部二条突帯の朝顔形円筒の存在が推定される。仮に朝顔形円筒B類とする。

さて朝顔形円筒も普通円筒と同じものさしの割り付けが行なわれているとみられるので、同様に規格と器高を復元すると朝顔形円筒A1類は20、10、10、肩部20、頸部以上25cmで器高は約85cm、朝顔形円筒A2類は20、10、10、肩部15、頸部以上20cmで器高は約75cm、朝顔形円筒B類は仮にあるとして20、10、肩部15、頸部以上20cmで器高は約65cmとなる。肩部が上下幅が長いのが特徴である。

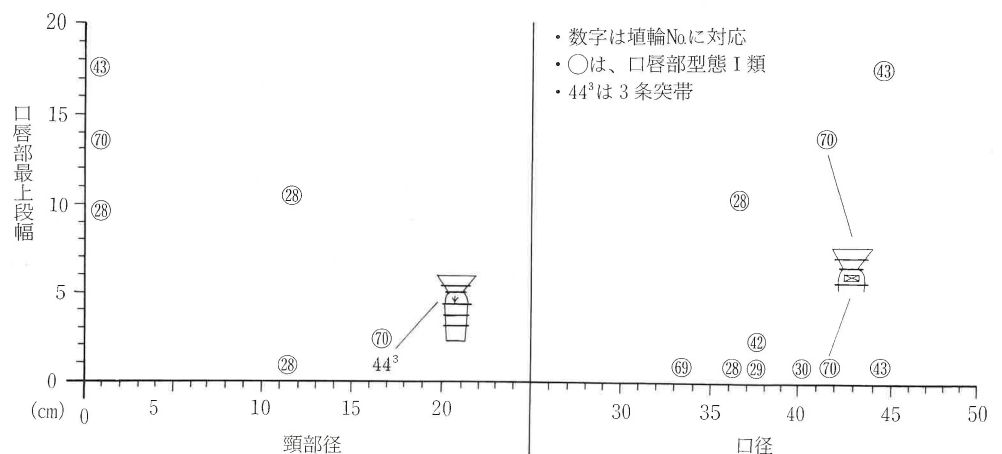
次に細部の形態、調整技法等を記述していく。

基底部成形技法は粘土紐巻きあげの出発点となる厚い幅広の粘土板を張り合わせた基底部を作り、内傾接合で巻き上げていく技法である。

基底部は厚く特別な底部調整もおこなわれていない。接地面には乾燥時についたと推定される圧痕が残っている例が多い。

外面調整技法は1次調整タテハケのみであるが、ハケの条線がきわめて浅く板状工具に

第47図 猫石丸山古墳出土朝顔形円筒埴輪の各部計測値の度数分布とその関係



よるタテ方向のナデと呼ぶべきものが多い。実測図ではわざと強調している。

内面調整は、指圧痕と指ナデが基本で、粘土帯接合痕が内面に明瞭に残る例が多い。内面特に最上段内面に明瞭なヨコハケを最終段階で施す埴輪がある(第57図)。後述する口唇部Ⅱ・Ⅲ類の円筒埴輪にのみ認められる特有の処理である。

突帯の断面形態は、通常の台形からやや低いもの、幅広のものまでであるが、いずれも3本指をあててヨコナデ調整したものである。56のみは三角突帯であった。下面のヨコナデが十分でなく接合痕が残る例が多い。突帯の接合方法で接合面に沈線などを施す破片はなかったが、ヨコナデをいれてハケメが消える例がある。

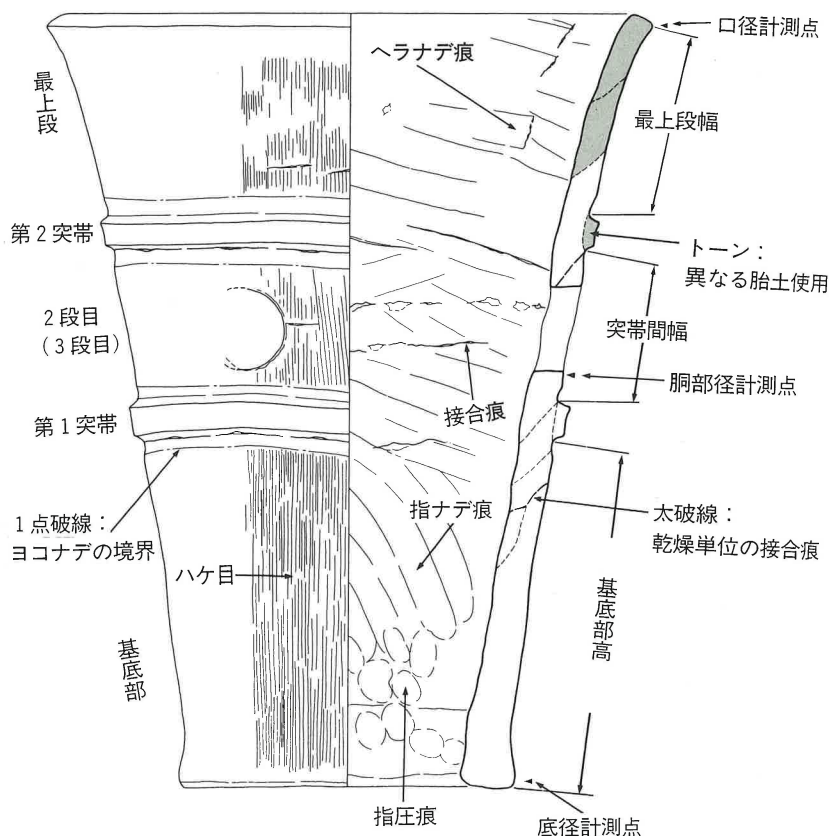
最上段口縁部の形態(第57図)には、3手法がある。Ⅰ類は3本指で丁寧に断面方形に仕上げるもので、規格のA・B類双方に見いだされる。Ⅱ類は2本指で上方に薄く摘みあげる形態で、Ⅲ類は同じく2本指で側方に摘み出す形態である。Ⅱ・Ⅲ類は二条突帯の普通円筒B類にのみみとめられ、しかもこの口縁部形態の普通円筒は大部分内面ヨコハケ調整が行なわれている(第57図)。

透穴は円形透かしのみである。二条突帯のB類には突帯間に対抗位に2個、三条突帯のA類には対抗位に2個ずつ交差して付けられている。基底部に透かしはなかった。朝顔形円筒の場合は肩部の上位に2個円形透かしを加えており、肩部上下幅が通常の朝顔形円筒に比べて長いという特徴は、この部分に透かしを入れることをあらかじめ予定した規格であろう。なおこの特徴は嘉穂地方の朝顔形円筒と共通である(註2)。「嘉穂型」の朝顔形円筒埴輪といってもよいかもしれない。

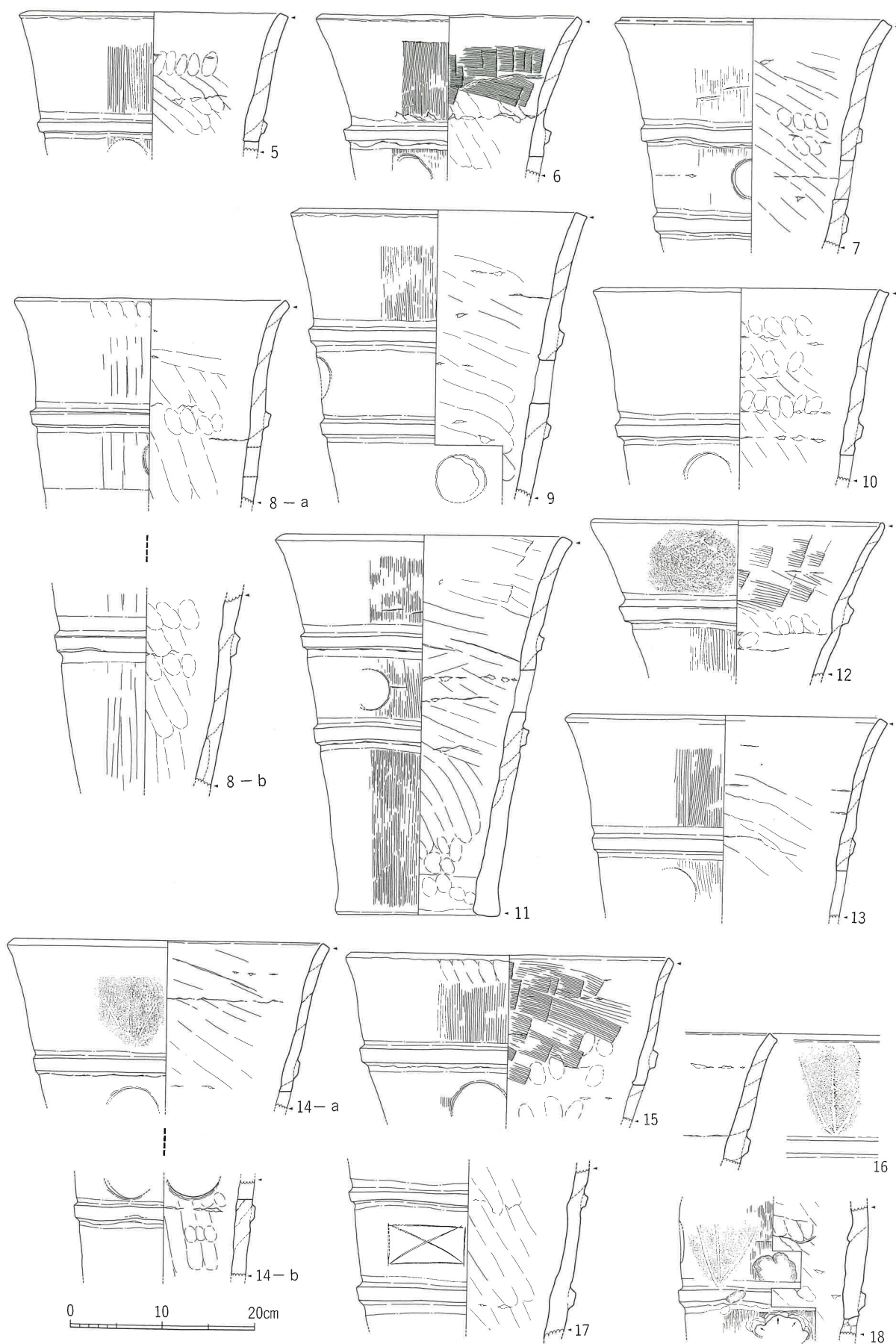
ヘラ記号が認められる(第43・56図、図版21・22)。Ⅰ類は鳥足形で、ロ類はマス形、ハ類は格子形、ニ類はX字形の4種類が認められる。ヘラは透穴穿孔と同じ鋭利な工具を使用しているが、ニ類75のみは植物の茎を使用したと推定される。Ⅰ類は円筒埴輪A類にのみ記され、位置も普通円筒では最上段、朝顔形円筒では肩部につけられる。3本のヘラ描きの交点が第3突帯に接するように描かれる。ロ類は円筒埴輪A類B類ともにあり、位置は普通円筒A類では第2突帯と第3突帯の間、普通円筒B類では第1突帯と第2突帯の間、朝顔形円筒では肩部上位に描く。ハ類は普通円筒B類にのみ記され、位置は最上段である。朝顔形円筒にハ類は記されていない。ニ類は1例のみだが、今のところ普通円筒A類にある。11)③で詳述する。

#### 円筒埴輪のまとめ 一分類一

以上から猫石丸山古墳の円筒埴輪は第43図のように分類できる。普通円筒は三条突帯のA類と二条突帯のB類からなり、ヘラ記号Ⅰ類とニ類を有する個体をさらにA1類とし、ヘラ記号ロ類をA2類とする。B類はA類と同じ処理の口唇部Ⅰ類をもつものをB1類とする。ヘラ記号ロ類が記されたものが多い。口唇部Ⅱ・Ⅲ類はB類に限られ、ヘラ記号ハ類が用いられている。これをB2類とする。



範例：実測図の記号と計測点



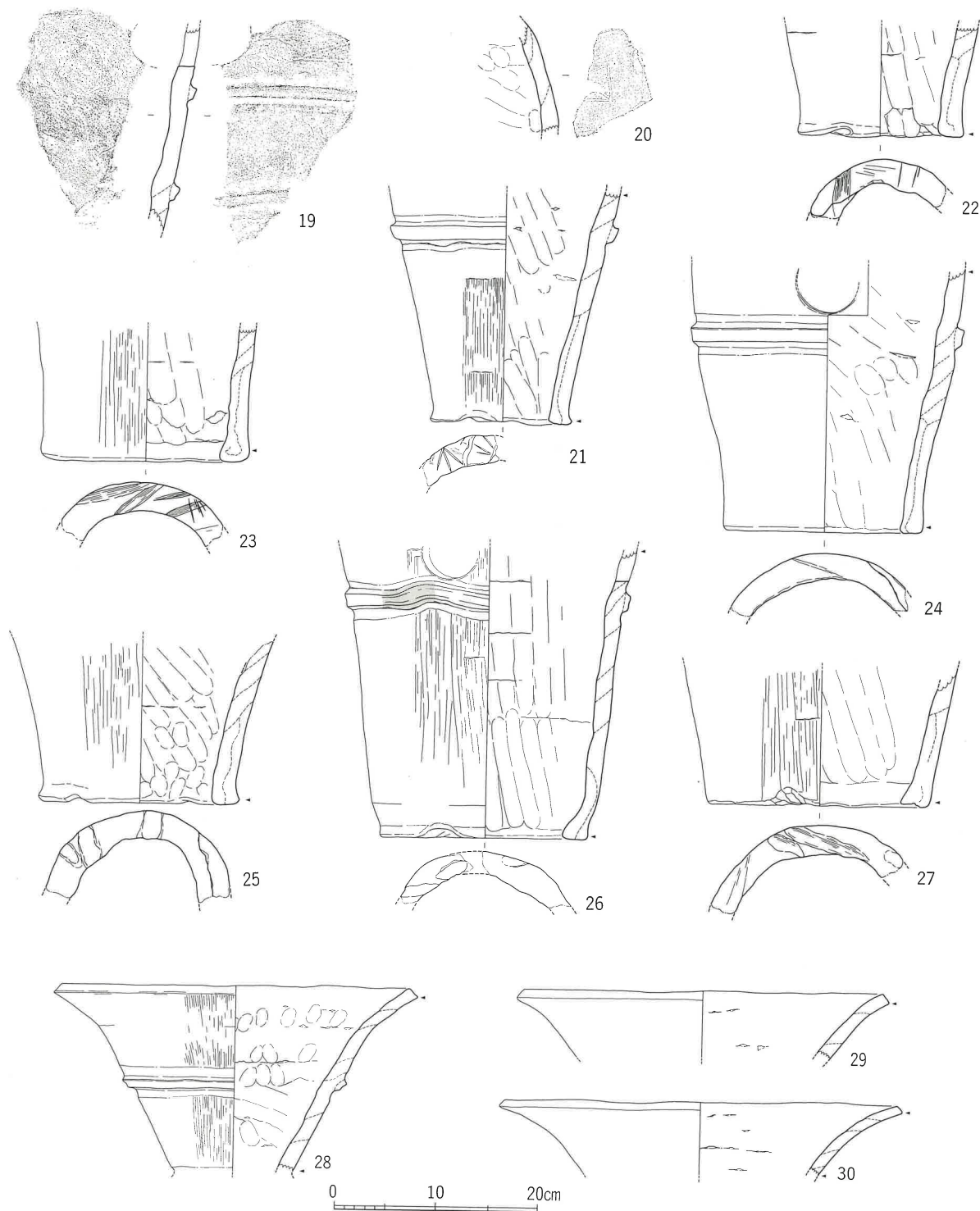
第48図 猫石丸山古墳出土土円筒埴輪 (1) (1/6)



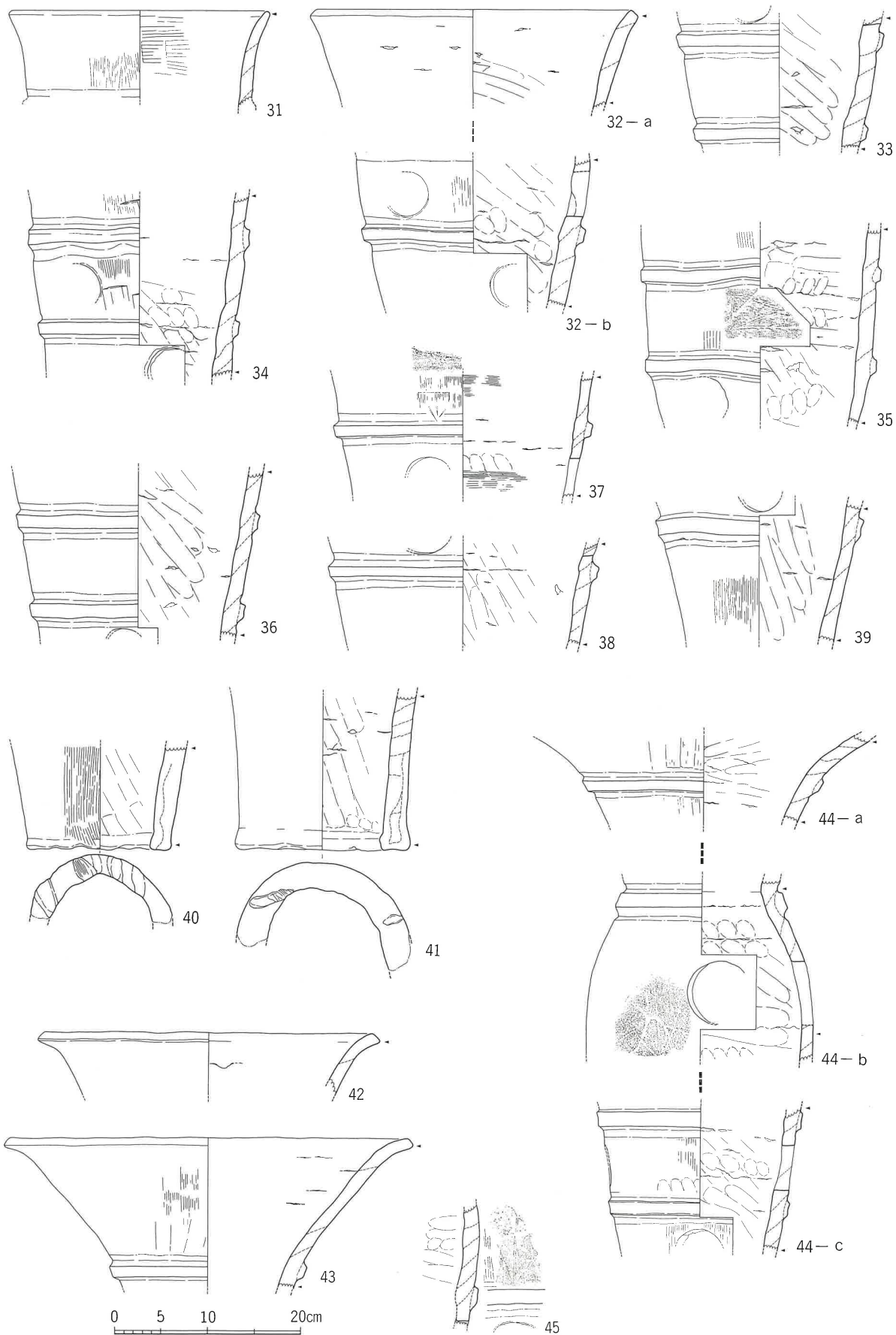
朝顔形円筒は規格によってA1類・A2類・B類に別れるが、A1類には口唇部I類とヘラ記号イ類が対応し、A2類には口唇部I類とヘラ記号ロ類が対応する。朝顔形円筒B類になると推定される小型の朝顔形円筒にはヘラ記号イ・ロ類しかなく、朝顔形円筒にはハ類がまったく記されていないので、普通円筒のB1類に対応すると推定される朝顔形円筒として、B1類とする。

註1、岸本圭「北部九州における円筒埴輪の規格性」『九州考古学』71 1996 九州考古学会

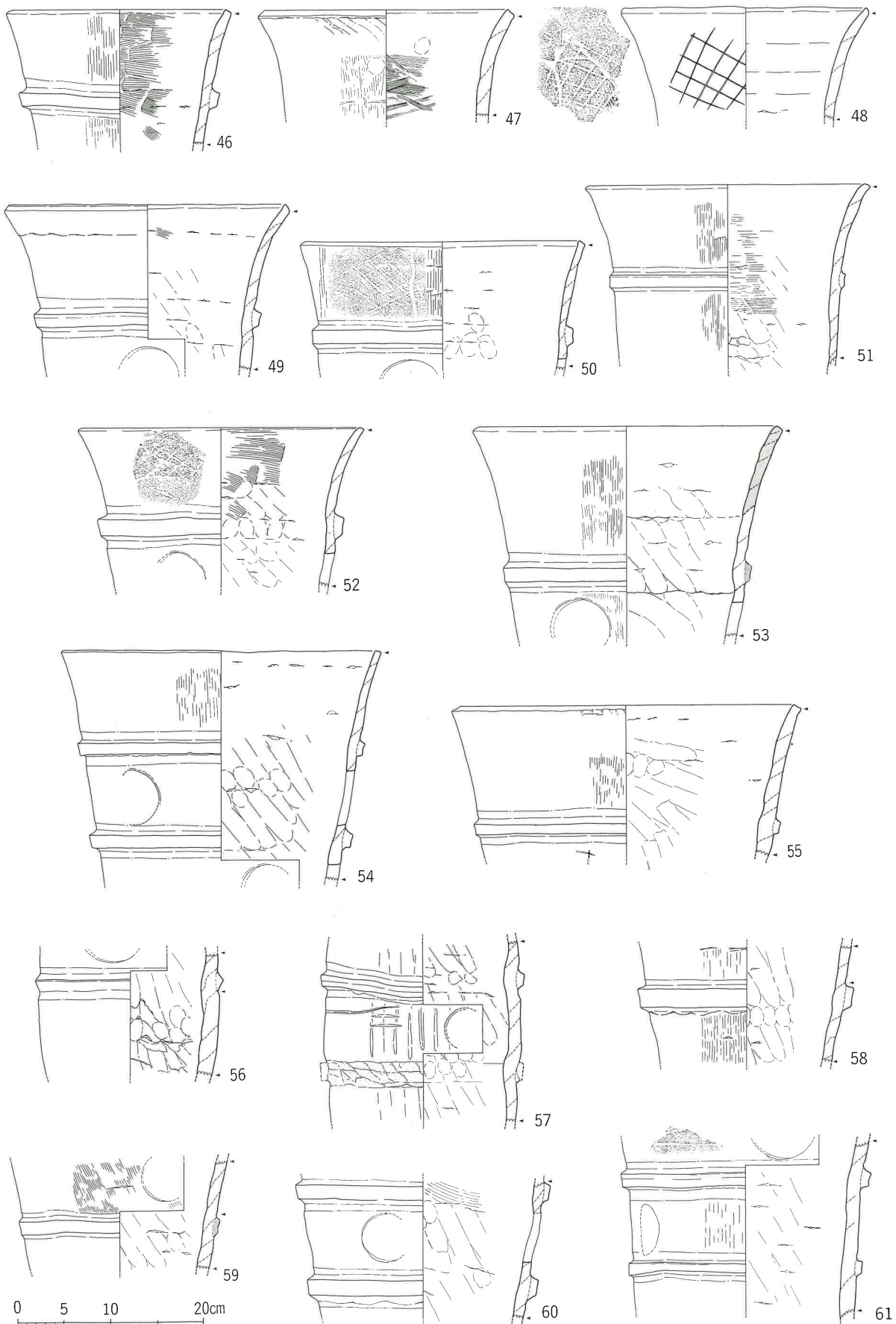
註2、上野智裕編『次郎太郎古墳群』1997 稲築町教育委員会



第49図 猫石丸山古墳出土円筒埴輪(2)―第1トレンチ・普通円筒・朝顔形円筒(1/6)

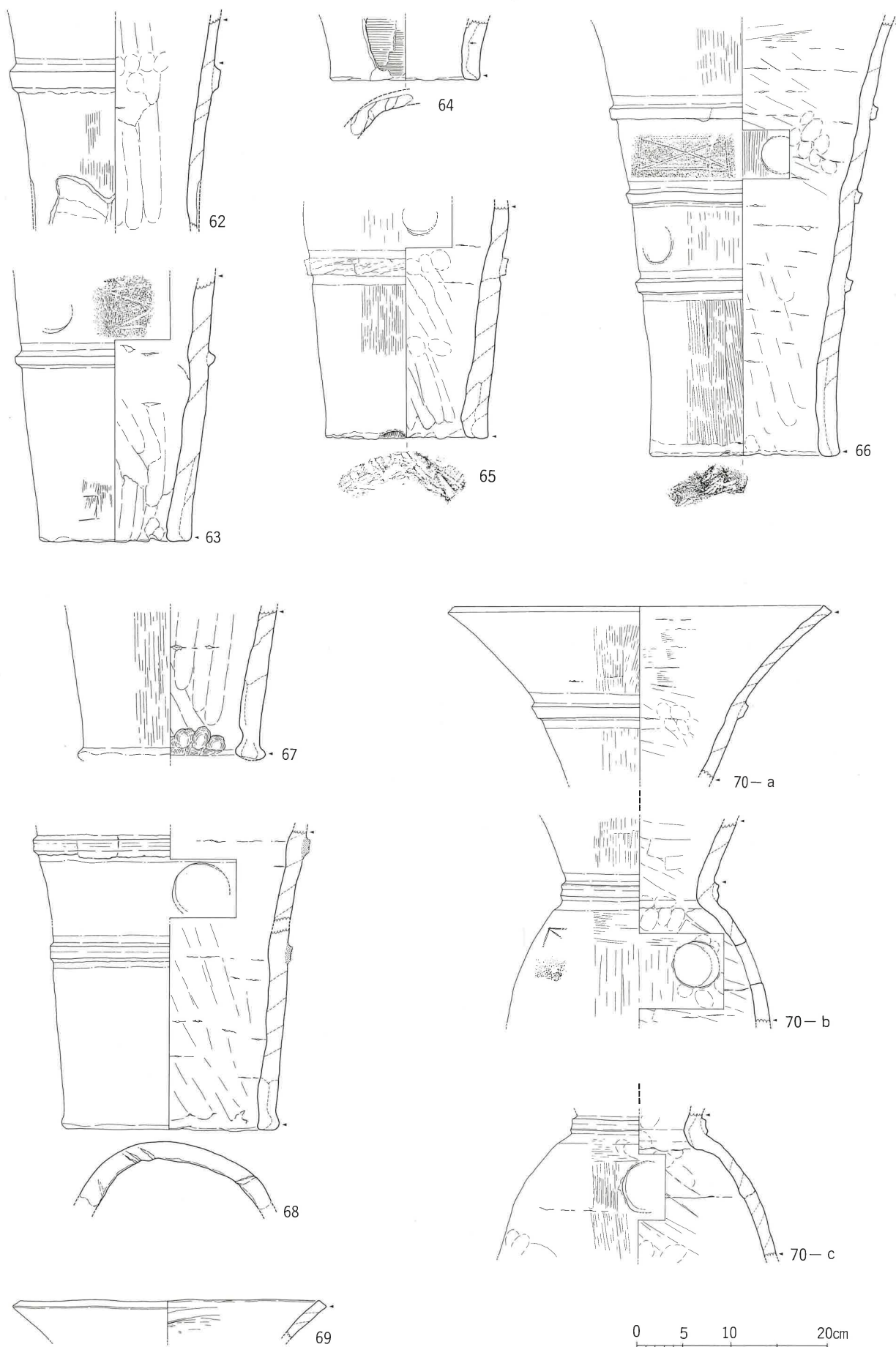


第50図 猫石丸山古墳出土土円筒埴輪(3)―第2トレンチ・普通円筒・朝顔形円筒―(1/6)

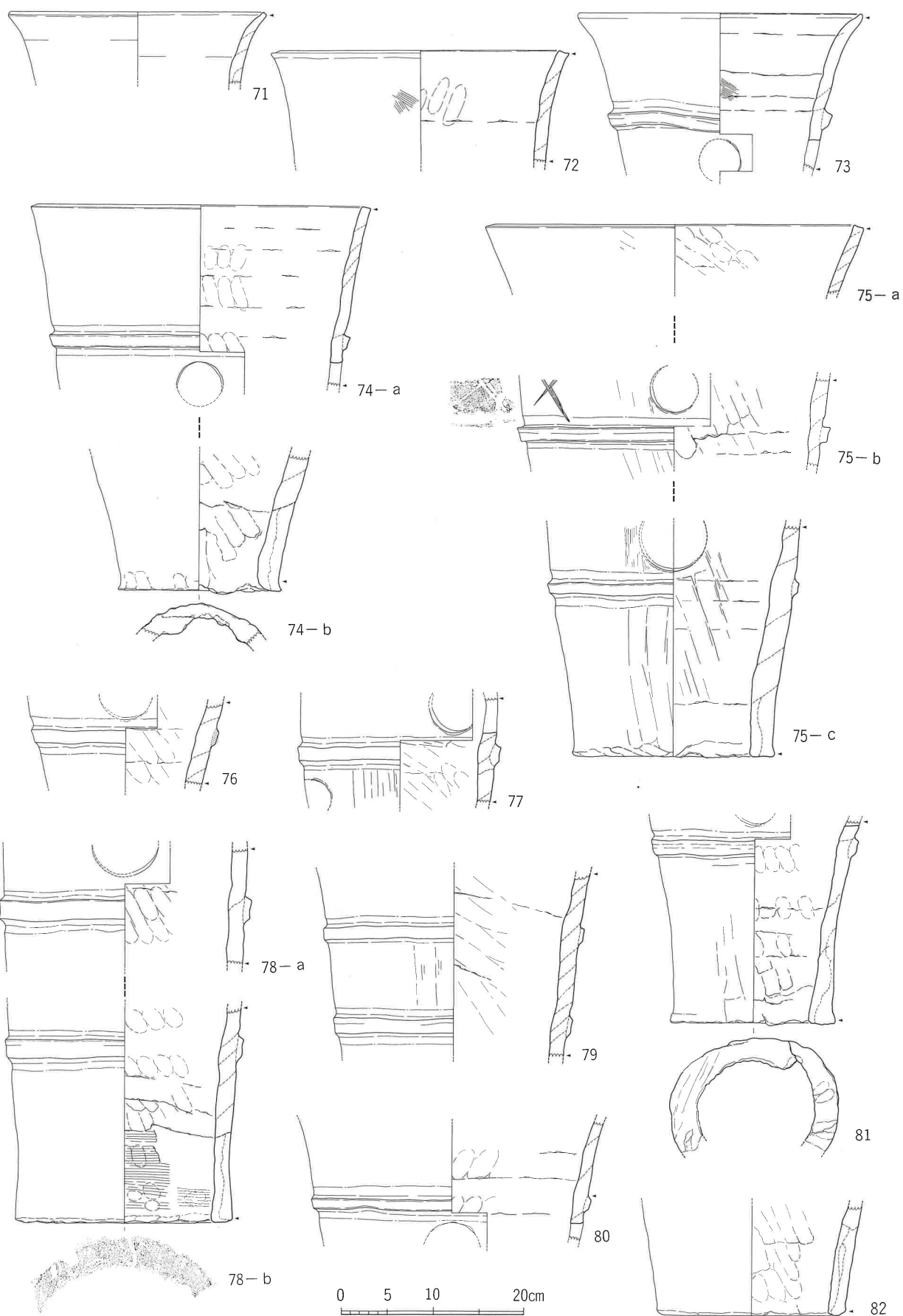


第51図 猫石丸山古墳出土土円筒埴輪（4）—第3トレンチ・普通円筒—（1/6）





第52図 猫石丸山古墳出土土円筒埴輪(5)―第3トレンチ・普通円筒・朝顔形円筒(1/6)



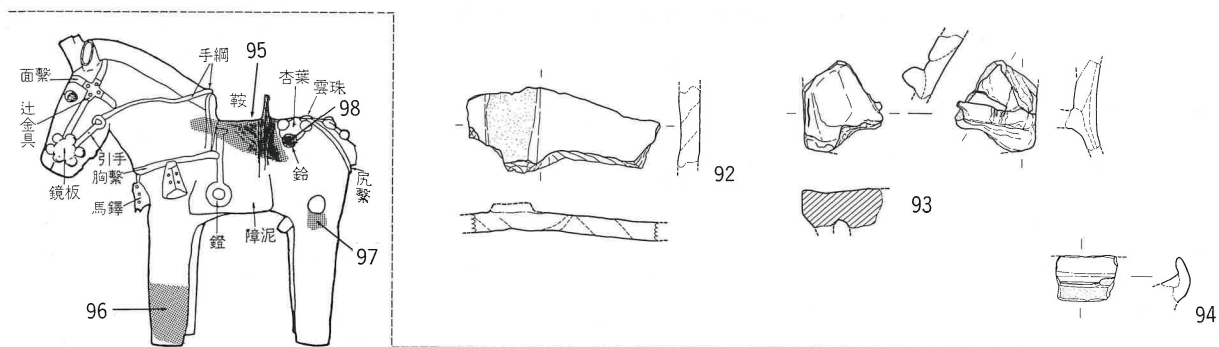
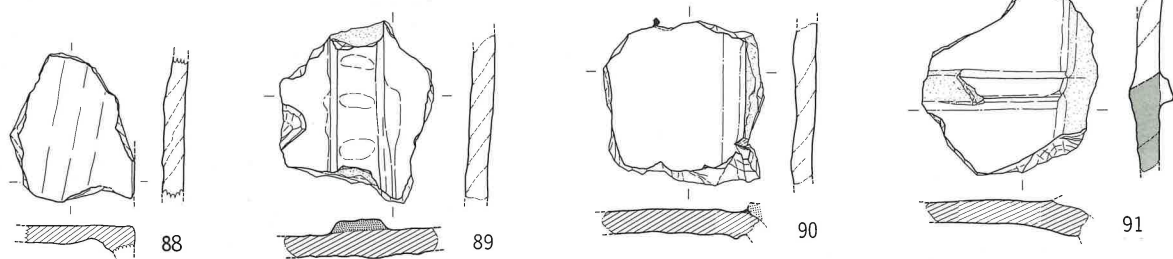
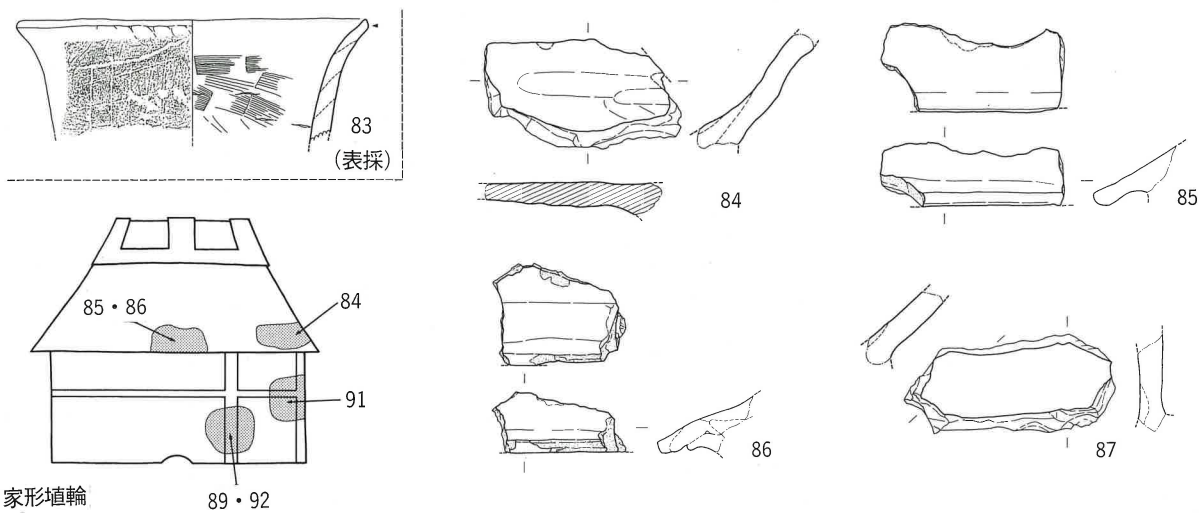
第53図 猫石丸山古墳出土土円筒埴輪(6)―第4トレンチ・普通円筒(1/6)

第13表 猫石丸山古墳出土土円筒埴輪観察表

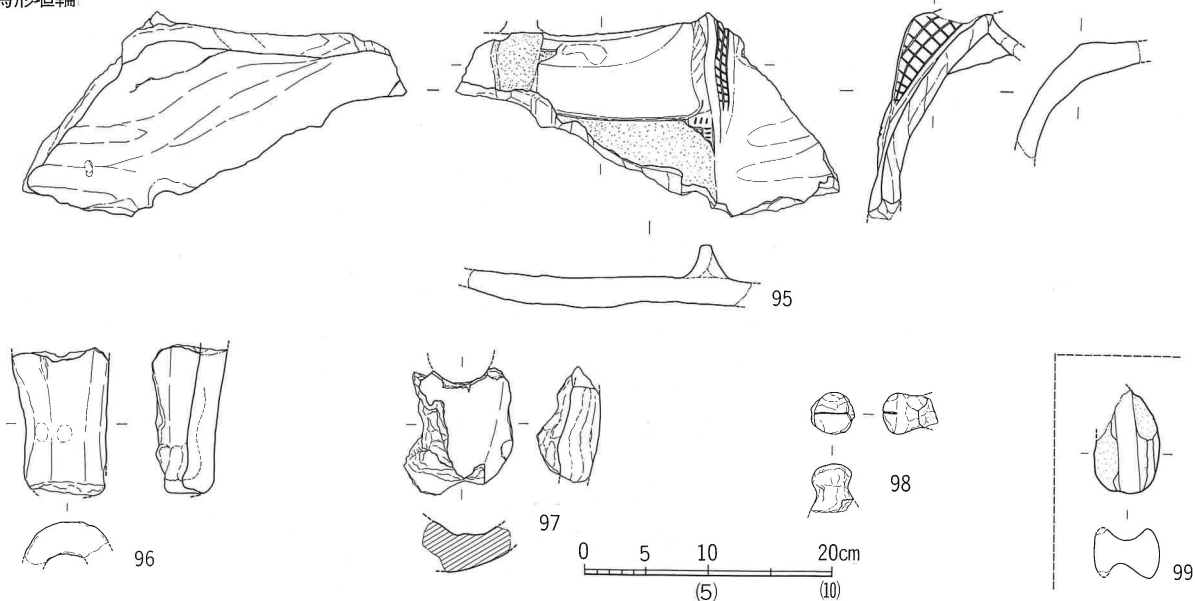
| No.  | 出土位置<br>層位 | 器種          | 規格 ( )つきは復元径・単位(cm) |                    |        |        |             |            |      | 胎土                   | 成形              | 調整                    |                                | 色調                 |             | 口唇部<br>形態 | 突帯       | 送り穴(単位:cm)   | ヘラ<br>記号 | 赤色<br>顔料 | 備考                             |
|------|------------|-------------|---------------------|--------------------|--------|--------|-------------|------------|------|----------------------|-----------------|-----------------------|--------------------------------|--------------------|-------------|-----------|----------|--------------|----------|----------|--------------------------------|
|      |            |             | 器高                  | 口径                 | 頸部径    | 底部径    | 最上段<br>突起間隔 | 底部高        |      |                      |                 | 外面                    | 内面                             | 外・内面               | 断面          |           |          |              |          |          |                                |
| 5    | 1トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢAorB1  | —                   | (29.6)             | —      | —      | 11.4        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(5本/1cm)     | 斜め強い指ナデ・<br>指圧痕                | 明橙褐色               | 淡褐色         | I         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部(1/4片)                      |
| 6    | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣB2     | —                   | (29.2)             | —      | —      | 12.1        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(7本/1cm)     | 斜め指ナデ後<br>横ハケ<br>(11・12本/1cm)  | (外)明黄褐色<br>(内)明茶褐色 | 暗灰色         | II        | 低い<br>円形 | 指痕残る         | —        | —        | 口縁部(1/5片)                      |
| 7    | 1トレンチⅢ・Ⅳa層 | 普通円筒ⅢAorB1  | —                   | (30.3)             | —      | —      | 11.8        | 7.5        | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>後横ナデ         | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 明茶褐色               | 灰色          | I         | 低い<br>円形 | 2・<br>径4.2   | —        | —        | 口縁部・<br>胴部(1/3片)               |
| 8a   | 1トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢB2     | —                   | (30.1)             | —      | —      | 11.5        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>後横ナデ         | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 明赤褐色               | 黒灰色         | II        | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部・胴部(1/3片)<br>2条突帯と推定される     |
| 8b   | 1トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢB2     | —                   | —                  | —      | (14.2) | —           | 14.5<br>以上 | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 明茶褐色               | 灰褐色         | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 基底部(1/4片)<br>2条突帯と推定される        |
| 9    | 1トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢA層     | —                   | (32.2)             | —      | —      | 12.4        | 7.8        | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 斜め指ナデ                          | 淡黄褐色               | 黄灰褐色        | I         | 低い<br>円形 | 2・1・<br>径4.9 | —        | —        | 口縁部・胴部(1/4片)<br>3条突帯           |
| 10   | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣAorB1  | —                   | 32.1               | —      | —      | 14.1        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | ナデ?                   | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 明黄茶褐色              | 黒・<br>淡灰色   | I         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部・胴部(1/2片)                   |
| 11   | 1トレンチⅣ層    | 普通円筒ⅣB1     | 41.0                | 32.2               | —      | 18.0   | 10.5        | 8.5        | 18.2 | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ(10<br>・12本/1cm) | 斜めナデ・指ナデ・<br>指圧痕               | 明橙色                | 淡灰・<br>明褐色  | I         | 低い<br>円形 | 径4.6         | —        | —        | 口縁部・基底部<br>(1/2片)・2条突帯         |
| 12   | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣB2     | —                   | (31.9)             | —      | —      | 9.5         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(4本・1cm)     | 横ナデ・指圧痕・<br>横・斜めハケ<br>(4本/1cm) | 明橙褐色               | 灰褐色         | II        | 低い<br>円形 | —            | ハ・1      | —        | 口縁部(1/5片)                      |
| 13   | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣAorB1  | —                   | (34.8)             | —      | —      | 12.9        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(7本/1cm)     | 斜め指ナデ                          | 明茶褐色               | 黒灰・<br>灰褐色  | I         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部(1/4片)                      |
| 14   | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣA1     | —                   | 35.1               | —      | —      | 12.6        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | ナデ?                   | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 明茶褐色               | 黒色          | I         | 低い<br>円形 | 1+2          | イ        | —        | 口縁部(1/2片)・胴部<br>(1/2片)・3条突帯    |
| 15   | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣB2     | —                   | 35.7               | —      | —      | 9.5         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(5本/1cm)     | 横ナデ・指圧痕・<br>横ハケ<br>(7・8本/1cm)  | 淡黄褐色               | 淡灰色         | II        | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部(1/2片)                      |
| 16   | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣA1     | —                   | —                  | —      | —      | 10.9        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | ナデ                             | 明黄褐色               | 淡灰・<br>明黄褐色 | I         | 低い<br>円形 | —            | イ        | —        | 口縁部(1/8片)                      |
| 17   | 1トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢA2orB1 | —                   | —                  | —      | —      | 8.5         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | 斜め指ナデ                          | 淡褐色                | 灰・<br>淡褐色   | —         | 低い<br>円形 | —            | ロ・1      | —        | 胴部(1/4片)                       |
| 18   | 1トレンチⅣa層   | 朝顔形円筒A1     | —                   | —                  | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(7・8本/1cm)   | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 明茶褐色               | 灰色          | —         | 低い<br>円形 | 1・1・<br>指痕残す | イ        | —        | 肩部・胴部(1/2片)                    |
| 19   | 1トレンチⅣa層   | 普通円筒ⅣA2     | —                   | —                  | —      | —      | 8.2         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | 斜めナデ                           | 淡黄褐色               | 淡灰色         | —         | 低い<br>円形 | —            | ロ        | —        | 胴部片・3条突帯                       |
| 20   | 1トレンチⅢ・Ⅳa層 | 円筒埴輪ⅢAorB1  | —                   | —                  | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 斜め強指ナデ・<br>指圧痕                 | 明橙褐色               | 灰色          | —         | —        | —            | ロ        | —        | 胴部片<br>(朝顔形埴輪?)                |
| 21   | 1トレンチⅢ層    | 円筒埴輪Ⅲ層      | —                   | —                  | —      | (14.0) | —           | 17.5       | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 斜め指ナデ                          | 淡赤褐色               | 灰色          | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 底部・胴部(1/3片)                    |
| 22   | 1トレンチⅣa層   | 円筒埴輪ⅣA層     | —                   | —                  | —      | 16.4   | —           | 10.7<br>以上 | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | 斜め・横指ナデ・<br>指圧痕                | 淡黄褐色               | 淡灰色         | —         | —        | —            | —        | —        | 基底部(1/3片)                      |
| 23   | 1トレンチⅢ層    | 円筒埴輪Ⅲ層      | —                   | —                  | —      | (20.4) | —           | 13.0<br>以上 | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 縦指ナデ・指圧痕                       | 淡褐色・<br>淡赤褐色       | 黄灰色         | —         | —        | —            | —        | —        | 基底部(1/2片)                      |
| 24   | 1トレンチⅢ層    | 円筒埴輪Ⅲ層      | —                   | —                  | —      | (20.0) | —           | 18.0       | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 横み上げ<br>(張り合わせ) | 不明                    | 斜め・縦指ナデ・<br>指圧痕                | 明赤褐色               | —           | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 基底部(1/4片)+<br>胴部(2/3片)         |
| 25   | 1トレンチⅣa層   | 円筒埴輪ⅣA層     | —                   | —                  | —      | 19.9   | —           | 16.0<br>以上 | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(張り合わせ)  | 1次縦ハケ                 | 斜め指ナデ・<br>深い指圧痕                | 明橙褐色               | 明灰色         | —         | —        | —            | —        | —        | 基底部(2/3片)                      |
| 26   | 1トレンチⅢ層    | 円筒埴輪ⅢA?     | —                   | —                  | —      | 20.3   | —           | 22.3       | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 横み上げ<br>(張り合わせ) | 1次縦ハケ                 | 縦・斜め指ナデ                        | 淡黄褐色               | 淡灰色         | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 底・胴部(1/2片)<br>突帯の一部の胎土が<br>異なる |
| 27   | 1トレンチⅢ層    | 円筒埴輪Ⅲ層      | —                   | —                  | —      | 22.0   | —           | 13.6<br>以上 | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 横み上げ<br>(張り合わせ) | 1次縦ハケ                 | 斜め指ナデ                          | 明橙色                | 淡黄灰色        | —         | —        | —            | —        | —        | 基底部(1/3片)                      |
| 28   | 1トレンチⅣa層   | 朝顔形円筒B1?    | —                   | (36.1)             | (11.6) | —      | 10.4        | 9.0        | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(5・6本/1cm)   | 横・斜めナデ・<br>指圧痕                 | 明橙色                | 灰色          | I         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部(1/5片)                      |
| 29   | 1トレンチⅣa層   | 朝顔形円筒B1?    | —                   | 37.0               | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 横ナデ                   | 横ナデ                            | (外)明橙褐色<br>(内)灰赤褐色 | 灰色          | I         | —        | —            | —        | —        | 口縁部(1/2片)                      |
| 30   | 1トレンチⅣa層   | 朝顔形円筒A層     | —                   | (40.2)             | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>横ナデ          | 横ナデ                            | 淡黄褐色               | 淡黄褐色        | I         | —        | —            | —        | —        | 口縁部(1/5片)                      |
| 31   | 2トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢB2     | —                   | (28.1)             | —      | —      | 9.5         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 横ヘラナデ?                         | 明橙褐色               | 明橙褐色        | II        | —        | —            | —        | —        | 口縁部(1/6片)                      |
| 32-a | 2トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢA層     | —                   | (35.5)             | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 横ナデ                   | 斜めナデ                           | 淡黄褐色               | 淡灰褐色        | I         | —        | —            | —        | —        | 口縁部(1/4片)                      |
| 32-b | 2トレンチⅢ層    | 円筒埴輪ⅢA層     | —                   | —                  | —      | —      | 7.5         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ?                | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 淡黄褐色               | 淡灰褐色        | —         | 低い<br>円形 | 2・<br>径4.8   | —        | —        | 胴部(1/6片)・3条突帯                  |
| 33   | 2トレンチⅢa層   | 円筒埴輪Ⅲa層     | —                   | —                  | —      | —      | 7.5         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | 斜め指ナデ                          | 明橙色                | 灰色          | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 胴部(1/5片)・3条突帯                  |
| 34   | 2トレンチⅢb層   | 円筒埴輪ⅢA層     | —                   | —                  | —      | —      | 7.5         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ<br>(5本/1cm)     | 斜め・横指ナデ・<br>指圧痕                | 淡明橙褐色              | 灰褐色         | —         | 低い<br>円形 | —            | あり       | —        | 胴部(1/4片)・No32と<br>同一? 3条突帯     |
| 35   | 2トレンチⅢ層    | 普通円筒ⅢA2     | —                   | —                  | —      | —      | 7.7         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 淡黄褐色               | 灰褐色         | —         | 低い<br>円形 | —            | ロ        | —        | 胴部(1/4片)・No31と<br>同一? 3条突帯     |
| 36   | 2トレンチⅢ層    | 円筒埴輪Ⅲ層      | —                   | —                  | —      | —      | 7.4         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ?                | 斜め指ナデ                          | 淡黄褐色               | 淡灰色         | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 胴部(1/6片)・3条突帯                  |
| 37   | 2トレンチⅢa層   | 円筒埴輪Ⅲa層     | —                   | —                  | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 横ハケ・指圧痕                        | 淡黄褐色               | 淡黄褐色        | —         | 低い<br>円形 | —            | イ        | —        | 胴部(1/3片)・口縁部                   |
| 38   | 2トレンチⅢa層   | 円筒埴輪Ⅲa層     | —                   | —                  | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>が粒子<br>細かい胎土 | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | 斜め指ナデ                          | 淡黄褐色               | 淡灰色         | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 胴部(1/2片)<br>別系統の埴輪?            |
| 39   | 2トレンチⅢ層    | 円筒埴輪Ⅲa層     | —                   | —                  | —      | —      | 10.6<br>以上  | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 横み上げ<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ?                | 斜め指ナデ                          | 明赤褐色               | 淡黄<br>灰褐色   | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 胴部(1/5片)・底部                    |
| 40   | 2トレンチⅢ層    | 円筒埴輪Ⅲa層     | —                   | —                  | —      | 15.7   | —           | 11.1<br>以上 | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 張り合わせ           | 1次縦ハケ<br>(4・5本/1cm)   | 斜め指ナデ                          | 黄褐色                | 灰色          | —         | —        | —            | —        | —        | 基底部                            |
| 41   | 2トレンチⅢb層   | 円筒埴輪Ⅲb層     | —                   | —                  | —      | 18.9   | —           | 16.7<br>以上 | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 明橙色                | 淡灰色         | —         | —        | —            | —        | —        | 基底部(2/3片)                      |
| 42   | 2トレンチⅢ層    | 朝顔形円筒B1?    | —                   | (37.0)             | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 横ナデ                   | 横ナデ                            | 淡黄褐色               | 灰色          | I         | —        | —            | —        | —        | 口縁部(1/10片)                     |
| 43   | 2トレンチⅢ層    | 朝顔形円筒A層     | —                   | (44.0)             | (18.4) | —      | 17.0        | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ?                | 横指ナデ                           | 明橙褐色               | 灰褐色         | I         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部(1/5片)                      |
| 44-a | 2トレンチⅢb層   | 朝顔形円筒A1     | —                   | 上(35.6)<br>下(20.6) | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 横・斜め指ナデ                        | 淡黄褐色               | 淡灰色         | —         | 低い<br>円形 | —            | —        | —        | 口縁部(1/6片)                      |
| 44-b | 2トレンチⅢa層   | 朝顔形円筒A1     | —                   | —                  | —      | (16.4) | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 不明                    | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 淡褐色                | 淡灰色         | —         | 低い<br>円形 | 2・<br>径7.0   | イ        | —        | 胴部(1/4片)                       |
| 44-c | 2トレンチⅢa層   | 朝顔形円筒A1     | —                   | —                  | —      | —      | 7.8         | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 斜め指ナデ・指圧痕                      | 淡褐色                | 淡灰色         | —         | 低い<br>円形 | 2・1・<br>径4.9 | —        | —        | 胴部(3/4片)・3条突帯                  |
| 45   | 2トレンチⅢa層   | 朝顔形円筒A1     | —                   | —                  | —      | —      | —           | —          | —    | 砂粒多い<br>大形粒有         | 輪埴み<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                 | 横指ナデ・指圧痕                       | 明黄褐色               | 灰色          | —         | 低い<br>円形 | —            | イ        | —        | 胴部                             |



| No.  | 出土位置<br>層位        | 器種             | 規格 ( )つきは復元径・単位(cm) |              |        |        |            |             |            | 胎土           | 成形                      | 調整                        |                                            | 色調                 |            | 口部<br>形態 | 突帯       | 遮し穴(単位)<br>・径単位(cm)   | ヘラ<br>記号 | 赤色<br>顔料 | 備 考                                     |
|------|-------------------|----------------|---------------------|--------------|--------|--------|------------|-------------|------------|--------------|-------------------------|---------------------------|--------------------------------------------|--------------------|------------|----------|----------|-----------------------|----------|----------|-----------------------------------------|
|      |                   |                | 器高                  | 口径           | 頸部径    | 底部径    | 肩上段幅       | 突帯間幅        | 基底部高       |              |                         | 外 面                       | 内 面                                        | 外・内面               | 断面         |          |          |                       |          |          |                                         |
| 46   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>B2     | —                   | (24.5)<br>以上 | —      | —      | 8.3        | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>(内傾接合)           | 1次縦ハケ                     | 横ナテ(5本/1cm)<br>・斜めハケ                       | 明橙褐色               | 灰褐色        | Ⅱ        | 低い<br>台形 | —                     | —        | —        | 口縁部(1/5片)・口縁部<br>がゆがんでいるので、<br>口径はまだ大きい |
| 47   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>AorB1  | —                   | (28.0)       | —      | —      | 11.2<br>以上 | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ<br>・横ナテ             | 横・斜め(11-<br>12本/1cm)ハケ                     | 淡明褐色               | 灰・<br>明褐色  | Ⅱ        | —        | —                     | —        | —        | 口縁部(1/6片)                               |
| 48   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>B2     | —                   | 27.0         | 19.2   | —      | 12.5<br>以上 | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>(内傾接合)          | ナテ?                       | ナテ?                                        | 明茶褐色               | 灰褐色        | Ⅱ        | —        | —                     | ハ-2      | —        | 口縁部(1/2片)                               |
| 49   | 3トレンチ<br>Ⅲ層下部     | 普通門筒<br>B2     | —                   | 31.0         | —      | —      | 11.1       | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>(内傾接合)          | ナテ?                       | ナテ・指圧痕<br>・斜めハケ                            | 茶褐色                | 黒褐色        | Ⅱ        | 低い<br>台形 | 円形                    | —        | —        | 口縁部・胴部(2/3片)                            |
| 50   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>B2     | —                   | (31.0)       | —      | —      | 8.8        | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                     | 横ナテ・指圧痕                                    | 淡黄褐色<br>明褐色        | 灰色         | Ⅱ        | 低い<br>台形 | 円形                    | ハ-4      | —        | 口縁部(1/4片)                               |
| 51   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>B2     | —                   | (30.9)       | —      | —      | 9.6        | 7.5<br>以上   | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                     | 斜指ナテ・指圧痕<br>・横ナテハケ                         | 淡褐色                | 灰褐色        | Ⅲ        | 低い<br>台形 | —                     | —        | —        | 口縁部(1/4片)                               |
| 52   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>B2     | —                   | (31.0)       | —      | —      | 9.6        | —           | —          | 砂粒多い<br>大形粒有 | 輪積み<br>(内傾接合)           | 不明                        | 斜め指ナテ・指圧痕<br>・横(7-8本/1cm)・<br>斜め(5本/1cm)ハケ | 明橙褐色<br>淡黄褐色       | 灰褐色        | Ⅲ        | 低い<br>台形 | 円形                    | ハ-2      | —        | 口縁部(1/6片)                               |
| 53   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A?     | —                   | (33.5)       | —      | —      | 14.5       | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>(内傾接合)           | 1次縦ハケ?                    | 斜め指ナテ                                      | 明褐色<br>明赤褐色        | 黒灰色        | Ⅰ        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径6.4           | —        | —        | 口縁部・胴部(1/4片)<br>口縁部と突帯胎土<br>異なる         |
| 54   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A      | —                   | (35.0)       | —      | —      | 9.8        | 7.9         | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ<br>・横ナテ             | 横ナテ・斜め指ナテ                                  | 明橙褐色<br>黄褐色        | 灰褐色        | Ⅰ        | 低い<br>台形 | 円形2<br>(4?)           | —        | —        | 口縁部(1/3片)<br>・3条突帯                      |
| 55   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A2orB1 | —                   | (38.0)       | —      | —      | 12.2       | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ<br>・横ナテ             | 斜め指ナテ・指圧痕                                  | 明橙褐色               | 灰・灰褐色      | Ⅰ        | 低い<br>台形 | —                     | ロ        | —        | 口縁部(1/2片)                               |
| 56   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>(内傾接合)          | 不明                        | 斜め指ナテ・指圧痕                                  | 明褐色                | 灰色         | —        | 三角       | 円形                    | —        | —        | 基底部・胴部<br>(1/5片)                        |
| 57   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | —      | 7.6        | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>(内傾接合)          | 1次縦ハケ                     | 斜め指ナテ・指圧痕                                  | 明赤褐色<br>明茶褐色       | 灰褐色<br>・黒色 | —        | 低い<br>台形 | 円形                    | —        | —        | 胴部(1/4片)・<br>歪みはげしい                     |
| 58   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                     | 斜め指ナテ・指圧痕                                  | 淡黄褐色               | 灰色         | —        | 低い<br>台形 | —                     | —        | —        | 胴部(1/4片)                                |
| 59   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪<br>A?     | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ                     | 斜め指ナテ・指圧痕                                  | 淡褐色<br>明褐色         | 淡灰褐色       | —        | 低い<br>台形 | 円形                    | —        | —        | 胴部(1/3片)・突帯<br>に異なる胎土使用                 |
| 60   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | —      | 7.7        | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 不明                        | 斜め指ナテ・指圧痕<br>・斜め(4本/1cm)<br>・横ハケ           | 淡黄褐色               | 灰色         | —        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径5.5           | —        | —        | 胴部(1/4片)                                |
| 61   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A2     | —                   | —            | —      | —      | 7.7        | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ                     | 斜めナテ                                       | 明褐色<br>淡褐色         | —          | —        | 低い<br>台形 | 円形<br>(1+1)           | ロ        | —        | 胴部(1/3片)<br>・3条突帯                       |
| 62   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪<br>B2     | —                   | —            | —      | —      | 14.5<br>以上 | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | 1次縦ハケ                     | 斜指ナテ・指圧痕                                   | 淡黄褐色               | 淡灰色        | —        | 低い<br>台形 | —                     | —        | —        | 基底部・胴部<br>(1/4片)                        |
| 63   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪<br>B1     | —                   | —            | —      | 16.4   | —          | —           | 18.5       | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ?                    | 斜めの粗い指ナテ                                   | 淡明橙褐色              | 灰褐色        | —        | 低い<br>台形 | 円形                    | ロ        | —        | 基底部(1/6片)<br>・2条突帯                      |
| 64   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | 16.0   | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 張り合わせ<br>細かい粒<br>子      | 剥離面に<br>横ハケ<br>(4-5本/1cm) | 不明                                         | 淡褐色                | 灰色         | —        | —        | —                     | —        | —        | 基底部(1/5片)                               |
| 65   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | 17.4   | —          | —           | 17.1       | 砂粒多い         | 張り合わせ<br>大形粒有<br>上げ内傾接合 | 1次縦ハケ                     | 粗い横ナテ・指圧痕                                  | 明橙褐色               | 灰色         | —        | —        | 円形                    | —        | —        | 基底部(1/3片)                               |
| 66   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A2     | 46.1<br>以上          | (32.0)<br>以上 | —      | 20.2   | 9.0<br>以上  | 7.6<br>・8.0 | 17.4       | 砂粒多い         | 張り合わせ<br>大形粒有<br>上げ内傾接合 | 1次縦ハケ<br>(5-6本/1cm)       | 斜め・縦ナテ・<br>指圧痕・一部横ハケ                       | 明橙褐色               | 灰色         | —        | 低い<br>台形 | 円形2・<br>径4.0          | ロ-2      | —        | 基底・胴部(1/2片)・<br>3条突帯                    |
| 67   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | 20.0   | —          | —           | 16.0<br>以上 | 砂粒多い         | 張り合わせ<br>大形粒有<br>上げ内傾接合 | 1次縦ハケ                     | 縦・斜め指ナテ<br>(指紋残る)                          | (外)淡黄褐色<br>(内)明橙褐色 | 灰色         | —        | —        | —                     | —        | —        | 基底部(1/5片)                               |
| 68   | 3トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪<br>A?     | 32<br>以上            | —            | —      | 23.2   | —          | (9.2)       | 17.6       | 砂粒多い         | 輪積み<br>(内傾接合)           | 1次縦ハケ                     | 斜め指ナテ                                      | 明褐色<br>明茶褐色        | 灰・<br>明茶褐色 | —        | 低い<br>台形 | 円形1                   | —        | —        | 基底部(1/2片)<br>・胴部(1/5片)突帯<br>に異なる胎土使用    |
| 69   | 3トレンチ<br>Ⅲ層下部     | 朝顔形<br>円筒B1?   | —                   | (33.7)       | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 横ナテ                       | 横ナテ                                        | 明褐色                | 灰色         | Ⅱ?       | —        | —                     | —        | —        | 口縁部(1/5片)                               |
| 70-a | 3トレンチ<br>Ⅲ層下部     | 朝顔形<br>円筒A2    | —                   | (41.1)       | (15.4) | —      | 13.3       | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ<br>・横ナテ             | 斜めナテ・指圧痕<br>・横ハケ                           | 明橙褐色               | 灰色         | Ⅱ?       | —        | —                     | —        | —        | 口縁部(1/5片)                               |
| 70-b | 3トレンチ<br>Ⅲ層下部     | 朝顔形<br>円筒A2    | —                   | 上(20.8)      | 16.0   | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 1次縦ハケ<br>・横ナテ             | 粗い横・斜めナテ・<br>指圧痕                           | 明橙褐色               | 灰色         | —        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径5.0           | ロ        | —        | 胴部(1/2片)<br>・胴部(1/4片)                   |
| 70-c | 3トレンチ<br>Ⅲ層下部     | 朝顔形<br>円筒A2    | —                   | —            | (14.4) | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 横ナテ・<br>縦ハケ?              | 斜め指ナテ・横ハケ                                  | 明橙褐色               | 灰色         | —        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径5.6           | —        | あり       | 頸部(2/3片)                                |
| 71   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>B2     | —                   | (28.5)       | —      | —      | 8.0<br>以上  | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>(内傾接合)          | 横ナテ                       | 横ナテ                                        | 明橙褐色               | 黒灰色        | Ⅱ        | —        | —                     | —        | —        | 口縁部(1/6片)                               |
| 72   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>AorB1  | —                   | (32.9)       | —      | —      | 13.0<br>以上 | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>(内傾接合)          | 1次斜めハケ                    | ナテ・指圧痕                                     | 明橙褐色               | 黒灰色        | Ⅰ        | —        | —                     | —        | —        | 口縁部(1/6片)                               |
| 73   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>B2     | —                   | (31.4)       | —      | —      | 11.1       | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | 縦ナテ?                      | 横・斜め<br>(7-8本/1cm)ハケ                       | 明褐色                | —          | Ⅱ        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径4.8           | —        | —        | 口縁部(1/6片)                               |
| 74-a | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A?     | —                   | (37.4)       | —      | —      | 14.0       | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | ナテ?                       | 指ナテ・指圧痕                                    | 茶褐色                | —          | Ⅰ        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径5.0           | —        | —        | 口縁部(1/2片)・突帯<br>に異なる胎土使用                |
| 74-b | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A?     | —                   | —            | —      | (17.8) | —          | —           | 14.6<br>以上 | 砂粒多い         | 張り合わせ<br>大形粒有<br>上げ内傾接合 | ナテ?                       | 指ナテ・指圧痕                                    | 黄・赤褐色              | 黒灰色        | —        | —        | —                     | —        | —        | 基底部(1/4片)                               |
| 75-a | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A      | —                   | (41.5)       | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>(内傾接合)          | 斜め?ナテ                     | 斜め指ナテ・指圧痕                                  | 赤褐色                | 黒灰色        | Ⅰ        | —        | —                     | —        | —        | 口縁部(1/6片)                               |
| 75-b | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A      | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>(内傾接合)          | ナテ?                       | 斜め指ナテ                                      | 赤褐色                | 黒色         | —        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径5.2           | —        | —        | 胴部(1/4片)                                |
| 75-c | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 普通門筒<br>A      | —                   | —            | —      | 22.1   | —          | —           | 17.2       | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | 縦ハケ?                      | 指ナテ                                        | 赤褐色                | 黒灰色        | —        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径7.6           | —        | —        | 基底部(2/3片)                               |
| 76   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪<br>A?     | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | ナテ?                       | 斜め指ナテ                                      | 淡褐色<br>(突帯部・明褐色)   | 黒灰色        | —        | 低い<br>台形 | 円形                    | —        | —        | 胴部(1/5片)・突帯<br>に異なる胎土使用                 |
| 77   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪<br>A      | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 縦ナテ?                      | 粗い指ナテ                                      | (外)黄・灰褐色<br>(内)灰褐色 | 灰褐色        | —        | 低い<br>台形 | 円形2・<br>径上5.6<br>下4.4 | —        | —        | 胴部(1/3片)<br>・一部須恵器<br>3条突帯              |
| 78-a | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 縦ナテ?                      | 指ナテ・指圧痕                                    | 茶褐色                | 灰褐色        | —        | 低い<br>台形 | 円形2                   | —        | —        | 胴部(1/3片)                                |
| 78-b | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | (24.0) | —          | —           | 17.4       | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 縦ナテ?                      | 指ナテ・指圧痕<br>・横ハケ後指圧                         | 茶褐色                | 黒灰色        | —        | 低い<br>台形 | —                     | —        | —        | 基底部(1/3片)<br>・胴部(1/5片)                  |
| 79   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | —      | 7.7        | —           | —          | 砂粒多い         | 巻き上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | 縦ハケ?                      | 斜め指ナテ                                      | 茶褐色                | 黒灰色        | —        | 低い<br>台形 | —                     | —        | —        | 胴部(1/4片)                                |
| 80   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | —      | —          | —           | —          | 砂粒多い         | 横み上げ<br>大形粒有<br>(内傾接合)  | ナテ?                       | ナテ・指圧痕                                     | 淡黄褐色               | —          | —        | 低い<br>台形 | 円形・<br>径(5.2)         | —        | —        | 胴部(1/6片)                                |
| 81   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | 18.2   | —          | —           | 18.1       | 砂粒多い         | 張り合わせ<br>横み上げ<br>(内傾接合) | 1次縦ハケ                     | ナテ・指圧痕                                     | 茶褐色                | 黒灰色        | —        | 低い<br>台形 | 円形                    | —        | —        | 基底部・胴部(2/3片)                            |
| 82   | 4トレンチ<br>Ⅲ層       | 円筒埴輪           | —                   | —            | —      | (20.9) | —          | —           | 12.0<br>以上 | 砂粒多い         | 張り合わせ                   | ナテ?                       | 指ナテ・指圧痕                                    | 橙褐色                | 灰褐色        | —        | 低い<br>台形 | —                     | —        | —        | 基底部(1/3片)                               |
| 83   | 後門部、<br>一段目<br>表採 | 普通門筒<br>B2     | —                   | (28.3)       | —      | —      | 10.0<br>以上 | —           | —          | 砂粒多い         | 輪積み<br>大形粒有<br>(内傾接合)   | ナテ                        | 横ナテ・斜め指ナテ<br>・斜めハケ                         | 明茶褐色               | 明茶褐色       | Ⅱ        | —        | —                     | ハ-3      | —        | 口縁部(1/5片)                               |



馬形埴輪



第54図 猫石丸山古墳出土形象埴輪・土製品一家形・馬形埴輪 (1/6) ・土鍾 (1/3)

b 形象埴輪(第54図、第14表、図版19・20)

家形埴輪 84～87はいずれも屋根部の底の破片と思われる。84には妻側と平側の接点が残っており、寄棟造り家形埴輪であったことがわかる。88～92は壁の破片で、88・90・91はコーナー部である。いずれも軸部の壁は粘土紐を内傾接合した巻き上げあるいは輪積成形である。縦方向には幅広の突帯が取りつき(89・90・91・92)、91にはさらに横方向に円筒埴輪と同じ台形突帯が付けられている。縦の突帯は90・91のようにコーナー部にもある。胎土の使い方の特徴として、まったく異なる色の胎土で突帯を付ける例があり(89・90)、普通円筒A1類の一部にまったく同じ胎土の使い方が認められ、この家形埴輪を製作した工人は、普通円筒の一部も製作した可能性が高い。また91のように壁の下半の胎土に砂粒の非常に多い胎土を使っている例もある。調整はナデで丁寧に仕上げている。胎土は円筒埴輪と同一だが、全体に赤く焼き上がっている。93・94は部位不明。

コーナーに縦の突帯を付ける厚手のもの(90・91)と突帯の付かない薄手のもの(88)があるので、少なくとも2個体の家形埴輪があったと推定される。いずれも西くびれ部の第3トレンチⅢ層埴輪堆積の上位から出土した。西くびれ近くの墳丘上に配置されていたと推測される。

馬形埴輪 家形埴輪と同じく西くびれ部の第3トレンチⅢ層埴輪堆積の上位から出土した。95は鞍の部分で、前輪の部分は剥落し、後輪の右側が残る。背面には格子状の線刻が施されている。障泥の表現も剥落しているが、残った部分に線刻が認められる。96は脚部と推定される中空の破片。97は脚部側面と推定され、円形の透かし穴が残る。98は馬鈴で、その表現がよく残る。いずれも大変赤く焼き上がっている。しかし丹塗りはない。家形埴輪も同様で、製作工人は赤く焼き上げることで丹塗りを省略できるだけの製作技術の水準をもっていたものと推定される。同一個体である可能性も高いが、資料が限定されているので確定できない。

③土製品(第54図、第15表、図版20)

有溝土錘が1点、第2トレンチのⅢ層埴輪堆積中から出土している(第54図99)。(田中)

第14表 猫石丸山古墳出土土形象埴輪観察表

| No. | 出土位置・層位    | 器種   | 部 位    | 破片の大きさ       | 胎 土           | 成 形        | 調 整     |                 | 色 調     |       |     | 赤色胎土                  | 備 考                      |
|-----|------------|------|--------|--------------|---------------|------------|---------|-----------------|---------|-------|-----|-----------------------|--------------------------|
|     |            |      |        | 単位(cm)タテ×ヨコ  |               |            | 外 面     | 内 面             | 外面      | 内面    | 断面  |                       |                          |
| 84  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 屋根ひさし  | 12.0×15.5    | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 粘土板接合?     | 横指ナデ    | 指ナデ・指圧痕         | 明赤褐色    | 赤褐色   | 外・内 |                       |                          |
| 85  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 屋根ひさし  | 7.8×15.0     | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | ?          | 横ナデ     |                 | 明赤・淡茶褐色 | 一部黒灰色 | —   |                       |                          |
| 86  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 屋根ひさし  | 8.3×9.3      | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 粘土紐成形      | 横ナデ     |                 | 明褐色     | 黒灰褐色  | —   |                       |                          |
| 87  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 屋根ひさし? | 7.5×17.0     | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 粘土板2枚の接合?  | 横ナデ     | 粗いナデ            | 明赤褐色    | 黒灰色   | 外   | No.91と同一個体            |                          |
| 88  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 壁のコーナー | 12.4×10.0    | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 積み上げ(内傾接合) | ナデ      | 横指ナデ・指圧痕        | 明赤・淡褐色  | 黒褐色   | 外   |                       |                          |
| 89  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 壁      | 14.6×12.3    | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 積み上げ(内傾接合) | ナデ      | 斜め指ナデ・指圧痕       | 明赤褐色    | 黒褐色   | 外   | 突帯の胎土異なる(黄褐色)         |                          |
| 90  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 壁のコーナー | 13.0×13.0    | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 積み上げ(内傾接合) | 丁寧なナデ   | 斜め指ナデ・指圧痕       | 明赤褐色    | 黒灰褐色  | 外   | 突帯の胎土異なる(淡黄褐色)        |                          |
| 91  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 壁のコーナー | 14.5×14.0    | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 積み上げ(内傾接合) | ナデ      | (上)指ナデ・指圧痕(下)ナデ | 明赤褐色    | 黒褐色   | —   | No.87と同一個体・下部は砂礫の多い胎土 |                          |
| 92  | 3トレンチⅢ層・下部 | 家形埴輪 | 壁      | 15.6×6.8     | 砂粒多い(精緻)      | 積み上げ(内傾接合) | ナデ      | 縦指ナデ            | 明赤褐色    | 黒色    | 外・内 | 突帯剥離                  |                          |
| 93  | 3トレンチⅢ層    | 家形埴輪 | 不明     | 7.2×6.4      | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 粘土紐成形      | ナデ      |                 | 淡茶褐色    | 黒灰褐色  | —   | 部位不明                  |                          |
| 94  | 3トレンチⅠ層    | 家形埴輪 | 不明     | 3.6×5.0      | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | —          | 横ナデ     |                 | 淡茶褐色    | 黒灰色   | —   | 部位不明                  |                          |
| 95  | 3トレンチⅢ層    | 馬形埴輪 | 鞍      | 17.0×30.5    | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 積み上げ(内傾接合) | 横指ナデ    |                 | 赤褐色     | 明橙褐色  | 黒灰色 | 外・内                   | 文様・後輪の背後に格子状線刻(縦10本・横3本) |
| 96  | 3トレンチⅢ層    | 馬形埴輪 | 脚部     | 1/2形(足首径6.6) | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 粘土板張り合わせ   | ナデ      | ナデ・指圧痕          | 赤褐色     | 黒褐色   | —   |                       |                          |
| 97  | 3トレンチⅢ層    | 馬形埴輪 | 脚部の付け根 | 10.6×9.0     | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 粘土板張り合わせ   | ナデ      | 斜め指ナデ・指圧痕       | 明赤褐色    | 黒灰色   | 外   | 円形の透し穴有               |                          |
| 98  | 3トレンチⅠ層    | 馬形埴輪 | 馬鈴     | 径3.0・長さ3.8以上 | 砂粒多い(精緻)・大形粒有 | 手づくね       | 指ナデ・指圧痕 |                 | 赤褐色     | 淡・赤褐色 |     |                       |                          |

第15表 猫石丸山古墳出土土製品観察表

| No. | 出土位置・層位 | 器種 | 部 位            | 破片の大きさ      | 胎 土  | 成 形  | 調 整 |     | 色 調  |    |     | 赤色胎土 | 備 考         |
|-----|---------|----|----------------|-------------|------|------|-----|-----|------|----|-----|------|-------------|
|     |         |    |                | 単位(cm)タテ×ヨコ |      |      | 外 面 | 内 面 | 外面   | 内面 | 断面  |      |             |
| 99  | 2トレンチⅢ層 | 土錘 | 長さ4.1cm・幅2.5cm |             | 砂粒多い | 手づくね | ナデ  | —   | 淡赤褐色 |    | 暗褐色 | —    | ほぼ完形(1/5欠損) |



## 11) 猫石丸山古墳のまとめ

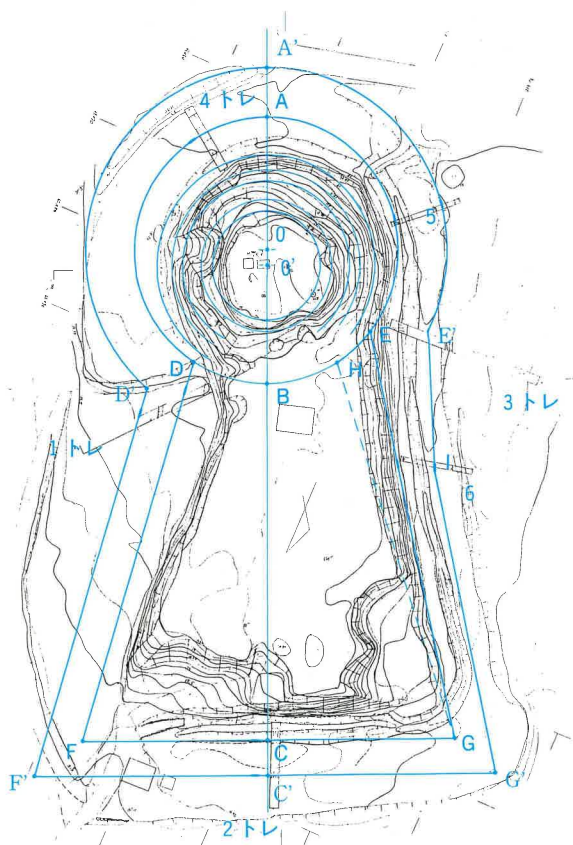
### ①墳丘の設計・規格・施工(第55図)

測量と発掘の結果から猫石丸山古墳の築造過程を復元しよう。まず古墳の選地(第34図)は1)項で指摘したように丘陵先端の中位段丘上ながら、やや奥まった場所に造られている。西からはよく見えるが、北と南からは見えない位置にある。しかしそれでも段丘斜面下の最も近い旧海岸線から100mほどしか離れていない。このような立地は野内古墳と共通することを先に指摘した。段丘は「小谷池」のある谷を境にして南西方向に広がるが、よく見ると、この段丘は猫石丸山古墳の位置から北西方向にのびる浅い尾根状地形と、花仕切4・5号墳の位置する西にのびる尾根状地形からなることがわかる。猫石丸山古墳は前者の北西方向に緩やかに下降する地形を利用して築造されている。標高は後円部付近で19m、前方部付近で17mである。

前方部の向き(第55図A-C)は方位角336度で、おおそ北北西を向く。猫石丸山古墳に先行して築造されたと推定される真玉大塚古墳と野内古墳がともに前方部を南西方向に向けるのとは大幅に異なっており、そのような伝統に束縛されず地形にあわせて築造されたと推定される。その場合前方部前端斜面がいちばん目立つことになり、第2トレンチで出土した円筒埴輪にA類の大型品が多かったことは、この向きと関係するかもしれない。つまり目立つ場所に目立つ埴輪を配置したのではなかろうか。ちなみに他のトレンチには偏りはない。

実際の設計では、周溝を含めて完全な形に築造できるように選地されている。第3トレンチの周溝外側で平行するように検出された小溝が猫石丸山古墳に伴うものならば、設計時の区画溝と評価できるであろうが、現状では不明と言わざるをえない。そこで仮に各トレンチの墳端ラインと周溝外側上辺にもとづいて作図したのが第55図である。第3・4トレンチの墳端と円丘部測量図から中心点O点を導き、後円部を正円に復元した。ただし後円部墳頂と段築テラスを測量図から復元すると中心点はO'点となり一致しない。くびれの屈折点をどこに推定するかによってこのような誤差がうまれると推定されるが、今回の調査ではこれを解決する資料を得られなかった。前方部は第1・2トレンチの墳端ラインと周溝ラインからF・F'点を導き、測量図と重ねてG・G'点を推定した。そこからO-Cの軸線を設定した。東くびれ部は第1トレンチの墳端と後円部復元線からまずD点を導いた。軸線から反転すると西くびれ部はH点となるが、第3・5・6トレンチから復元されるE点と合わない。調査でくびれの屈折点を検出できなかったので確定できないが、西くびれがH点の場合には左右対称の前方部規格となり、E点の場合には左右非対称の規格となる。いずれにしても猫石丸山古墳は後円部に比べて前方部が発達した平面規格といえる。

この復元案を基にすると猫石丸山古墳の平面規格はA-Cで墳長約66m、後円径A-B約28m、前方長B-C約38m、くびれ幅はD-Hの場合約15.5m、前方幅F-Gは約40mとなる。また後円部の周溝幅は外側上辺で復元すると約5m、前方部前端のそれは約4mとなり、猫石丸山古墳の総長は75mと復元される。周溝は楕形ではなく前方後円形である。後期の前方後円墳としては珍しいが、ほぼ同時期の築造である宇佐市鶴見古墳の周溝形態もこの形である(文献69)。また後円高は第1・4トレンチ周溝底からみると約5m、第3トレンチ周溝底からは約6.5mで、かなり異なる。前方高は第2トレンチ周溝底から現状では約4mとなるが、この値は前方部墳丘が削平されているからである。そのため前方頂と後円頂の比高差は現状では約2.5mだが、実際の前方部頂は後円部並みの高さがあったと推定される。後円頂径は11~12mとなろう。基底線は水平ではなく、後円部が



第55図 猫石丸山古墳の墳丘規格想定案 (1/800)

ら前方部にかけて 1.5 m の差があり、西側くびれ部付近は一段低い。

さてこの規格の施工には次の特徴がある。①このように基底線が傾いたまま墳丘を規格どおり築造することは、基底線を水平に設定している前期の立野古墳に比べて築造技術が向上していることをうかがわせる。②周溝の深さまでが削出しでその上は墳丘盛土と推定される。周溝の深さは第4トレンチと約 1.5 m と推定されるので、後円部では高さ 5 m のうち下 1.5 m は削りだしとなり、それ以上は盛土と推定され、周溝の規格では土量をまかなえないのではないかと疑われる。③葺石は用いていない。④三段築成で段築テラスに円筒埴輪を配置していたと推定される。

主体部はかつて墳頂部に穴があり、その底に大きな石があつて隙間からなかに入れた等の地元の伝承などからみて後円部に横穴式石室が存在すると推定される。

## ②築造時期

猫石丸山古墳の築造時期を推定する手がかりは、墳丘規格と須恵器および円筒埴輪である。①墳丘規格は、前方部が後円部に比べて発達し、前方長と前方幅は後円径をはるかに上回り、その 140 % 前後になる。この前方部が発達した形態は古墳時代後期の特徴である(文献 120)。周溝平面形は前方後円形だが、その形態は古墳時代後期にもあることはすでにふれた。②須恵器は甕の型式からみて陶邑編年の TK10 型式にあたる(註 1)。第 1 トレンチⅢ層の埴輪堆積に伴い、そこに形象埴輪が集中するという出土状況からみて、この甕は形象埴輪群と円筒埴輪の設置された時期すなわち最初の埋葬時に置かれた公算が高い。③円筒埴輪は、川西編年(註 2)の第 V 期で、基底部の長いいわゆる「嘉穂型」にあたる(註 3)。その年代は須恵器型式の MT15 ～ TK10 に用いられたと考えられている(註 3・4)。須恵器の年代と矛盾しない。

第 56 図 猫石丸山古墳円筒埴輪のヘラ記号分類

※○No.は、筆順復元可能な資料

| ヘラ記号の分類 | 細分  | 筆 順    | 埴輪No.                                         | 対応型式 | 口唇部形態 |
|---------|-----|--------|-----------------------------------------------|------|-------|
| イ       |     | —<br>  | 14、16、 <sup>⑬</sup> 37、44、 <sup>④⑤</sup>      | A 1  | I     |
| ロ       | ロ-1 |        | <sup>⑰</sup> 19、20<br>35、55                   | A 2  | I     |
|         | ロ-2 | (同上) → | <sup>⑥⑥</sup> 61、63<br>70                     | B 1  |       |
| ハ       | ハ-1 |        | <sup>④⑧</sup> 、 <sup>⑤②</sup><br>(→多い)        | B 2  | Ⅱ、Ⅲ   |
|         | ハ-2 | (同上) → | <sup>⑫</sup>                                  |      |       |
|         | ハ-3 |        | <sup>⑧③</sup>                                 |      |       |
|         | ハ-4 |        | <sup>⑤①</sup>                                 |      |       |
| ニ       |     | —<br>  | ※描具は鋭利な工具ではなく、<br>かたいせんい状のもの<br><sup>⑦⑤</sup> | A    | I     |

口類の筆順解説 ロ-1 類

1、左から平行に 2 本  
2、左上から対角に 1 本

3、右上から対角に 1 本  
4、上から側面に 2 本

ロ-2 類

1、左から平行に 2 本  
2、右上から対角に 1 本

3、左上から対角に 1 本  
4、上から側面に 2 本

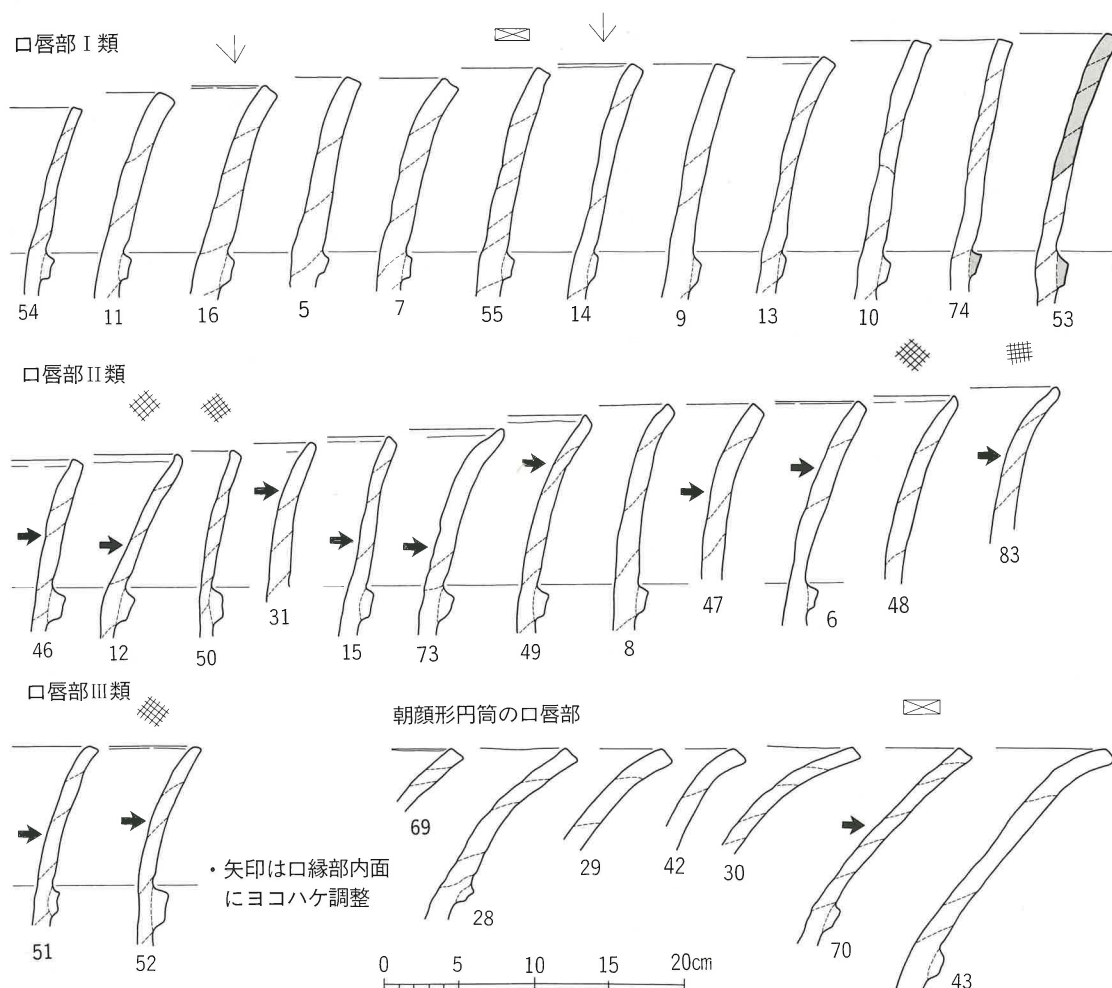
以上の3点から、猫石丸山古墳の古墳完成時の首長埋葬（初葬）は、須恵器型式のTK10型式期とひとまず押さえられる。しかし古墳の規模と内容からみて築造工事の開始期は当然それをさかのぼる。したがって猫石丸山古墳の築造年代は古墳時代後期前半（6世紀前半）で、首長埋葬が後期中ごろに近いTK10型式期に行なわれたと推定される。ちなみに集成編年(註5)9期、和田編年(註6)の10期にあたる。

### ③埴輪型式とヘラ記号からみた埴輪工人の編成(第56~58図、図版21・22)

埴輪の整理を進める過程できわめて興味深い事実にてであった。分類した円筒埴輪と調整技法の特徴およびヘラ記号が排他的に対応するのである。まずこの点を整理しさらに埴輪製作の姿を可能なかぎり復元してみよう。

ヘラ記号は第56図のように分類できる(図版21・22)。文様にはイ～ニ類の4種があり、筆順の違いで細分できる。イ類は鳥足形を3画で表現し、筆順は中央→右→左の順に一定して細分できない画一的な表現である。ロ類はマス形を6画で表現し、中央の×形交差の順序の違いでロー1類とロー2類に細分できるが微妙な違いであり、イ類同様画一的な表現といってよい。ハ類は格子形を表現しているが、画数と筆順で4細分できる。ハー1類は左上から4本次に右上から4本の計8画で格子形を表現する。ハー2類はハー1類と同じ筆順だが右上からの線が一本多い5本で9画である。ハー3類はハー2類と同じ画数・筆順だが線を入れる方向が異なり、他のハ類が斜格子・菱形に表現するのに対し、正格子・矩形に表現する。ハー3類はハー2類と同じ表現・画数だが、第1画を右上から一本先にひく特有の筆順である。ハ類は文様こそ格子形で同じだが、表現は極めて多様で非画一的である。ニ類はX字形だが植物の茎を使用したと推定され、イ～ハ類のヘラ記号と同じ意義をになったと言えるか疑わしい。以上の4種類が認められる。

ニ類は別にして、イ～ハ類のヘラ記号の表現上の特徴は、①イ・ロ類が極めて画一的な表現で、描き方に習熟した同一工人あるいは緊密な関係にある工人集団によって描かれたと推定され、描かれる位置にもきまりがある（第43



第57図 猫石丸山古墳出土円筒埴輪の口唇部と、ヘラ記号・内面調整の対応関係 (1/5)



図)。イ類は普通円筒最上段、朝顔形円筒肩部に下端が突帯に接するように描かれる。ロ類は普通円筒の上から1番目の突帯間中央に、朝顔形円筒肩部の上位に、いずれも透穴と同じ高さに描かれる。このヘラ記号表現の習熟と描く位置のきまりから、イ類とロ類のヘラ記号の違いは工人集団の違いを示している可能性がある。②一方ハ類はハー1類が多いとはいえ様々な表現があり、表現の習熟度が低い。複数の工人によって描かれ、彼らはイ・ロ類のヘラ記号をもつ工人集団ほど緊密な関係になかったと推定される。位置は普通円筒B類最上段だけに描かれる。

円筒埴輪型式との対応をみると、第43図で復元した円筒埴輪の規格にヘラ記号が対応する。すなわち、イ類は三条突帯のA類普通円筒と最も大型のA1類朝顔形円筒に、ロ類はA類普通円筒と二条突帯のB類普通円筒およびA2類朝顔形円筒に記されている。これに対しハ類は最も小型で二条突帯のB類円筒埴輪にのみ記されている。これは三条突帯の円筒埴輪A類を作った工人集団がヘラ記号イ・ロ類を記し、とりわけ大型のA類円筒埴輪はイ類ヘラ記号の工人が製作した可能性を示し、二条突帯の普通円筒B類はロ類ヘラ記号とハ類ヘラ記号の集団によって作られたことを示しているのではないだろうか？ この点を円筒埴輪の製作手法の細部から検証してみよう。

口唇部表現と内面調整との関係を調べるために、口唇部Ⅰ～Ⅲ類に分けて最上段上下幅の短い順に配列し、ヘラ記号のある個体を示したのが第57図である。口唇部Ⅰ類は3本指の方形で、長いものが多い。内面調整は指ナデでハケメはない。ヘラ記号もイ・ロ類に限られる。これに対して、口唇部Ⅱ・Ⅲ類は2本指で上方あるいは側方に摘み出す方法で、この口唇部表現の個体にのみ内面ヨコハケの最終調整が認められ、ヘラ記号が記される場合は必ずハ類である。そして口唇部Ⅱ・Ⅲ類表現は二条突帯の普通円筒B類にかざられる。普通円筒B2類とした所以である。つまり口唇部Ⅱ・Ⅲ類に表現し内面最終調整にヨコハケを施す技法を共有する工人集団の製作した円筒埴輪にのみ格子形のヘラ記号ハ類が記されている。そしてその製作した埴輪は二条突帯の普通円筒B類に限られているのである。一方口唇部Ⅰ類で内面調整にハケメを使わない工人集団には、イ類とロ類のヘラ記号を使いわけの緊密な関係だが異なる集団がいたと推定される。

工人編成は以上から第58図のように想定される。「嘉穂型」埴輪の技法をもち異なるヘラ記号をもつ工人集団甲A・甲Bが、別の製作の技法をもつ工人集団乙に技術指導を行ない（物差し・同一規格）、後者の製品にはヘラ記号ハ類が記された。甲集団は胎土使用の特徴からみて形象埴輪とA類円筒埴輪を主に製作し、技術的に未熟な乙集団は大量に必要なB類普通円筒を製作したといえる。両者の埴輪の胎土や規格の同一性からみて、同一の工房で作られたとみられる。そして甲集団は埴輪の型式からみて在地工人ではなく嘉穂地域あるいは豊前北部からの外来工人とみられ、乙集団は在地から埴輪製作にかかわって経験のある集団を組織したものとおもわれる。もちろん編成の主体は猫石丸山古墳を築造した首長である。

(田中)

註1、田辺昭三『陶邑Ⅰ』1966 平安学園

註2、川西宏幸「円筒埴輪総論」

『考古学雑誌』64-2

1978 日本考古学会

註3、岸本圭「北部九州における円筒埴輪の規格性」

『九州考古学』71 1996

九州考古学会

註4、水ノ江和同・重藤輝行・

尾園晃・岸本圭「福岡県稲

築町次郎太郎古墳群の研究」『九州考古学』72

1997 九州考古学会

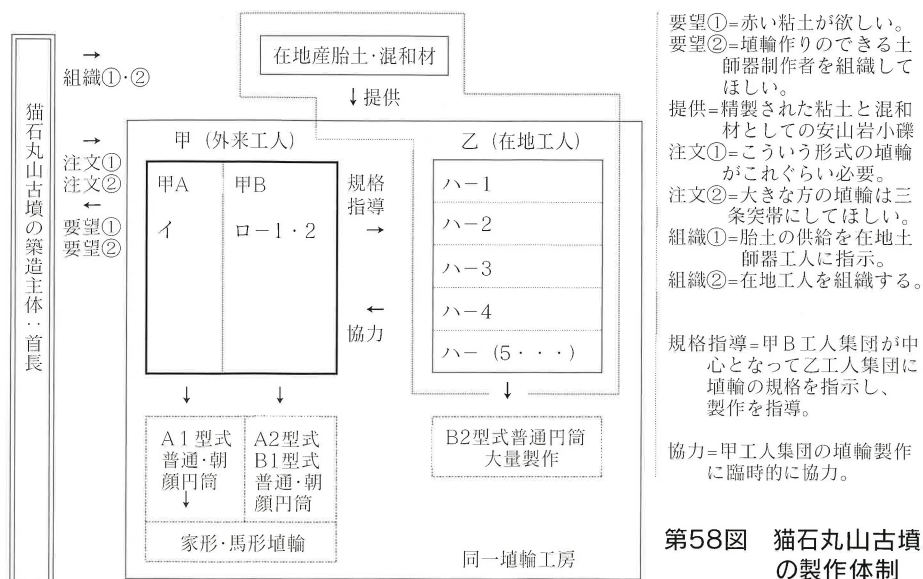
註5、『前方後円墳集成』

1991～94 山川出版社

註6、和田晴吾「古墳時代の

時代区分をめぐる」『考古学研究』34-2 1987

考古学研究会



第58図 猫石丸山古墳埴輪の製作体制

### 第3節 真玉大塚古墳(第59図)

古くから知られていた前方後円墳である(註1)。1950年代に賀川光夫氏によって測量が行なわれ、墳長90mで盾形周溝をめぐる古墳時代中期の古墳と報告された(文献30・38)。その後長い間注目されなかったが、90年代になって清水宗昭氏により「豊」の大首長墳のひとつと再評価され(文献105)、地元真玉町教育委員会によって1994(平成6)年度から将来の史跡指定と活用を目的に継続的に測量と範囲確認調査がおこなわれている(文献118・130・134)。その調査過程ではじめて埴輪が採集され、墳長も100mを越え、周溝は二重にめぐることが明らかとなった。現在までの調査結果をまとめてみよう。古墳は丘陵先端の中位段丘上に造られている(第34図)。旧海岸線に非常に近い位置で、東を除く三方向の海からよく見える。前方部外周溝は段丘崖のすぐそばにあり、最も近い旧海岸線から30mほどしか離れていない。この立地は入津原丸山古墳と共通し、猫石丸山古墳・野内古墳とやや異なることを先に指摘した。標高は海拔7mである。前方部はおおよそ南西を向き、野内古墳と同一方向である。

墳丘は後円部北側が土取りにより、前方部東側が神社建設により大きく損壊している。さらに墳丘全体が畑地・果樹園として利用されてきたためにかなり変形している。周溝も水田・畑地として拡幅あるいは埋め立てられている。それでも盾形周溝をもった前方後円墳であることはわかる。第1トレンチの調査から、周溝が二重に確認され、すくなくとも前方部では二重にめぐることが第2・第3トレンチでも確かめられた。第1トレンチの内周溝内側の葺石検出により前方部前端の墳端が確定し、そこから墳丘軸線を計測すると、後円部の現在の周溝端までで約100mとなり、周溝が水田化により拡幅されていることを考慮すれば、墳長はさらに長くなるであろう。大分県内の前方後円墳としては規模A2類で県内第3位の大型古墳となる。なお第59図の墳丘断面図は高さの縮尺を2倍にしている。

範囲確認調査が継続中なので確定的なことは言えないが、測量と現地観察から、後円部径約60m、前方幅約60mで、後円部高約8m、前方部高約8m(第1トレンチ内周溝の底面からはかると)となる。前方部が後円部に匹敵するほど高く同時に幅も後円部径に匹敵する。福岡県京都郡苅田町所在の御所山古墳の墳形に似ている。墳丘はかなり損壊しているが後円部・前方部ともに三段築成とみられる。内周溝の内側に葺石があり、墳丘各所で人頭大の川原石が露出しているの、葺石は全面に葺かれていたと考えられる。また原地形は起伏の少ない平坦な段丘面であるから、墳丘の大部分は盛土によると推定される。事実近年の神社本殿改修工事の際、前方部の墳丘断面を観察する機会があったが、上から標高9mの高さまでは盛土であった。

周溝は今のところ前方部側でのみ二重に確認しているが、周辺地形を観察すると、墳丘西側の池や東南側の池の周囲に高さの異なる畑が一段認められ、全周二重周溝となる可能性が高い。前方部前端では、第1トレンチで内周溝の検出面の幅は約12m、外周溝の幅は約10mである。外周溝の斜面には葺石はない。前方部西側側面の外周溝は幅が3mほどでかなり狭くなっている。

真玉大塚古墳の埋葬施設はいまだ確認されていないが、後円部の土取り跡の壁面を観察するかぎり、主体部の痕跡はない。したがって後円部中央には埋葬施設はなく、墳丘規模から考えて東側あるいはくびれ部の方向といった偏った位置に開口する横穴式石室が、中心主体と想定される。前方部では昭和9年の神社新築造成の際に、鉄刀などが大量に出土したと伝えられ、その時の埋葬施設の石材の一部ではないかと思われる安山岩板石が境内に残されている。したがって前方部にも埋葬施設が存在した可能性が高い。

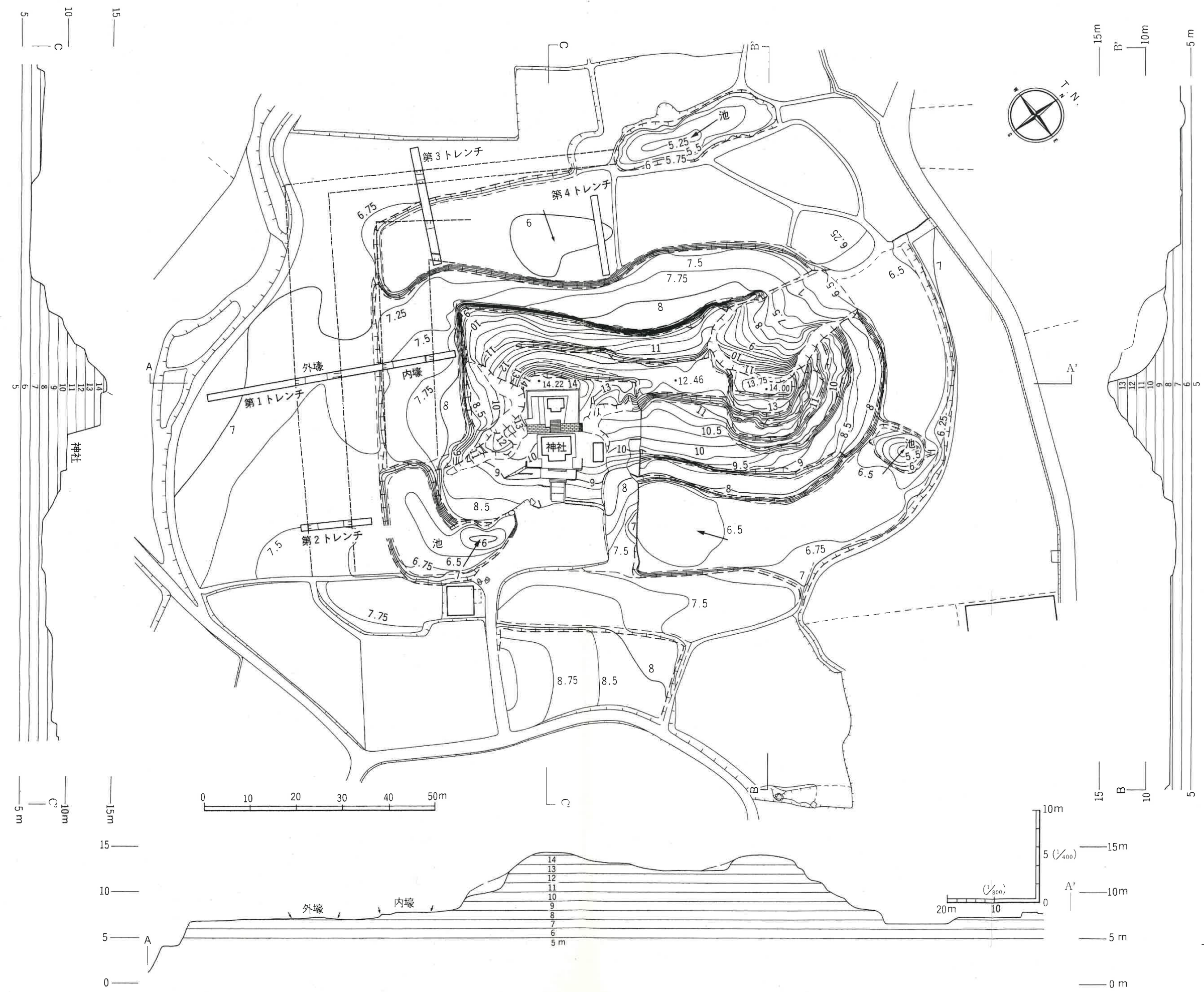
埴輪は各トレンチで出土したが外周溝には少なく、内周溝では第3トレンチではほぼ完全な普通円筒埴輪が転落した状態で検出された。ただし出土量は猫石丸山古墳にくらべると少ない。今のところ網代壁を線刻で表現し丹塗りのある家形埴輪の破片と円筒埴輪が検出されている。円筒埴輪には普通円筒と朝顔形円筒がある。野内・猫石丸山例より薄手で、はるかに丁寧な作りである。突帯も高く、無黒斑穴窯焼成の川西編年Ⅳ期の円筒埴輪と推定される。注目すべき点は底部整形に淡輪技法に起源するいわゆる底部輪台技法が認められる点である。今のところ底部破片はすべてこの技法である。

墳丘形態と埴輪から、野内・猫石丸山両古墳に先立つ古墳時代中期後半の築造と考えられる。(田中)

註1、河野清実『豊後国東半島史』1932



第59図 真玉大塚古墳墳丘測量図 (1/800)





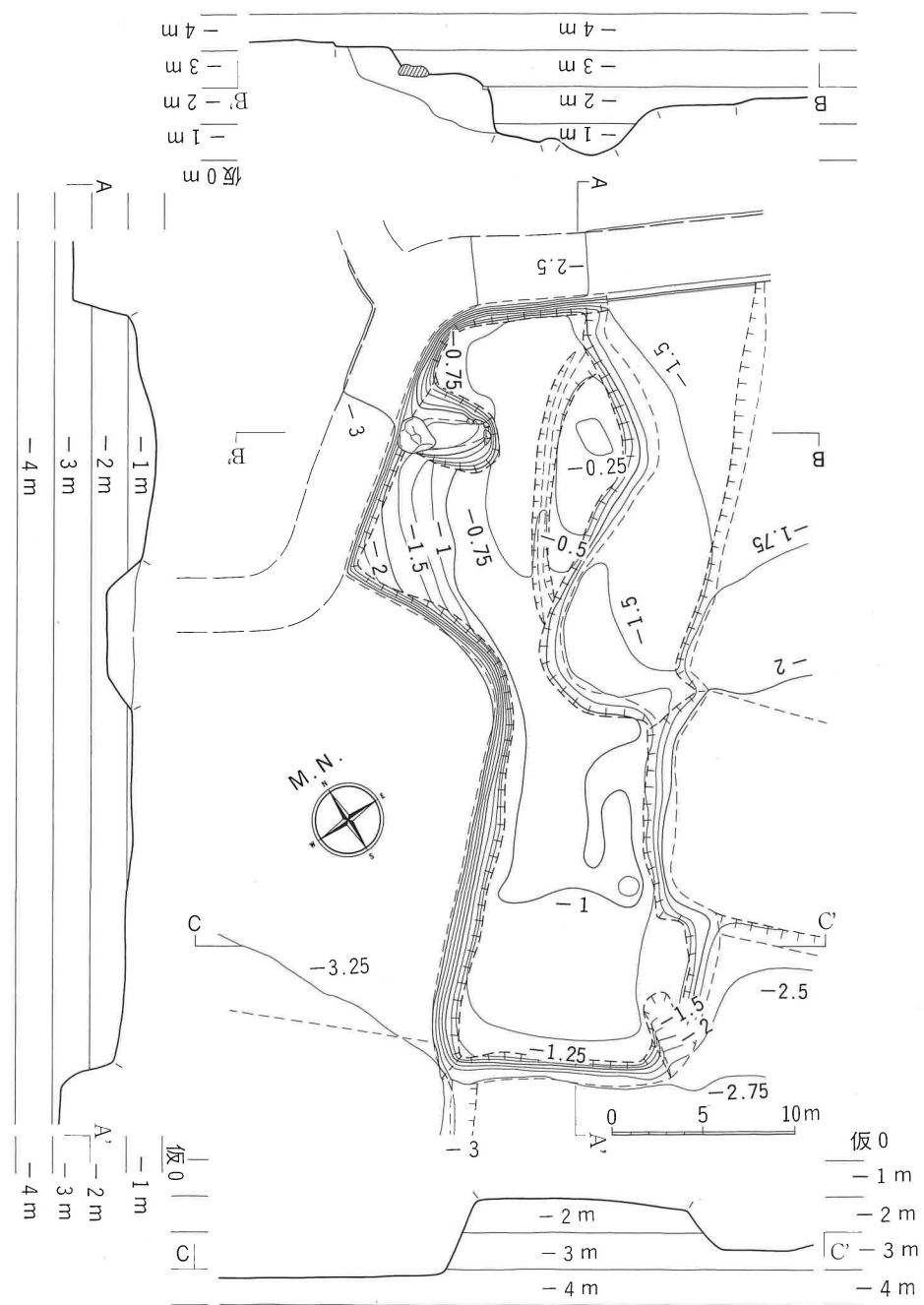
#### 第4節 野内古墳(第60図)

猫石丸山古墳の北側、赤坂川を挟む対岸の段丘上に位置する。現在の真玉町大字西真玉字赤坂に所在する。海上にかつて突出していた段丘で、猫石丸山古墳より高い位置に築かれている。古くから横穴式石室が開口していたらしく石材の再利用の言い伝えが多いが、前方後円墳と認識されたのは1970年代の分布調査によるものであった(文献50)。その後埴輪の採集が果たえられ、1993~94年に有志により墳丘測量がおこなわれ、その成果が下村精一・江藤和幸両氏によって報告されている(文献123)。その報告を中心に野内古墳を紹介する。

農道整備、周辺の畑地耕作、また墳丘そのものが畑地化しているため、墳形は大きく損なわれている。残丘から前方後円墳であることはわかるが、墳丘の規格を復元することはむづかしい。残丘北西部に崩壊した横穴式石室がなかば埋没して露出する。その位置から残丘北側が後円部、南側が前方部とわかる。そうすると、前方部は南西に向き、真玉大塚古墳の前方部方向と一致している。残丘の墳長は44 mであるが、周辺の削平状態から推定すると本来50 mを超す前方後円墳であったと見られる。

横穴式石室は奥壁・側壁に大型の一枚石を用いずに板状の石を積み上げた古い型式で、礫敷きであったという。轡や太刀の出土が伝えられる。周囲では朝顔形を含む円筒埴輪が採集され、突帯の形状から猫石丸山古墳の円筒埴輪に先行する可能性が指摘されている(文献123)。

前方部の向きが猫石丸山古墳と異なり、中期後半築造の真玉大塚古墳と一致することと、円筒埴輪の特徴からみて、猫石丸山古墳にさかのぼる古墳時代後期はじめに築造された前方後円墳と推定される。(田中)



第60図 野内古墳測量図 (1/400)

## 第5節 まとめ ―西国東地区における大型古墳の変遷とその性格―(第61・62図)

前方後円墳の規模では真玉大塚古墳が最大で墳長100mを越え、大型古墳の規模A2類で県内3番目の前方後円墳である(2章3節)。次いで猫石丸山古墳が墳長66mで規模B類。野内古墳は現状では残長44mだが、前節でふれたように墳長50m前後の規模C類の前方後円墳と推定される。入津原丸山古墳は造出し付き円墳だが墳長75mを越え、円墳規模A類で真玉大塚古墳に匹敵するといつてよい。その他に入津原丸山古墳に近いイド山古墳群3号墳と5号墳はいずれも径30mを越え周溝の残る円墳で、ある時期の首長墳と推定される。西国東地区の大型古墳は規模の点で、真玉大塚古墳と入津原丸山古墳が傑出している。

墳丘規格は、真玉大塚古墳は前方部が後円部に匹敵する墳形で、猫石丸山古墳はさらに前方部が後円部をはるかに凌駕する。野内古墳は規格不明ながら前方部が小さな古墳とは考えられない。このように前方部の拡大した墳丘規格は古墳時代中期後半から後期にかけて汎日本的に認められる。墳丘規格の上から真玉大塚古墳から猫石丸山古墳へという変遷を指摘し得る。

埋葬施設では、安山岩製箱形石棺を使用する入津原丸山古墳が最も古く、革綴短甲を副葬する点から中期前葉の築造と推定し得る。イド山3・5号墳の主体部は箱形石棺で入津原丸山古墳とあい前後する時期と推定される。横穴式石室と推定される真玉大塚古墳・野内古墳・猫石丸山古墳は新しい。埴輪では、川西編年Ⅲ期の円筒埴輪が採集された入津原丸山古墳が最も古く、Ⅳ期の真玉大塚古墳、Ⅴ期の野内古墳・猫石丸山古墳の順になる。以上をまとめ、水系別に配列し



第61図 宇佐と西国東の大型古墳 (1/10万) 1903年測量5万分の1 「高田」使用

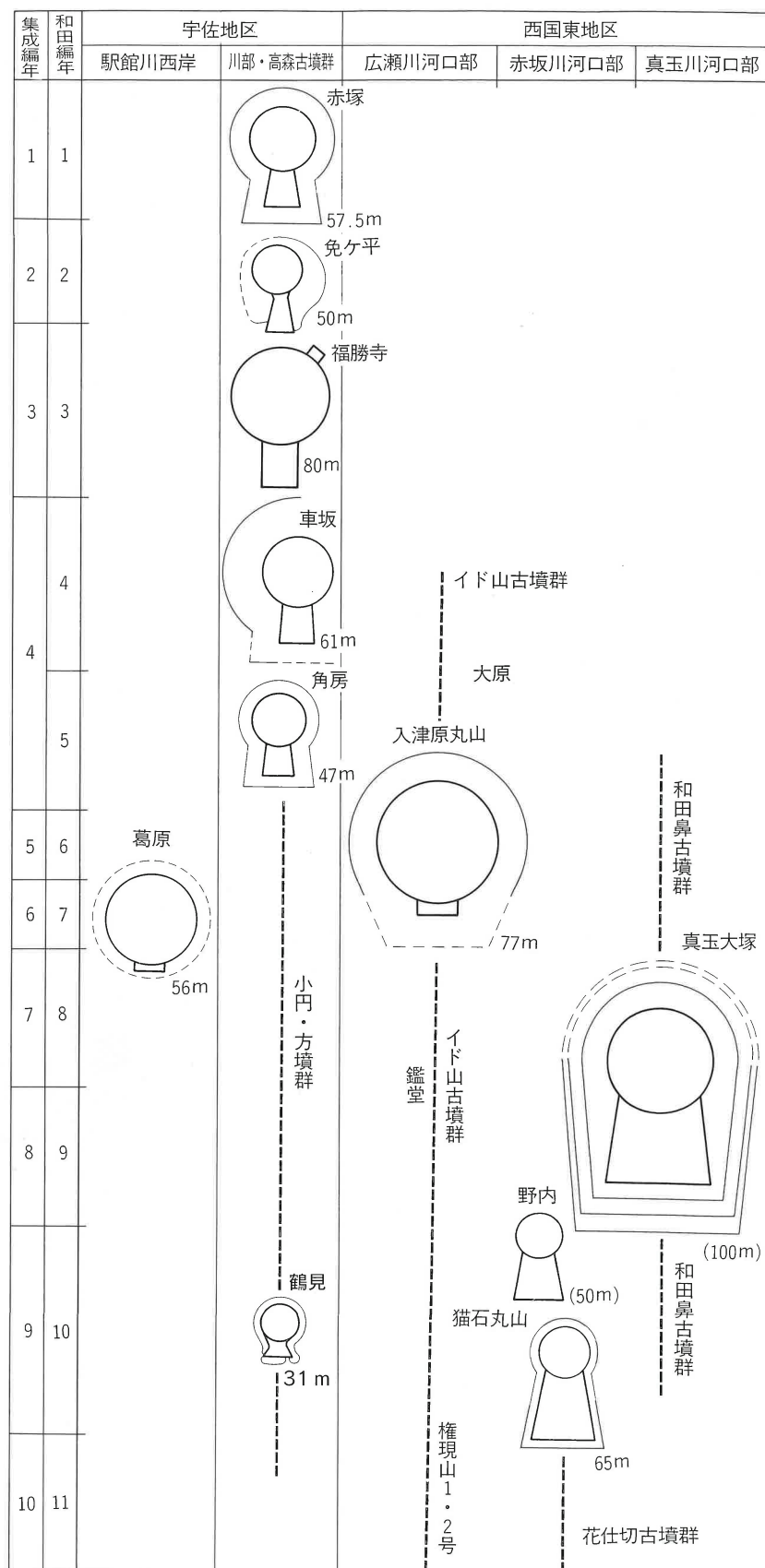


たのが第62図右側の編年表である(註1)。西国東地域は二つの単位地域を統一した首長を継続的に輩出した地域であったとみられ、とくに真玉大塚古墳から猫石丸山古墳にかけては連続して首長墳に大型前方後円墳を採用する。

細かく見ると広瀬川・赤坂川・真玉川河口部の3地域にわかれ、なかでも広瀬川流域と真玉川流域が継続的に古墳を造営した単位地域であったと推定される。中期には広瀬川流域の入津原丸山古墳から真玉川流域の真玉大塚古墳へと西国東地区全体の首長権が移動したと推定される。そして後期に首長の墓域のみが、中間の赤坂川河口部にうつり、野内古墳・猫石丸山古墳がそこに作られている。これは西国東地区の統一首長がそれまでの首長層の共同墓域から離れて新たな墓を造営するという首長権の在地における変化を暗示している。

ところで、古墳時代中期から後期にかけてこれだけの大型古墳を築造した西国東地区においても、古墳時代前期と、入津原丸山古墳と真玉大塚古墳の間の中期中ごろには大型古墳が築かれていない。イド山古墳群や和田鼻古墳群の存在からみて、西国東地区には単位地域毎に首長墓の築造が続いたことは確実であるが、上記4古墳に匹敵する大型古墳は築造されていない。この事実は、西国東地区全体を統合した地区首長という地位にあるという条件だけでは、規模B類以上の前方後円墳や規模A類の大型円墳は築造できなかったことを示しているのではないだろうか。言い換えれば、西国東の大型古墳群に葬られた首長は、西国東地区をはるかにこえる広い領域の多くの首長を組織した盟主的首長という地位ゆえに大型古墳の築造が可能だったのではないだろうか？

この問題に最後にふれておきたい。西国東地区に最も隣接する大型古墳の集中地域は、西方の宇佐地区である(第61図)。7世紀末の律令国家による「豊」国の分割により、西国東と宇佐の間には豊前と豊後の境界が設定された。寄藻川が国境である。以後この境界観は、現在に生きる我々をもとらえている。この国境は律令国家が政治的に設定した人為的な境界で



第62図 宇佐・西国東地区の大型古墳編年表



あり、決して在地の歴史の中で生まれたものではない。弥生時代の土器型式や墓制の分布がそれを証明している。少なくとも古墳時代まではそのような境界はなく、かえってその近さからみれば密接な関係が予想される。

宇佐地区の大型古墳の編年を検討すると第62図左のようになる。造出し付大型円墳の葛原古墳(文献84)が副葬品と埴輪から古墳時代中期中頃、小型前方後円墳の鶴見古墳(文献48・69)が石室構造と副葬須恵器から後期前半である。ほかに埴輪をもつ高倉古墳が大型円墳の可能性がある。川部高森古墳群の前方後円墳では赤塚(文献6)・免が平(文献44・72・92)が副葬品から前期前半、福勝寺古墳が墳形から前期中頃、車坂・角房は墳形から前期と推定される(文献120)。以上の5古墳では風土記の丘整備時にトレンチ調査による範囲確認調査(文献52・54・55・58)が行なわれたが、円筒埴輪が一切出土していない。宇佐・西国東地区の中期以後の大型古墳では鶴見古墳を除いて円筒埴輪の大量使用が認められ、川部高森古墳群でも中期後半(集成編年7・8期)には10m級の小古墳に円筒埴輪が採用されている(文献108)。上記の5基の前方後円墳に円筒埴輪の使用がないことは、赤塚・免が平のみならず福勝寺・車坂・角房の3前方後円墳も前期の築造であることを間接的ながら示している。以上から鶴見古墳を除く川部高森古墳群の五つの前方後円墳を古墳時代前期に、葛原古墳を中期中頃の築造と推定すると、きわめて興味深い編年表ができあがる(第62図)。すなわち宇佐地区の大型古墳の欠ける時期に、それを埋め合わせるように西国東で大型古墳が築造されているのである。盟主的古墳の移動を強く示唆する(註2)。

この大型古墳の変遷は次のように評価される。①少なくとも宇佐地区と西国東地区を包括し、おそらくより広大な各地の首長を組織した政治的領域が古墳時代初頭に成立し、その盟主的首長が大型前方後円墳を築造しはじめる。②古墳時代前期には宇佐地区からその首長が輩出し赤塚古墳から角房古墳までの前方後円墳を累代的に築造したが、中期初めに西国東地区の首長が盟主となり、その移動に伴って墳形が大型円墳の入津原丸山古墳が築造される。③その後再び盟主は宇佐地区の葛原古墳の被葬者に移動するが、中期後半には再び西国東の真玉川流域に真玉大塚古墳が築かれる。墳形は前方後円墳にもどり、以後踏襲される。④以後盟主的首長は西真玉地区から輩出され、古墳時代後期まで野内古墳・猫石丸山古墳と前方後円墳が累代的に築造される。宇佐地区の鶴見古墳は規模の小ささと円筒埴輪を用いない点からみて、西国東地区の盟主的首長の下位に組織されてその影響下にあった首長の古墳と推定される。

以上のように宇佐と西国東を別個の地域としてみるだけでなく、ひとつのまとまりをもった地域としてとらえる視点が今後のこの地域の評価にとって必要であると考え。(田中)

註1、編年表の時期区分は60頁第9図に準じる。

註2、都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22史学編 1988 大阪大学文学部

## 第5章 総 括

今回の調査は、これまでその内容が詳しく判明していなかった地域の前方後円墳を重点に測量調査と必要最低限な範囲確認調査を実施して、今後の研究・整備活用に向けた基礎資料の充実を目的とした。

その成果は本文のなかでのべられているのでここでは触れないが、三重地区の古墳群は県内でも有数の古墳時代前期の前方後円墳群であること。一方西国東地区には県内でも最大規模の後期の前方後円墳群であることが判明し、その時期の大型古墳そのものが県内には少ないだけに極めて貴重な史跡といえる。最後に調査した2古墳の保存状態をしるして、総括にかえたい。

立野古墳については後円部から前方部南側にかけて現状では崖面になっており、少しずつ崩落している状況である。早急に崩落を食い止め、現状を維持する対策が必要である。崩落に伴う樹木の倒壊も心配される。緊急な保全措置が望まれる。

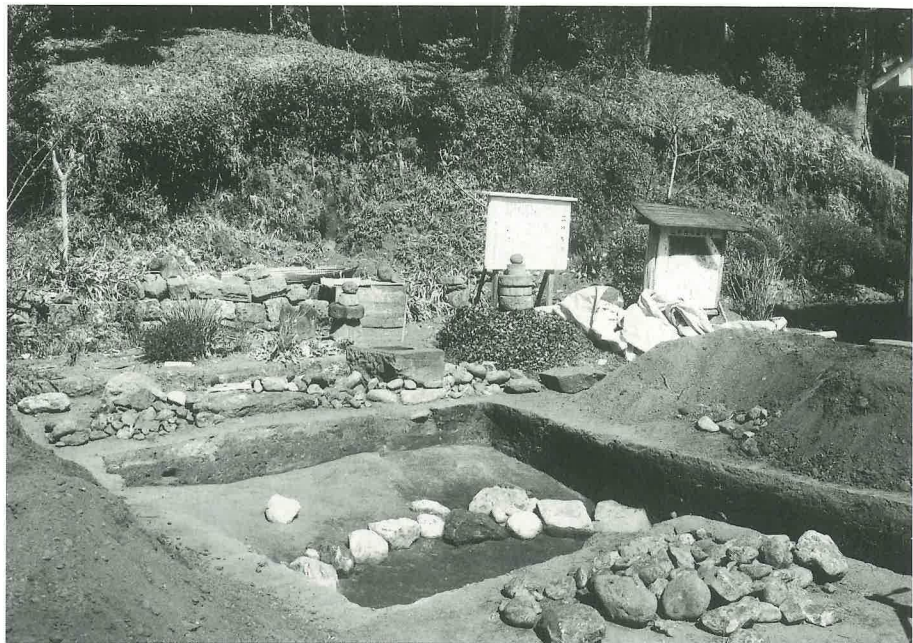
猫石丸山古墳では、南側の市道の拡幅が予定されており、周溝と指定地との調和のとれた工事計画がのぞまれる。また、竹の根による墳丘表面の傷みが進行しており、竹林を定期的に伐採・清掃する必要がある。

最後に、調査報告にあたりお世話になった関係各位・各機関に感謝申し上げ、結びとしたい。(田中+清水)

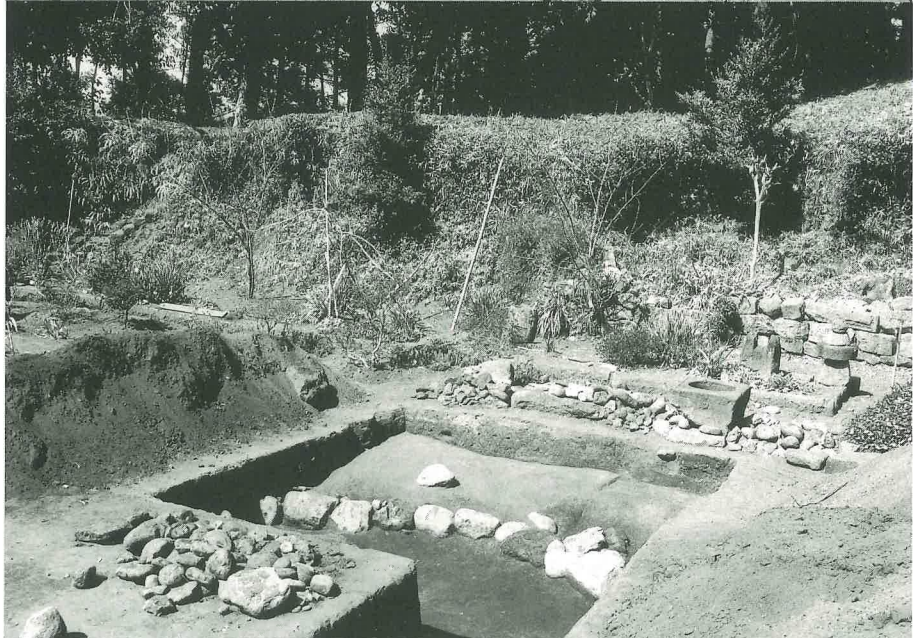


立野古墳

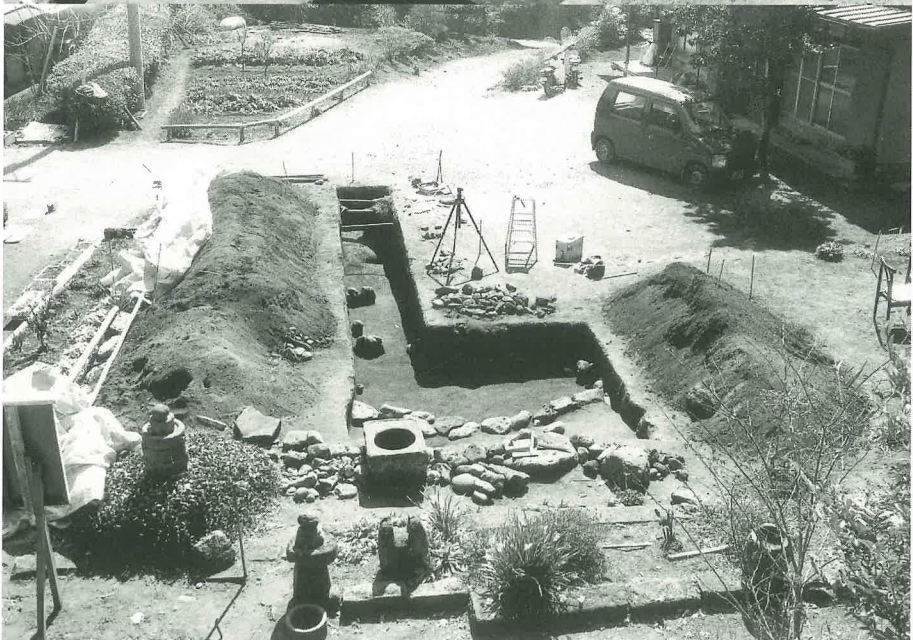
第1トレンチ  
くびれ部から後円部を望む  
(X地点がみえる)



第1トレンチ  
くびれ部から前方部を望む



第1トレンチ全景  
(墳丘上より)



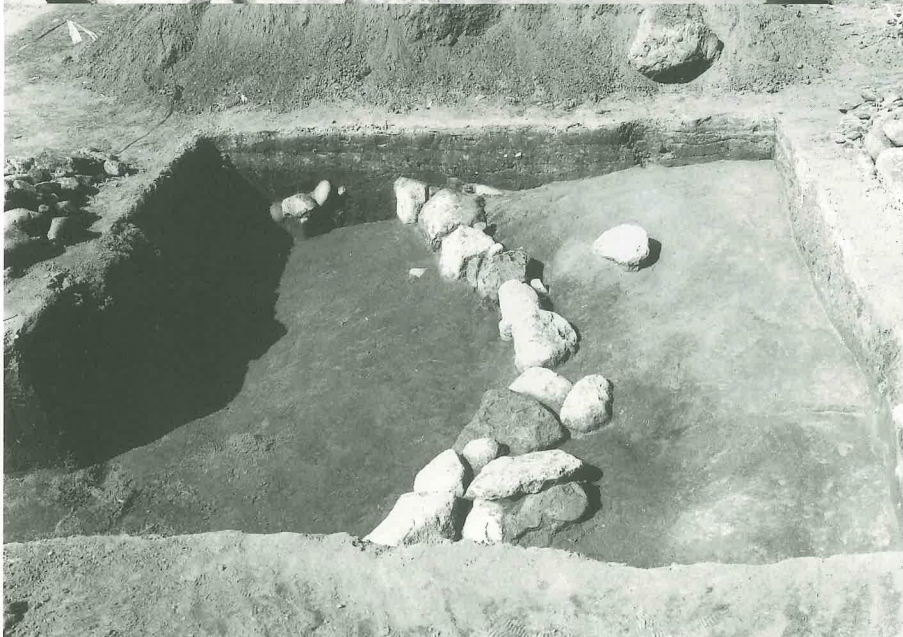




第1トレンチ  
くびれ部葺石列  
(Va層を除いた時点)



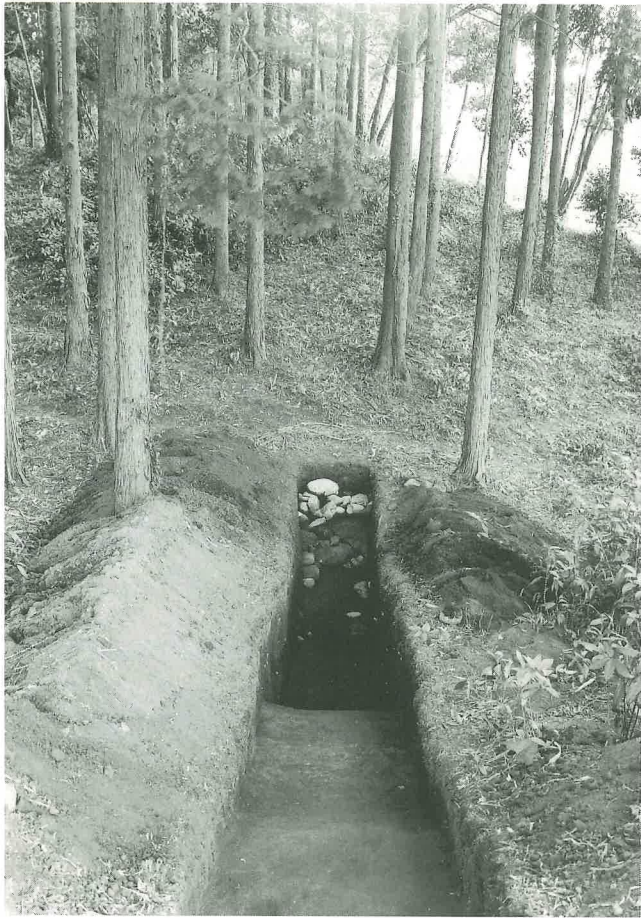
第1トレンチ  
東壁断面と葦石根石列



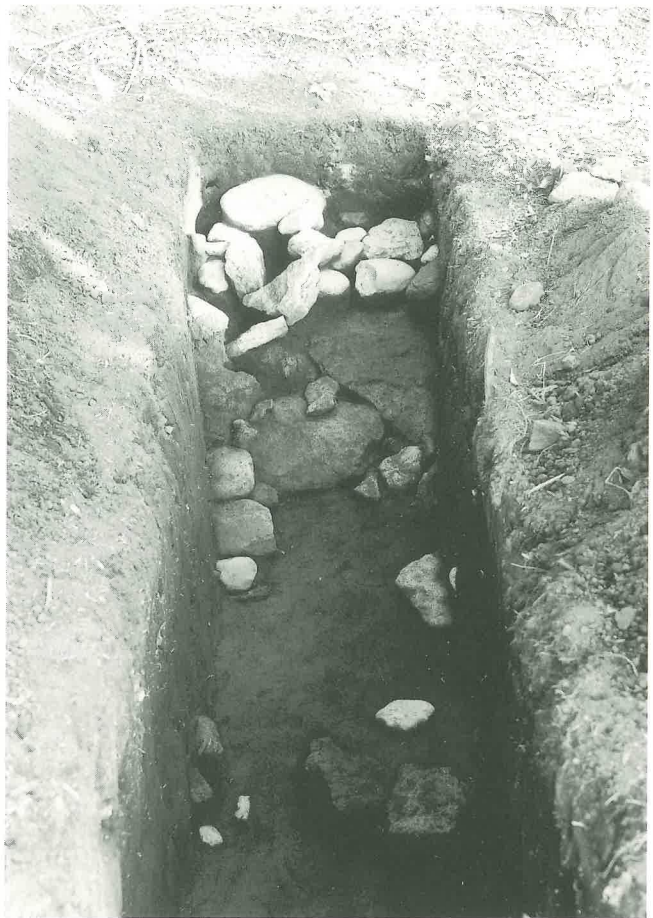
第1トレンチ西壁断面と葦  
石根石列  
(Va、Vb層をのぞいた状態)



立野古墳



第3 トレンチから後円部を望む



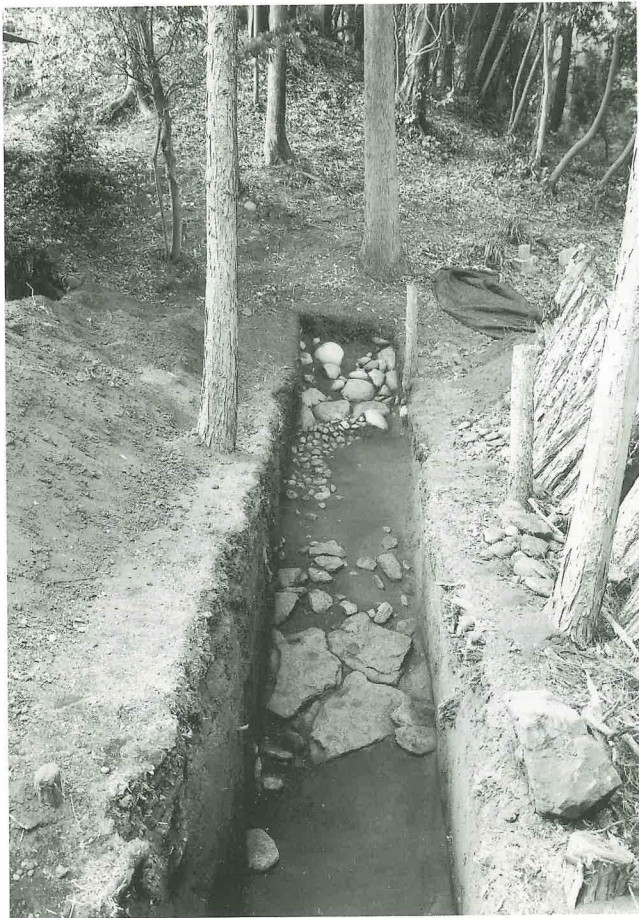
第3 トレンチの葺石



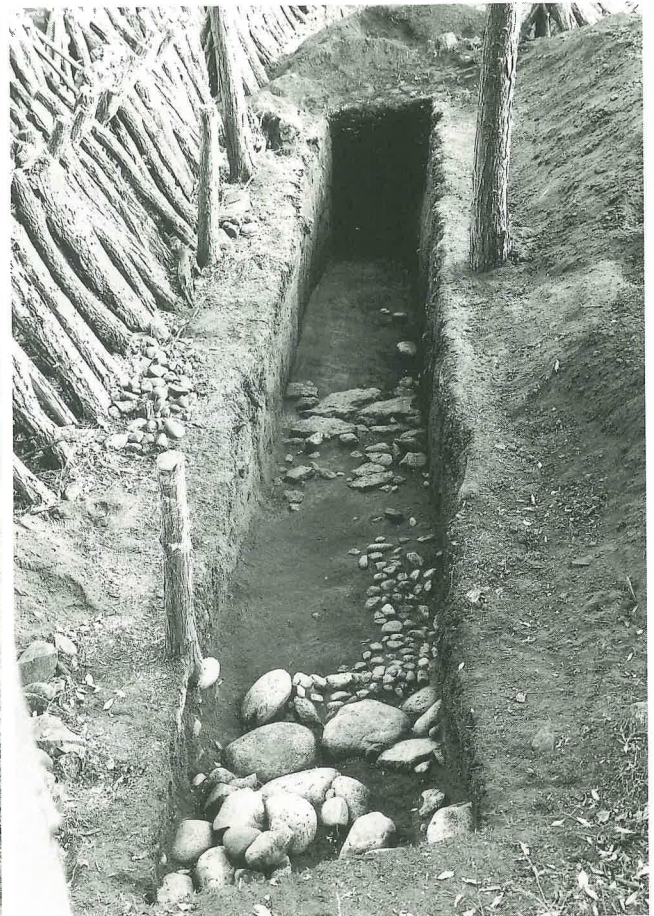
第3 トレンチと「周堤」



立野古墳



第4 トレンチの葺石とテラス（周溝内）



第4 トレンチの葺石とテラス（墳丘上から）

立野古墳出土埴輪（1）



1



2









17 (内)



18 (内)



21



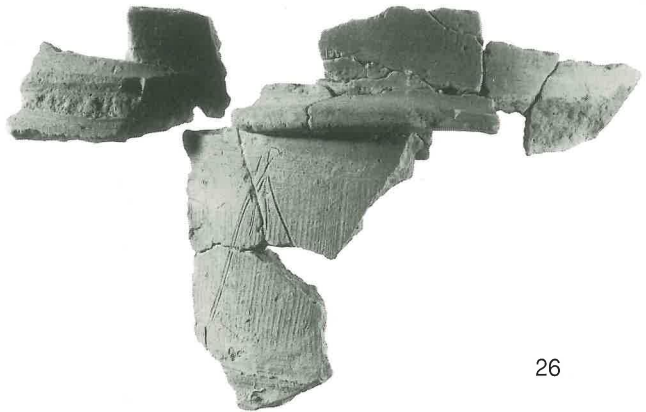
19 (内)



20 (内)



23



26



27



34 (外)



34 (内)

小坂大塚古墳



後円部（北東から）



前方部（南から）



前方部（北東から）





遠景（中央）  
旧海岸より望む



後円部 手前、周溝跡  
（南東より）



前方部 手前、周溝跡  
（西より）



猫石丸山古墳

後円部（南西から）



後円部（北東から）



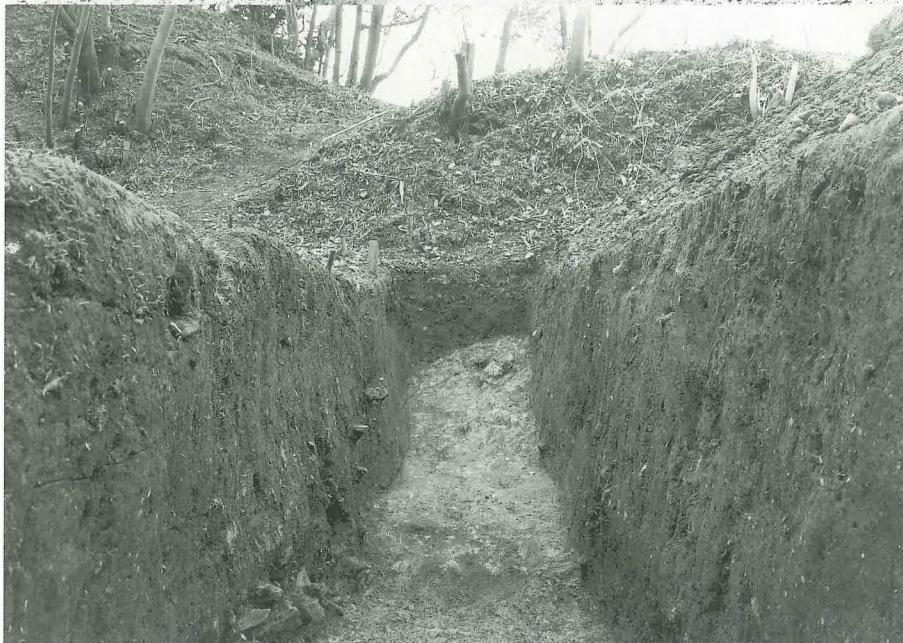
前方部と周溝跡（南から）







第1トレンチ  
墳丘とトレンチ  
(北東から)

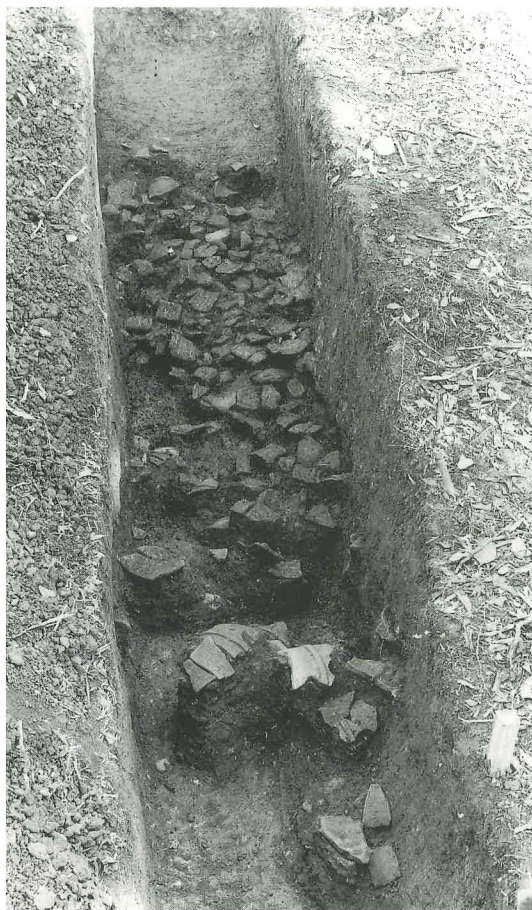


第1トレンチ  
墳端 (北東から)

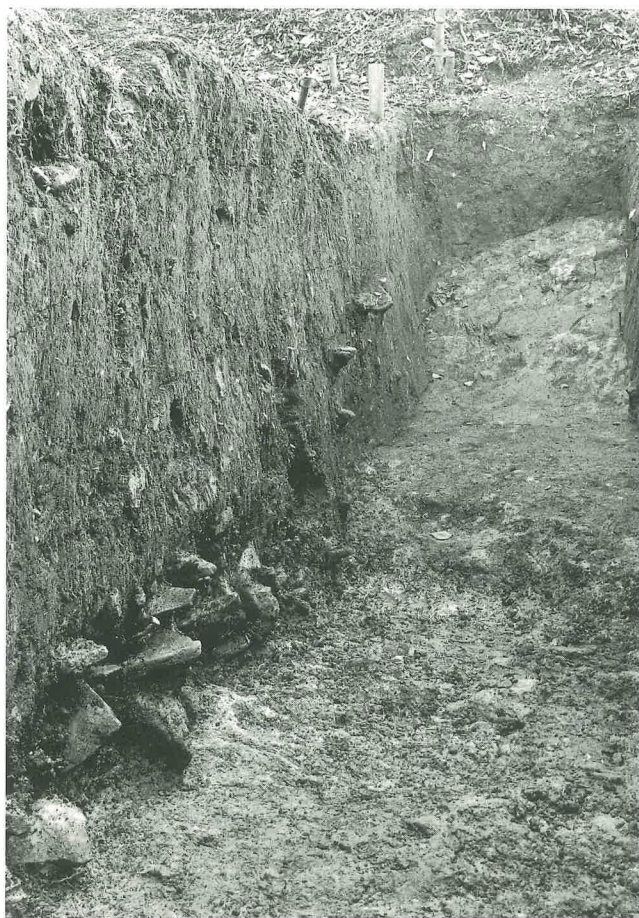


第1トレンチ  
周溝東壁断面  
(西から)





第1トレンチ、遺物出土状態（1回目・南西から）



第1トレンチ、埴輪の断面出土状態と墳端



第2トレンチ 周溝と出土状態（北北西より）

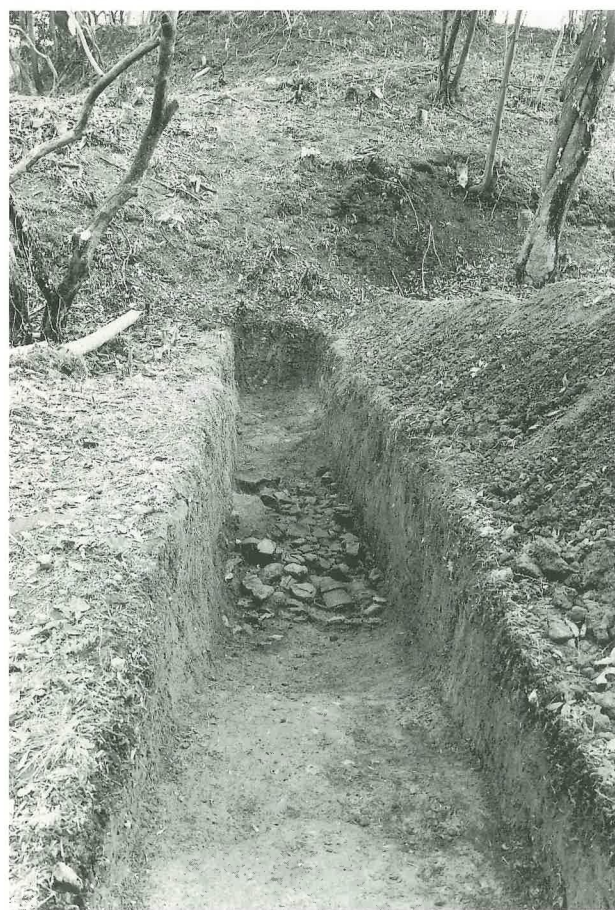




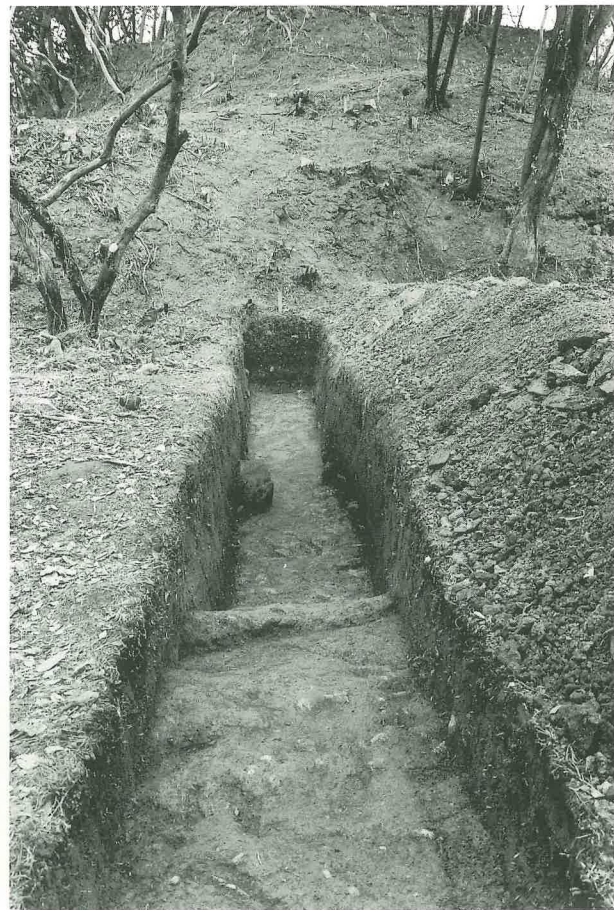
第3トレンチ、周溝と遺物出土状態（東から）



周溝 完掘状態（東から） 小溝がみえる



周溝内出土状況（西から）



周溝、完掘状態と小溝

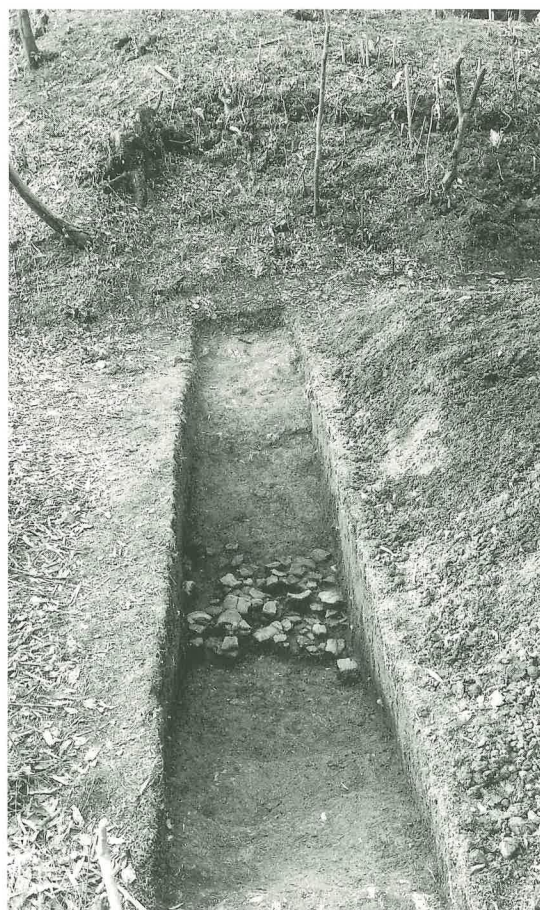




第3 トレンチ 西壁は断面（南西から）



第4 トレンチ、周溝と遺物出土状態（北西から）



第4 トレンチ、周溝と遺物出土状態（南東から）





1



2

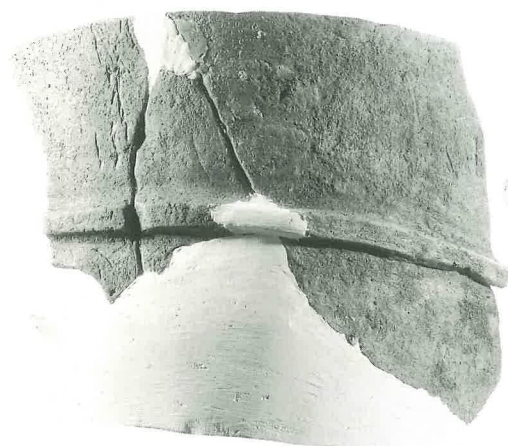


3



4

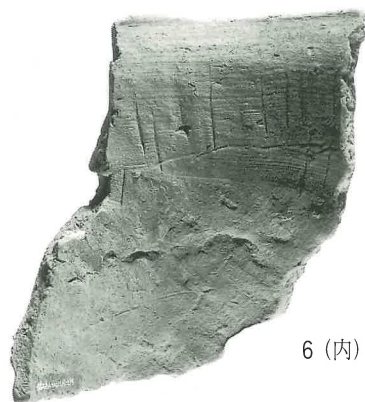
猫石丸山古墳  
出土須恵器



5



6 (外)



6 (内)



7

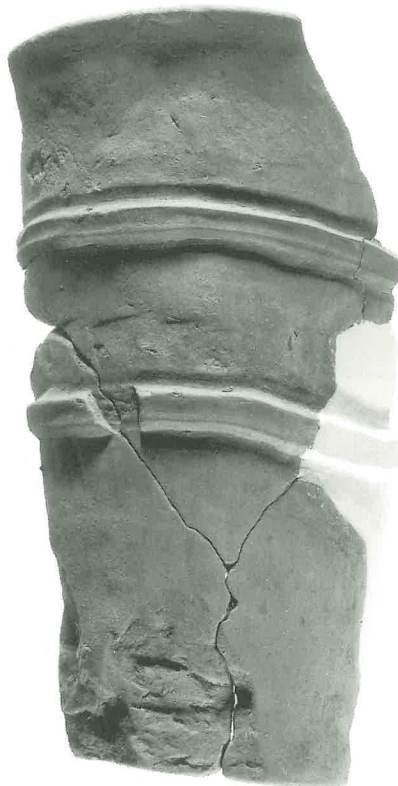


9

猫石丸山古墳  
出土埴輪 (1)



10



11 (外)



11 (内)



12



14-a



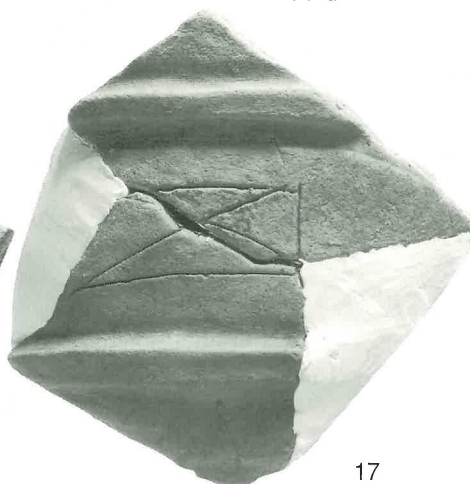
16



15 (外)



15 (内)



17

猫石丸山古墳  
出土埴輪 (2)



图版 16



18 (外)



18 (内)



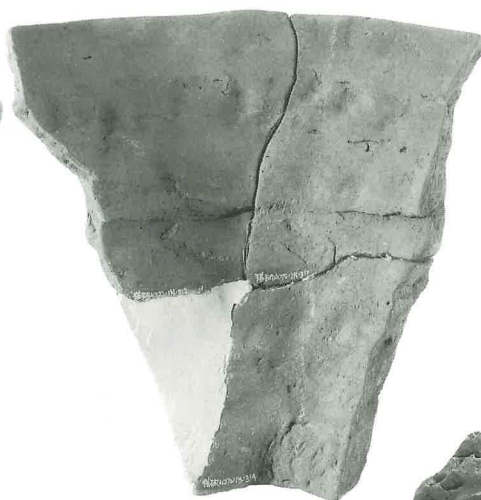
24



26



28 (外)



28 (内)

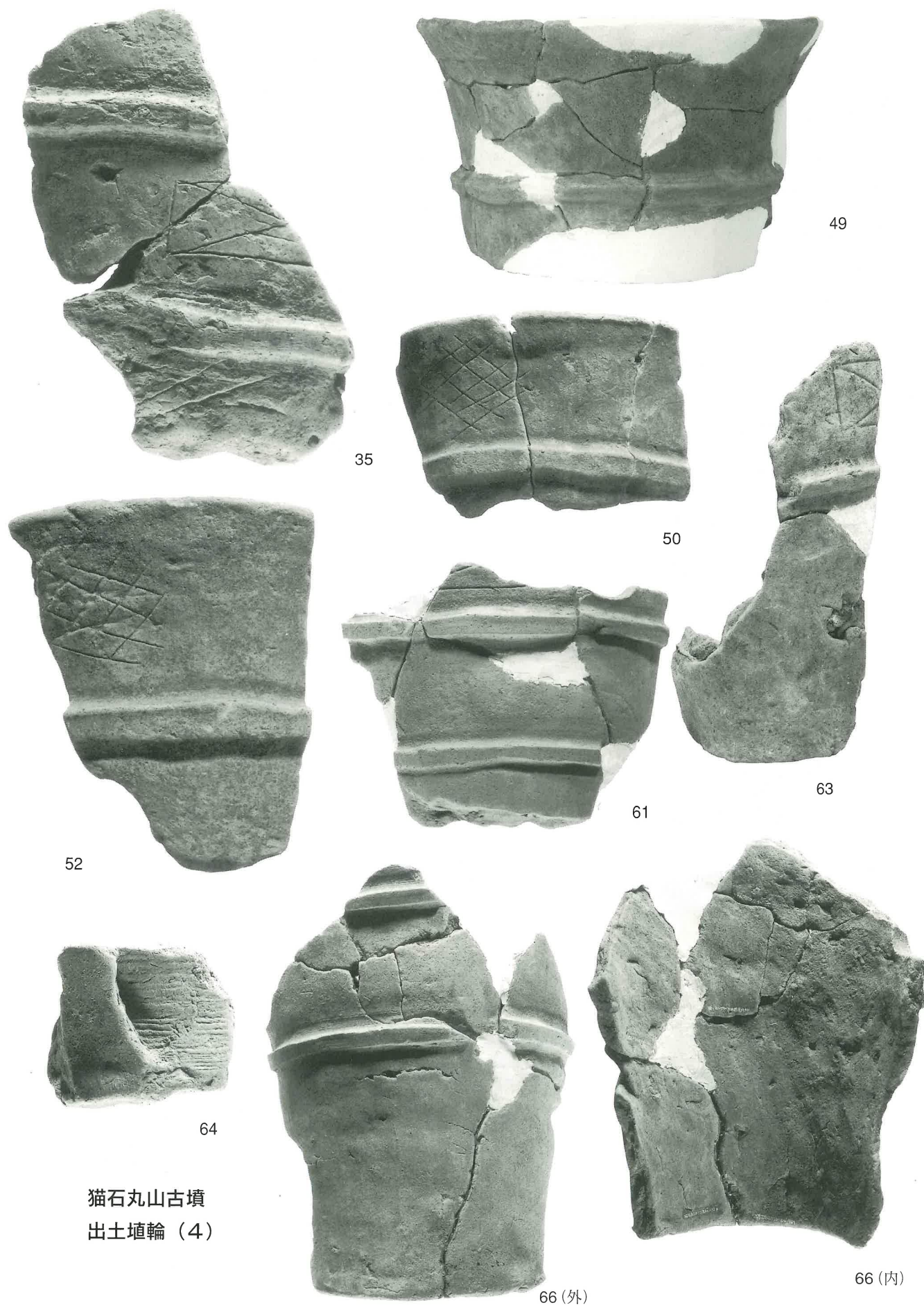
猫石丸山古墳  
出土埴輪 (3)



29



34



猫石丸山古墳  
出土埴輪 (4)





67 (内)



67 (指紋)



68

猫石丸山古墳  
出土埴輪 (5)



70-a



74-a



70-b



75-c



79



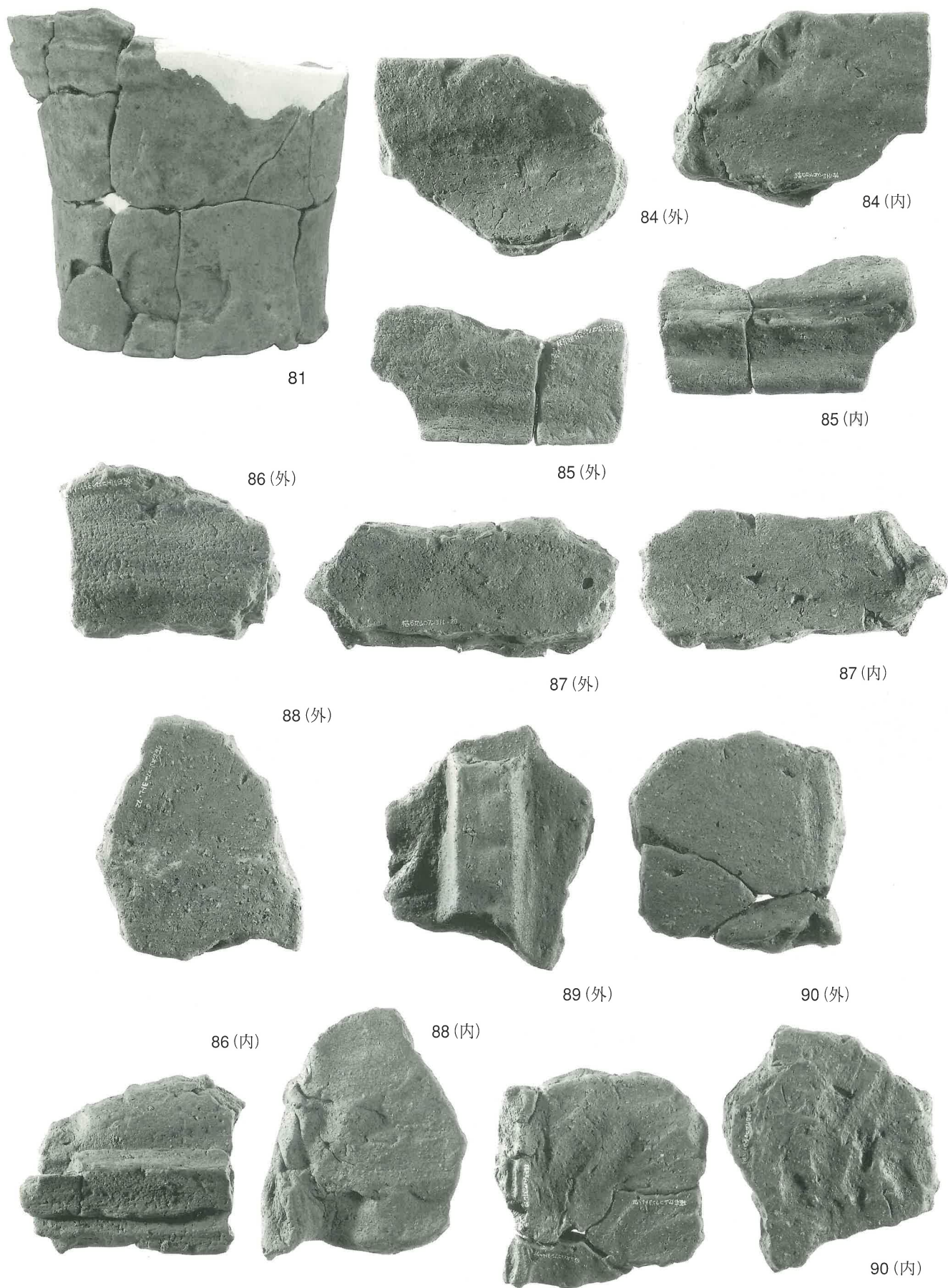
70-c



78-b (外)



78-b (外)

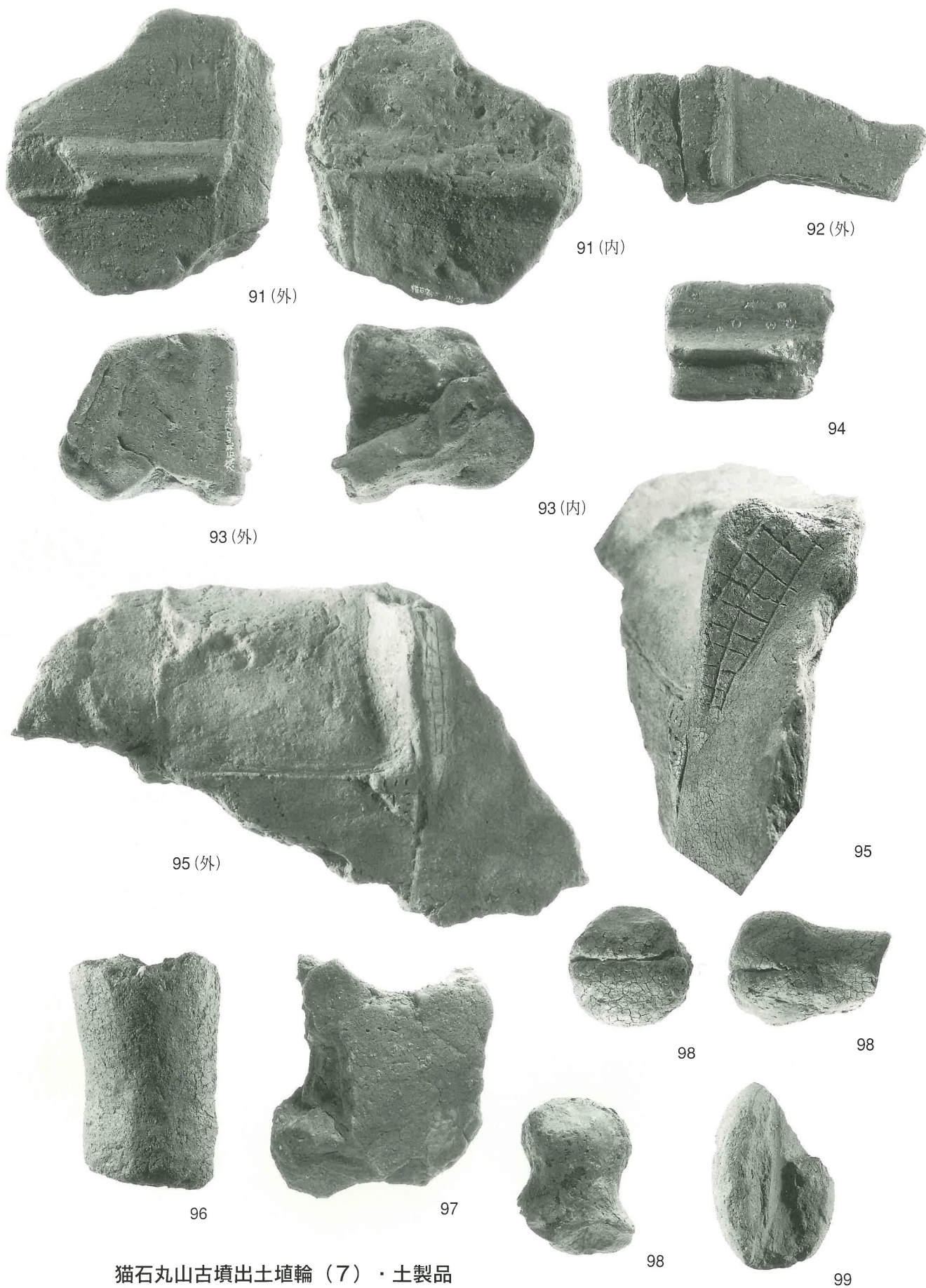


猫石丸山古墳出土埴輪(6)

89 (内)



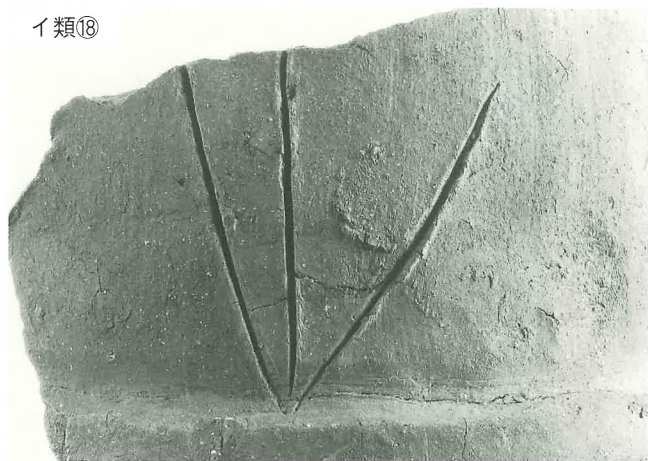
图版 20



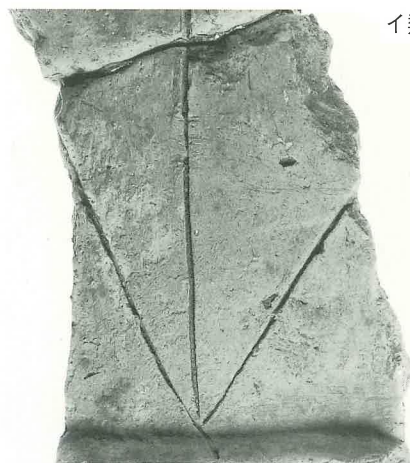
猫石丸山古墳出土埴輪 (7) ・土製品



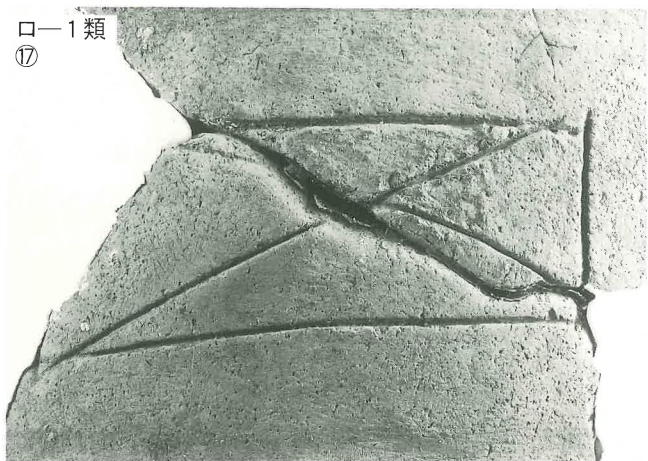
イ類⑬



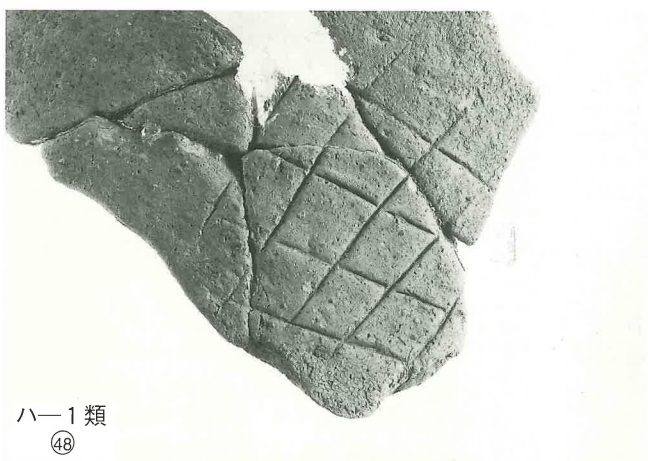
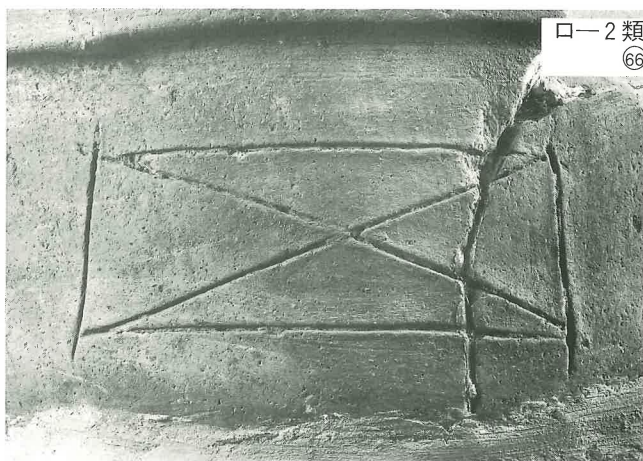
イ類④⑤



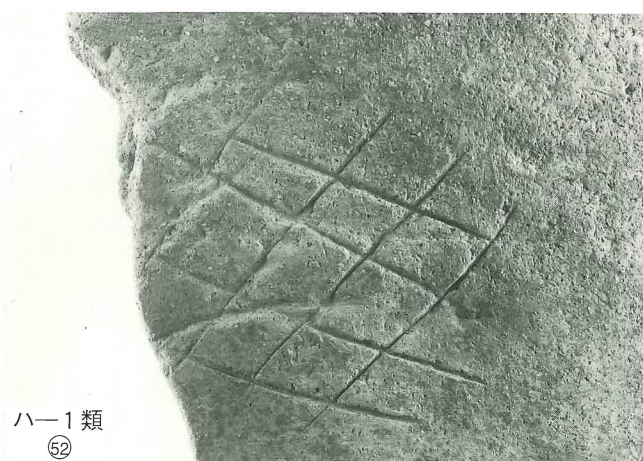
ロ-1類  
⑬



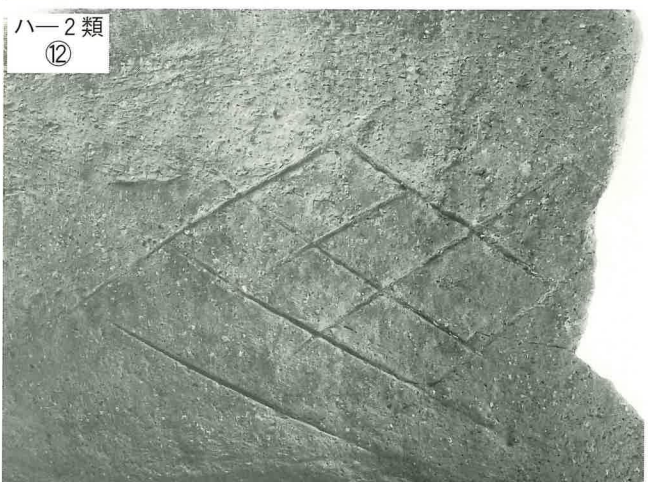
ロ-2類  
⑥⑥



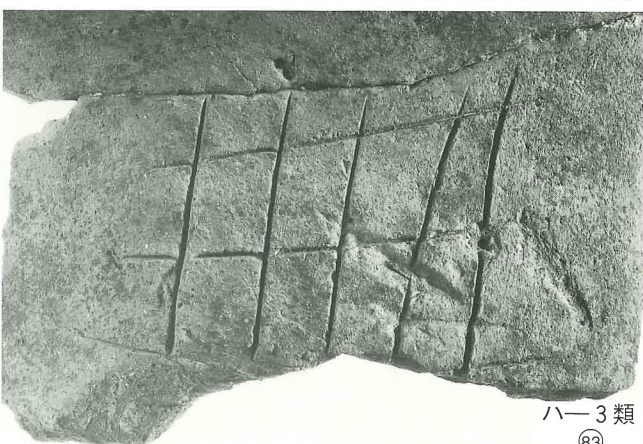
ハ-1類  
④⑧



ハ-1類  
⑤②

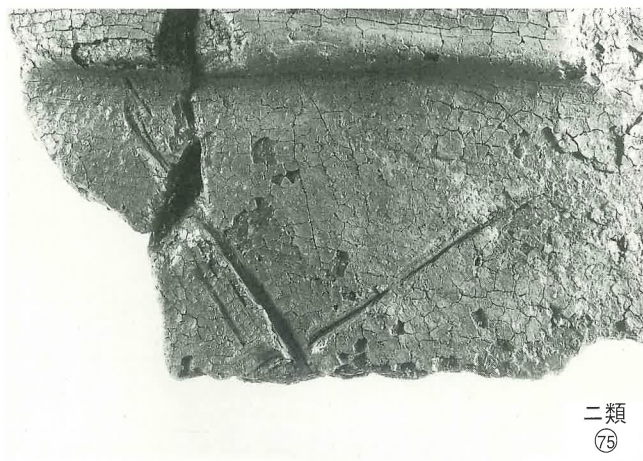
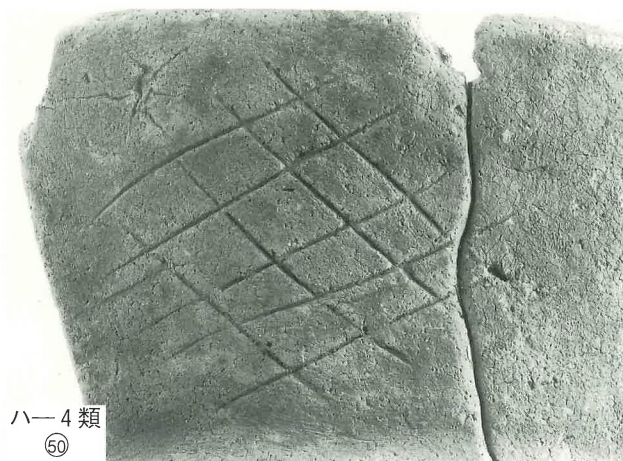


ハ-2類  
⑫



ハ-3類  
⑧③





猫石丸山古墳 円筒埴輪のヘラ記号 (2)

# みんな来て見て聞いちゃくれ 3月3日(日曜日)に現地見学説明会

立野古墳は、県教委の調査の結果、大変貴重な古墳であることがわかってきました。わたしたちのふるさとをよりよく知るために皆様の参加を期待しています。(午後1時)  
五反田 神武

大分合同新聞(朝刊)

平成8年(1996年)2月28日 水曜日

## 三重町の立野古墳

### 築造時期は4世紀後半

#### 県内最古の円筒埴輪の破片出土

三重町・田原の立野古墳を調査する県教委の係員

出土した円筒埴輪の破片

三重町・田原の一であることが県教委の調査で実施している。立野古墳(県指定)で分かった。立野古墳は平成四年三月史跡)から県内最古の円筒埴輪(はにわ)の破片が出土し、古墳の築造時期が四世紀後半の前期古墳と推定された。出土した土管形の円筒埴輪の破片には「三角」という文字が刻まれている。古墳の調査は、平成四年三月から三月下旬にかけて行われた。県教委が調査と試掘調査を行った。出土した土管形の円筒埴輪の破片には「三角」という文字が刻まれている。古墳の調査は、平成四年三月から三月下旬にかけて行われた。県教委が調査と試掘調査を行った。出土した土管形の円筒埴輪の破片には「三角」という文字が刻まれている。

角形の透孔(すしあな)が二つあり、断面が「コ」の字状の突起(張り)がある。出土した土管形の円筒埴輪の破片には「三角」という文字が刻まれている。

角形の透孔(すしあな)が二つあり、断面が「コ」の字状の突起(張り)がある。出土した土管形の円筒埴輪の破片には「三角」という文字が刻まれている。

角形の透孔(すしあな)が二つあり、断面が「コ」の字状の突起(張り)がある。出土した土管形の円筒埴輪の破片には「三角」という文字が刻まれている。

また古墳の北側には、古墳の周囲を取り囲む堀のような溝があり、深さ約一メートル、幅約八メートルあり、周囲の外側には溝がある。高橋副主幹は「大野川中流には前期古墳とみられる前方後円墳が埋蔵されており、かなりの勢力を持っていた」と述べている。

〈ふぐと日本料理〉  
**山田屋**  
日持市港町 ☎(0972)62-9145

在地の首長がいて推定され、三月三日午後一時から一般対象の現地説明会を開く。

(資料)

現地説明会を告げる、地元のピラ

|        |                           |  |
|--------|---------------------------|--|
| フリガナ   | おおいたのぜんぽうこうえんふん           |  |
| 書名     | 大分の前方後円墳                  |  |
| 副書名    | 三重・西国東地区編                 |  |
| 巻次     | ――                        |  |
| シリーズ名  | 大分県文化財調査報告書               |  |
| シリーズ番号 | 第100輯                     |  |
| 編著者    | 田中裕介・清水宗昭・諸岡郁・橋本幸治        |  |
| 編集機関   | 大分県教育委員会                  |  |
| 所在地    | 〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1 |  |
| 発行年月日  | 1998年3月31日                |  |

| フリガナ                   | フリガナ                                            | コード   |        | 北緯        | 東経         | 調査期間                      | 調査面積          | 調査原因         |
|------------------------|-------------------------------------------------|-------|--------|-----------|------------|---------------------------|---------------|--------------|
|                        |                                                 | 市町村   | 遺跡番号   |           |            |                           |               |              |
| たでのこふん<br>立野古墳         | おおの みえ<br>大野郡三重町<br>大字上田原字<br>立野                | 5 4 1 | 541007 | 33度00分12秒 | 131度35分27秒 | 19951224<br>～<br>19960318 | 対象範囲<br>6000㎡ | 重要遺跡<br>範囲確認 |
| ねこいしまるやま<br>猫石丸山<br>古墳 | ぶんごたかだ<br>豊後高田市大<br>くさじ ねこいし<br>字草地字猫石          | 1 0 2 | 102001 | 33度35分11秒 | 131度27分32秒 | 19961021<br>～<br>19970117 | 対象範囲<br>4000㎡ | 重要遺跡<br>範囲確認 |
| おさかのおつか<br>小坂大塚<br>古墳  | おおの みえ<br>大野郡三重町<br>おさか おお<br>大字小坂字大<br>つか<br>塚 | 5 4 1 | 541046 | 32度58分52秒 | 131度36分44秒 | 19970722<br>～<br>19970918 | 対象範囲<br>3000㎡ | 重要遺跡<br>範囲確認 |

| 所収遺跡名  | 種別 | 主な時代   | 主な遺構               | 主な遺物                             | 特記事項  |
|--------|----|--------|--------------------|----------------------------------|-------|
| 立野古墳   | 墓地 | 古墳時代前期 | 前方後円墳（葺石・周溝<br>陸橋） | 円筒埴輪・壺形埴輪・器<br>台、古代土師器、近世陶<br>磁器 | 墳長65m |
| 猫石丸山古墳 | 墓地 | 古墳時代後期 | 前方後円墳（周溝）          | 須恵器・円筒埴輪・形象<br>埴輪                | 墳長65m |
| 小坂大塚古墳 | 墓地 | 古墳時代前期 | 前方後円墳              | （測量図）                            | 墳長45m |

大分県文化財調査報告書第100輯

大 分 の 前 方 後 円 墳

三 重 ・ 西 国 東 地 区 編

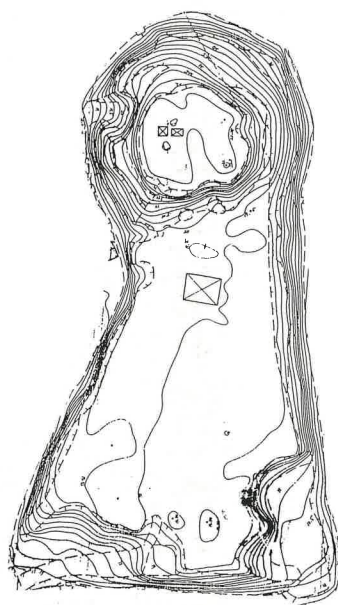
1 9 9 8 年 3 月 3 1 日

発行 大分県教育委員会

〒870-0021 大分市府内町3-10-1

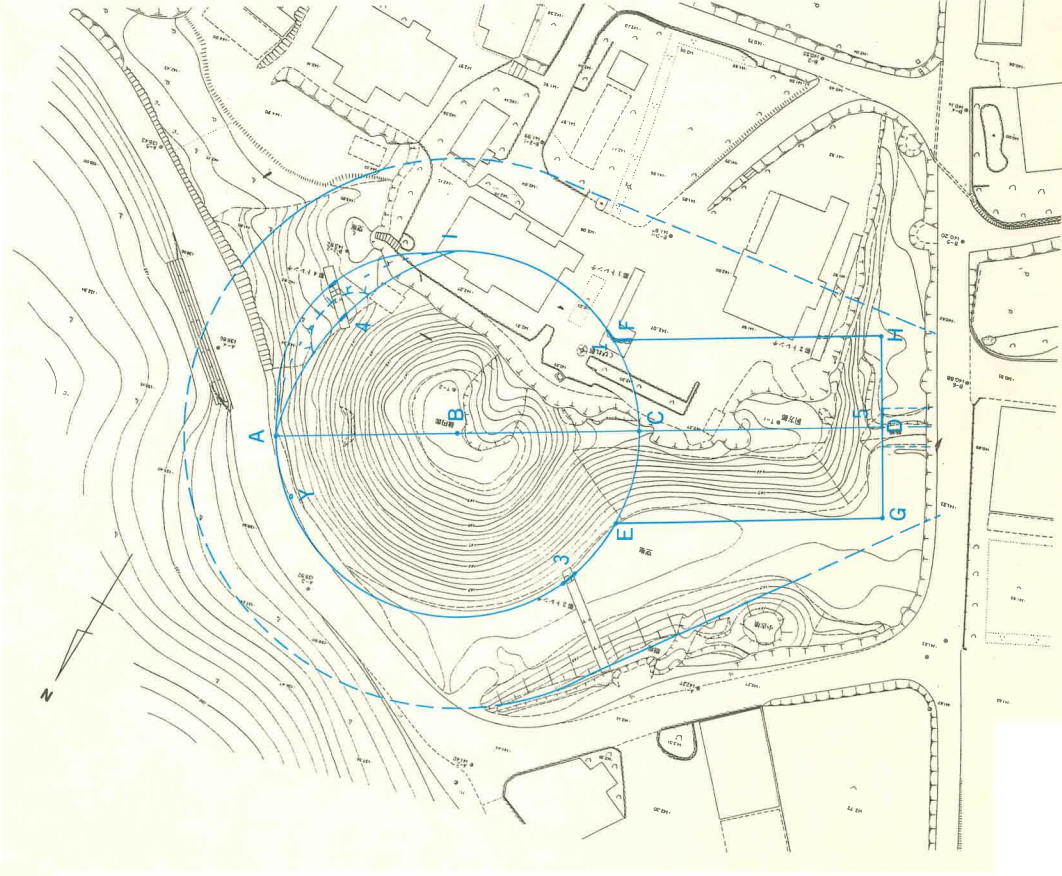
印刷 佐伯印刷



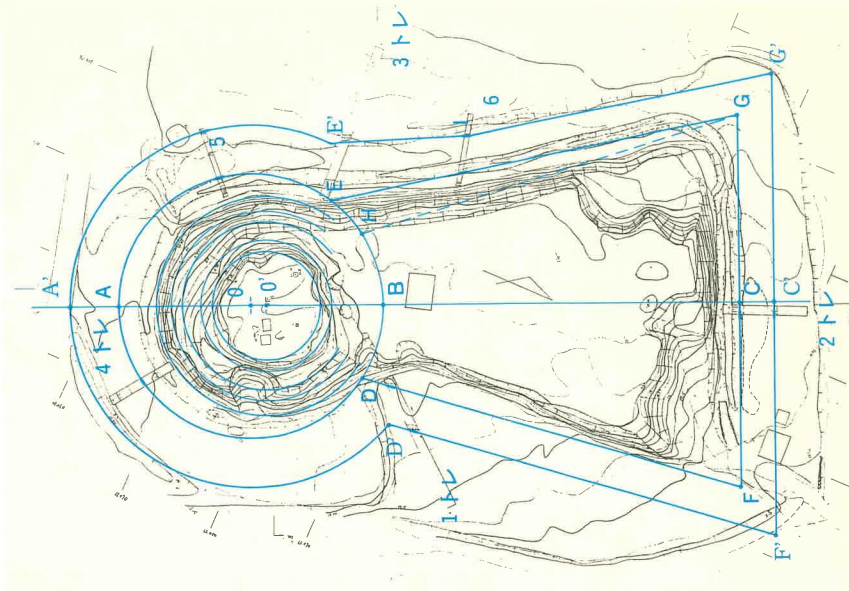








第20図 立野古墳の墳丘規格想定案 (1/800)



第55図 猫石丸山古墳の墳丘規格想定案 (1/800)

図の差しかえ：第20図は49頁、第55図は96頁におはり下さい。『大分の前方後円墳』